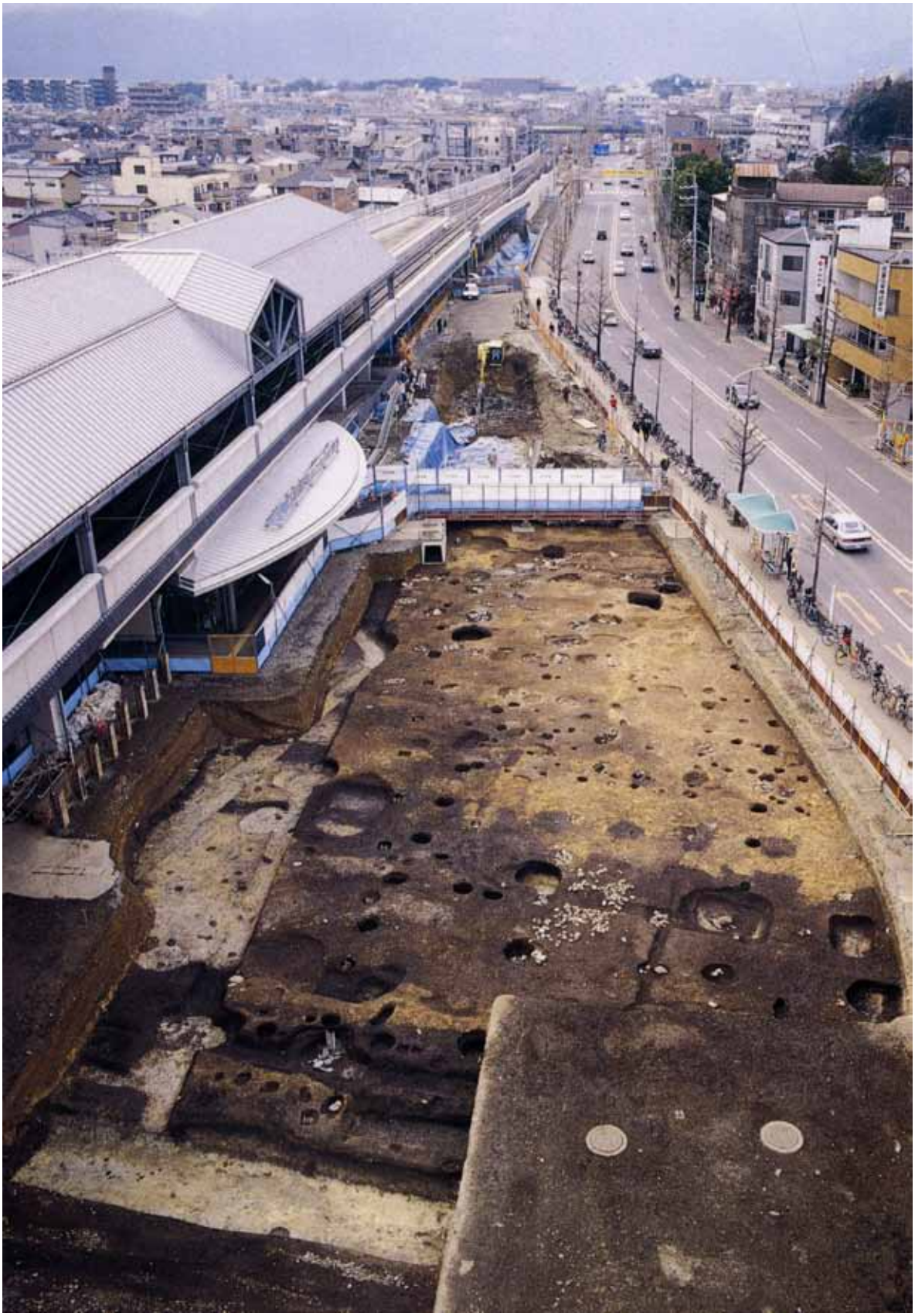
平成８年度

京都市埋蔵文化財調査概要

1998年

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

上：ＳＫ 183、左下：ＳＫ 567、右下：出土漆器椀（平安京左京八条三坊 2）



東御所（法金剛院境内）

序

京都市内には平安京跡をはじめとして、長岡京跡、六勝寺跡、鳥羽離宮跡など歴史都市にふさわしい重要な遺跡があります。当研究所は昭和51年発足以来､鋭意､これらの埋蔵文化財の調査、研究、普及啓発活動に努めてまいりました。本概要報告は年次報告として定期的に発刊しているものであります。今回は平成８年度に実施しました平安京跡を中心に29件の調査概要を報告させていただいております。

本年度も例年通り平安京跡の調査件数が最も多く、40件を実施いたしました。平安京左京八条三坊からは昨年度に引き続き、銭や鏡の鋳型などが出土しております。右京では１町を区画する小径を検出しており、西京極大路に接する法金剛院跡の発掘調査では、庭園や門、建物が発見され、法金剛院の様子をかなり具体的に明らかにすることができました。この他にも調査で得られた各遺跡の多くの成果を、できるだけ簡潔にわかりやすくまとめております。

本概要報告が今後とも学術研究の資料として、また埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、市民の方々に利用され貢献できれば幸いと考えております。

おわりに、当研究所に埋蔵文化財の調査を依頼していただいた原因者の方々、京都市をはじめ関係諸機関の方々に御礼申し上げますと同時に、広く市民の方々にも当研究所の活動に深い理解と御協力をいただけますよう御願い申し上げます。

平成10年２月

財団法人京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　川上　貢

凡　例

1　本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が平成８年度に実施した、事業の年次報告である。発掘調査（第１章）、試掘・立会調査（第２章）、資料整理（第３章）、普及啓発事業等報告（第４章）とした。

2　調査継続のため昨年度に報告を終了したもの、次年度に報告するものについては表３・４に示した。

3　本書中に示した方位・座標値は、平面直角座標系Ⅵによった。ただし座標値は単位（m）を省略している。座標は、京都市遺跡測量基準点と京都市水準点を使用した。

4　本書中の地図は、京都市長の承認を得て、同市発行の都市計画基本図 (縮尺 : １/2,500)、市街図（縮尺：１/25,000）を複製して調整した。

5　遺構表示のうち、表示記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例に従った。

6　調査位置図の方位は、北を上に配置し、縮尺は付記した。各調査位置図に示した黒塗り部分が、本年度実施した調査地点および調査対象地である。

7　図版１・２の調査地点番号のⅠは発掘調査、Ⅱは試掘・立会調査を表す。表３・４の番号を用いており各章の報告番号とは必ずしも一致しない。

8　平成８年度発掘調査のうち、文化庁国庫補助事業による調査は、『京都市内遺跡発掘調査概報』平成８年度に報告している。

9　本年度の調査ならびに本書の作成にあたっては、研究所全員の協力と参加があった。

10　写真は、遺物写真および一部を除く発掘調査の遺構写真は村井伸也・幸明綾子が、試掘・立会調査の写真とその他の写真は、各調査担当者が撮影した。

11　各報告は、文末に記した各調査担当者が執筆（連名の場合は初出の者が主として報告）した。

12　本書の作成にあたっては、編集と調整は資料課が行った。

目　次

第１章　発掘調査

Ⅰ　平成８年度の発掘調査概要 ……1

Ⅱ　平安宮・京跡

1　平安宮豊楽院跡…… 3
2　平安宮中和院跡…… 6
3　平安宮太政官跡…… 9
4　平安京朱雀大路跡…… 11
5　平安京左京七条二坊・名勝滴翠園…… 12
6　平安京左京八条二坊１…… 14
7　平安京左京八条二坊２…… 17
8　平安京左京八条三坊１…… 19
9　平安京左京八条三坊２…… 24
10　平安京右京一条三坊…… 31
11　平安京右京一条四坊・法金剛院境内…… 35
12　平安京右京二条三坊…… 51
13　平安京右京三条一坊…… 54
14　平安京右京六条一坊…… 57

Ⅲ　白河街区跡

15　六勝寺跡・岡崎遺跡…… 60

Ⅳ　その他の遺跡

16　上ノ庄田瓦窯跡…… 63
17　岩倉幡枝古窯跡群…… 67
18　北野廃寺…… 68
19　京都大学構内遺跡…… 69
20　法性寺跡・鳥辺野跡・正覚寺跡…… 75
21　下三栖遺跡…… 79
22　灰方古墳群…… 84

第２章　試掘・立会調査

Ⅰ　平成８年度の試掘・立会調査概要 …… 86

Ⅱ　平安宮・京跡

1　平安宮内裏跡…… 87
2　平安宮朝堂院・太政官跡・聚楽遺跡…… 89
3　平安宮右近衛府・図書寮跡…… 93
4　平安京左京七条三坊…… 95
5　平安京左京九条一坊…… 96
6　平安京右京三条二坊…… 99
7　平安京右京四条一坊・朱雀院跡…… 101

Ⅲ　その他の遺跡

8　尊勝寺跡・最勝寺跡１…… 104
9　尊勝寺跡・最勝寺跡２…… 106
10　法住寺殿跡…… 108
11　六波羅政庁跡…… 110
12　醍醐廃寺…… 112

第３章　資料整理

1　保存処理…… 116
2　復原彩色…… 117

第４章　普及啓発事業等報告

1　財団法人京都市埋蔵文化財研究所設立二十周年記念事業の実施… 118
2　普及啓発および技術者養成事業…… 118
3　京都市考古資料館状況報告…… 121
4　役職員名簿…… 125

図　版　目　次

図版１	調査位置図１	平安京・白河街区調査位置図
図版２	調査位置図２	１　洛北地区調査位置図
		２　長岡京・大原野地区調査位置図
		３　鳥羽離宮・伏見地区調査位置図
		４　山科・醍醐地区調査位置図
図版３	平安宮豊楽院跡	１　１区全景
		２　２区全景
		３　３区全景
		４　４区全景
図版４	平安京朱雀大路跡	１　北区全景
		２　南区全景
図版５	平安京左京七条二坊・名勝滴翠園	１　調査地全景
		２　１区全景
		３　醒眠泉下層検出状況
図版６	平安京左京八条二坊１	１　調査区全景
		２　ＳＫ 229 墨書土師器出土状況
		３　木棺墓ＳＫ 144
図版７	平安京左京八条二坊２	１　第３面全景
		２　ＳＥ 120
		３　線路の基礎
図版８	平安京左京八条三坊１	１　１区第１面全景
		２　１区第２面北部
図版９	平安京左京八条三坊１	１　２区第１面全景
		２　２区第２面全景
図版 10	平安京左京八条三坊１	１　１区第２面井戸 77
		２　１区第２面土壙 81
		３　２区第２面土壙 291
		４　２区第２面土壙 335
図版 11	平安京左京八条三坊２	１　１次調査区全景
		２　３次調査区全景
図版 12	平安京左京八条三坊２	１　ＳＫ 183・185・186
		２　ＳＫ 567

図版 12　平安京左京八条三坊２　３　ＳＤ 1000
図版 13　平安京右京一条三坊　１　調査区全景
２　溝 236、橋脚１
図版 14　平安京右京一条四坊・法金剛院境内　１　１次３区全景
２　１次６区全景
３　１次７区全景
４　１次８区全景
図版 15　平安京右京一条四坊・法金剛院境内　１　２次１区全景
２　２次１区建物地業
図版 16　平安京右京一条四坊・法金剛院境内　１　２次２区全景
２　２次３区全景
図版 17　平安京右京一条四坊・法金剛院境内　１　２次３区下層全景
２　３次１区全景
３　３次１区池
図版 18　平安京右京一条四坊・法金剛院境内　１　３次２区全景
２　３次３区全景
３　４次下層全景
図版 19　平安京右京一条四坊・法金剛院境内　１　５次１区全景
２　５次１区下層南トレンチ全景
図版 20　平安京右京一条四坊・法金剛院境内　１　５次１区中門廊
２　５次１区遣水
図版 21　平安京右京一条四坊・法金剛院境内　１　５次２区洲浜・池
２　５次３区全景
図版 22　平安京右京二条三坊　１　１区全景
２　２区全景
図版 23　平安京右京三条一坊　１　調査区全景
２　調査区西半部
図版 24　平安京右京三条一坊　１　朱雀大路西側溝ＳＤ 41 － Ⅰ
２　朱雀大路西側溝ＳＤ 41 － Ⅱ
図版 25　平安京右京六条一坊　１　調査区全景
２　池ＳＧ 19・21
図版 26　上ノ庄田瓦窯跡　１　調査区全景
２　ＳＤ１、ＳＫ３
図版 27　上ノ庄田瓦窯跡　１　ＳＸ 33 ～ 35、ＳＡ１
２　出土瓦

図版 28　岩倉幡枝古窯跡群　1　Ａ区全景
2　Ｂ・Ｃ区全景
図版 29　北野廃寺　1　室町時代全景
2　奈良時代から平安時代全景
図版 30　京都大学構内遺跡　1　調査区南半部７層上面全景
2　調査区北半部７層上面全景
図版 31　法性寺跡・鳥辺野跡・正覚寺跡　1　第２面全景
2　土器群 29
3　柱穴状 33 弥生土器出土状況
図版 32　下三栖遺跡　1　第１面全景
2　ＳＤ３
3　ＳＤ２
図版 33　下三栖遺跡　1　第２面全景
2　ＳＫ 77
3　ＳＩ 79・80
図版 34　灰方古墳群　1　１号墳全景
2　４号墳全景
図版 35　平安宮朝堂院・太政官跡・聚楽遺跡　1　朝堂院暉章堂東辺延石
2　朝堂院暉章堂北辺基壇外装
3　朝堂院明礼堂西辺
4　太政官西面築地部分
図版 36　醍醐廃寺　1　調査区全景
2　ＳＤ２

図　目　次

図 1　平安宮豊楽院跡　調査位置図 …… 3
2　〃　遺構平面図 …… 4
3　〃　３区ＳＤ 19 出土鴟尾破片 …… 4
4　〃　３区ＳＤ 19 出土軒瓦拓影 …… 5
5　平安宮中和院跡　調査位置図 …… 6
6　〃　遺構平面図 …… 7
7　〃　調査地全景 …… 8
8　平安宮太政官跡　調査位置図 …… 9
9　平安宮太政官跡　遺構平面図 …… 9

図 10　〃　第１面全景……10
11　〃　第２面全景……10
12　平安京朱雀大路跡　調査位置図……11
13　〃　遺構平面図……11
14　平安京左京七条二坊・名勝滴翠園　調査位置図……12
15　〃　調査区配置図……13
16　平安京左京八条二坊１　調査位置図……14
17　〃　遺構平面図……14
18　〃　ＳＫ 144 実測図……15
19　〃　ＳＫ 229 出土墨書土器実測図……16
20　平安京左京八条二坊２　調査位置図……17
21　〃　遺構平面図……18
22　平安京左京八条三坊１　調査位置図……19
23　〃　１区遺構平面図……20
24　〃　２区遺構平面図……21
25　〃　２区出土銭貨鋳型実測図……22
26　〃　１区土壙 81 出土灰釉陶器壷実測図 …22
27　平安京左京八条三坊２　調査位置図……24
28　〃　第４面遺構平面図……25
29　〃　第３面遺構平面図……26
30　〃　第２面遺構平面図……27
31　〃　第１面遺構平面図……28
32　〃　ＳＫ 183 出土土師器実測図……29
33　〃　ＳＤ 472 出土柿経……29
34　平安京右京一条三坊　調査位置図……31
35　〃　遺構平面図……32
36　〃　埋納遺構実測図……32
37　〃　溝 202 出土墨書土器実測図 ……33
38　平安京右京一条四坊・法金剛院境内　調査位置図……35
39　〃　法金剛院境内調査区配置図……35
40　〃　平安京右京一条四坊十二・十三町
調査区配置図……36
41　〃　１次３区遺構平面図……36
42　〃　１次６・７区遺構平面図……36
43　〃　２次１区遺構平面図……37

図 44　平安京右京一条四坊・法金剛院境内　２次２区遺構平面図……38
45　〃　３次１～３区遺構平面図……39
46　〃　１次８区、２次３区、４次、５次１区遺構平面図……40
47　〃　２次３区、４次、５次１区（下層）遺構平面図……41
48　〃　５次２区遺構平面図……42
49　〃　５次３区遺構平面図……43
50　〃　出土土師器実測図……44
51　〃　２次１区ＳＫ９出土軒瓦実測図……45
52　〃　５次調査出土軒瓦実測図１……46
53　〃　５次調査出土軒瓦実測図２……47
54　平安京右京二条三坊　調査位置図……51
55　〃　１区遺構実測図……52
56　〃　２区遺構実測図……52
57　〃　ＳＤ２上層遺物出土状況……53
58　〃　井戸ＳＥ 66 ……53
59　平安京右京三条一坊　調査位置図……54
60　〃　遺構実測図……55
61　平安京右京六条一坊　調査位置図……57
62　〃　遺構平面図……58
63　〃　ＳＤ 20 出土土器実測図 ……59
64　六勝寺跡・岡崎遺跡　調査位置図……60
65　〃　調査区柱状断面図……61
66　上ノ庄田瓦窯跡　調査位置図……63
67　〃　遺構平面図……64
68　〃　ロクロピットＳＸ 34 実測図 ……64
69　〃　出土軒瓦実測図……65
70　〃　ＳＫ４出土土器実測図……66
71　岩倉幡枝古窯跡群　調査位置図……67
72　北野廃寺　調査位置図……68
73　京都大学構内遺跡　調査位置図……69
74　〃　東壁断面図……70
75　〃　４層上面遺構平面図……70
76　〃　５層上面遺構平面図……71

図 77　京都大学構内遺跡　７層上面遺構平面図……71
78　〃　土器溜 401 出土土器実測図　……72
79　〃　高麗青磁梅瓶実測図……72
80　〃　調査区配置図……74
81　法性寺跡・鳥辺野跡・正覚寺跡　調査位置図……75
82　〃　遺構実測図……76
83　〃　出土遺物実測図……77
84　〃　流路 23 出土須恵器・実測図　……78
85　下三栖遺跡　調査位置図……79
86　〃　噴砂断面……79
87　〃　遺構平面図……80
88　〃　竪穴住居平面図……81
89　〃　出土土器実測図……82
90　〃　ＳＥ 12 出土軒平瓦実測図　……83
91　〃　ＳＥ 12 出土木製品実測図　……83
92　灰方古墳群　調査位置図……84
93　〃　１号墳実測図……84
94　〃　４号墳実測図……85
95　〃　出土土器実測図……85
96　平安宮内裏跡　調査位置図……87
97　〃　１区全景……87
98　平安宮朝堂院・太政官跡・聚楽遺跡　調査位置図……89
99　〃　主要遺構配置図……89
100　〃　主要遺構実測図……91
101　平安宮右近衛府・図書寮跡　調査位置図……93
102　〃　遺構配置図……94
103　〃　40 地点出土土器実測図　……94
104　平安京左京七条三坊　調査位置図……95
105　平安京左京九条一坊　調査位置図……96
106　〃　調査区１南壁断面図……96
107　〃　出土瓦実測図……97
108　〃　出土瓦……98
109　平安京右京三条二坊　調査位置図……99
110　〃　出土銅製帯金具実測図…… 100
111　〃　出土銅製帯金具…… 100

図112　平安京右京四条一坊・朱雀院跡　調査位置図…… 101
113　〃　№5トレンチ全景…… 103
114　尊勝寺跡・最勝寺跡1　調査位置図 …… 104
115　〃　3～7区検出遺構位置図…… 104
116　尊勝寺跡・最勝寺跡2　調査位置図…… 106
117　〃　2区雨落溝実測図…… 106
118　〃　建物1西辺雨落溝北側…… 107
119　〃　同雨落溝南側…… 107
120　法住寺殿跡　調査位置図…… 108
121　〃　№3トレンチ全景…… 108
122　〃　遺構平面図…… 109
123　六波羅政庁跡　調査位置図…… 110
124　醍醐廃寺　調査位置図…… 112
125　〃　調査区配置図…… 113
126　〃　B区SD2北壁断面図…… 114
127　〃　出土遺物実測図…… 115
128　保存処理　鳥羽事務所搬出…… 117
129　〃　含浸処理槽の設置…… 117
130　〃　含水率測定…… 117
131　〃　クラック計測…… 117

表　目　次

表1　平成8年度の復原彩色件数一覧表（復原彩色）…… 117
2　平成8年度月別入館者数一覧表（京都市考古資料館状況報告）…… 124
3　平成8年度発掘調査一覧表…… 127
4　平成8年度試掘・立会調査一覧表…… 129
5　平成8年度その他契約一覧表…… 130

第１章　発掘調査

Ⅰ　平成８年度の発掘調査概要

本年度の発掘調査の委託契約件数は35件で、昨年度の委託契約件数28件より７件増加している。内訳は、平安宮跡４件、平安京跡22件（左京域９件、右京域12件、朱雀大路１件）、白河街区跡１件、その他の遺跡８件である。本年度は長岡京跡、鳥羽離宮跡、中臣遺跡の委託契約に基づく発掘調査がなく、例年と異なり報告項目はない。その分平安京跡の発掘件数が増加している。

平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡の１件については、すでに平成７年度京都市埋蔵文化財調査概要で報告している。また、平安京左京四条二坊、左京八条二坊、左京八条三坊、右京北辺二坊・北野廃寺、右京三条一坊、山科本願寺跡の６件は、年度がまたがる継続調査であり、次年度に報告する。平安京右京一条四坊と法金剛院境内は隣接しており、発掘調査も一連の調査として実施したため、６件の調査をまとめ、右京一条四坊・法金剛院境内の項を立て報告する。今回報告する発掘調査の項目数は22項目である。

平安宮跡　豊楽院跡（１）では､観徳堂跡の検出を目的としたが､明確な遺構を検出できなかった。しかし溝内から軒丸瓦､軒平瓦､鴟尾片など多量の瓦類が出土している。中和院跡（２）では、平安時代の整地層や柱穴を検出した。太政官跡（３）では平安時代の遺構は検出できなかった。

平安京跡　朱雀大路跡（４）では、調査区が朱雀大路の中央であったため、平安時代の建物や溝など顕著な遺構はみあたらなかったが、路面と轍痕を検出することができた。

左京七条二坊・名勝滴翠園（５）では、滴翠園の沿革を明らかにする調査を実施している。本年度も京都駅周辺の発掘調査が目立った年度であった。左京八条二坊１（６）では中世の掘立柱建物、井戸、溝、木棺墓などを検出し、多量の土器とともに鋳造関係の遺物、鞴の羽口、鏡や仏具の鋳型などが出土している。左京八条二坊２（７）でも鏡の鋳型などが出土している。またこの調査では初代京都駅に関連する機関車の転車台も発見されている。左京八条三坊１（８）では平安時代前期から中期の遺物を含む流路を検出している。この流路が埋没し、平安時代後期に整地され、左京八条三坊周辺では街区が形成されることが明らかになった。この調査では八条坊門小路も検出している。左京八条三坊２（９）では中世町屋の痕跡が認められ、多量の漆器や箸が土壙から出土したことが注目された。

右京一条三坊（10）の調査では鷹司小路の南側溝が検出され、一町内を東西に二分する小径を検出している。右京一条四坊・法金剛院境内（11）は、ＪＲ山陰本線花園駅およびその近辺６件の発掘事例である。法金剛院は西京極大路に接して立地しており、今回の調査は右京一条四坊から西京極大路、法金剛院にかけての調査であった。法金剛院の東御門、東御所の建物、中門廊、遣水などが検出され、また寺域が大路側に張り出して占地されていることが明らかになるなど法

金剛院の様相をかなり明らかにすることができた。右京二条三坊（12）では、祭祀遺物と考えられる10数個の小礫と70枚以上の延喜通寶がまとまって出土しており、右京三条一坊（13）では、朱雀大路西側溝と姉小路北側溝の交差点部を検出している。右京六条一坊（14）の調査は大阪ガス京都工場跡地を対象にした12次調査にあたる。今回は南北２間×東西５間の身舎に庇が付く平安時代前期の東西方向掘立柱建物、東西方向の溝などを検出している。中でも右京六条一坊十三町は資料を蓄積しており、宅地様相の詳細が判明しつつある。

白河街区跡　六勝寺跡・岡崎遺跡（15）は複合遺跡である。今回の調査でも、わずかではあるが古墳時代の土師器や須恵器が出土する。また、平安時代後期の瓦溜も検出されており、最勝寺に関連するものと考えている。

その他の遺跡　上ノ庄田瓦窯跡（16）は、平安宮豊楽殿で使用された鴟尾が制作された窯跡として著名である。今回の調査では、台地上に立地する溝によって区画された建物やロクロピットで構成される工房を検出している。岩倉幡枝古窯跡群（17）では、16世紀半ばから17世紀の土師器焼成窯がみつかり、多量の土師器皿が出土している。北野廃寺（18）の調査では、７世紀後半から９世紀にかけての掘立柱建物を検出しており、平安時代初期に造営された常住寺と関係すると思われる。京都大学構内遺跡（19）で検出した建物は、12世紀後半代の武家の屋敷と考えられる。中国華南産の白磁水注、高麗青磁梅瓶が出土している。法性寺跡・鳥辺野跡・正覚寺跡（20）の調査では、弥生時代・古墳時代中期の流路から、まとまって弥生土器が出土しており、下三栖遺跡（21）では、庄園下三栖庄と関係する井戸や建物を検出している。灰方古墳群（22）の調査は、緊急の調査ではあったが、２基の小型の無袖横穴石室を検出し、１基の石室内には須恵質陶棺が収められていた。　（永田信一）

Ⅱ　平安宮・京跡

1　平安宮豊楽院跡（図版1・3）

経過　調査は山陰線南側側道新設に伴い実施したもので、調査地は平安宮豊楽院内の堂の一つである観徳堂とその西側の地区に比定される。

1～4区を2回に分けて調査した。

遺溝・遺物　1区は盛土層が60㎝、近世の整地層が40～60㎝、以下は黒褐色砂礫層、にぶい黄褐色砂泥層の地山となる。

平安時代の遺構は、土壙、小穴があるが、遺構の性格は不明である。

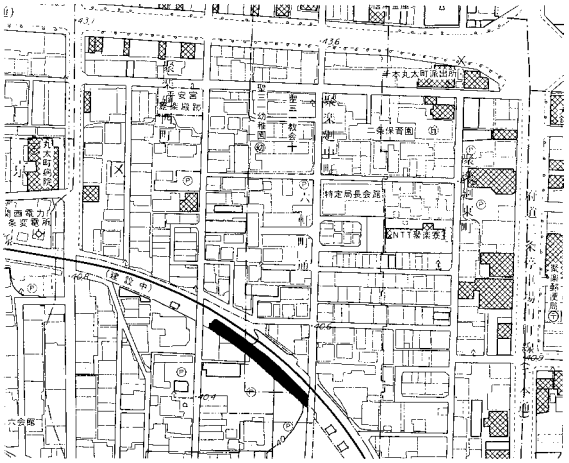


図1　調査位置図（1：5,000）

室町時代の遺構ＳＤ3は南北方向の溝で、南壁から北へ1.5ｍを検出した。幅0.7ｍ以上、深さ0.35ｍを測る。検出位置が観徳堂西辺の推定位置にあたり、凝灰岩の抜き取り跡の可能性もある。

調査区東半部では、近世の落込を検出した。幅12.0ｍ以上、深さ2.0ｍ以上を測る大規模な遺構であるが、性格は不明である。

平安時代の遺物は、遺構からは土師器小片が少量出土しているにすぎないが、近世の落込から多量に出土している。

2区は盛土層、旧耕作土層が30㎝、平安時代の瓦を含む灰黄褐色砂泥層が10～15㎝、以下黄褐色砂泥層の地山となる。

検出遺構は室町時代の柱穴と近世の溝である。

ＳＤ14は幅1.3ｍ、深さ0.7ｍを測る南北方向の溝である。ＳＤ13は東西方向の溝でＳＤ14を切っており、幅1.1ｍ、深さ0.5ｍを測る。ＳＤ15は、東西方向の溝でＳＤ13から南へ3ｍ隔てて並行する位置にあり、幅0.9ｍ、深さ0.3ｍを測る。

平安時代の遺物は、近世の溝（ＳＤ13～15）より緑釉瓦などが混入出土している。

3区は盛土層、旧耕作土層が約30㎝、近世の整地層（にぶい黄褐色泥砂）が約30㎝、以下褐色砂泥層（地山）となる。

攪乱壙はほとんどないが、大半が近世の遺構である。ＳＤ18は幅2.2ｍ、深さ0.6ｍを測る東西方向の溝である。ＳＤ20は幅1.25ｍ、深さ0.85ｍを測る断面逆台形を呈する東西方向の溝である。ＳＤ18とＳＤ20の心々間の距離は6ｍである。

平安時代の遺構としては、幅2.3ｍ、深さ0.85ｍを測る南北方向の溝ＳＤ19があり、埋土より多量の瓦類と前期から中期の土器類が少量出土した。ＳＤ19は、豊楽院の復原図によると空

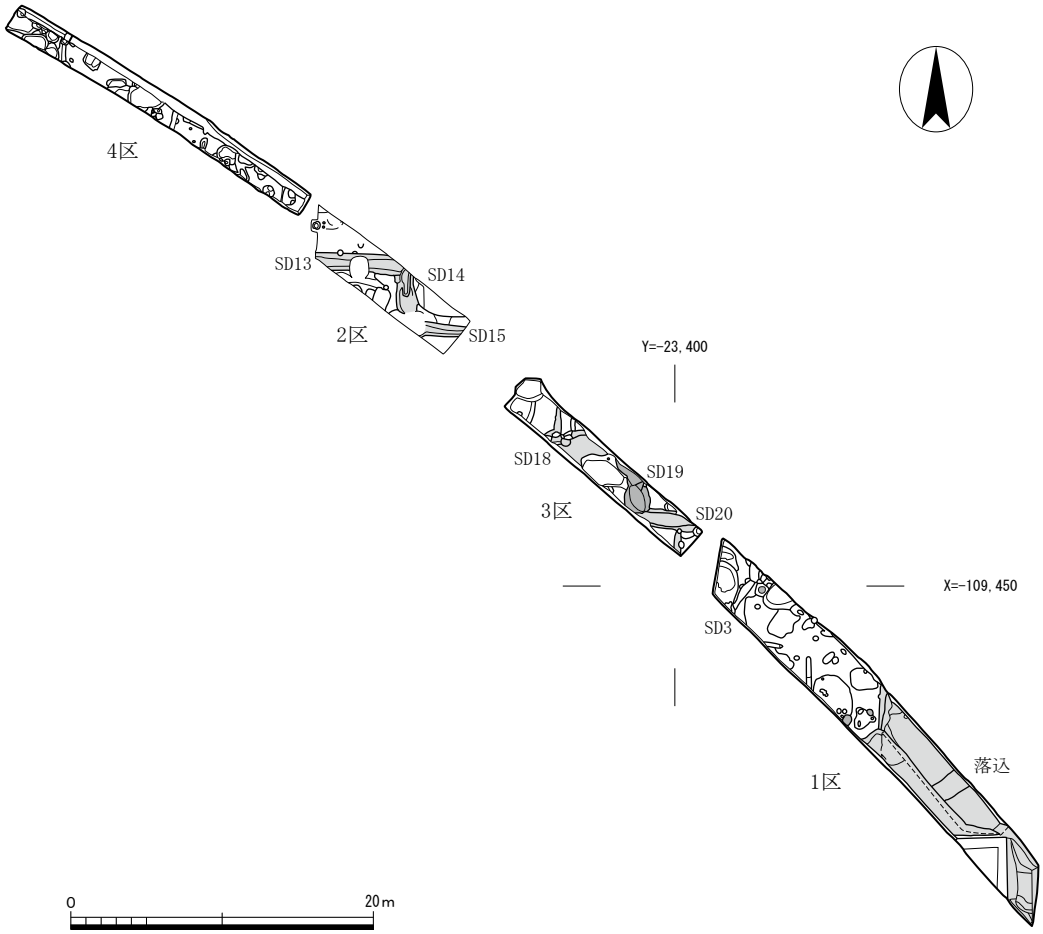


図2　遺構平面図（1:500）

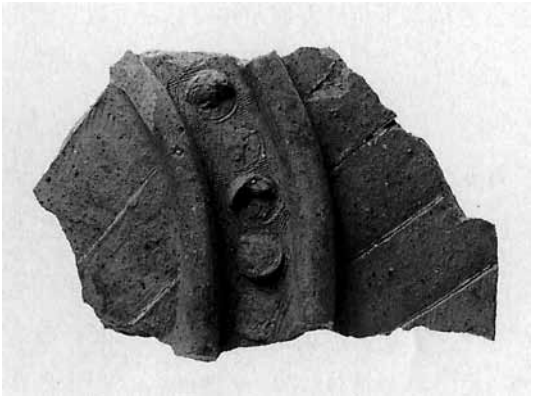


図３　３区ＳＤ 19 出土鴟尾破片

閑地に位置しており、区画に関連する溝と考えられる。

平安時代の遺物は、ＳＤ 19 より多量に出土したが、大半は瓦類であり土器類は９世紀から 10 世紀前半代の土師器、須恵器、緑釉陶器などがわずかに出土した。瓦当類は、平安時代前期から中期の文様をもつ軒平瓦､軒丸瓦が 20 数点出土した。そのほか、須恵質の鴟尾破片や凝灰岩片なども出土した。

近世の遺物はＳＤ 18・20 などから出土しているが、特に記すものはない。

４区は、東半部では盛土層（５～ 15cm）以下、近世の整地層（10 ～ 20cm）、地山（にぶい黄褐色砂泥層）となるが、西半部では盛土層（５～ 10cm）以下、地山となる。

26 基の遺構を検出したがすべて近世の遺構であり、平安時代に属する遺構は検出できなかった。

平安時代の遺物は、近世の遺構に混入して、瓦の小片が少量出土しているにすぎない。

小結　今回の調査地は､国家的な饗宴を行う施設である豊楽院の堂の一つである観徳堂および、

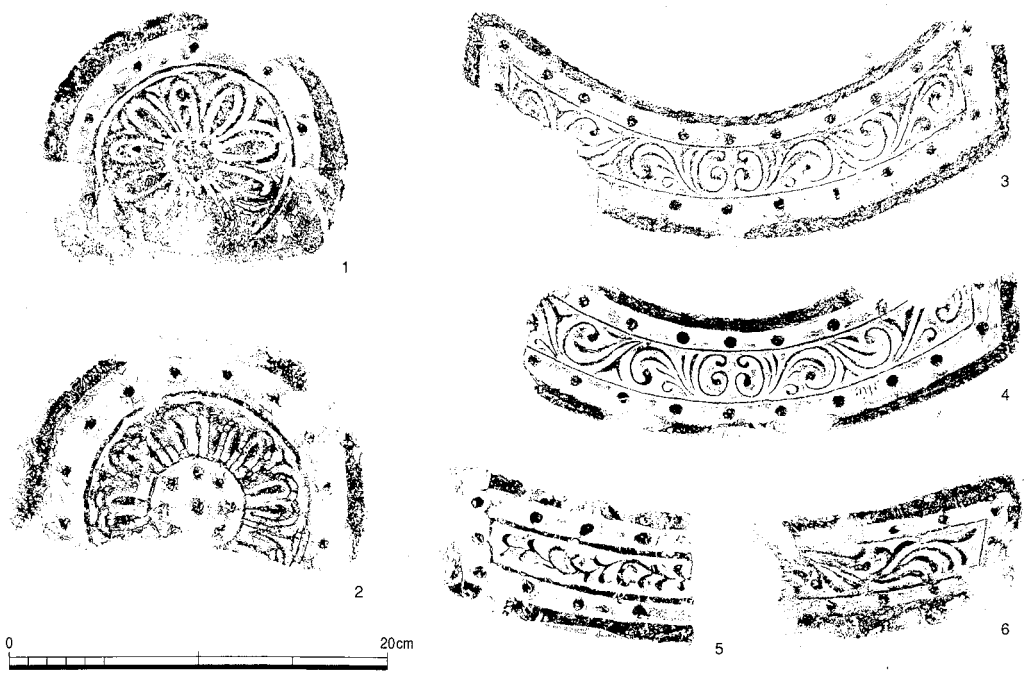


図4　3区ＳＤ19出土軒瓦拓影（1：4）

その西側に比定される地である。

１区は、豊楽院観徳堂跡推定地に設定したトレンチであるが、室町時代、江戸時代の遺構で削平を受けており、明確な遺構は確認できなかった。しかし、室町時代の溝状遺構ＳＤ３は観徳堂西辺の推定位置にあたる。豊楽院の過去の調査において、基壇の凝灰岩抜き取りの時期とほぼ一致していることを考えると、ＳＤ３が建物西辺の痕跡と考えることもできよう。

平安時代の遺構は近世の遺構によってほとんど削平されており、明確な遺構としては、３区で検出したＳＤ19だけである。ＳＤ19はＳＤ３の西側９ｍのところに位置する南北方向の溝で、溝内より多量の瓦類が出土した。

今回の調査では、観徳堂を検出することはできなかったが、区画に関連する溝内や近世遺構内より緑釉瓦など豊楽院で使用された瓦類が多量に出土した。調査地周辺に豊楽院に関連する遺構があると推定できる。

また、近世には聚楽第周辺に武家屋敷が構えられていたことが資料に残されており、徳川期にも京都所司代の組屋敷が置かれている。２・３区で検出した東西・南北方向の溝（ＳＤ13～15・18・20）は、屋敷や地割りに関係した区画溝と考えられる。　　（伊藤　潔・小松武彦）

2　平安宮中和院跡（図版１）

経過　調査対象地は、上京区下立売通千本東入田中町 422-1 に所在する。（株）京都菓子工業の所有地となっており、同工業の社屋建て替え工事に伴う発掘調査である。この敷地は、平安時代には平安宮中和院推定地内の東辺中央に位置する。中和院は、内裏の西側に位置するので対象地は内裏の近接地でもある。

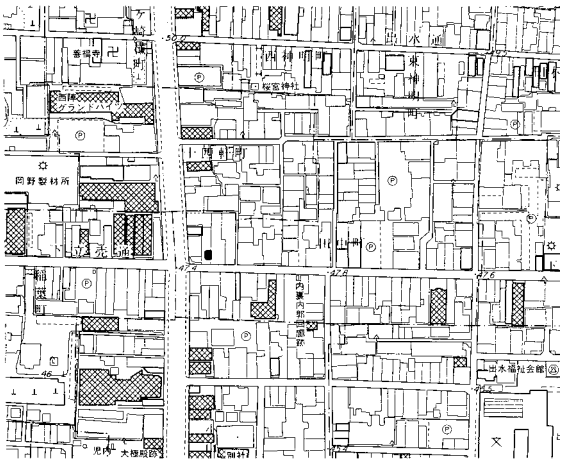


図５　調査位置図（1：5,000）

発掘調査に先立ち 1996 年５月 15 日に、京都市埋蔵文化財調査センターが試掘調査を実施している。試掘調査によって、部分的ではあるが、土師器や緑釉瓦を伴う平安時代の整地層が残存していることが確認され、これを根拠として発掘調査の実施が決定された。

発掘調査は、当研究所に委託され、同年５月 30 日から調査を実施した。発掘調査にあたっては予算、期間などの事情から調査規模を限定した。調査区は近世以降の大規模な掘り込み遺構が多く、平安時代の遺構、土層の遺存状況は良好ではなかったが、部分的に平安時代の遺構面を確認することができた。

遺構・遺物　自然堆積層とみられる地山は、砂礫層と黄褐色系土層（～砂泥、シルト、粘質土などの土質で構成されており、聚楽土と通称される）に区分できる。黄褐色系土層（地山）の上面は調査区東半で東南方向へ傾斜し、砂礫層（地山）はその上面に堆積している。これらの地山の土層は、黄褐色系土層をベースにして開析された東南方向へ開く谷地形内に堆積した砂礫層と推測される。

調査区北西付近では、地山直上に形成された整地層を検出している。整地層は、下層が 15cm 前後の厚さで砂礫と粗砂を主とし、上層は６～ 15cmの厚さで黄褐色系の砂質土となっている。下層は、基礎土で上層が表層の整地土ともみられ、上面は平坦である。下層からは、平安京Ⅰ期（８世紀後半～９世紀前半）の土師器杯の破片と平瓦片が出土しており、平安時代初期の整地土ともみられよう。

この整地層は、北壁から南へ 2.7ｍ前後で途切れており、南側の地山との間に段差を生じている。この段は東西方向に延びるが、東側は不明である。整地層南辺の段は遺構面であった可能性もある。段から 1.5 ｍほど南側では、平安時代の柱穴と見られるＰ it ３を検出しているが、関連する柱穴は付近には残存していなかった。遺物採取のために拡張した南壁中央部の砂礫層（地山）上面でも、平安時代の柱穴（Ｐ it ４）を検出しているが、これについても関連する他の柱穴は検出できなかった。

西北部の整地層上部では、段より南へ延びる数層の整地層を確認している。その最上層に平安

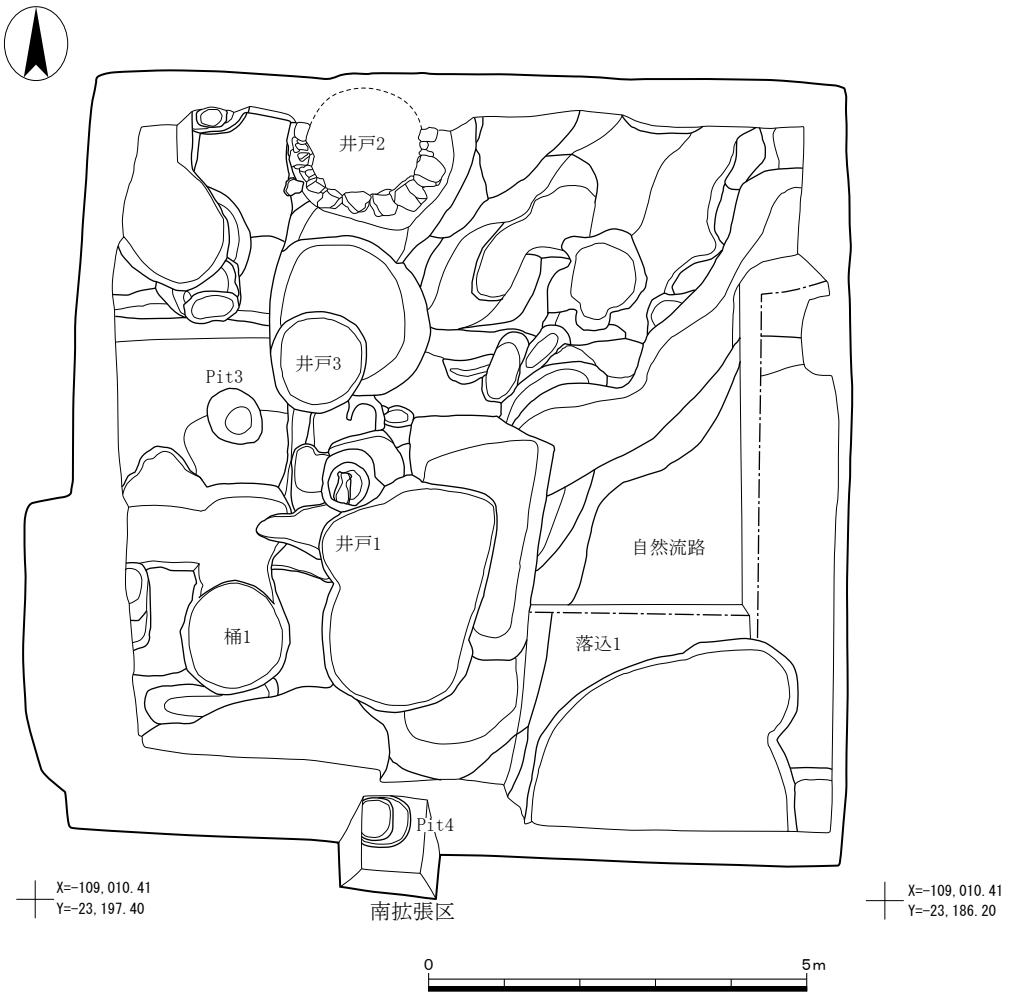


図６　遺構平面図（1:100）

時代の瓦片が数多く含まれていた。

東半部で検出した砂礫層上面で東西方向に延びる段差が、人工的なものか自然地形かに関しては調査区が狭小で結論が難しく、段差部より南側全体を落込１とした。南側に肩部が存在し溝状を呈する可能性も想定できるが、結論は近接地での調査に待ちたい。落込１内の堆積土層は、４層に分層でき、最上層と第３層は砂礫を含む泥砂を主体とし、第２・４層は砂礫が主体となっている。第２・３層からは、土師器杯・椀・皿・高杯、緑釉瓦を含む瓦片が出土している。土師器は、平安京Ⅰ期に属するものが主であり、瓦類も同時期とみられる。落込１内の堆積土層全体を、地山上面の段差を埋める整地土層とすれば、平安時代前期の土層ともいえる。しかし、これらの土層上面では平安時代の遺構は確認できておらず、成立を確認している遺構は近世初頭以降とみられるものだけである。平安時代の遺物を多く含むものの、近世初頭の整地土層の可能性もあり、今回の調査では結論は避けておきたい。

調査区では、地山直上面および整地層には、近世以降の土層、遺構が検出された。中世の土層、遺構は検出されず、混入としても中世の遺物は出土していない。江戸時代前期から近代に比定できる遺構は、井戸、大型の掘込、礎石など各種のものを確認し、陶磁器をはじめ土器や瓦類など

各種の遺物が出土している。

小結　今回実施した発掘調査では、平安時代前期の整地層と柱穴を、部分的ではあるが確認することができた。平安時代前期の土器や瓦類も多くはないが出土しており、狭小な調査区ではあったが一定の成果を得ることができた。平安時代前期の土層、遺構は、中和院に関連するものとみてよいだろう。性格などは、周辺調査との成果を合わせて総合的な見地から判断したい。

（小森俊寛・上村憲章）

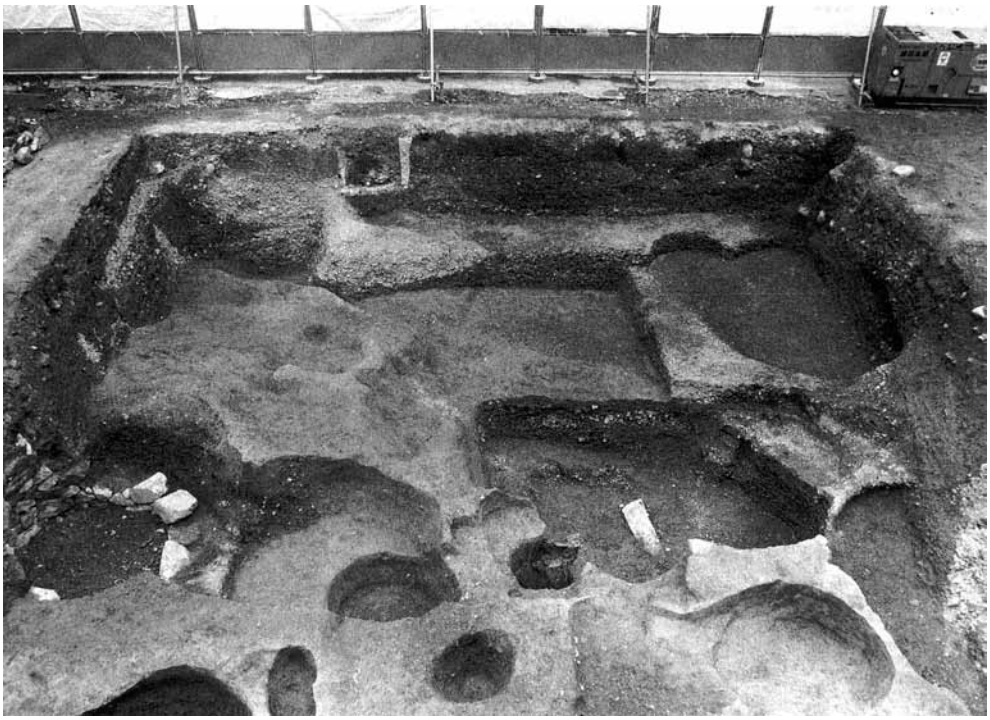


図７　調査区全景（西から）

3　平安宮太政官跡（図版1）

経過　本調査は二条児童公園内に耐震性貯水槽を新設するために行われた。調査地点は、二条城北西隅の堀と、竹屋町通を隔てて向かい合う位置にある。当地は平安宮太政官と宮内省間の南北道路推定地にあたり、また二条児童公園は、江戸時代に広大な敷地をもった京都所司代下屋敷の一画をなす。調査区のすぐ北側で1981年9月に小規模な調査[註]が行われており、幅4.5m、深さ1.3～1.7mの江戸時代前期の南北方向「濠」や室町時代の遺構が検出されている。

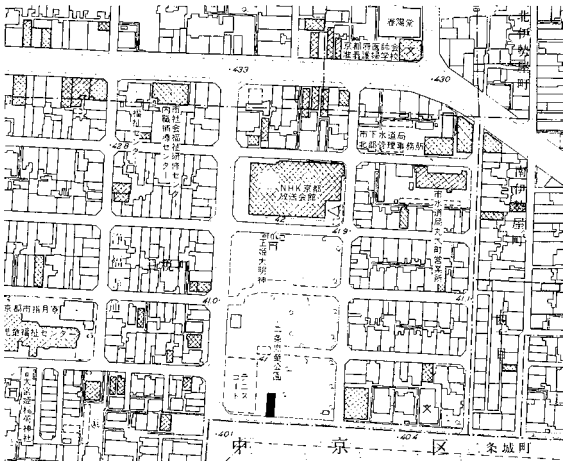


図8　調査位置図（1：5,000）

遺構・遺物　調査は江戸時代の盛土・整地層を重機で掘削し、オリーブ褐色から黄褐色の整地層上面を第1面として調査をはじめた（現地表下約1.2m）。この面で検出した遺構は、江戸時代の各時期のものがある。注目されるのは北側の大型土壙（ＳＫ1）であり、調査区北側の1981年調査の「濠」の延長と考えられ、この位置で西側に曲がるか、あるいは終息するものとみられる。

第1面の調査後、整地層を除去する作業に入った。この整地層から出土した遺物は平安時代の瓦が多く、室町時代の遺物、桃山時代の遺物が出土した。

整地層除去後の地山上面を第2面とした。第2面では、主として15世紀を中心とする室町時代と考えられる遺構が検出されたが、遺物は細片が多く、時期判断の難しいものもある。Ｐit２とＰit３は､ほぼ南北方向に位置しており、柱当たりを確認することができる。両者の柱間は約4.2mあり、その間の柱穴がＳＫ4によって削平されたとすると、柱間7尺の南北柵列か東側に延びる掘立柱建物と推定できる。

遺物の総量は整理箱で20箱あり、弥生時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、桃山時代、江戸時代の遺物が出土した。平安時代は瓦類が主体で、土器類は土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器が出土

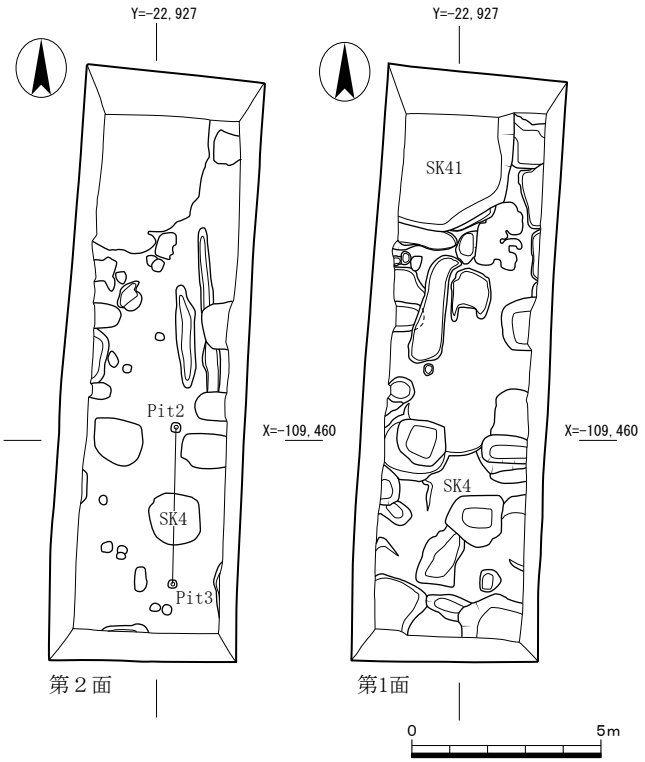


図9　遺構平面図（1:200）

図 10　第 1 面全景（北から）

図 11　第 2 面全景（北から）

した。他に畿内第Ⅳ様式の弥生土器壷片が出土している。

小結　本調査では平安時代の遺物は出土したが、遺構は検出できなかった。確認した最も古い遺構は室町時代の柱穴や土壙である。

オリーブ褐色から黄褐色の整地層は、桃山時代の遺物を含んでいるが、1981 年北側の調査では同じ層を室町時代ととらえている。少し離れた調査区の北側には聚楽第が比定されており、周辺地域を含め大規模な整地が行われたとみられる。整地層の詳細な時期については今後の調査に期待したい。

江戸時代の「濠」が、京都所司代下屋敷に関連する遺構とすると、その外郭とみるのが一般的であろう。しかしながら同屋敷の東限は日暮通までとされ、外郭の位置として疑問が残る。これが城郭と同様に屈曲部をもって東側に延びると理解できるが、今後の調査課題といえよう。

また、弥生時代の遺物は、隣接する二条城北遺跡との関連でとらえられる。　（高　正龍）

註　辻　純一「太政官跡」『昭和 56 年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1983 年

4　平安京朱雀大路跡（図版１・４）

経過　この調査はＪＲ丹波口駅周辺の再開発に伴うもので、旧専売公社跡地周辺の調査としては第８次になる。本年度の調査対象地は、丹波口駅北側の千本通五条北東角（朱雀大路跡）である。この周辺では今回の調査区北東部で５・６次の発掘および試掘調査を、昨年度は今回の調査地北側で朱雀大路関連の発掘調査を実施している。昨年度の調査（７次調査）では、調査区が朱雀大路路面のほぼ中央ということもあって平安時代の顕著な遺構はなかったが、平安時代末から鎌倉時代の遺物を含む湿地状の堆積、近世の土取り跡とみられる土壙などを検出している。今回の調査区も前回同様に路面のほぼ中央に該当し、中央部で朱雀大路の路面整地層や轍とみられる溝状の遺構を検出した。

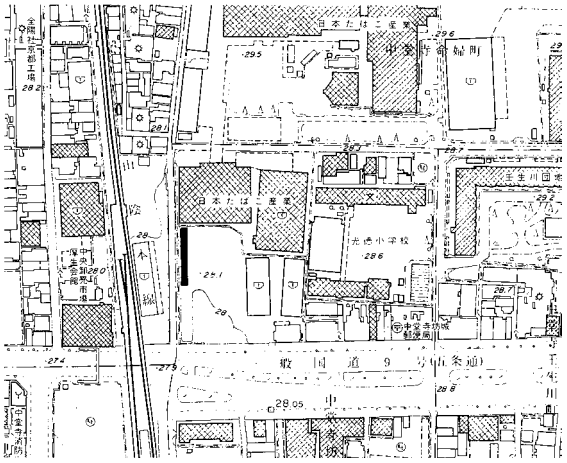


図12　調査位置図（1：5,000）

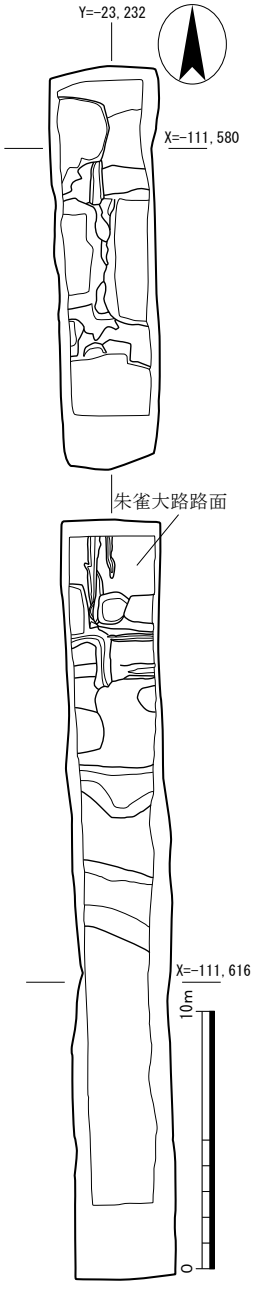


図13　遺構平面図
（1:300）

遺構・遺物　調査予定地の北寄りに排水管が敷設されていたため、調査区を南北の２区画に分割した。朱雀大路路面は南調査区の北端および北調査区の中央南寄りで検出したが、北調査区では建物基礎などの現代撹乱により残存状態は良くない。南調査区では路面の整地層は小礫や瓦を含む茶褐色の粘質土層に泥砂層が混じるもので、地山の茶褐色砂泥層上に厚さ約10cmほどを確認している。またここでは轍とみられる、断面がゆるいＵ字形を呈する溝を数条重複して検出した。この路面が遺存していた南調査区北端部以南では近世以降の流路あるいは湿地状の遺構の一部と考えられる泥土層が厚さ約１ｍにわたって堆積し、路面は検出できなかった。

遺物の出土は少量で、大半が近世以降の土取穴、湿地などから出土したものである。朱雀大路路面の整地層には、わずかに瓦、土師器の小片が含まれていただけであった。

小結　この周辺の朱雀大路関係の調査ではこれまで５次、６次調査で東側溝を確認していたが、路面そのものの検出は今回が初めてである。前回と同様に調査区が大路のほぼ中央部のため、他の平安時代の遺構は検出していないが､近接した地点で朱雀大路の側溝と路面が確認できた意義は重要である。今回検出した路面は出土遺物が非常にわずかであるため厳密な時期決定はできないが、出土した瓦の時期や５次、６次での側溝の時期が平安時代末から鎌倉時代に属することから、ほぼ同時期のものとみられる。　（平尾政幸）

5　平安京左京七条二坊・名勝滴翠園（図版１・５）

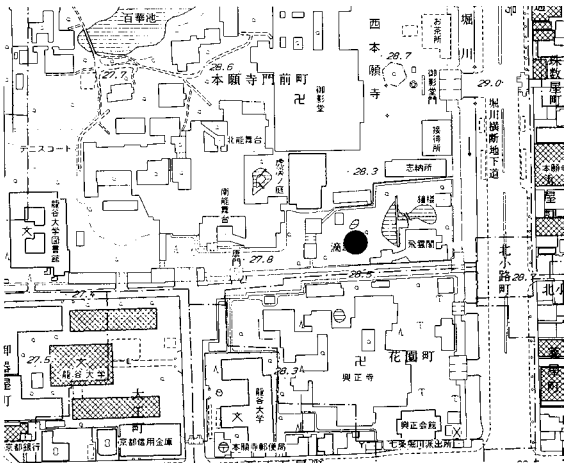


図 14　調査位置図（1 : 5,000）

経過　調査地点は西本願寺境内南西地区に位置する名勝滴翠園内で、今回庭園の整備事業に伴い発掘調査を実施した。滴翠園は国宝飛雲閣に伴う庭園で、飛雲閣北側の滄浪池と西側の西池（通称）の、大小２つの池を中心に展開する。滄浪池と西池は暗渠で結ばれ、西池からは庭園外へ延長する排水路が取り付く。現在、滄浪池は井戸水を引き入れ水量を保っているが、西池は過去数十年間、水の枯渇した状態で、暗渠、排水路もその機能を果たしていない。今回はこの西池から排水路に５箇所の調査区（１～５区）を設定した。さらに、庭園内の基本層序確認のために２箇所の調査区（６・７区）を設定し、現在は西池に取り込まれた形となっている「醒眠泉」も調査対象とした。また補足調査として西池を中心とした庭園西半部の平板測量を行った。

遺構･遺物　庭園の西半部は西池の他に「醒眠泉」「筆塚」、および茶室「青蓮射（澆花亭）」「西待合」「清浄亭」の建物で構成される。通称西池とされるのは円形に一段落ち込んだ部分で、階段が付属し池底に降りることができる。ここから北東の「醒眠泉」と石碑を含む円形の池庭、さらには「青蓮射（澆花亭）」前まで玉石を敷いた枯流れが続く。一方西池の南西は、両側に石垣を積み上げた排水路に接続する。西池周辺の石組みは、造り替えが繰り返されたことが一見してわかるほど複雑である。また滄浪池から西池の南を通って、排水路まで溝が敷設されている。滄浪池から西池、西池から排水路までが暗渠となり、東西口には水門が付く。

西池周辺に設定した各調査区は、面積も 0.6 ～ 2.5㎡と狭く、土層の堆積状況の確認が主な調査であった。検出した遺構には、排水路の底に据えた橋に関係する可能性のある木片（１区）、暗渠の西口水門の水受けとして据えた平瓦、水門前の敷石（２区）、旧西池の西肩口を形成する庭石（３区）がある。排水路にあたる部分（１・２区）では、水流を示す堆積を確認し、西池南側の溝の下層では、本来の池南肩口の立ち上がりにあたる土層を確認した（４区）。また基本層序観察のための６区では、本願寺移転時の整地層と室町時代の堀川の氾濫によると考えられる流路の堆積を確認した。同じ目的で設定した７区では、室町時代の遺物包含層を確認したが、本願寺整地層といえる堆積はなかった。

「醒眠泉」は、池底に据えられた八角形の石枠内を掘り下げたところ、現在の池底から深さ約60cmで木製の井戸枠と枠内を埋める粘土層を確認した。井戸枠は径 70cmで、幅約 10cmの縦板十数枚を円形に組んでいる。粘土層の下層には大礫が投棄され、底部の検出は不可能であった。粘土層より上層も玉石がつめられており、人為的に埋められたことがわかる。

遺物の大半は６・７区から出土したもので、本願寺に関する瓦類が多くを占める。西池および

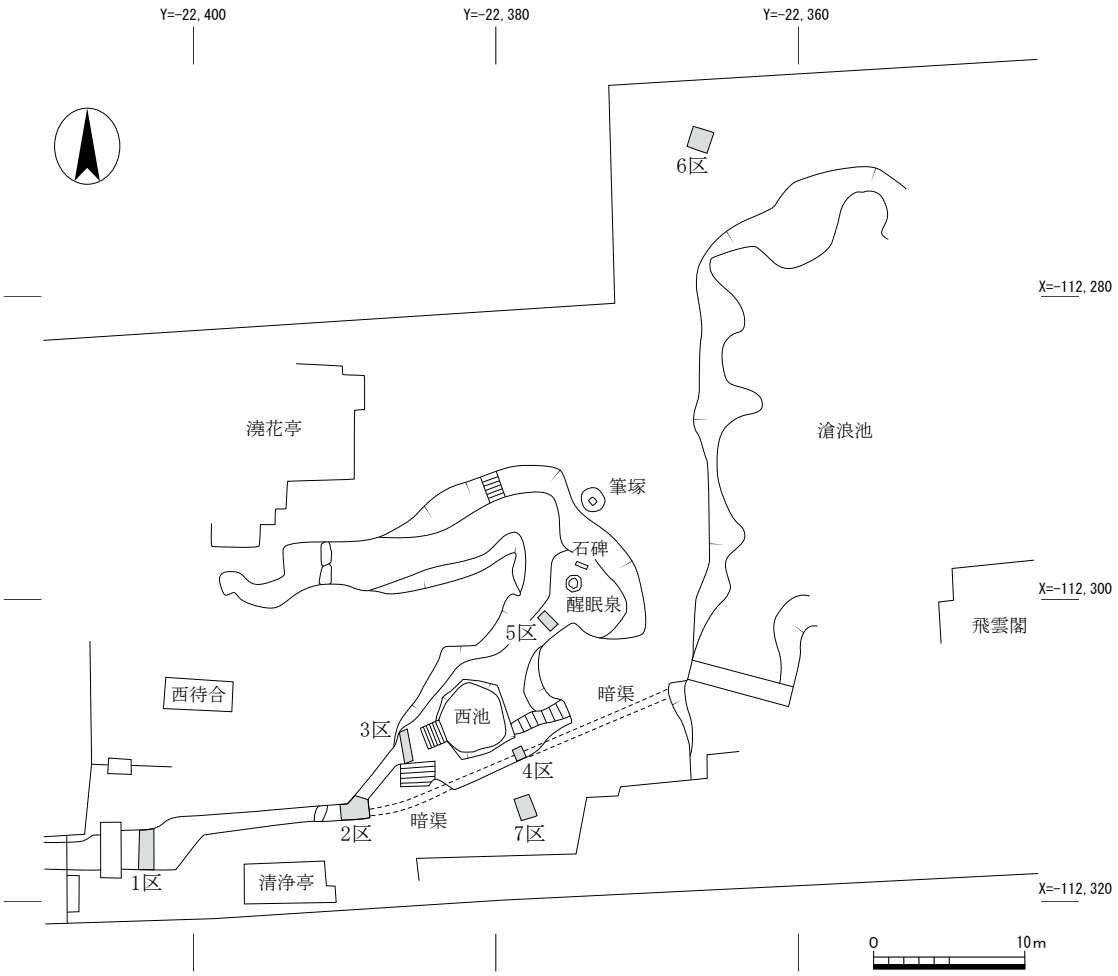


図15　遺構平面図（1:500）

排水路に設定した１～５区からの出土土器類は、小片で時期比定は困難だが、おおよそ江戸時代末期以降のものとみられ、排水路最下層（１・２区）から硝子製品や碍子が出土している。

小結　飛雲閣に伴う庭園が「滴翠園」と称せられ、その体裁を整えたのは明和年間、文如上人の時代とされる。その中で、すでに元禄年間には存在したという洛陽七井の一つ「古醒井」を明和３年（1766）に採掘し、「醒眠泉」としたという。調査の結果、「醒眠泉」下層で井戸枠を検出し、これが井戸であったことを確認した。

西池と排水路の築造は出土遺物から明治時代以降といえる。文化８年（1812）に描かれた『滴翠園十勝図』や明治初頭（明治５・９年）の『西本願寺飛雲閣之図』銅版画にも「醒ガ井水」あるいは「醒眠泉」はあるが、西池や排水路は描かれていない。そして明治 29 年の境内図（西本願寺財務局所蔵）には滄浪池の西隣に池があり、そこから庭園西門まで水路が描かれている。また江戸時代の庭園内で催された茶会などを記録した史料にも、西池らしい池庭のうかがえる史料はない。調査結果とこれらの史料から、西池と排水路は明治時代（絵画史料からすると明治９～29 年）の庭園整備の際に造られたと考える。その後、水位の低下などに伴って整備を繰り返すうちに現在の形となったのであろう。　（近藤知子）

6　平安京左京八条二坊１（図版１・６）

経過　調査地は平安京左京八条二坊十四町に該当し、トレンチ東側は西洞院大路に面する。同じ十四町内では、当地の南側で1995年に発掘調査[註1]を行っている。また、隣接のＪＲ京都駅構内およびその周辺の調査から、中世八条院町の様相を示した町屋跡や、仏具・鏡などの鋳造関係資料が多量に検出されている。したがって、調査目的を西洞院大路以西の中世町屋の検出に主眼をおいた。

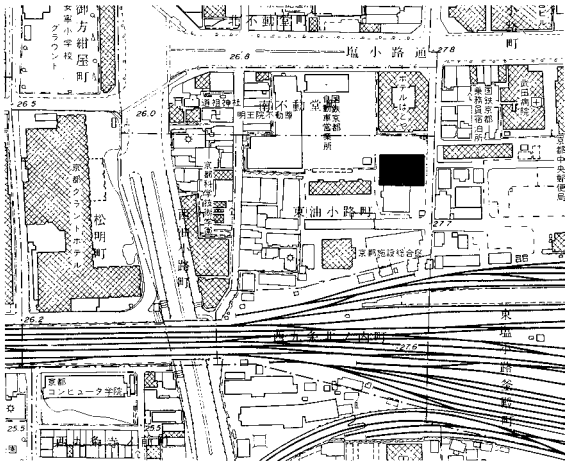


図16　調査位置図（1：5,000）

明治初期の耕作土層と、その下の幕末の遺構までを重機で掘り下げたが、途中、初代京都駅の転車台が確認されたので記録作業を行った。

遺構　耕作土層直下の遺構面は砂礫で自然堆積層である。近隣の調査では中世の厚い包含層を伴うが、当該地では明治時代の京都駅整備に伴い、ほぼ全面にわたって削平を受けている。

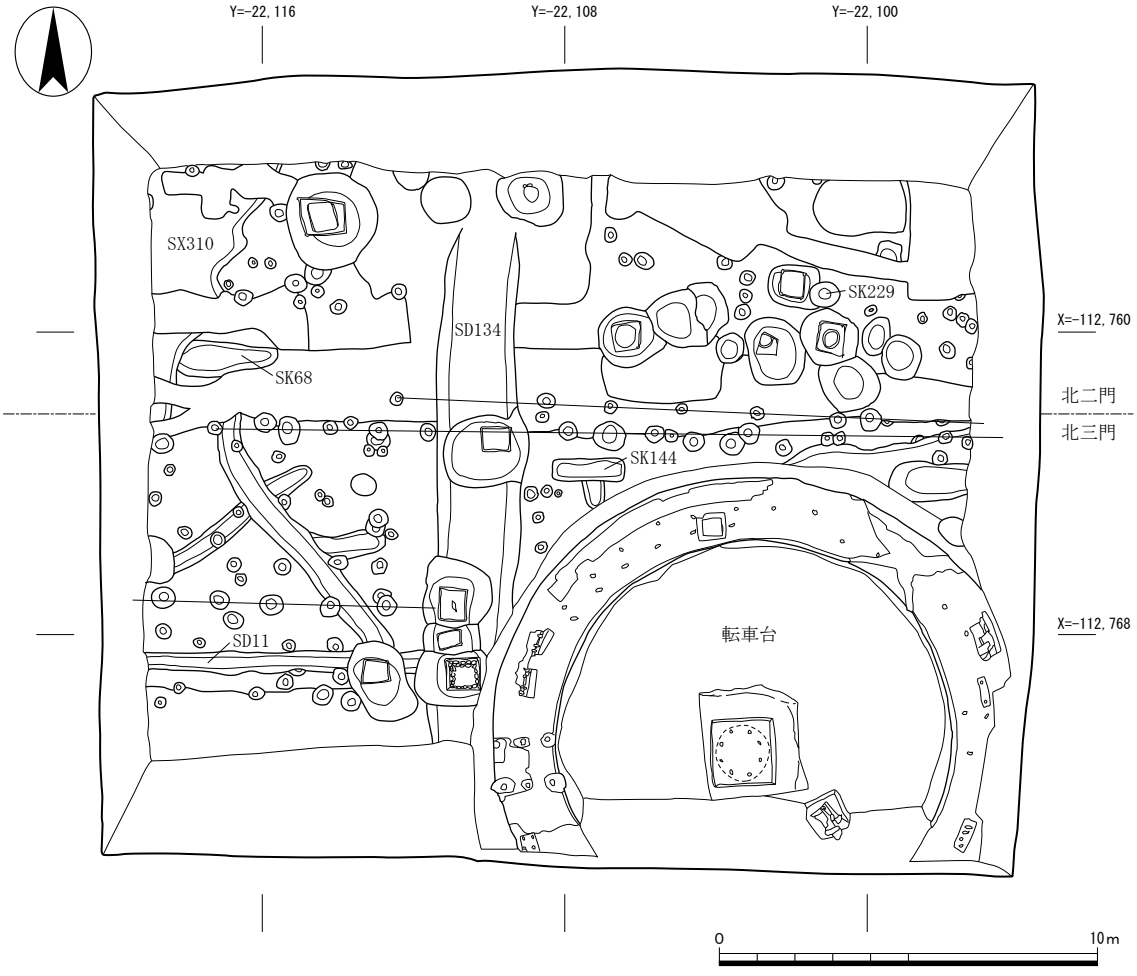


図17　遺構平面図（1:200）

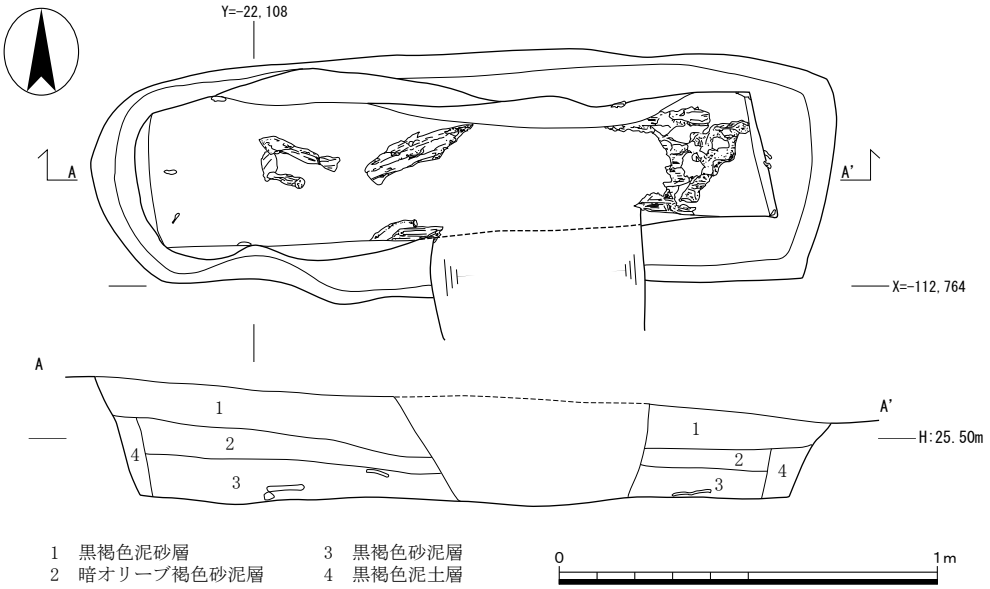


図18　SK144実測図（1:20）

遺構は、トレンチ北西隅の平安時代前期の池状遺構（ＳＸ310）と幕末以降の遺構を除き、12～15世紀までのものが検出された。遺構総数は310基で、その内容は掘立柱建物柱穴、井戸15基、木棺墓1基、土壙、溝などである。

トレンチ北西隅の池状遺構（ＳＸ310）はオリーブ褐色泥砂が堆積し、平安時代前期の遺物を検出した。12世紀以前の明確な遺構はこれのみである。

12世紀に入ってトレンチ中央を南北に幅２ｍの溝（ＳＤ134）が掘られるが、井戸との切り合いから13世紀には埋まっている。北二・三門を区切る推定ライン付近に東西方向の柵列を検出したが、時期は確定できない。井戸は溝（ＳＤ134）内の５基と、トレンチ北東部の北二・三門を区切るライン北２ｍ付近の８基に集中的に検出され、何らかの土地利用上の規制が考えられる。井戸はすべて木組みか素掘りで、平安時代末期から南北朝時代までの時期で、量的には13世紀末から14世紀初めのものが多い。また、鋳造関係の遺物が詰まった土壙（ＳＫ68）が検出された。幅約１ｍ、長さ2.5ｍ、深さ約0.3ｍを測る。工房跡が付近に存在したことを示している。トレンチ中央部で東西方向に埋葬してある木棺墓を１基（ＳＫ144）検出した。鉄釘が木棺痕跡に沿って検出され、内側から骨を検出した。この木棺は幅0.3ｍで狭く、長さ1.8ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋納品はなく、骨も原形を留めず、歯も検出できなかった。

15世紀に入る遺構はトレンチ南部の東西溝（ＳＤ11）とその北に沿って並ぶ東西柵列だけである。したがって、それらは町屋に関連するものではなく、町の衰退を示すものかもしれない。

幕末の遺構として、トレンチ北東部に木樋暗渠、４頭の犬の遺体を埋めた土壙、地鎮土壙（ＳＫ229）などがあるが、明治期の耕作土で覆われる。この耕作土を切る初代京都駅の転車台（ただし付属設備はすべて取り去られている。）は直径14ｍ、高さ1.6ｍを測り、現代のものより小型である。明治期の車両の大きさに対応するものであろう。円周部は煉瓦を漆喰で固めた10段

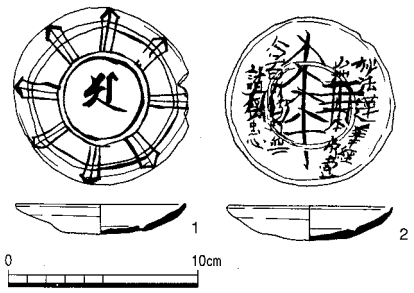


図19　ＳＫ229出土墨書土器実測図（1：4）

のイギリス積み。中心軸部土台は1.73ｍ四方、厚さ0.46ｍの御影石製である。

遺物　池状遺構（ＳＸ310）から平安時代前期の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器Ａ・瓦などが出土している。この平安時代前期と幕末以降の遺物を除けば、他の近隣調査と同じ出土傾向を示し、平安時代末期から南北朝時代にかけての土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器・輸入陶磁器などが主である。土壙（ＳＫ68）からは坩堝・鞴の羽口・鏡や仏具の鋳型・砥石、灰などが出土した。13世紀末から14世紀初めのものである。

特筆すべき遺物に、江戸時代後期の地鎮に用いられ、内面に墨書が施された２枚の土師器皿がある。それらは合子状に合わされ直径50㎝の土壙（ＳＫ229）底に置いてあった。釈文は上の土師皿が中央に梵字で胎蔵大日を表わす「𑖀」を配し、その周りに法輪をめぐらしている。下の土師皿は九文字の経文で魔を断つ日蓮宗の秘法とされる「九字法」で「妙法蓮華経□□□一」「令百由旬　内無諸衰患」と読める。数少ない江戸時代後期の町人の信仰形態を示す資料となろう。

小結　以上の成果を土地利用の変遷から整理するならば、次のようにまとめることができる。平安時代前期に一時的に開発されたが、すぐに衰退したようである。平安時代後期に至り、付近に西八条殿・八条院などが営まれてくると、溝が掘られ再開発が及んできたようである。その後、13世紀末から14世紀初めをピークとする町屋が展開する。鋳造関係遺構・遺物を検出する町屋跡の広がりについては今後の課題であろう。しかし15世紀には衰退して田畑と化し、幕末に至るまで変わらなかったとみられる。幕末には再び開発が始まるが、明治時代初めに一度耕地化されたようである。明治10年、そこが京都駅構内となったのも、この付近が当時の市街地の南限だったからであろう。

このように、現代までの土地変遷の歴史が明確に追える貴重な遺跡である。鋳造関係の職人が住み、宅地内に墓を作り、井戸を繰り返し掘っていた住民の姿も窺い知ることができる。とりわけ宅地内墓（山田邦和氏のいう「七条町型墓地[註2]」に分類されるが、ここでは町中央部の空閑地ではなく、西洞院大路に面した町屋部分に墓地がある点が異なっている。）のあり方は、中世墓制を考える上での好資料となろう。また地上遺構として残存しない初代京都駅関係遺構を検出したことも、交通関係史は勿論、近代京都の歴史を考える上で不可欠なものであろう[註3]。

（東　洋一・南出俊彦）

註１　百瀬正恒「平安京左京八条二坊」『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1997年
註２　山田邦和「京都の都市空間と墓地」『日本史研究』409号　1996年
註３　森　俊郎「初代京都駅の転車台が出土」『ＲＡＩＬ　ＦＡＮ』№529　1996年

7　平安京左京八条二坊２（図版１・７）

経過　この調査は、ホテル新築工事に伴って実施したものである。調査地は、平安京左京八条二坊十四町推定地にあたる。

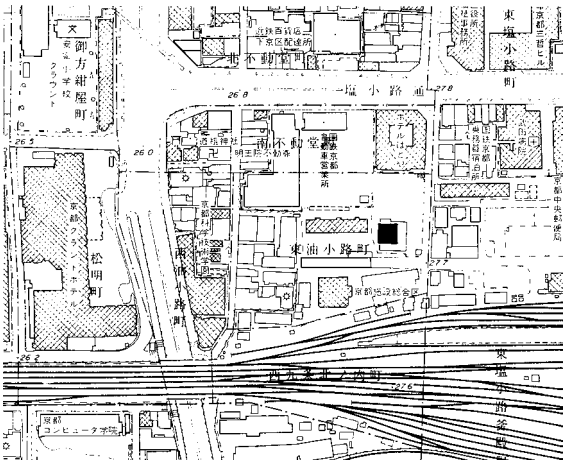


図20　調査位置図（1：5,000）

調査地周辺では、近年のＪＲ京都駅再開発に伴う数次の調査により、古代・中世の土地利用について数々の成果をあげている。特に、中世八条院町に関連する調査では、仏具・鏡などを生産していたことを裏付ける鋳型が多数発見されている。今回の調査では、１次調査（本概要１章Ⅱ－６）で検出した初代京都駅に関連する遺構、中世生産遺跡が西洞院大路以西に展開しているのかの確認と、平安時代後期に属すると考えている南北方向の溝の続きを確認することを目的とした。

遺構　第１面では、初代京都駅（七条停車場）に関連する転車台と、それに取り付くと考えられる線路の基礎と思われる柱穴列を検出した。転車台は１次調査でみつかったものの続きである。柱穴の中には柱が残っているものもあった。江戸時代と考えている遺構には耕作に伴う小溝を検出している。

第２面では、鎌倉・室町時代に属する井戸７基、土器片・炭を多量に含んだ土壙などを検出している。井戸ＳＥ120は、北半部が埋設管敷設に伴う攪乱によって上部が削平されていたが、方形の掘形をもち、底部で幅0.3ｍほどの縦板を多角形に組んでいた痕跡が認められた。掘形の規模は一辺が約2.3ｍ、深さは検出面から約1.3ｍであった。井戸ＳＥ205は、方形の掘形を呈し、井筒を桟で補強した縦板組みであった。底部に曲物を施していた。掘形の規模は一辺約1.5ｍ、検出面からの深さは約1.3ｍであった。それぞれの井戸部材は腐食していて遺存状況は良くなかった。建物にまとまる柱穴は検出していない。

第３面では、平安時代後期に属する溝ＳＤ134を検出している。幅約1.5ｍ、深さ約0.3ｍの規模をもち、調査区を南北に貫く。１次調査で確認した溝の続きである。

遺物　鎌倉・室町時代に属する井戸、土壙などから出土した鋳造関係の遺物（坩堝、鏡の鋳型など）が出土しているが、周辺の調査と比べると出土量は少ない。他に土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、滑石製品も出土している。

溝ＳＤ134からは平安時代後期とみられる土師器が出土している。同時期と考えられる遺物には、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器などがある。

小結　今回の調査で得られた成果をまとめると、以下のようになる。

現在、地上遺構としては現存してないが、明治10年（1877）に開業した初代京都駅（七条停車場）に関連する転車台と、それに付随する線路基礎と考えられる柱穴列を確認できたことは、近代京

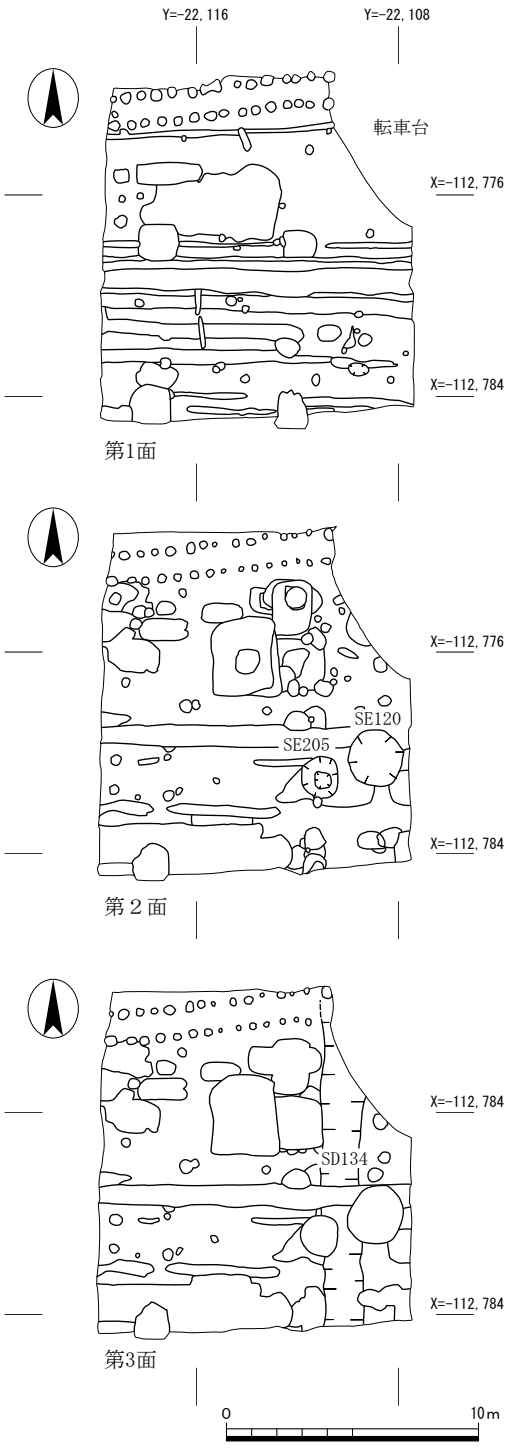


図21　遺構平面図（1:300）

都の歴史･交通史を考える上で重要な資料となろう。

近世については、耕作に伴う小溝以外は明確な遺構は認められず、この地で耕作が行われていたことがうかがえる。

鎌倉・室町時代については、これまでの周辺の調査同様、鏡の鋳型などの鋳造活動を裏付ける遺物が出土したが、その量は多くなく、西洞院大路を境に東と西では活動のあり方に異なる面がうかがえる。また、狭い調査区ながら井戸を多く検出していることから、付近に生活の場が展開していたことがうかがえる。しかしながら建物を示す柱穴は確認しておらず、空閑地であったと考えられる。

平安時代には、調査区東半部を南北に貫く溝ＳＤ134を検出した。後期に属すると考えているＳＤ134は、当調査区の南で1995年に実施した京都七条公共職業安定所新築に伴う発掘調査[註]では確認されておらず、両調査区の間で方向を変えると考えられる。その他には当該期に属する遺構は確認しておらず、積極的な開発は行われなかったと思われる。

（南出俊彦・久世康博）

註　百瀬正恒「平安京左京八条二坊」
『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所　1997年

8　平安京左京八条三坊１（図版１・８～10）

経過　本調査は、京都駅北口広場地下街（ポルタ）の拡張計画に伴うもので、京都駅北口広場地下街の調査では第６次調査になる。調査対象地は京都駅北口広場北西部で、平安京の条坊復原では、左京八条三坊六町・七町・十町・十一町および八条坊門小路・室町小路にあたっている。また、この地は平安時代以降も八条院町およびその隣接地として活況を示したことが知られている。

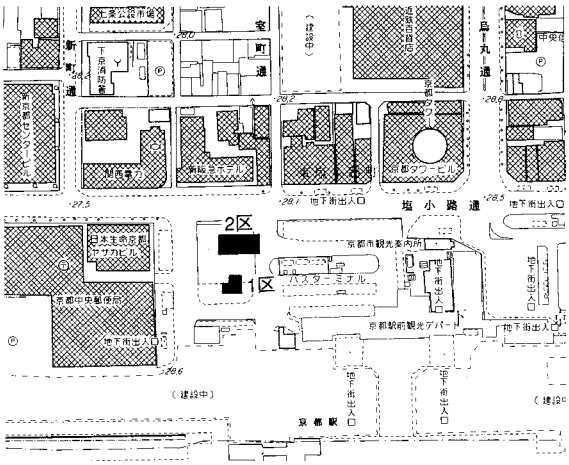


図 22　調査位置図（1 : 5,000）

調査地周辺は京都市内では最も頻繁に発掘調査を実施している地域の一つで、一連の調査により平安時代から室町時代の路面・建物・井戸・土壙・溝などを検出し、部分的には町並みの復原も可能となってきている。また、遺物の出土量も多く、特に鋳造関係の遺物が多量に出土することから、京都における手工業生産の実態解明のための貴重な遺跡でもある。

調査地は京都駅前の非常に交通が頻繁な場所にあたり、また、地下街建設工事と調査が平行することにもなったので、交通の確保・安全対策・工事の進捗状況などの要因を考慮し、調査区は南側の１区、北側の２区に分けて設定した。１区は八条三坊六町および八条坊門小路推定地、２区は八条三坊七町推定地にあたる。調査はまず１区、ついで２区の順にすすめ、両調査区とも室町時代（第１面）、平安時代後期から鎌倉時代（第２面）の遺構面で記録を取った後、最後に断ち割り調査を実施して下層の状況の把握を行った。

遺構　調査開始前に原因者により現地表下約 1.5 ｍまで１次掘削が行われていたので、観察ができたのは桃山時代から江戸時代の耕作土である黒褐色砂泥層からである。その下層には室町時代の遺物を含む厚さ 10 ～ 20㎝の黄褐色・黄灰色・黒褐色の泥砂層があり、室町時代の遺構の成立面となっている。この泥砂層は次に述べる１区の路面・側溝の部分にはない。泥砂層下層の地山砂礫および２区で検出した平安時代前期から中期の流路の埋土上面に、平安時代後期から鎌倉時代の遺構がある。

第１面　井戸・土壙・柱穴・路面・溝などを検出した。路面は１区南端で東西方向に検出した。検出幅は約 1.5 ｍで、調査区外南側へ広がっている。直径１～ 15㎝の礫が敷いてあり、固く締まっている。遺物は焼締陶器甕と白磁椀の小片が１点ずつ出土した。路面の北側には相互に切り合う５条の東西方向の溝を検出した。切り合いのため不明確だが、幅はそれぞれ１～２ｍで、最も深い溝 35 で約 50㎝の深さがある。また、溝 38・39 の２条は調査区内で途切れている。溝 38 には護岸に伴う杭列が残っていた。溝の出土遺物は若干の混入はあるものの、溝 35 が 13 世紀後半、溝 36 が 12 世紀後半から 13 世紀前半、溝 37 が 14 世紀、溝 38・39 がともに 13 世紀前半でまと

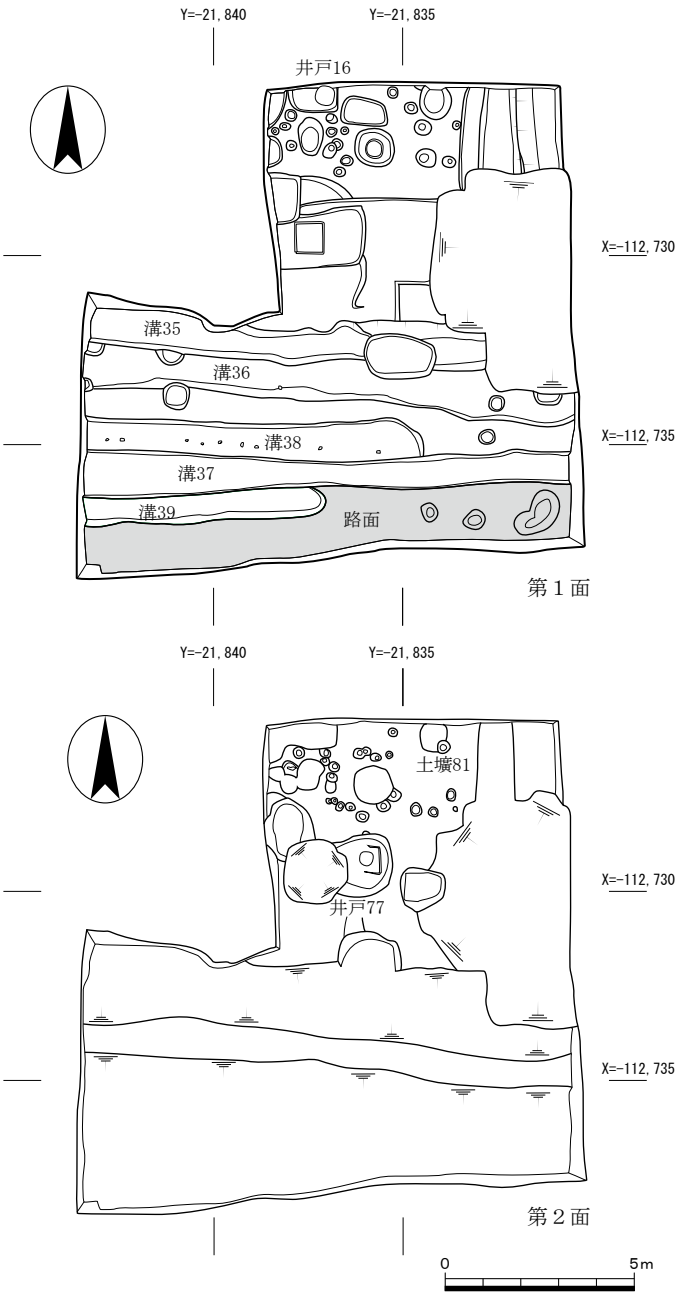


図23　１区遺構平面図（1:200）

まる。したがって、切り合い関係も考慮するとこれらの溝は、溝 36 →溝 38・39 →溝 35 →溝 37 の順に埋没したと推定できる。これを八条坊門小路路面、北側溝とすると、平安京復元案から約 10 ｍ南へずれた位置にあたることとなる。

１区の溝の北側および２区の全域には、多数の井戸・土壙・柱穴が点在する。井戸枠には方形縦板組みのもの、底を抜いた曲物を重ねたもの、石組みのものなどがある。土壙は円形や方形の平面形を呈し、一辺２ｍ以下の規模の小さなものが大部分である。多くはゴミ処理の穴と考えている。柱穴はいずれも直径約 30㎝で、柱あたりは直径 10 ～ 20㎝ほどである。底に石を据えるものもある。調査区東部に多く、西部には少ない傾向があるので、室町小路に近い地区に建物があったと推定することができるが、個々の建物の復原には至っていない。また、２区西側には南北方向の溝 200 がある。室町小路西築地より約 30 ｍ西側の位置にあり、建物の背後を区画する溝の可能性がある。

第２面　井戸・土壙・柱穴・路面・溝などを検出した。１区で検出した路面は、この時期から成立しており、溝 36 はこれに伴うと考えている。それ以外の井戸・土壙・柱穴は第１面と同様、１区の北部および２区の全域に分布する。ただし、遺構の総数は第１面に比べて少ない。井戸には方形縦板組みのものと、底を抜いた曲物を重ねたものがある。２区の井戸 286 では井戸枠底部の横桟内に２個の曲物が据えてあった。土壙も第１面と同様、多くがゴミ処理の穴と考えられるが、特異なものとして１区の土壙 81、２区の土壙 291 と土壙 335 をあげることができる。１区の土壙 81 は、直径約 30㎝の土壙に灰釉陶器の壷を倒立させて据えてあった。土壙底には直径２～３㎝の小石がまばらに入れてある。何らかの祭祀に伴う遺構かもしれない。２区の土壙 291 は

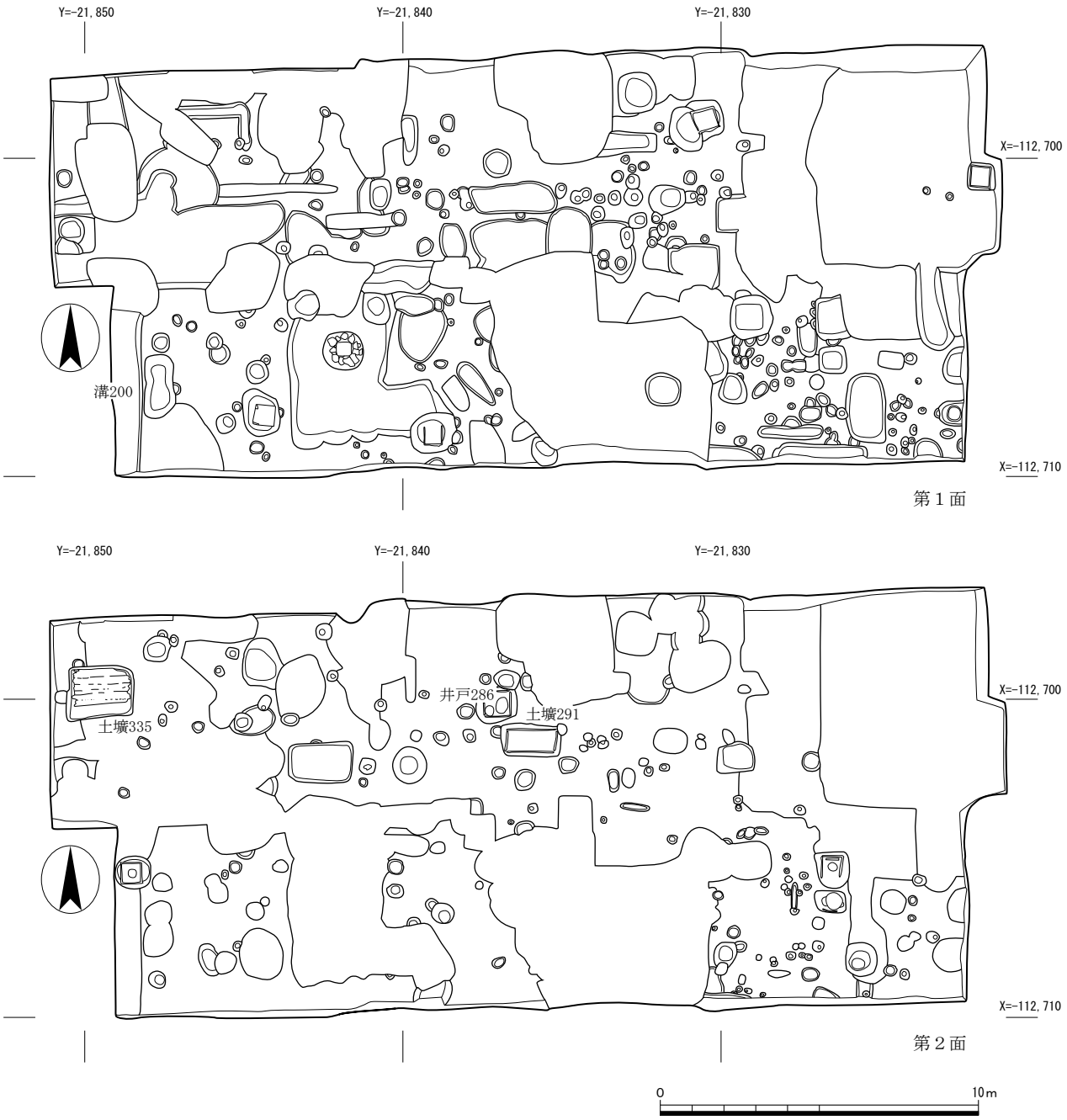


図24　２区遺構平面図（1:200）

大きさ 1.9 × 1.0 ｍで四辺に幅約 15㎝の板を組み合わせて立ててある。また、土壙 335 は大きさ 2.0 × 1.6 ｍで底部に長さ 1.8 ｍ、幅 1.1 ｍの一枚板が据えてあった。今のところ両者の用途は不明である。柱穴の規模や形状、分布状況は第１面と同様である。

なお、２区東部の下層で流路を検出した。幅 15 ｍ以上・深さ 0.5 ｍ以上で、調査区東側・南側に広がる。肩口の方向から北東から南西方向に流れていたと推定できる。埋土は直径３～ 15 ㎝の礫を含む泥砂・砂泥である。平安時代前期から中期の遺物を多く含んでいた。この下層は地山の砂礫層になる。

遺物　調査では大きく第１面・第２面・下層流路の３回に分けて遺物を採集したが、遺構相互

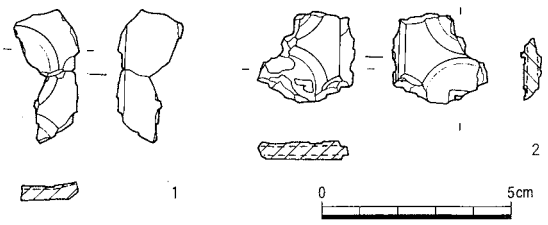


図 25　2 区出土銭貨鋳型実測図（1 : 4）

の切り合いが多かったため、新しい時代の遺構に、古い時代の遺物混入が多くあった。全体では室町時代の遺物が約半数を占めている。

室町時代の遺物には土器類・瓦類・鋳造関係遺物・金属製品・石製品・木製品などがある。土器類には土師器皿･小型鉢、瓦器椀･皿･鍋･釜･鉢・火鉢・甕、焼締陶器鉢・壷・甕、施釉陶器椀・皿・おろし皿・鉢・香炉、青磁椀・鉢・盤・壷・香炉、白磁椀・鉢・壷、褐釉壷、染付壷などがある。数量では土師器の皿が多くを占め、ついで瓦器の椀･鍋、焼締陶器の鉢･壷･甕が多い。輸入陶磁器では 1 区の井戸 16 から青磁の香炉･椀･盤がまとまって出土した。瓦類には丸瓦・平瓦・軒瓦・甎がある。いずれも出土量は非常に少ない。鋳造関係遺物には鋳型・鞴の羽口・坩堝・銅滓がある。鋳型は大部分が鏡の鋳型で、他に銭貨の鋳型が 2 点ある。銭貨の鋳型は両者とも 2 区より出土した（図 25）。ともに厚さ 5 ㎜ほどで、小さな破片に砕けている。 1 は片面に銭面をもつ破片で、銭面には粗土の上に薄く真土が重ねられている。もう一方の面は平坦に仕上げ、端部が銭面の方に反っている。 2 は両面に銭面をもつ破片で、 1 と同様に粗土の上に薄く真土を重ねて銭面を作る。それぞれの面で銭部・湯道・堰を観察することができ、片面には銭銘があった痕跡が残るが、剥離しており判読できない。金属製品には鉄釘・銅鋺、石製品には滑石製鍋・硯・砥石がある。木製品は井戸と溝から出土した。井戸枠・曲物・杭・板材があるが、腐朽が進んでおり、遺存状態は悪い。その他に凝灰岩片・焼けた石片・焼けた壁土が出土している。

平安時代から鎌倉時代の遺物には土器類・瓦類・鋳造関係遺物・金属製品・石製品・木製品などがある。土器類には土師器皿・鉢、瓦器椀・皿、須恵器鉢、焼締陶器鉢・甕、灰釉陶器椀・壷、青磁椀・皿・合子、白磁椀・壷・合子、青白磁椀・皿・合子、褐釉壷などがある。この時期も土師器・瓦器・焼締陶器が多くを占めている。土壙 81 から出土した灰釉陶器の壷（図 26）は、口縁端部を欠くがほぼ完存している。外面全体に薄く灰黄色の釉薬が施されているため、調整の詳細はよくわからないが、体部外面をケズリ、口縁部外面および体部内面をヨコナデで仕上げている。頸部外面には 1 条の沈線がめぐる。また、底部外面にはヘラ切りの痕跡がわずかに残っている。瓦類には丸瓦・平瓦・軒瓦・甎があるが、室町時代と同様、非常に少ない。鋳造関係遺物には鋳型･鞴の羽口･坩堝･銅滓がある。鋳型には鏡･鋺･刀装具（？）の鋳型があり、そのほとんどが鏡である。鏡の鋳型の中には菊花の文様が判明する破片もある。金属製品には鉄釘・鉄滓・用途不明の銅製品、石製品には滑石製鍋・砥石がある。木製品には井戸枠・曲物・板材があるが遺存状態は悪い。その他に焼けた壁土と馬歯が出土している。

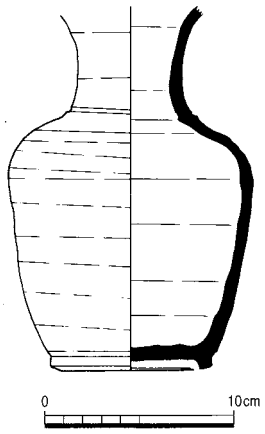


図 26　1 区土壙 81 出土
灰釉陶器壷実測図
（1 : 4）

平安時代前期から中期の遺物には土器類･瓦類･金属製品･石製品･

木製品などがある。多くは２区の下層の流路から出土しており、埋土内に散らばって埋没していることから、流路上流から流されてきたものが堆積したと考えている。土器類には土師器皿･高杯･盤、黒色土器椀・甕、白色土器皿、須恵器杯・鉢・壷・甕、灰釉陶器椀・壷、緑釉陶器椀・耳皿などがある。土師器の他にも黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器が一定の割合を占める。瓦類は少量の丸瓦と平瓦の他に緑釉瓦の破片が１点出土した。金属製品には銅の針金、石製品には石帯がある。石帯は巡方の破片３点で、うち１点は未製品である。木製品は完形の杓子や曲物片などが確認できるものの、多くは用途不明品である。その他に土錘･馬の骨や歯が出土している。

さらに、わずかながら弥生土器の壷、古墳時代の土師器の甕・小型器台、須恵器の杯・壷の破片が、混入して出土している。

小結　今回の調査で検出した最も古い遺構は平安時代前期から中期の遺物を含む流路である。周辺の調査でも同じ方向に流れる流路を多数検出しており、今回の流路もそのいずれかにつながるものとみられる。

調査地で恒常的な生活の痕跡を認めることができるようになるのは、平安時代後期になってからである。流路は埋没し、整地され、街路が整備されている。その中で、１区で検出した八条坊門小路の路面と北側溝が、平安京復元案よりも約 10 m南へずれている可能性が出てきたことは注目できる。復元案で路面にあたる部分に井戸･土壙･柱穴などの遺構が営まれていることから、当初から今回検出した場所に路面・側溝が構築されていたと考えられ、平安時代後期の条坊制に対する意識を考察する上で興味深い。

室町時代になると、全域で整地が行われるが、八条坊門小路の路面はほぼ踏襲されている。個々の建物の復原はできていないが、遺構の数が増加することからも当時の活況がうかがえよう。また、鏡や銭貨の鋳型が出土したことから調査地でも鋳造生産が行われていたことが明らかとなった。

その後、室町時代後半になると遺構・遺物がほとんど認められなくなる。そして、黒褐色砂泥層の堆積から、遅くとも桃山時代には耕地となってしまったことがわかる。

今回の調査地は京都駅前の交通が激しい場所にあたり、必ずしも好ましい調査環境にはなかったが、平安時代から室町時代にかけての調査地の変遷を明らかにする上で多大の成果をあげることができた。今後とも綿密な調査を続けていく必要があるだろう。　（山本雅和）

9　平安京左京八条三坊２（図版１・11・12）

経過　調査地は、八条院町の北東部にあたり、平安京左京八条三坊十四町の北東部に位置する。調査地周辺の既往の調査では、調査地南隣接地（ＪＲ駅舎建設４次：1995 年調査）で平安時代後期の溝・湿地および鎌倉時代から室町時代の溝・建物・井戸など、調査地南西側（烏丸線№69：1977 年調査、ポルタ建設：1978 年調査）で鎌倉時代から室町時代の遺構を検出した。

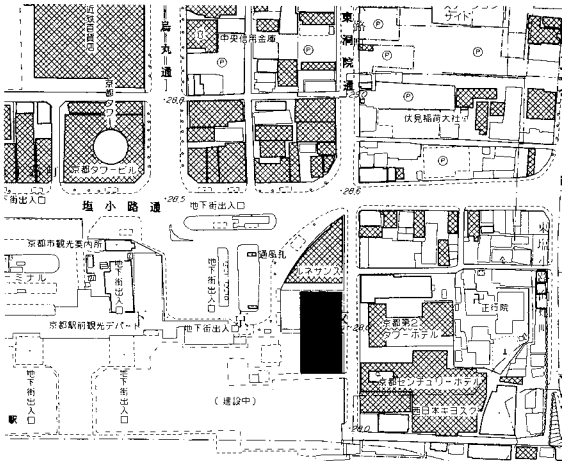


図 27　調査位置図（1：5,000）

調査目的は、平安時代後期の八条院関係の遺構、および鎌倉時代から室町時代の八条院町遺構の確認である。

調査地北西部に１次調査区（幅 25 ｍ×長さ 34 ｍ）を設定し、調査を実施した。１次調査中に調査地南側の試掘調査（２次調査）を行い、東側の遺構残存状況が良好なことを確認した。１次調査終了後、引き続き調査地南東部に、１次調査区南東部を含み３次調査区（幅 13 ｍ×長さ 21 ｍ）を設定し、調査を実施した。

遺構　層序は上から、第１層現代積土層（厚さ 120㎝）、第２層黒色土層（中世から近世耕作土，厚さ 10㎝）、第３層黒褐色砂泥層（中世遺物包含層，厚さ 10㎝）、第４層灰褐色砂泥層（中世遺物包含層，厚さ 10㎝）、第５層うぐいす色泥砂層（整地層，厚さ 10㎝）、第６層灰色砂泥層（遺物包含層，厚さ 20㎝）、第７層茶灰色砂泥層（遺物包含層，厚さ 10㎝）、第８層黄灰色砂礫層（無遺物層）である。

第３層上面（第１面，標高 26.7 ｍ）で近世の遺構、第５層上面（第２面，標高 26.5 ｍ）で鎌倉時代から室町時代の遺構、第６層上面（第３面，標高 26.2 ｍ）で平安時代から鎌倉時代の遺構、第８層上面（第４面，標高 26.1 ｍ）で平安時代以前の遺構を検出した。以下、各時期に分けて遺構の概要を述べる。

平安時代後期以前の遺構　調査地全域で湿地状の堆積（第６・７層）を検出した。湿地底部は全体に起伏があり、調査区南東部では流路と考えられる北東から南西方向の窪みがある。堆積層中には、古墳時代から平安時代中期の土器の他、腐植物・木片を多く含む。

平安時代後期から鎌倉時代の遺構　調査区南東部で南北溝ＳＤ 3540・3543 を、北西部で東西溝ＳＤ 1000 を検出した他に、顕著な遺構はみられなかった。調査区東端部で検出したＳＤ 3540（幅 2.2 ｍ、深 0.5 ｍ）は東洞院大路西築地の内側溝に相当する。ＳＤ 3543・1000 の性格は不明であるが、ＳＤ 1000 は北一門・二門の境にあたる。両溝ともに埋土中に瓦を多量に含む。

鎌倉時代後半から室町時代前半の遺構　この時期の遺構は、全域をうぐいす色砂泥で整地した後に成立する。時期は、14 世紀後半が中心である。

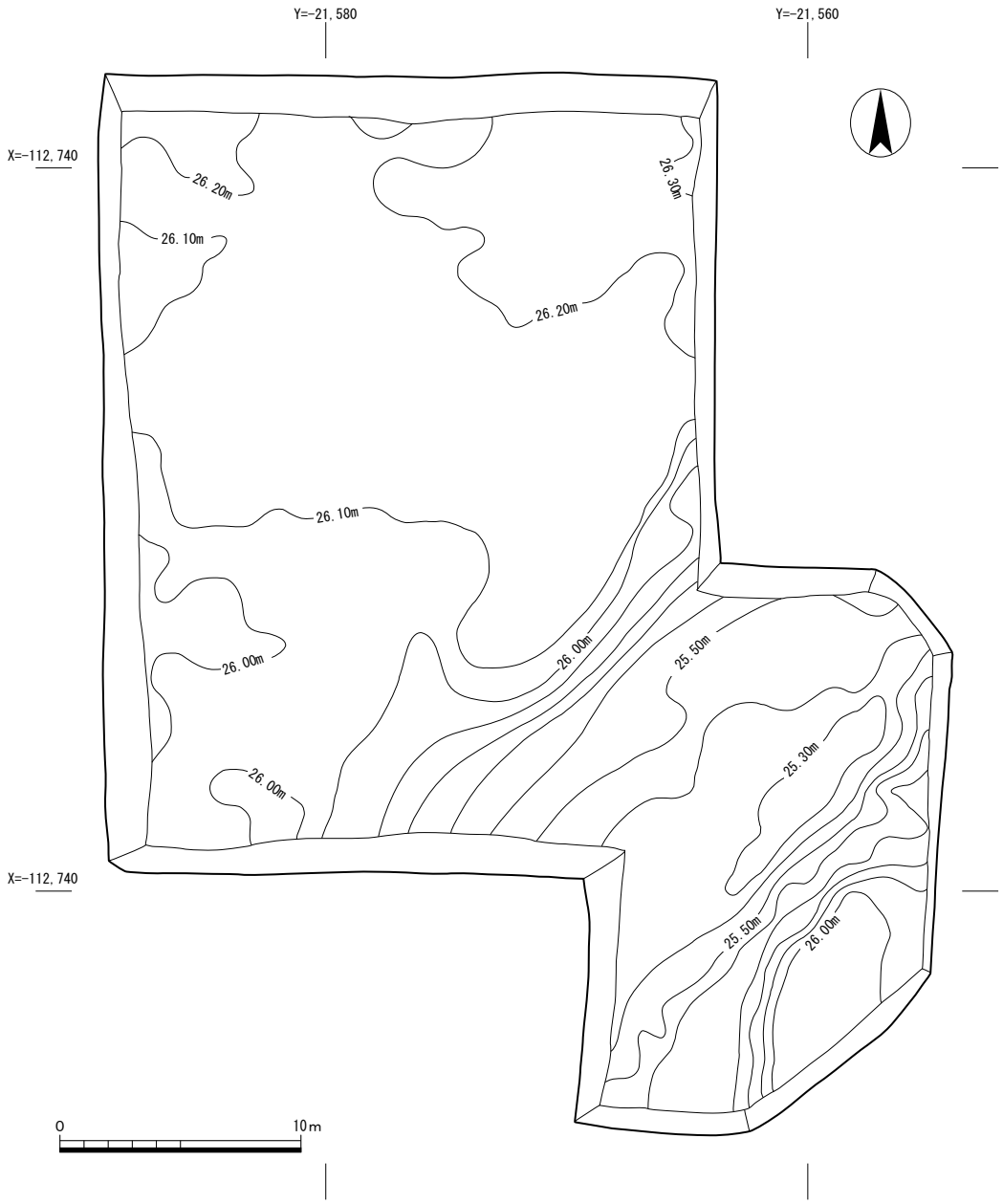


図28　第４面遺構平面図（1:300）

調査区南西部で東西溝ＳＤ555（幅0.8ｍ、深さ0.2ｍ）を検出した。溝は八条坊門小路南側溝推定地から南へ約30ｍに位置する。この溝の北側・東側では柱穴・井戸・土壙などの遺構を数多く検出したが、溝の南西部では少ない。調査区北部は南北柵ＳＡ4001によって区画され、調査区東部は東西柵ＳＡ4002～4005によって区画される。東西柵の間隔は16.5～11ｍである。

調査区の北側から東側にかけて数多くの柱穴を検出したが、建物としてまとまるものは少ない。柱穴は２・３回の重複がみられる。復原できた建物は調査区北部のもの（ＳＢ4006・4007・4008）は規模が小さいが、南東部のもの（ＳＢ4009・4010）はやや規模が大きい。掘立柱建物の柱穴は小さく（直径20～40㎝）、柱は丸や角（直径10㎝程度）で、柱穴の底に礎石・礎板を据えるものも多い。柱の間隔は1.5～2.0ｍと狭い。

井戸は、柱穴が集中する場所で検出し、東洞院大路から８～12ｍ、八条坊門小路から14ｍ内

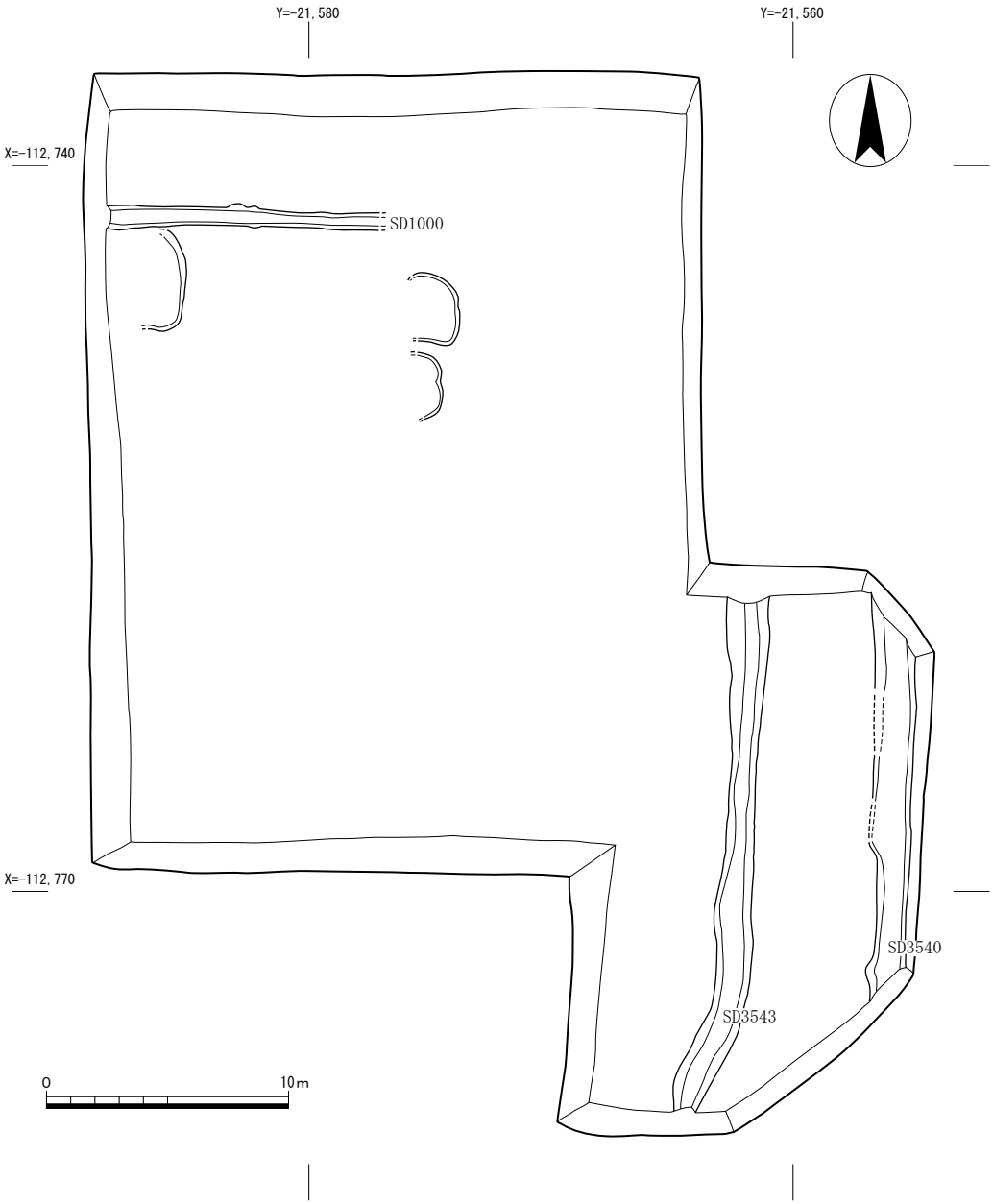


図29　第３面遺構平面図（1:300）

側に集中する。構造は、石組みのもの（ＳＥ 253・3146・3395)、縦板を九角形に組み合わせるもの（ＳＥ 85・181・363・3060)、縦板を方形に組み合わせ横桟で止めるもの（ＳＥ 259・122・566)、円形の桶を据えるもの（ＳＥ 246・147・149・3156)、曲物を積み重ねるもの（ＳＥ 462)、土製羽釜の上に曲物を重ねるもの（ＳＥ 247)、曲物の上に底部を抜いた甕を据えるもの（ＳＥ 3397）などがある。深さはほとんどが１ｍ前後である。

土壙は調査区全域で検出した。大半が投棄用のゴミ穴であるが、多量の遺物を埋納した特殊な土壙もみられる。漆器・箸・土師器皿を埋納したもの（ＳＫ 183)、土師器と箸のもの（ＳＫ 185・228・229・169・567)、土師器皿だけのもの（ＳＫ 180・186・182・158)、箸だけのもの（ＳＫ 800・752）がある。ＳＫ 183（1.0 × 0.5 ｍ、深さ 0.5 ｍ）では、底に檜の葉を敷きその上に漆器を重ね、上に多量の箸と土師器皿を埋納する。

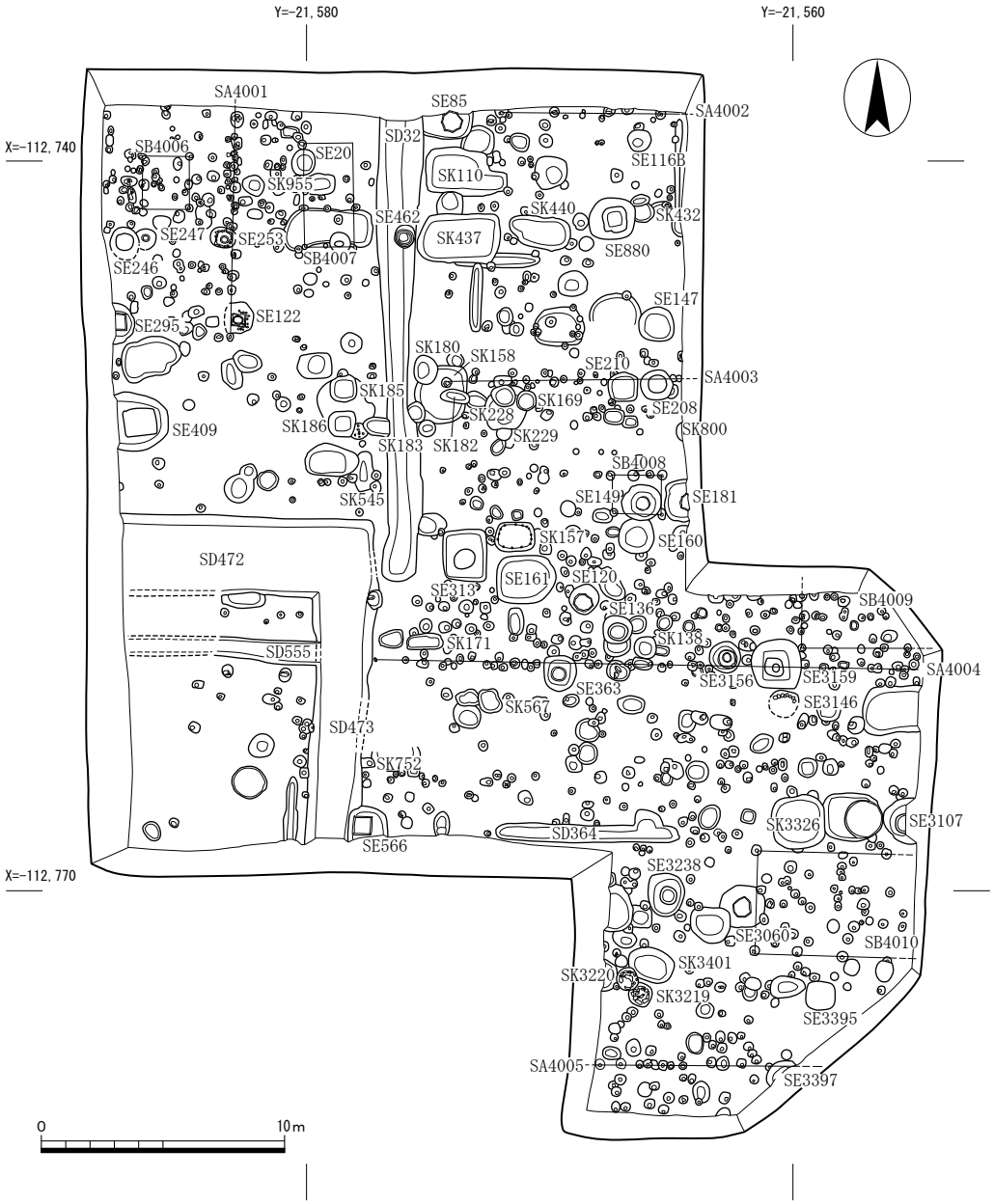


図30　第２面遺構平面図（1:300）

その他の遺構では、調査区南部で埋め甕（ＳＫ 3219・3220）を２箇所で検出した。いずれも備前の甕を使用し、２個接して据えられ間に縦板を入れる。調査区北東部で水溜状遺構ＳＫ 432（径 0.8 m、深 0.3 m）を１箇所検出した。土壙いっぱいに曲物を据える。調査区中央で竪穴状遺構ＳＫ 157（1.6 × 1.2 m、深 0.2 m）を１箇所検出した。土壙周囲に杭が並び、何らかの施設があったと推定できる。調査区中央部で便所遺構ＳＫ 171（1.4 × 0.6 m、深 0.4 m）を１箇所検出した。壁面に縦板の痕跡を確認している。

室町時代後半の遺構　この時期の明確な遺構として溝を検出した。柱穴・土壙などにもこの時期のものがある。時期は 15 世紀前半が中心である。調査区南西部で逆Ｌ字形の溝ＳＤ 472･473（幅 3.0 m、深さ 0.5 m）を検出した。溝は東洞院大路から約 24 m、八条坊門小路から 26 mに位置し、ＳＤ 555 の造り替えと考えられる。溝コーナーから北側に南北溝ＳＤ 32（幅 1.5 m、深さ 0.5 m）

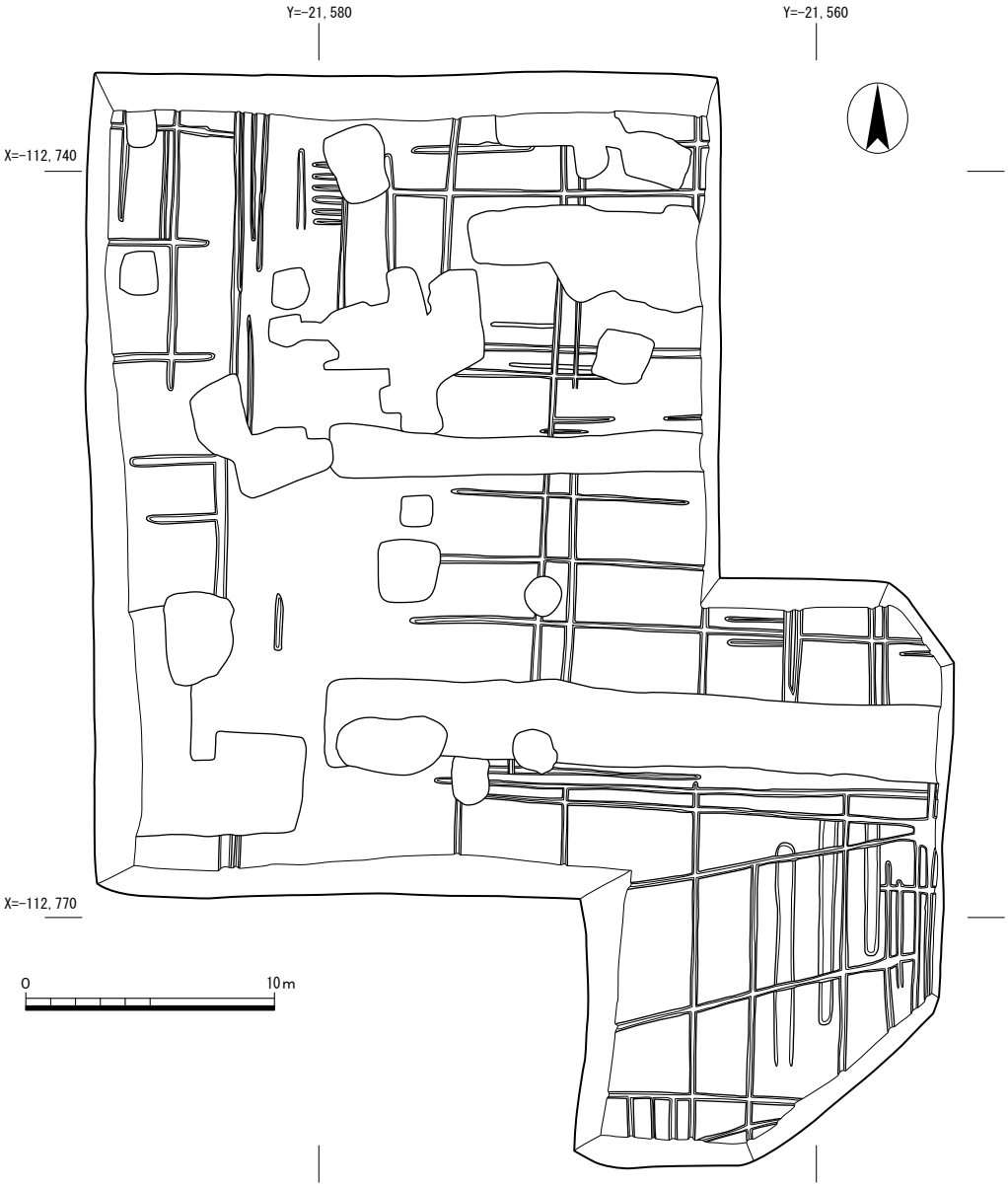


図31　第１面遺構平面図（1:300）

を検出した。

近世の遺構　調査区全域で、南北・東西方向の水田排水用暗渠の溝を多数検出した。溝はいずれも幅0.4ｍ、深さ0.3ｍ前後で、中に礫を埋めたもの、底部に竹を並べたものもある。溝の他には、漆喰枠の井戸・土壙などを検出した。

遺物　遺物は整理箱に800箱が出土した。内容は土器・瓦・木製品・石製品・銭貨・骨・種子などがあり、大半が土器類である。時期的には、古墳時代・平安時代中期から後期・鎌倉時代から室町時代・室町時代から江戸時代に分かれ、大半が鎌倉時代から室町時代である。古墳時代の遺物は須恵器があり、第６層から少量出土する。

平安時代中期から後期の遺物　土師器･須恵器･緑釉陶器･瓦などがあり、土器類は少ない。第４・５層や中世の遺構から出土した。瓦類には軒丸瓦105点・軒平瓦126点があり、溝などから出土した。

鎌倉時代後半から室町時代後半の遺物　土器類・木製品・石製品・銭貨などがある。柱穴・土壙・井戸・溝・包含層から出土し、特に、調査区中央の土壙からは多量に出土した。土器類には土師器･須恵器･瓦器・陶器・白磁・青磁など多種あるが、大半は土師器で磁器類は少ない。木製品には漆器・箸・折敷・曲物・下駄・柿経などがある。漆工具は出土していない。柿経の内容はすべて『妙法蓮華経』で、第２巻譬喩品、第４巻五百弟子受記品、第４巻法師品、第５巻安楽行品、第６巻法師功徳品、第７巻薬王菩薩本事品が書写されている。

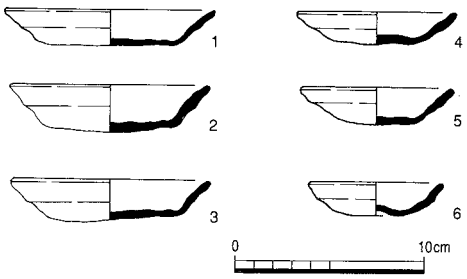


図 32　ＳＫ 184 出土土師器実測図（1 : 4）

漆器類は約 200 点ある。土壙・溝・井戸などから出土し、ＳＫ 183 からはまとまって 117 点出土した。器形は椀・皿・鉢・蓋などがあり、食器類が主体を占める。椀は大半が体部内外面黒漆塗りのもの、内面赤色で外面黒色、両面赤色で高台だけ黒色のものもある。椀の約８割には体部内外面と見込みに、赤色漆で草木・花・扇・鳥・幾何学文・情景文などの絵が描かれる。皿は内外面黒色のものが多く、内面赤色外面黒色のものもある。皿の約５割は見込みに赤色漆で直線数本などの簡素な絵が描かれる。鉢は内外面黒色に赤色漆でカタバミの花を描いたものがある。漆絵は大半が手描きで、スタンプ文のものはごくわずかである。

小結　今回の調査結果を、時期ごとに述べる。

鎌倉時代以前　平安時代後期以前には湿地で、条坊は施行されていない可能性がある。平安時代後期に大規模な整地を行い、条坊を施工して築地内溝が造られたとみられる。この状況は、周辺の調査成果と同様である。十四町は、八条院御倉に推定されるが、この時期の明確な遺構としては、溝以外に検出していない。しかし、調査区南西部を中心にして軒瓦が多く出土し、駅舎第

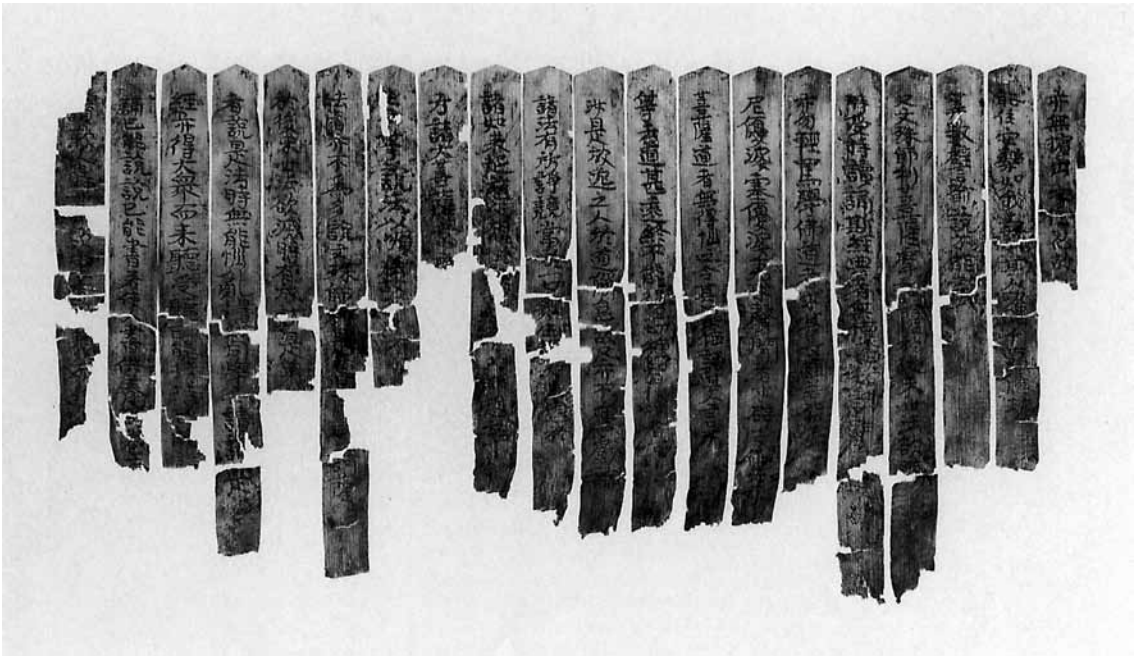


図 33　ＳＤ 472 出土柿経

４次調査区と考え合わせると、近接地に瓦葺き建物が想定できる。

鎌倉時代から室町時代　今回の調査で、八条院町十四町北東隅の土地利用の様子がある程度明らかになった。町内は、東洞院大路に対しては東西方向に、八条坊門小路に対しては南北方向に、柵や溝で区画して宅地が作られる。各宅地は、道路に面して幅が７～11ｍ、奥へ20～23ｍぐらいの短冊形を呈する。宅地内には通りに面してやや大きな建物が復原でき、その奥に小規模な建物・井戸・ゴミ捨て土壙・便所などがある。小規模な建物は雑舎や付属屋などと推定できる。さらに宅地の奥の町中心部は遺構が少なく、烏丸線・ポルタ調査と考え合わせ空閑地として利用されたと想定できる。掘立柱建物や井戸は頻繁に造り替えられていたと推定でき、土壙が多いことなどから当地域が活況を呈していたことがうかがえる。

注目される遺構は、建物などの裏側で多数検出した漆器や箸・土師器などを多量に埋納した土壙である。出土した土師器・漆器は完形のものが多く、整然と埋められ、単なる生活用品廃棄物ではなく、何らかの行事などに使われたと想定できる。

当時期の区画溝や柵は、四行八門制とほぼ合い、中世の町屋の構造を考える上で貴重な発見となった。『東寺百合文書』などの文献史料によると、町の四周に町屋が建ち並び、一辺に20軒前後の町屋が軒を連ねていたことが知られる。さらに、東洞院大路や八条坊門小路に面した宅地の所有者や職業がわかるものもある。この状況は調査結果と合い、検出した屋敷地のあり方と考え合わせると興味深い。また、八条院町内の西側の調査（中央郵便局南側や北側の調査）では、鋳造関係の遺構や遺物を数多く検出しているが、今回は出土がなく、町内が職種によって住み分けられたと推定できる。

調査で出土した多量の漆器は、これまでの京都市内の全出土数（24箇所、数十点）を大きく上回り、当時の漆器の使用状況や具体的な内容を知る上で貴重な資料となった。

室町時代以降　当地域では、室町時代後半以降（15世紀後半）の遺物・遺構が急速に減少し、水田の暗渠排水溝などしかみられない。このことから、この地域は急速に水田化したことが明らかとなった。衰退の時期などは、八条院町西部の状況とは少し異なっており、注目できよう。

（上村和直・太田吉男・出口　勲・上田栄治）

10　平安京右京一条三坊（図版1・13）

経過　調査地は平安京右京一条三坊二町に該当している。町内での発掘調査は初めてで、居住者名などがうかがえる史料も残されていない。しかし、約200ｍ西の山城高校（一条三坊九町）の調査で、寝殿造りの原型とみられる建物が発見された。当調査地はこの近隣にあるところから、同様の遺構が発見されることが期待された。

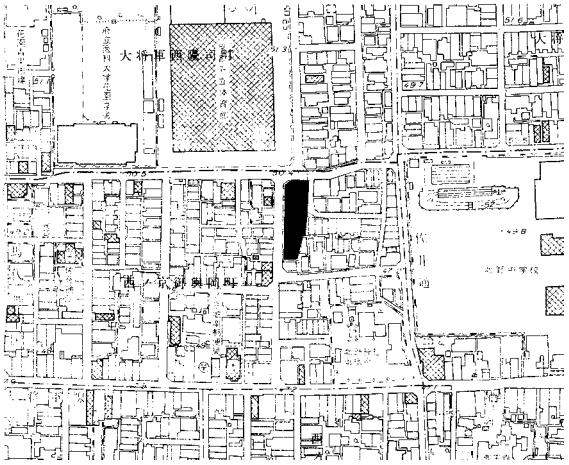


図34　調査位置図（1：5,000）

調査の結果、条坊に関連する溝や、土壙、橋脚、町内通路（小径）、建物、火災に伴う焼土の整地層などを確認した。

遺構　調査地の基本土層は、現代盛土層－（遺物包含層）－黒色砂泥層（黒ボク）となっている。黒色砂泥層は地山で、各時期の遺構が成立している。調査地ではこの土層の下層に火山灰層が10㎝の厚さで２層以上堆積していることが判明した。

検出した遺構は平安時代（９世紀）から江戸時代（19世紀）にわたるものである。

平安時代の遺構には、溝、小径、橋脚、埋納遺構、掘立柱建物などがある。

溝236　調査地の北端で検出した。幅1.6ｍ、深さ1.1ｍの規模で、溝の断面は逆台形である。平安時代中期から後期の遺物が出土した。平安時代前期に成立しており、後に新たに掘りなおされたとみられる。

溝96　調査地の西端付近で検出しており、幅1.0ｍ、深さ0.2～0.4ｍの規模である。溝の平面形は皿状の部分や舟底状の部分があり、所々で溝が途切れている。堆積土層には流水のあった痕跡は認められない。

溝202　調査地の中央で検出しており、幅1.5～2.2ｍ、深さ0.1～0.5ｍの規模である。溝の平面形は舟底状の部分が何段もみられ、南下するにつれて東へ広がっている。この溝から多くの遺物が出土している。

小径　溝96と202にはさまれた空間は１町内を南北に往環するための通路で、『延喜式』に記されている「小径」とみられる。その理由は小結で記述する。

溝353　溝202の下層で発見している。１町の中心に該当するところで検出している。大きく２層に分層でき、上層には焼土が確認される。近隣火災の後処理で埋められたと考えている。

橋脚　２基検出している。橋脚１は溝236のほぼ中央北側で、地山（礫層）を掘り込んだ皿状の落込（幅1.3ｍ）を発見し、そこで柱穴を２基みつけている。また南肩でも柱穴を検出した。落込は溝96と溝202に一致しているため､これらの一連の遺構を橋脚の遺構であると考えている。橋脚２は溝202をまたがるようにして検出している。橋脚２のすぐ南では遺物の出土が多く、こ

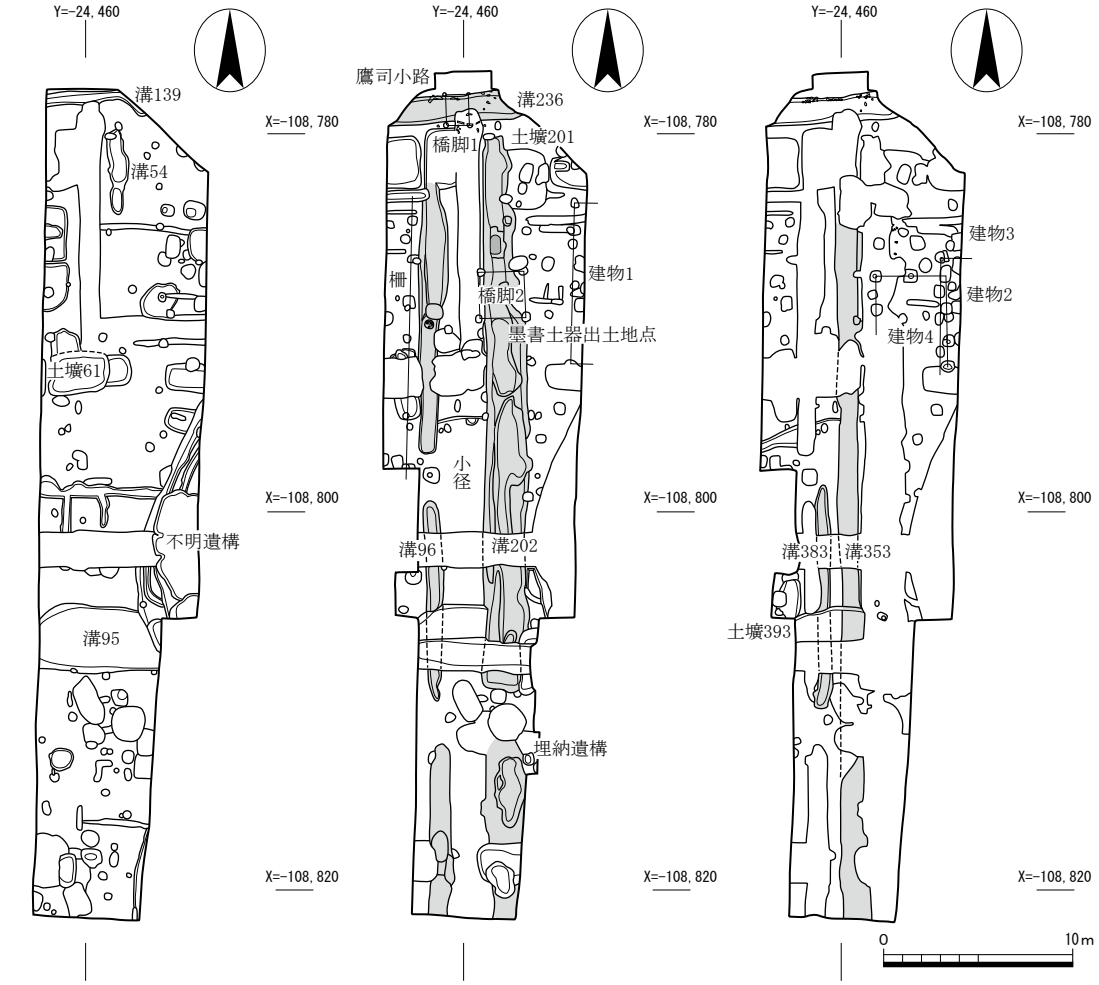


図35　遺構平面図（1:400）

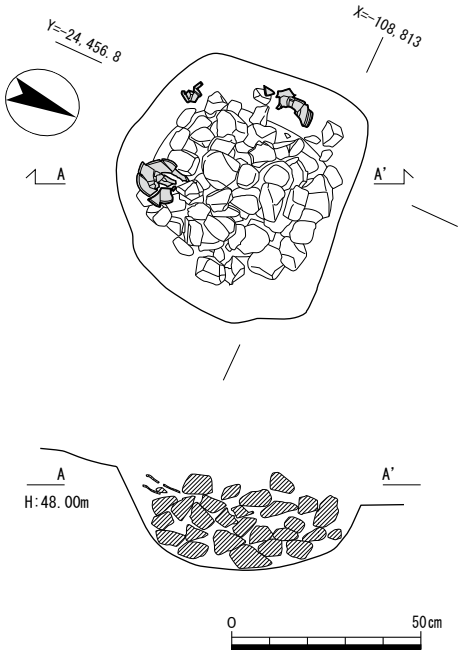


図36　埋納遺構実測図（1:20）

の位置から遺物を投棄したものと考えられる。

埋納遺構　一辺 60㎝、深さ 25㎝の隅丸方形の土壙である。壙内には拳大の石を敷き詰めており、その上に土師器数枚を埋置した状態で検出している。平安京内で典型的な祭祀遺構である。敷地の安寧を祈った地鎮壙とみられ、検出した位置からここが隣地との境界であったとみられる。

掘立柱建物　溝 202 の東側で隅丸方形の柱穴を検出した。調査区の関係で検出した数は少ないが、4 棟以上の建物を確認している。溝 202 の下層でも検出した。

中世以降の遺構には、溝、土壙、湿気抜溝群などがある。

溝 95　幅 1.5 m、深さ 1.1 mほどの、断面が逆台形を呈する東西溝である。調査区の中央近くで検出してい

る。掘形は２段になっており、検出面の幅は3.6ｍを測る。埋土から出土する遺物は平安時代のものが多かったが、最下層から室町時代の土器や瓦が出土した。溝の形状や時期から「構」の堀ではないかと思われる。

溝139　幅0.7ｍ、深さ0.1ｍほどの、断面がレンズ状を呈する小溝である。検出長は4.5ｍある。江戸時代の遺物が出土しており、鷹司小路南側溝の名残であろう。

溝54　幅1.0ｍ、深さ0.1ｍほどの、断面がレンズ状を呈する小溝である。江戸時代の遺物が出土しており、小径東側溝の名残と思われる。

湿気抜溝群　幅10～20cm、深さ５cmほどの、断面がレンズ状を呈する東西方向の小溝群である。約1.5ｍ間隔で検出している。

不明遺構　調査区の中央東端で検出している。弧状になっており、肩部では小溝が３条重複していた。またこの遺構を切って肥溜も検出している。江戸時代末期のものである。

遺物　遺物は整理箱に91箱出土した。その大半が平安時代の土器類で、他に瓦類・土製品・金属製品・石製品などがある。溝236・95・353、土壙343・201からの出土が多くを占めている。

土器類　器種としては土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、輸入陶器、緑釉陶器、灰釉陶器などが出土している。器形としては、皿・壷・甕・椀・鉢・羽釜・蓋・硯などがある。なかには、墨書土器、陰刻花文をもつ緑釉陶器もある。本調査では緑釉陶器が比較的多い。

瓦類　瓦類は極めて少なく、軒丸瓦、軒平瓦、緑釉瓦などがある。ほとんどが破片であるが、軒丸瓦のうちの１点は奈良時代のものである。

土製品　土馬、土錘。これらは溝202から出土している。

金属製品　釘、不明鉄製品、銅製金具。焼土から出土した釘には焼けた木材が付着しており、焼失家屋の釘であると考えられる。

その他　煙水晶剥片、石帯、滑石製鍋、砥石、卵形石製品、凝灰岩、壁土。壁土は建物２～４のどれかの焼失に伴うもので、いずれも焼け焦げていた。

特筆すべき遺物として、墨書土器がある（図37）。これは、10世紀初めの小径東側溝（溝202）から出土している。出土した位置は、鷹司小路に近く、橋脚２のすぐ南で、層位的には溝の最下層近くである。復原径13.6cmの土師器皿の内外面に墨書されている。残存しているのは１/４ほどである。内面に書かれている墨書は判読できない。外面には５行（17字）以上にわたって文字が書かれていたものと推定できる。これらの文字は、草仮名から平仮名への移行期に該当するものと考えている。出土した破片は接合できず、判読できたのは断片的で内容が理解できないため、あえて釈文として掲載することはしていない。参考までに考古資料としての仮名文字の出土例は、以下の例がある。

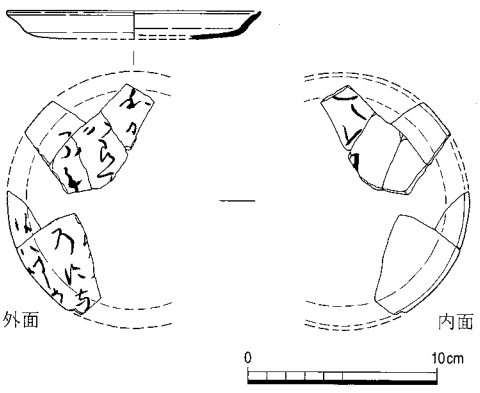


図37　溝202出土墨書土器実測図（1：4）

９世紀中　　漆紙　　書状？　多賀城跡[註1]

10 世紀前後　土師器皿　　平安京右京一条三坊二町（本例）

10 世紀中　　土師器杯、内面　和歌　　平安宮左兵衛府跡[註2]

12 世紀末　　土師器皿、内面　習書　　平安京左京六条三坊十五町[註3]

本例は平安時代前半における、仮名文字の変遷を考える上での重要な資料である。

小結　今回の調査でわかったことをまとめると以下のようになる。

①鷹司小路南側溝が明らかとなった。溝 236 は当研究所で想定している条坊復原モデルとほぼ一致しているため、鷹司小路南側溝であると考えている。溝 236 は平安時代前期の遺物の出土はなかったが、溝 353 が取り付くことや遺構が拡大していることをも考え合わせると、平安時代前期にも鷹司小路南側溝が存在していたと判断できる。

町内の利用の変遷が明らかとなった。町内中心の溝（溝 343）は当町を東西に２分割する溝であったことが判明した。溝 202 と溝 96 に挟まれた部分は、『延喜式』に書かれている１町内に通ずる「小径」と考えている。その理由を簡単に述べると次のようになる。溝 96 と溝 202 から出土する遺物の時期もほぼ同じである。鷹司小路南側溝と交差するところで「橋の痕跡」も発見している。祭祀遺物と考えられている土馬や小壺が溝 202 から出ているのは、ここで祭祀が行われ、人々が往来していたことを示す傍証となる。したがって溝 96 と溝 202 との空間が通路である可能性が高いと考えている。

②平安京内では小径と思われる遺構は数例発見されているが、橋とともに発見・確認されたのは初めての例である。

③文献史料などでは全く登場してこない地域であるため、当町に居住していた人物など詳細については全くわからないが、９世紀段階でも２分割溝があったことを確かめたため、三位以下の階層に属する者であったことは確実である。一方で、確認できた建物や出土した遺物の内容、特に緑釉陶器の多いことは、あまり下位の人物でもないともいえるであろう。

④平安時代以後になると、中世には堀が掘削され戦乱期の影響も垣間みられるが、水田耕作などに利用される程度であった。

遺物の整理にあたっては、馬田綾子、川端新、下坂守、田中倫子、西山良平、橋本義則、藤本孝一の各氏の協力・教示を受けた。末筆であるがここに謝意を表する次第である。

（久世康博・堀内寛昭）

註１　『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991　宮城県多賀城跡調査研究所　1992 年

註２　平尾政幸「平安宮左兵衛府跡」『平安京跡発掘調査概報』
京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978 － Ⅱ（財）京都市埋蔵文化財研究所　1978 年

註３　大矢義明他「№ 51」『京都市高速道路烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』1976 年度
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1981 年

11　平安京右京一条四坊・法金剛院境内（図版1・14～21）

経過　調査はＪＲ山陰本線連続立体交差化事業および花園駅周辺の整備事業に伴うものである。

調査地は平安京右京一条四坊十二・十三町と、大治五年（1130）に待賢門院によって建立された法金剛院の西御堂、東御所の推定地に位置する。法金剛院境内では、1968・1969年の丸太町通新設事業に伴う発掘調査[註1]で法金剛院の建物跡、築地跡と天安寺跡に比定される礎石建物が発見された。1986年の試掘調査[註2]では池の東岸を検出している。1990年の平安京右京一条四坊十三町・西京極大路跡の発掘調査[註3]では南北溝を検出している。昨年度の法金剛院境内の発掘調査[註4]では法金剛院の池西岸で塔や洲浜が良好に遺存することが確認されており、今年度の調査は池の東側も対象地として含まれるため、東御所や東岸の検出が期待された。

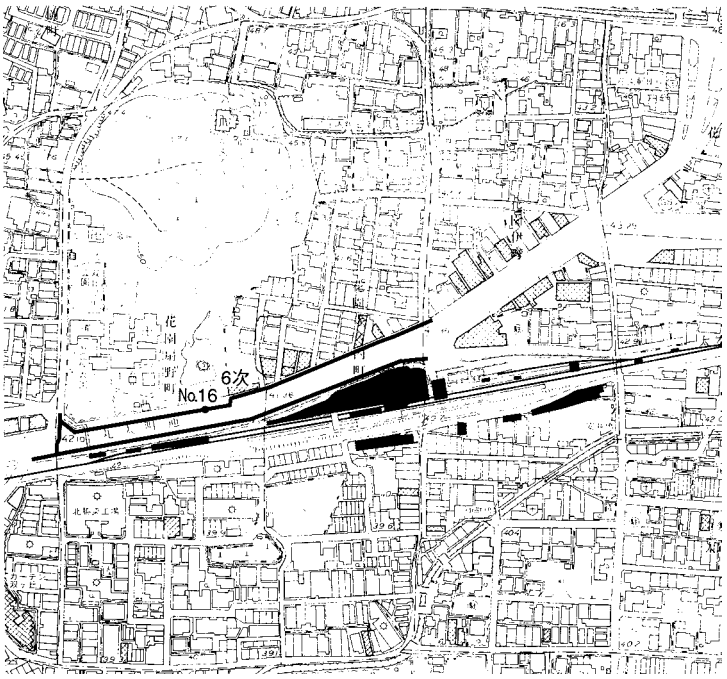


図38　調査位置図（1：5,000）

今年度は発掘調査５件、立会調査１件を実施した。１次調査は平安京跡に５箇所、法金剛院境内に３箇所の計８箇所調査区を設定した。１・２区は平安京右京一条四坊十二町、３～５区は同十三町にあたる。６・７区は法金剛院の西御堂の推定地で、1968・1969年調査の南側に、８区は東御所の推定地にあたる。２次調査は調査区を３箇所設定した。１区は法金剛院境内の東限の

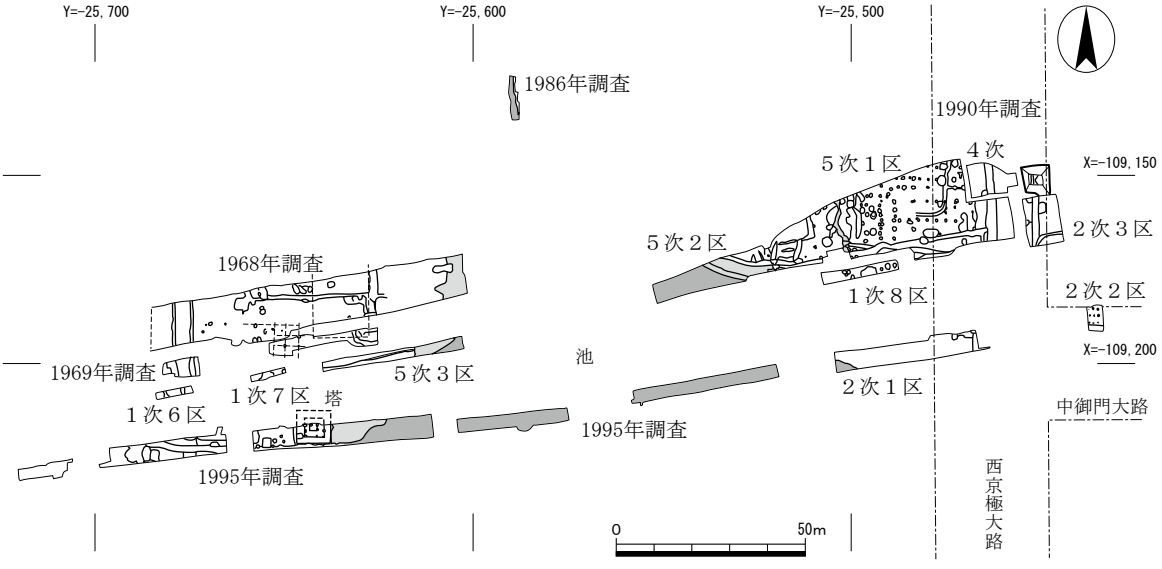


図39　法金剛院境内調査区配置図（1:2000）

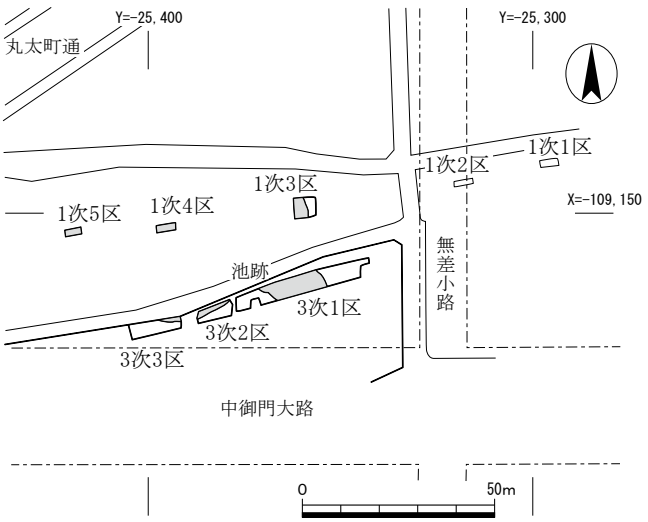


図40　平安京右京一条四坊十二・十三町調査区配置図（1:2000）

位置で西京極大路と中御門大路の交差点部、２区は中御門大路北築地、３区は西京極大路東築地にあたる。３次調査は東西方向に３箇所の調査区を設定した。平安京右京一条四坊十三町にあたる。４次調査は１箇所調査区を設定した。西京極大路にあたる。５次調査は３箇所調査区を設定した。１・２区は西京極大路、法金剛院の東御所に、３区は池の西側で西御堂にあたる。６次調査は丸太町通で実施した立会調査である。調査は、平安京跡から法金剛院境内を東西方向に横断した。

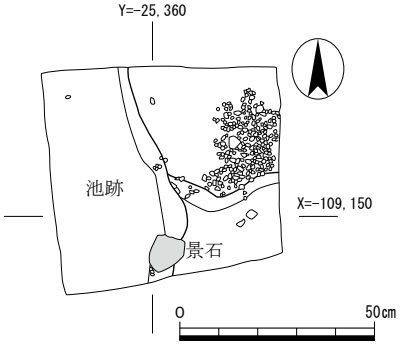


図41　1次3区遺構平面図（1:20）

遺構　調査区ごとに概述する。

１次１～５区　右京一条四坊十二・十三町にあたる。十二町の１区では平安時代の整地層と柱穴２基を検出した。２区では南北溝と流路を２条検出した。

十三町の３区（図 41）では平安時代後期から鎌倉時代の池の東岸を検出した。鎌倉時代（13 世紀前半）の岸部には河原石を敷き詰めた洲浜が造られ、水際には 0.8 × 1.0 ｍの花崗岩の景石を据えていた。この池は 12 世紀前半代に造られ、13 世紀中頃に埋められている。それ以降水田へ転化したものと思われる。西側の４・５区は青灰色泥土が堆積し池状を呈している。西岸は調査範囲外に至るため確認できなかった。

１次６・７区（図 42）　法金剛院の西御堂の推定地にあたる。６区では調査区南東角で、平安時代の整地層上面で礎石据付痕跡を１基検出した。規模は直径約 0.9 ｍ、深さ 0.2 ｍ、10 ～ 20㎝大の礎石据付石が遺存していた。他に礎石抜取穴と思われる遺構を３基検出した。７区では平安時代の整地層を調査区東端から西へ２ｍ幅で検出した。この西端部で幅約 1.0 ｍ、深さ 0.35 ｍの

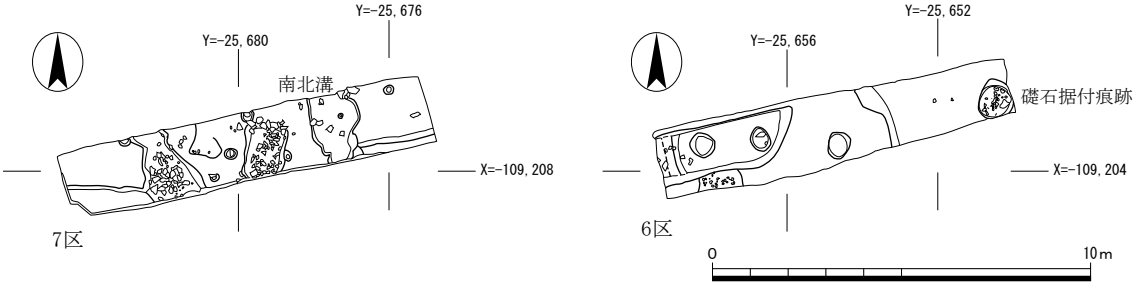


図42　1次6・7区遺構平面図（1:200）

南北溝を検出した。溝から平安時代後期の白色土器壷が出土した。また、室町時代の直径0.3ｍで底部に根石を据えた柱穴を５基検出した。

１次８区（図46）　東御所の推定地にあたる。調査区の東側で平安時代後期の礎石据付痕跡を東西方向に３基検出した。直径0.8～1.0ｍ前後の規模である。そのうち２基には据付石が遺存していた。柱間は1.8ｍである。西側でも礎石据付痕跡を１基検出した。

中央部で室町時代の南北方向の石列と最大幅4.8ｍ､深さ3.5ｍ以上の井戸の北半分を検出した。

２次１区（図43）　法金剛院の東限の位置で西京極大路と中御門大路の交差点部にあたる。調査区東側で地業を検出した。地業は、西京極大路と中御門大路が交差する道路敷地内にあり、粘質土や小石混じりの土を用いて、東西2.2ｍ、南北1.8ｍの範囲で両端に拳大の石を東西に並べて小区画化し、その単位ごとに固く叩き締めている。版築状の積土層は10層にもおよび、その厚さは1.3ｍ以上である。地業の東半部には、さらに南北方向に河原石を３～４段に積み、区画を縁取っている。この地業の西端は推定西京極大路西築地心のライン上にあたる。整地層は地業の西側から調査区のほとんどを占める。厚さは1.8ｍ以上を測り、最下部には部分的に河原石を粗く敷いている。中央部で検出した石列ＳＸ26は、高さ0.4～0.6ｍで約８ｍにわたり河原石を積み重ねたもので、整地の単位を区切るものである。地業と比較するとかなり粗い堆積状態を示している。整地層の下層で、流路ＳＤ28の北岸と南岸を部分的に検出した。この整地層は平安時代後期（11世紀）以前の北東方向と南東方向の流路を埋めたものと思われる。

池は調査区の南西端で池の東岸部を検出した。岸は南西方向に緩やかに傾斜しており、洲浜や景石などはみられない。地業面で鎌倉時代に投棄された平安時代後期の瓦を多量に含んだ土壙ＳＫ９を検出した。また、この土壙の下層には幅0.9ｍ、深さ0.5ｍ規模の土壙がある。底部には直径約0.7ｍ、厚さ約0.4ｍの花崗岩を据えていた。南北溝ＳＤ27を調査区の東端の拡張区で検

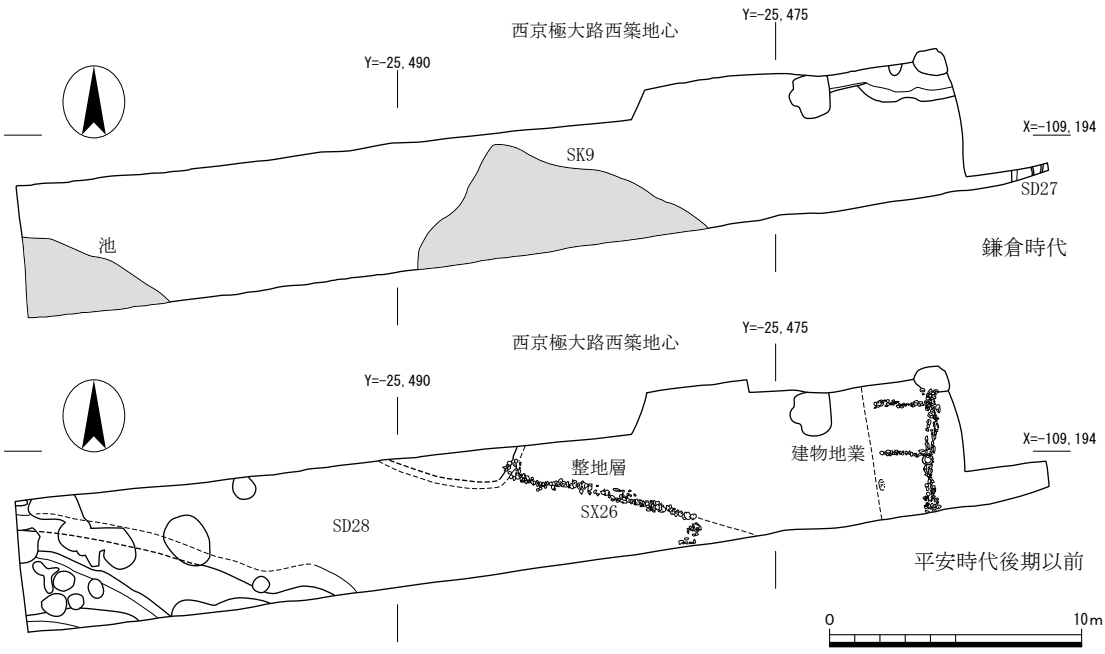


図43　2次1区遺構平面図（1:300）

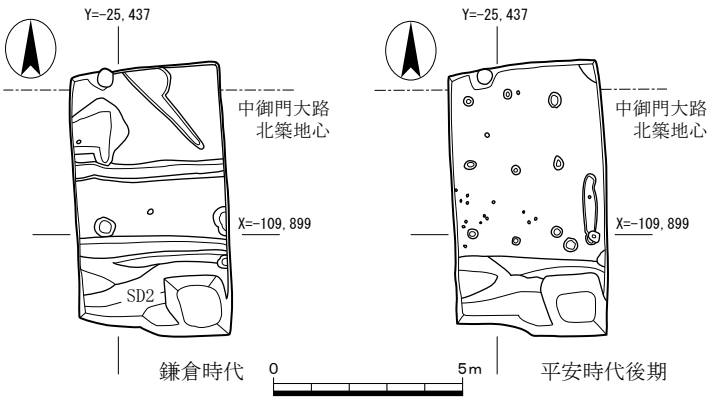


図44　2次2区遺構平面図（1:200）

出した。幅 1.6 m以上、深さ 0.8 mの規模で地業の東端に位置する。

２次２区（図 44）　中御門大路北築地にあたる。地表直下、鎌倉時代の整地面で中御門大路北側溝ＳＤ２の北肩部を検出した。幅 1.5 m以上、深さ 1.2 mである。溝の南肩は調査区外ではあるが、およそ３m規模と推定される。この下層の平安時代後期の整地面で柱穴 11 基を検出した。柱穴はいずれも直径 30㎝、深さ約 20㎝である。これらの柱穴は北築地に伴うものと思われる。平安時代後期の整地層は１mの厚さで整地され、下層は流路の堆積を示していた。

２次３区（図 46・47）　西京極大路東築地にあたる。平安時代後期（12 世紀）の整地面で西京極大路東側溝ＳＤ７、東築地に伴う柱穴を 23 基、東西溝ＳＤ９を検出した。下層で 11 世紀の石敷遺構ＳＦ 38、溝ＳＤ 39・40 を検出した。ＳＤ７は幅約３m、深さ約 0.5 mである。東肩部は、２～４㎝大の石で 60㎝幅に護岸されていた。西肩部は北西隅で一部検出した。柱穴はいずれも直径 20 ～ 40㎝、深さは 20 ～ 40㎝である。石や瓦などの根石を据えたものが７基検出された。また、白色土器壷が埋納された柱穴Ｐ it ５も検出した。ＳＤ９は調査区東から西へ流れ、ＳＤ７と交差する。幅 0.6 ～ 0.8 m、深さ 0.7 mである。

整地層の下層は、黒色泥土層と黄褐色砂礫層から成る土層が堆積し、土層内には伐採され根起こしされた竹が多く検出された。ＳＦ 38 はこの下層の調査区西側の一段低い部分で北東方向に検出した。検出幅は約 3.5 mで中央部は一段高く、２～３㎝大の細かい石が 1.5 ～ 2.0 m幅で堅く締められた路面状を呈し、両端は溝状ＳＤ 39・40 となっている。ＳＤ 39・40 からは 11 世紀前半代の遺物が出土した。検出面の堆積状況から調査区全体が流路内に位置したものと思われ、ＳＦ 38 は流路内の低位部に造られた路面遺構と考えられる。

３次１～３区（図 45）　右京一条四坊十三町にあたる。１区では１次３区で発見した池東岸延長と南岸を検出した。池ＳＧ 10 は調査区の中央部に位置し、池の北側は広く南側は狭くなっている。池は 12 世紀前半、13 世紀、14 世紀の３期に分かれる。12 世紀前半の造成期の池岸は、地山を掘り込み、拳大の河原石で形成され、池の底には漏水防止のために黄色粘土が貼られている。13 世紀には池は褐色砂泥層を用いて縮小される。岸から水際には河原石が敷かれ、東岸の洲浜には花崗岩の景石が１石据えられていた。14 世紀代には徐々に埋め立てられ、廃絶したものと思われる。

陸部では、池に関連した建物などは検出できなかった。13 世紀の池の南岸で井戸ＳＥ 11・12 の２基を検出した。また、調査区西端部の地山面で９世紀代の粘土採掘坑を検出した。

２区は８×４mと小さなものになったが、１区より続く池の南肩部が確認できた。このことか

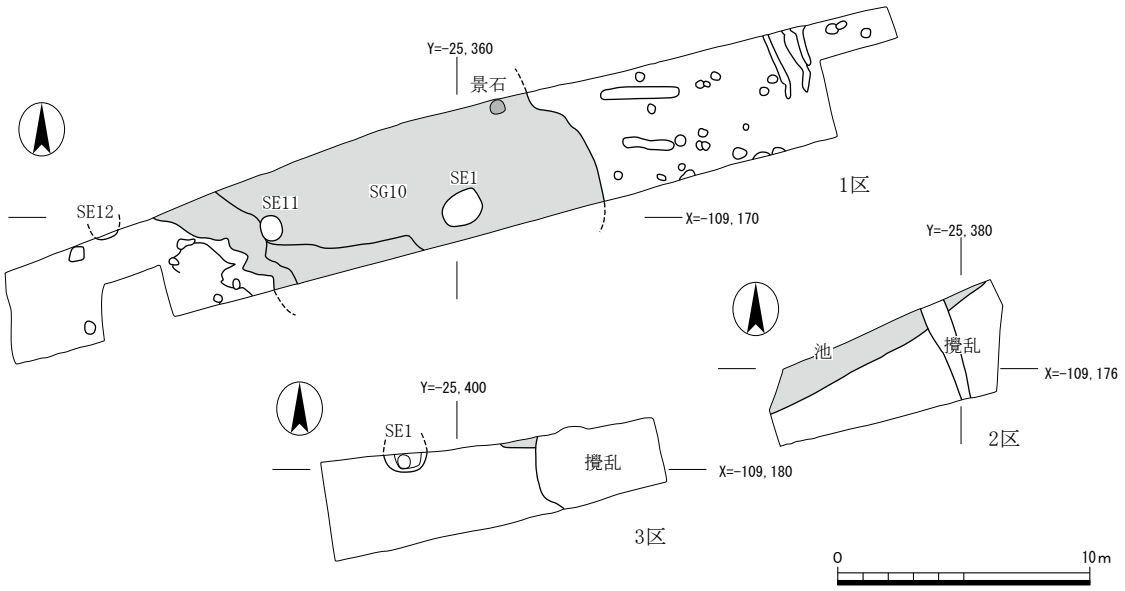


図45　3次1～3区遺構平面図（1:300）

ら、池の南岸は１区西端で北へ張り出し、２区で南に湾曲していたことが明らかになった。

３区は 13 × 3 mの東西方向に細長い調査区で、東半は深さ 2.3 mまで大きく撹乱を受け遺構は完全に破壊されていた。西半では、池の南岸の肩部が東西方向に確認できた。西端を断ち割ると、竹の根株や幹、枝が多く入った暗黒色泥土層があり、整地（埋めもどされた土層）ではないかと考えられる。

４次、５次１区（図 46･47）　西京極大路、法金剛院の東御所にあたる。層序はＪＲの盛土層が 0.4 m、耕作土層が 0.1 m、平安時代後期（12 世紀）の整地層１が 0.2 m、後期（11 世紀）の包含層が 0.1 ～ 0.2 m、以下黒色泥土層、褐灰色粘質泥土層、浅黄色粘土層の地山となる。

東側では西京極大路の路面・西側溝と法金剛院の東築地を検出した。路面は現地表下 0.4 ～ 1.1 mの間に、平安時代後期から明治時代まで５面を確認した。路面の検出幅は南北 21 m、東西 3.5 ～ 5.0 mである。各面はいずれも小礫が堅く敷き詰められており、平安時代後期、鎌倉時代の面では轍の痕跡も認められた。側溝は最大幅2.5 m、深さ 0.7 mである。溝は平安時代後期、室町時代、江戸時代の時期のものが検出された。築地は整地層１を掘り込んで黒褐色粘質泥土層を３層に分けて叩き固め、さらに暗褐色砂泥（整地層１）を台形に積み上げた版築状を呈している。基底部は幅約６m、深さ 0.4 mである。

西側では中門廊１・２、中門１、塀１・２、礎石建物１・２、雨落溝、遣水を検出した。中門廊１は東西１間×南北４間以上である。柱間寸法は桁行 2.4 m、梁間 3.6 mである。南から北へ２間目の柱間が 4.8 mで広く、東西も２間であることから中門（中門１）と考えられる。礎石建物２は中門廊１の南西側で検出した。礎石据付痕跡を東西に２基検出した。規模は直径 1.0 ～ 1.2 m、据付石は 0.1 ～ 0.4 m大の河原石が使われている。柱間は 2.1 mである。南と西側は近世の溝で削平を受けており規模など詳細は不明である。塀２は中門廊１の北東側で検出した。東西方向に５間で、柱間は 2.4 mである。柱穴内には 30㎝前後の石が据えられている。中門廊２は中門

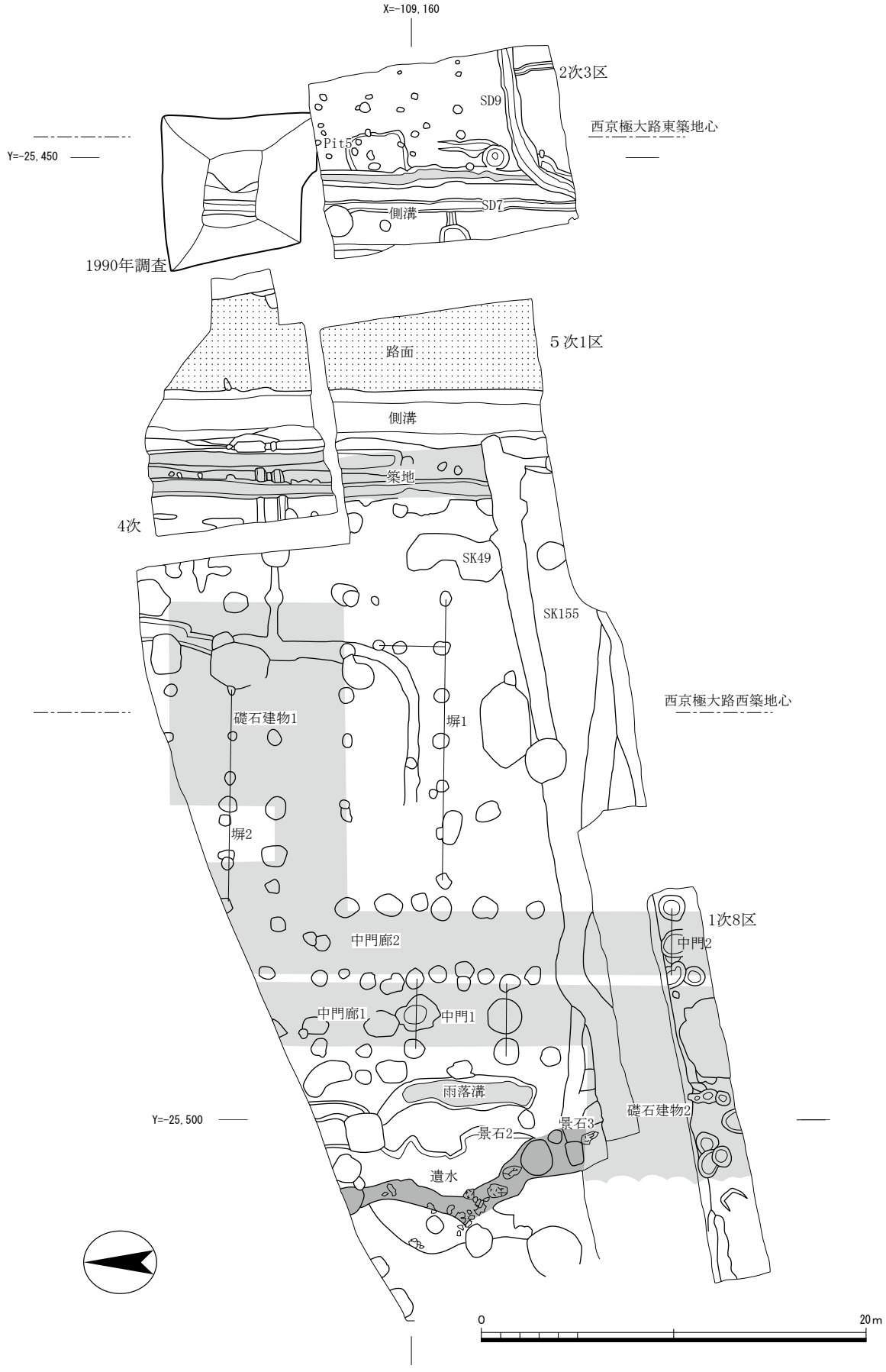


図46　1次8区、2次3区、4次、5次1区遺構平面図（1:300）

廊１のすぐ東側で検出した。東西１間×南北６間以上で５間目が直角に曲がり東へ２間延びて礎石建物１と接する。柱間の寸法は中門廊１と同じである。１次８区の西側で検出した礎石据付痕跡は中門廊２の柱筋の南に位置し、柱寸法も中門１と同じであることから中門廊２の中門（中門２）にあたるものと考えられる。礎石建物１は南北３間×東西４間で、南側に庇が付く。塀１は礎石建物１の南側に平行するように設けられている。東西６間、５間目で北へ南北２間である。柱間の寸法は塀２とほぼ同じである。雨落溝は中門１の西側柱筋から 1.5 m西で中門１に並行して検出した。幅は 1.2 m、深さ 0.1 m、南北長は 6.8 mである。東肩部には 20 ～ 30㎝大の石が南北方向に据えられていた。西側は残存していなかった。遣水は雨落溝の西で検出した。溝は北東方向からＳ字状に緩やかに蛇行しながら南西方向へと延び、礎石建物２の柱の間を抜けて池へ注ぐものと思われる。幅は 0.9 ～ 1.2 m、深さ約 0.3 m、延長は 14 mである。遣水には景石３基と据付痕跡１箇所が検出された。溝底部には玉石敷きなどはみられなかった。また、遣水にかけられる橋の橋脚などの痕跡は認められなかったが､橋を固定したと思われる挟石が１基確認された。景石に用いている石材はチャートである。他に、鎌倉時代に投棄された瓦が出土した土壙３基ＳＫ６・49・155 と室町時代の南北溝２条、Ｌ字に曲がる溝１条、柱穴などが検出された。

４次調査区では、下層で平安時代後期（11 世紀）の井戸、東西溝、柱穴を検出した。井戸の掘形径 2.2 m、深さ 2.3 m、一辺 1.5 m（残存）の縦板組み横桟留め方形木枠である。底部より曲物が出土した。時期は確定できないが一辺約 0.7 m掘形をもつ柱穴を３基検出した。西側は調査対象外のため検出できなかったが、南北２間、柱間は 2.4 mで南北棟の建物と思われる。

５次１区では検出した中門、中門廊、遣水、礎石建物などの遺構が現状保存されることとなり、

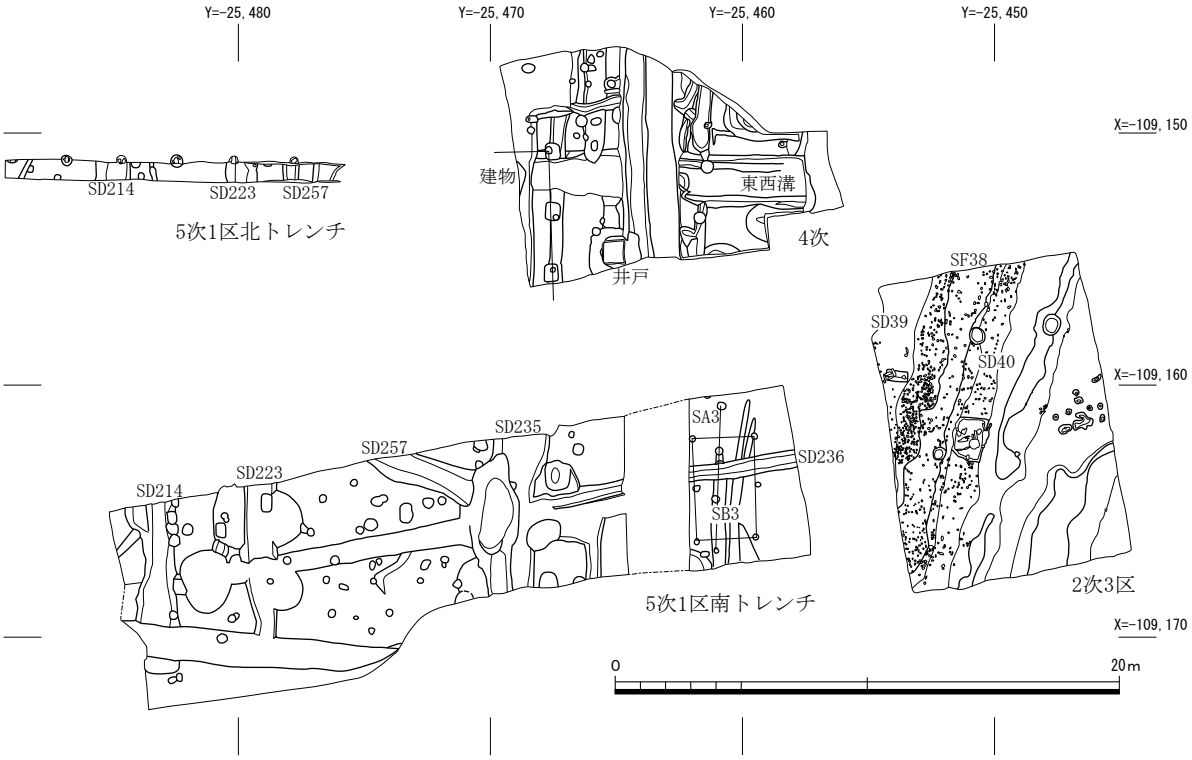


図47　2次3区、4次、5次1区（下層）遺構平面図（1:300）

下層遺構の調査は上層遺構に影響しない範囲で、必要最小限にとどめて行った。調査区は南東部に南トレンチ、北側の塀２に沿った北トレンチの２箇所を設定した。南トレンチは整地層１、包含層２の下層面（黒色泥土層）で、平安時代中期の溝３条ＳＤ 214・223・257、後期（11 世紀）の掘立柱建物ＳＢ３、柵列ＳＡ３、溝２条ＳＤ 235・236 を検出した。ＳＤ 214・223 は調査区の西側で検出した。ＳＤ 214 は南北溝で幅 1.6 ｍ、深さ 0.2 ｍである。ＳＤ 223 は南北溝で幅 1.3 ｍ、深さ 0.3 ｍである。この付近は平安京の西京極大路西築地推定地にあたる。ＳＤ 257 は調査区の中央部で検出した。溝は北西から屈曲して南へ延びる。溝は急激に流れたと思われ、屈曲部の東壁は流れに抉られ、底部は一段深くなっている。幅 1.2 ～ 2.3 ｍ、深さ 0.5 ～ 1.5 ｍである。ＳＢ３、ＳＡ３、ＳＤ 236 は東側で検出した。調査区中央部でも多数の柱穴を検出したが、建物の復原には至らなかった。北トレンチの調査は南トレンチで検出した溝の確認調査のために行った。その結果、南側の溝の延長を検出することができた。

５次２区（図 48） 東半が陸部で、西半は池部となる。陸部の層序は１区と同じである。池部では、盛土層下に近世の水田土、灰白色粘土層、そして地山となる。調査区東側に、版築状の整地層１が東西７ｍ以上、南北６ｍ以上の範囲で広がり、この版築状部分の西側には、さらに整地層２が広がっている。池岸は、北西から南東の方向におよそ 14 ｍにわたって検出した。岸部は、11 世紀の遺物包含層を掘り込み、粘質の強い整地層２で整地して形成し、その上面に幅 2.5 ｍ以上にわたってやや粗い砂を敷き詰めて洲浜を造っている。この砂層は数層から成るが、検出時で最大 14㎝の厚さがあった。洲浜北部では土壙ＳＫ 43 を検出した。この土壙は 1.1 ｍの規模で、底部には数個の根固め石が遺存し、景石の据付穴とみられる。汀の部分は、幅 1.5 ｍ以上の範囲で集中的に玉石、土器・瓦片を灰白色粘土に貼りつけて護岸している。この玉石の大きさは、５㎝大までの小さなものがほとんどである。整地層２の下層では、11 世紀の包含層と南北方向の

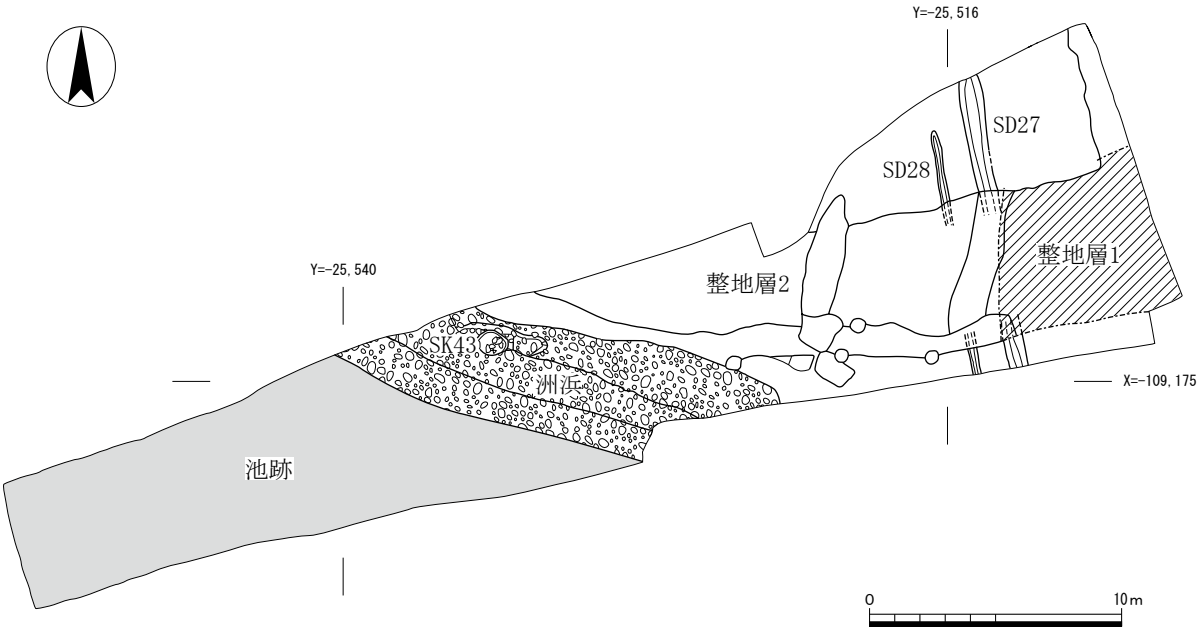


図48　5次2区遺構平面図（1:300）

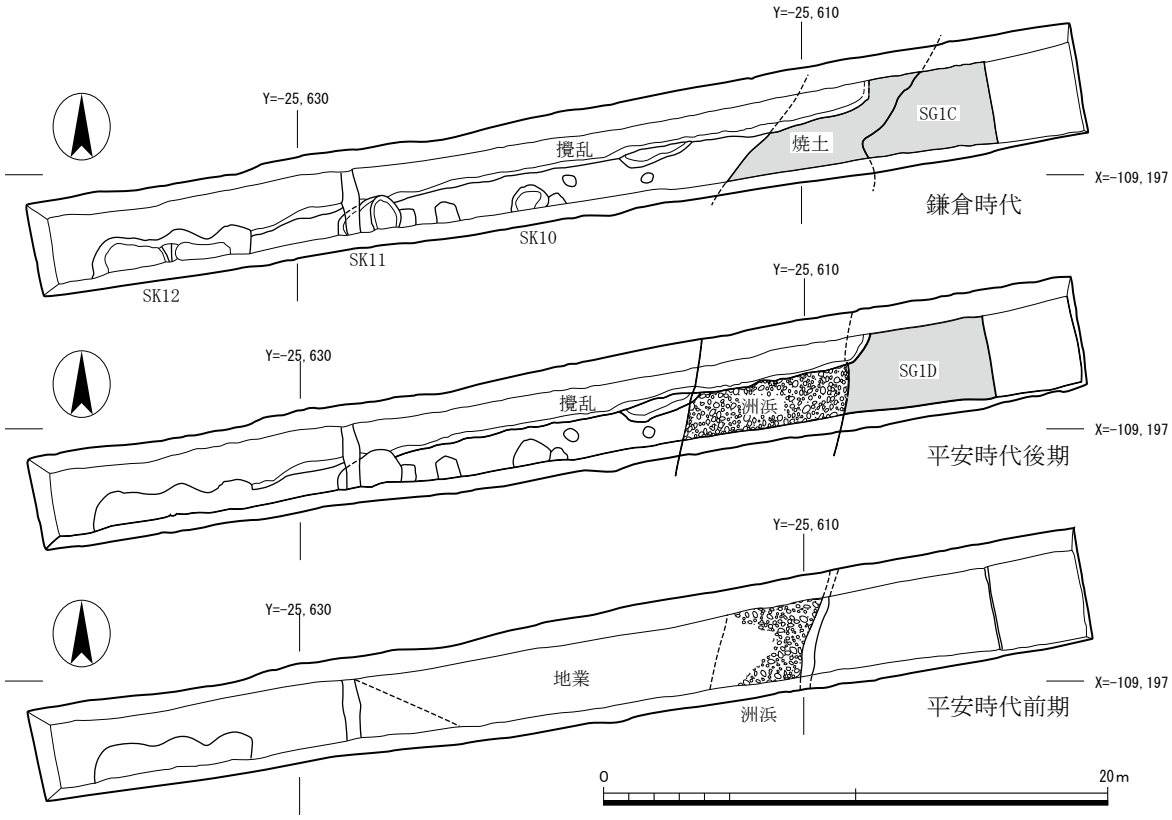


図49　5次3区遺構平面図（1:300）

並行する２条の溝ＳＤ 27･28 を検出した。傾きはやや西偏しており、両溝間の距離は６ｍである。

５次３区（図 49）　池の西側で西御堂にあたる。調査区はＪＲの軌道溝によって北半部は撹乱を受けていたが、平安時代後期から室町時代の西岸を検出した。さらに下層では平安時代前期の地業を検出した。西岸は、江戸時代から明治時代には２区と同じく、水田に転化されている。室町時代の洲浜は褐色砂層で形成される。陸部では土壙５基、柱穴２基を検出した。鎌倉時代の岸から洲浜は焼土と瓦から形成される。洲浜から平安時代後期の瓦が多量に出土する。陸部では土壙３基ＳＫ 10 ～ 12 を検出した。平安時代後期の汀線は、北東から南西方向に認められた。岸部は黒色泥土層や黄色砂礫層によって整地されている。洲浜は基盤部に河原石を敷き詰め、その上に化粧として、やや粗い砂を撒き緩やかな勾配に仕上げられている。また、洲浜から続く、池の堆積土も一部検出した。池と洲浜から 12 世紀末の土師器皿、瓦が出土した。創建当時の様相に近いものと思われる。地業は、法金剛院の整地層と 10 世紀の包含層の下層で検出した。10 ～ 40 ㎝大の河原石から成る整地層で、調査区の中央西寄りから東側に認められた。地業上面には北西から東南方向に石が平坦に敷き詰められ、北東部は北東方向へと緩やかな傾斜を示している。その端部は小振りの石が敷かれ、その上面には一部で砂が認められた。砂の痕跡などから園池遺構の可能性が考えられる。地業内から平安時代前期の軒瓦と瓦、土師器、緑釉陶器、黒色土器が出土した。

６次調査　丸太町通で実施した立会調査で、調査は平安京から法金剛院境内を東西方向に横断した。調査の結果、大部分は既存の埋設管で撹乱を受けていたが、№ 16 地点で焼土と瓦を含む

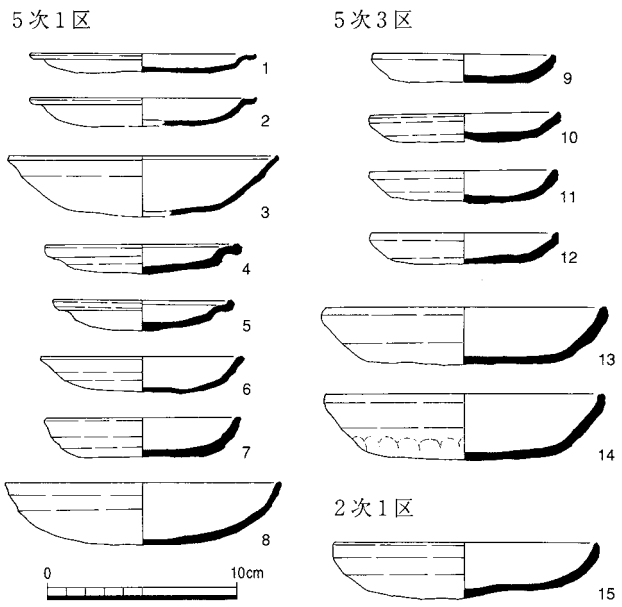


図50　出土土師器実測図（1：4）

洲浜の西岸と西岸より10ｍ東で陸部と思われる平安時代後期（12世紀）の整地層が検出された。

遺物　全調査における遺物の総量は、整理箱にして250箱である。瓦類が大半を占め、軒瓦は奈良時代から室町時代のものが1,000点以上出土した。

土器類は各調査区から出土しており、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、陶器、輸入陶磁器などがあり、平安時代後期から鎌倉時代のものが主である。その他、５次３区で９世紀の土器類、５次１区の下層遺構などから10・11世紀の土器類も出土している。また、５次２区で古墳時代後期の土師器・須恵器、５次３区では縄文時代の石鏃が出土した。

土器類　３次１区では十三町内に位置する池ＳＧ10の３期最下層より12世紀前半の土師器皿が出土した。13世紀の遺物は、ＳＧ10の２期の埋土に含まれ、土師器、瓦器、陶器、白磁、石鍋などが主に池西岸に集中して出土した。同じく井戸ＳＥ11からも同時期の遺物が出土している。

５次１区では礎石建物２、雨落溝、遣水、土壙などから輸入陶磁器を含む12世紀の土器類が出土している。下層遺構からは10～11世紀の土師器皿・杯が出土した。（図50－１～３）は10世紀でＳＤ237から出土した。（４～８）は11世紀で、（４）はＳＤ246、（５）はＳＤ240、（６）は下層、（７）はＰit233、（８）はＰit241から出土した。なかには、ＳＤ257から出土した10世紀のロクロ成形による土師器皿がある。

５次２区では池東岸の整地層１、洲浜から12世紀前半の土師器が出土している。また、整地層１の下層遺構からは11世紀の土師器が出土した。

池西岸にあたる５次３区の平安時代後期の洲浜から、土師器皿（図50－９～14）が完形品として一括出土した。12世紀後半である。

６次調査では、池の中の陸部とみられる整地層から平安時代後期の土師器が少量出土している。

出土した土器類には、埋納されたと考えられるものが数点みられる。１次７区の溝からは、平安時代後期の白色土器壷が出土した。２次３区の西京極大路東築地でも、Ｐit５から同様の白色土器壷が出土している。また、２次１区の東門とみられる建物地業のすぐ西の整地層から、12世紀前半の土師器皿（図50－15）が完形で正位の状態で出土している。いずれも、地鎮に伴う土器の可能性がある。

瓦類　２次１区の東門付近の土壙ＳＫ９から、播磨国や山城で生産された平安時代後期の軒丸

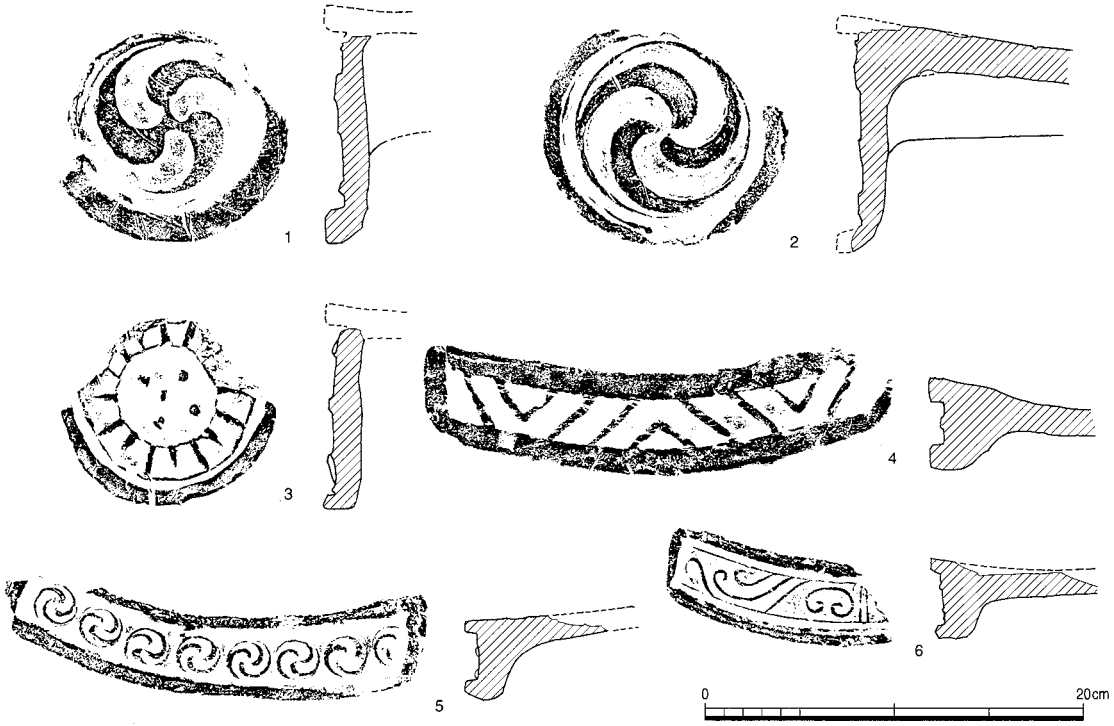


図51　2次1区ＳＫ9出土軒瓦実測図（1：4）

瓦・軒平瓦や丸瓦・平瓦が多数出土した。（図51 －３）は山城産の蓮華文軒丸瓦である。他は播磨産で、（４）は唐草文が退化した幾何学文軒平瓦である。

（図52・53）は５次調査で出土した軒瓦である。(16）は３区のＳＧ１Ｃ、(20）は２区ＳＤ12、他は１区から出土したもので（１～３）は整地層、（６・17・19・24）はＳＫ19、（４・８～10・26）はＳＫ49、(22）はＳＫ77、(13・23）はＳＫ97、（５・18）はＳＫ155、(14・15）はＳＫ189、(７･21）はＰit90、(11）はＰit176、(12）はＳＤ４、(25）はＳＤ235から出土した。（３）は３重の重圏文軒丸瓦、奈良時代のもので平安京に運ばれた再利用瓦である。（１）は中心部に「栗」字を入れた単弁八葉華文軒丸瓦、（２）は複弁四葉蓮華文軒丸瓦で、ともに平安時代前期のものである。（４～26）は平安時代後期のもので、生産地別では山城産（12～15・22～24)、南都産（16)、播磨産（４～11・17～21・25・26）と分類でき、９割近くが播磨産で占められている。(22）の平瓦凸面部にはヘラ書き記号が認められる。出土の特徴として、平安時代後期の瓦が池の東側に多く分布しており、塀２や土壙からのまとまった出土がある。これらは東御所衰退後に整理されたもので、一括して廃棄したものと思われる。また、池の部分では東岸に少なく、西岸で多く出土した。

その他の遺物　５次１区の室町時代の柱穴Ｐit46から、地鎮の際に埋納されたとみられる20枚を一緡にした皇宋通寶などの銅銭がある。

また、２次３区の溝ＳＤ39から、11世紀の土器類とともに出土した建築部材の「斗」や、５次１区の土壙ＳＫ49から出土した築地と関連するとみられる土壁片がある。

自然遺物には、３次３区の下層から出土した多量の竹株・根がある。これらは切断されているものもあり、付近にあった竹薮の土とともに埋立てに使用されたと思われる。良好な状態で出土

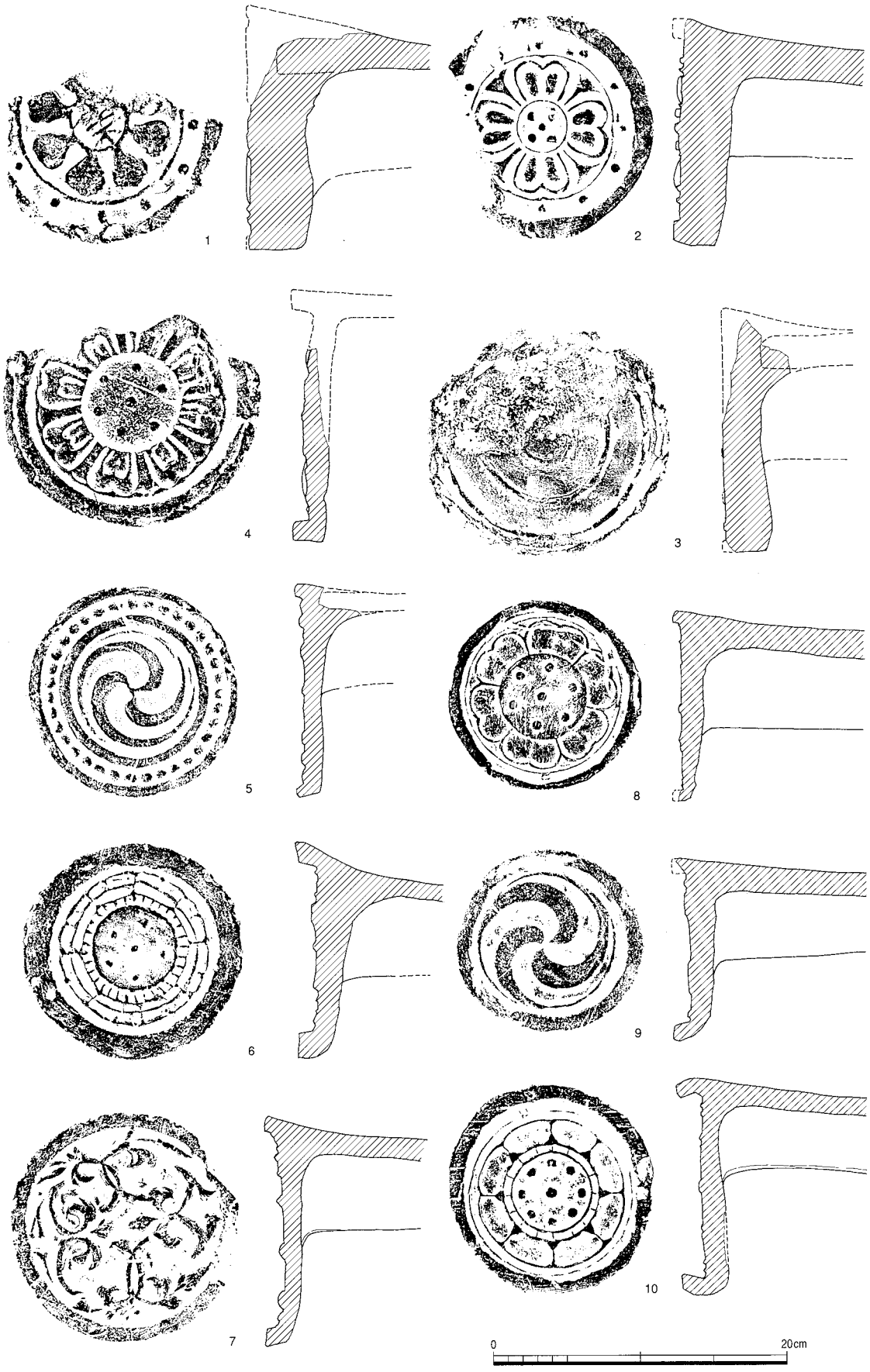


図 52　5 次調査出土軒瓦実測図 1 （1 : 4）

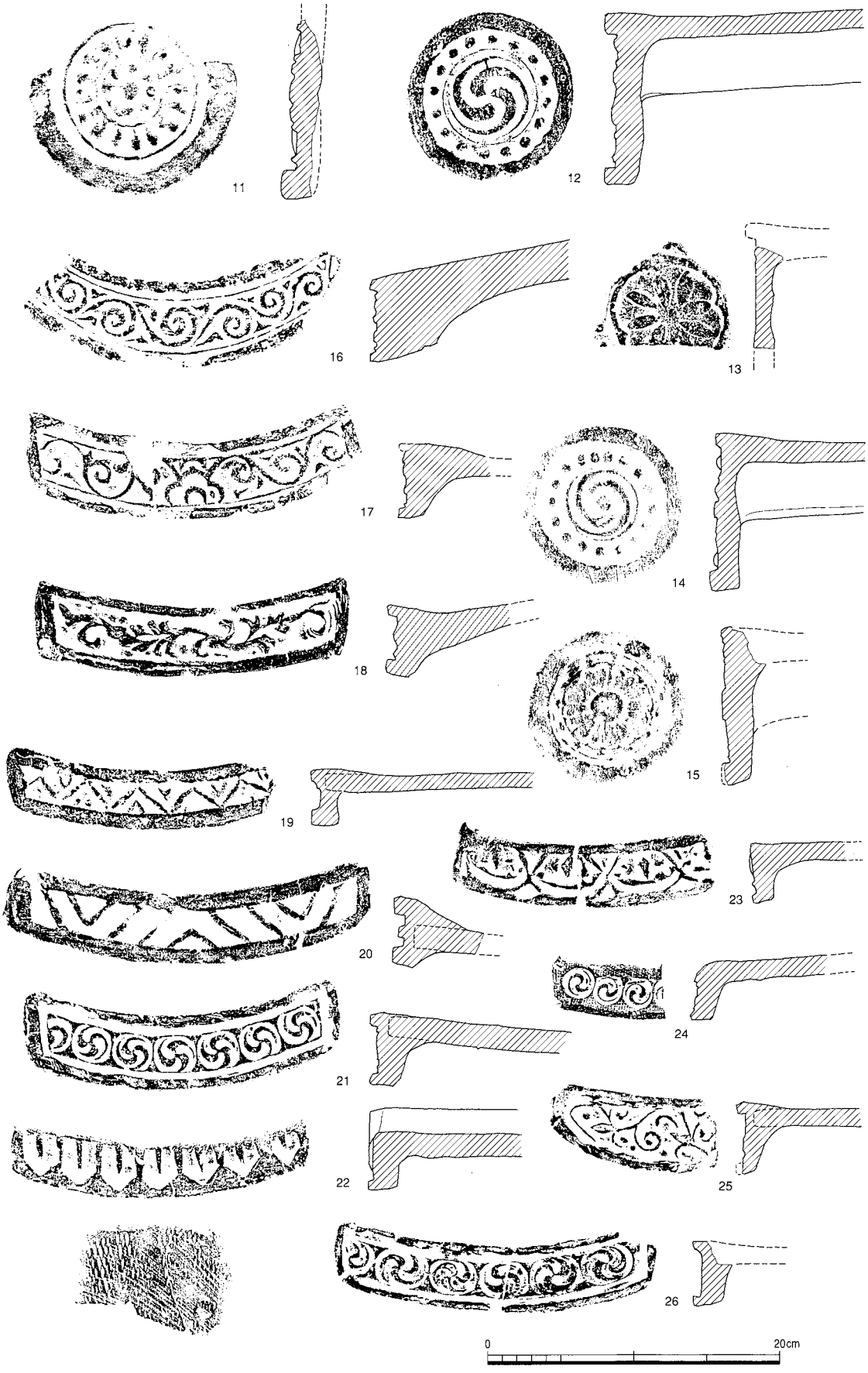


図 52　5 次調査出土軒瓦実測図２（1 : 4）

しており、竹種はマダケかハチク竹と思われる。

小結　地区ごとに概述する。

右京一条四坊十二・十三町地区（１次１～５区、３次１～３区）　十三町では、１次３区で平安時代後期（12 世期前半）に造営された池の東岸が検出された。そして、３次調査でも東岸の延長と南岸が検出された。検出した汀線は、明治時代の地籍図に記されている水田の境界線と一致している。地籍図には十三町の南半部中央に約 60 m四方の水田が記載されており、このことから十三町には園池を構えた邸宅が想定される。造営の時期も、西側に隣接する法金剛院の造営された時期と一致する。平安時代の十三町に関連する文献史料はないが、造営時期などから推察して法金剛院と関係のある貴族の邸宅の可能性がある。

中御門大路・西京極大路（２次１～３区、４次、５次１区）　中御門大路の北側溝は溝の全体規模は不明ではあるが、幅が約３m、深さは 1.2 mである。また、西京極大路の側溝も同様の規模であり、『延喜式』記載より規模が大きい。これは雨水や洪水などを排水するために深く掘られたもので、右京域特有の傾向と思われる。また、西京極大路に関連した遺構の発見は平安京跡では初例である。西京極大路の東側溝・東築地に伴う柱穴などは、ほぼ推定位置に検出した。しかし、西築地（法金剛院東築地）・西側溝を検出した位置は推定地より東側の地点で、さらに２次１区で検出した建物地業は門と考えられ、その位置などからも、西京極大路が『延喜式』記載の幅十丈（30 m、築地間）より約半分に狭められていることが明らかになった。これは、法金剛院の寺域が大路側へ張り出した形で占地していることになる。また、西京極大路の西築地推定地内で行った下層遺構調査では、12 世紀以前の西京極大路の遺構は発見されなかった。平安京の造営当初には、この西の地では道路などは造られなかったものと思われるが、平安京と外とを分けるための境界は明示したと考えられる。５次１区下層の西築地推定付近で 10 世紀に埋没したＳＤ 214・223 が検出されており、この２条の溝が条坊の区画溝に該当する可能性がある。10 世紀以降には西京極大路の西半では 10・11 世紀の建物、井戸、溝などが検出されていることから宅地として利用されている。西京極大路の東半の２次２・３区、十三町の３次２・３区の下層では、11 世紀以前の北東方向の流路が検出された。流路の方向から宇多川の旧流路と思われる。この流路上には、流路と同方向の路面状遺構が検出され、この遺構も 11 世紀中頃には埋没し、竹などが群生していたものと思われる。これらの状況から、この周辺の右京域は 11 世紀中頃までは平安時代以前の旧地形のままの自然環境を呈していたとみられる。法金剛院の造営時の様子が『長秋記』大治四年（1129）九月十二日の条に、「天安寺東西得河後有山、南方所、范眼精迷、雲尤有、歸由此旨」とあり、この地域の地形と合致していると思われる。この旧流路は造営時に埋め立てられ、宇多川は現在の位置に改修されたと考えられる。

法金剛院の西岸地区（１次６・７区、５次３区）　この地区での調査は、前調査の関連遺構の遺存の有無を主眼において実施した。５次３区では平安時代後期（12 世紀後半）の砂敷きの洲浜が検出された。西岸辺が平安時代末期から近世後半に衰退し、縮小され水田に転化していった過程が明らかになった。さらに、下層では天安寺、清原夏野の山荘に関連した遺構を検出した。

１次７区で検出した礎石据付痕跡は、1968・1969年の丸太町通の調査[註1]で検出された天安寺に比定される建築遺構Ⅱの東から２列目の柱筋の南延長上の位置し、さらに1995年の山陰線南側の道路部での調査[註4]で検出した塔下層遺構の礎石建物２の西側柱筋の北延長上の位置でもある。このことで建築遺構Ⅱと礎石建物２が関連建物であることが明確にできた。しかし、建物規模や具体的な性格についてはまだ検討を要する。

５次３区下層の地業は石敷の傾斜や上面の砂などから園池の洲浜の一部と思われる。出土遺物から９世紀中頃に属する時期の遺構である。この時期には双ヶ岡の東麓に右大臣清原夏野が天長七年（830）山荘を築造し、夏野の死後、山荘を仏寺として整備して天安寺が建立した時期にあたる。『日本三代実録』天安二年（858）十月十七日の条に、「陵邊修三昧沙弥廿口、令住雙丘寺、元是右大臣清原眞人夏野之山庄、今所謂天安寺也」とあり、天安寺が清原夏野の山荘であることが記述されている。法金剛院もまた『中右記』大治五年（1130）十月廿九日条に、「此亭本是昔天安寺舊跡云々」などの記述から推察すると山荘以降、それぞれが寺域や施設を継承し、再利用したことが見受けられる。そして山荘に園池の存在を示唆する記述がある。『続日本後紀』承和元年（834）夏四月の条に、「先太上天皇降臨右大臣清原眞人夏野双岡山荘、愛賞水木」とあり、嵯峨上皇が山荘に行幸し水木を鑑賞していたと思われる。この地業が山荘に造られた庭園に関連した遺構の可能性があるものと思われる。

法金剛院の東岸地区（１次８区、２次１区、５次１・２区、６次） 池の東には造営当初に東御所が設けられたところで、建物については『中右記』大治五年（1130）十月廿九日の条に、「今夕兩院初渡法金剛院御所、・・予不騎馬、密々秉燭之間早參彼御所、・・入御従東御門、・・水火童立中門、火北、水南、判官代朝隆親隆二人付、頗雖雪下、自南庭西行、昇自寝殿南階、入御簾中、・・仍東對代廊南庇西一間供御座、・・南廣庇敷高麗端一行、・・此亭本是昔天安寺舊跡云々、掘大池、西作御堂、大門西面、池東作御所、御門東面、造營之體、大略一町、宅過差美麗也」とあり、御所には寝殿、東對、中門、南庭、東御門などの建物が造られていた記述がある。また、『長秋記』にも北廊などの建物の記述がある。２次１区で検出した地業は地業の工法からも建物を造営する目的に採用された方法であり、検出した位置も中御門大路の正面にあることから法金剛院の東御門と考えることができる。門の規模、構造については後世の削平を受けており、明らかにできなかったことが残念である。

５次１区では建物、中門廊、塀、遣水が検出できた。これらの遺構配置から平安時代の貴族住宅形式の寝殿造建物の中で東門から寝殿や南庭に通じる出入り口部分に該当しており、上記、『中右記』の記述と一致する。このことから検出した遺構が東御所の一部であると考えられる。このような平安時代の寝殿造の中門廊を含めた遺構が調査で発見された例はない。また、２棟の中門廊は、礎石の据付石、柱筋と下層北トレンチの調査で礎石建物１と塀２との切り合い関係、中門廊２や塀１の柱穴の埋土には焼土と焼けた瓦が認められることなどから中門廊１が先行し、次に中門廊２に建て替えられ、されに中門廊２は養和元年（1181）五月二十一日の御所の火災で消失したと考えられる。建て替えられた時期についてはいくつか考えられる。創建から３年後に滝を含めた園池の改修とともに北斗堂、三重塔、経蔵などが建立され、寺域が拡張された。長承二年

(1133) から保延二年 (1136) の間か、もしくは待賢門院の死後、待賢門院の女、統子 (上西門院) の御料となる前の保元三年 (1158) 七月に法金剛院の修理が行われている。いずれの時期に改修されたかは、改めて報告したい。

５次２区は、寝殿の南庭部に位置している。また東側 (１区) の建物群が展開する平坦な地形とは異なり、寝殿の前面に広がる南庭の中門および遣水から園池への緩やかに傾斜した地形である。陸部で検出した版築状の整地層１部分には建物などが認められないことから、『年中行事絵巻物』[註5] に遣水の脇に小高い山が描かれている「築山」の痕跡と考えられる。東岸は他の岸より傾斜がきつく造られており、寝殿南庭の池岸の特徴を示しているものと思われる。また、汀は玉石を用いた洲浜ではなく、白砂を敷きつめた洲浜が法金剛院の特徴である。

６次調査で検出した整地層は池の中で狭まった位置にあり、文献史料から東御所と西御堂を繋ぐ橋梁が存在していたことがうかがえる。ここは、東岸と西岸の間の橋脚が置かれた中島と思われる。

今年度の調査でも右京二条四坊十三町では園池遺構や西京極大路の発見など新たな成果を得ることができた。法金剛院の調査では前述した史料の東御所の様相を具体的に確認することができた。東御所の建物配置は『年中行事絵巻物』[註6] を彷彿させるものであり、平安時代の御所や貴族邸宅を研究する上で貴重な資料となる。明治時代の地籍図[註7] に記載されている水田の地目界線と検出した東汀線が一致することも明らかになった。また調査資料ではないが、花園駅の南側には法金剛院の寺域が長承三年 (1134) に春日小路まで拡張された際に境内に取り込まれた築山と考えられる、３m程の小高い盛り上がりが現存しており、駅周辺には境内の旧地形が残されていることもわかった。花園駅周辺での約２年間にわたる調査で、法金剛院の全体像を復原する上で重要な成果を得ることができた。

最後に、庭園遺構については、千葉大学の浅野二郎氏ならびに日本庭園学会諸氏から多くのご教示を頂いた。ここに記して深謝致します。

なお、５次１区の東御所の建物は当地に保存されることなり、現位置に砂と土嚢袋で現状保存した。

(小松武彦・吉村正親・小檜山一良)

註１　杉山信三「法金剛院発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1969
京都府教育委員会　1969 年
註２ (財) 京都市埋蔵文化財研究所『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和 61 年度
京都市文化観光局　1987 年
註３　平田　泰「平安京右京一条四坊」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』
(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1994 年
註４　小松武彦・吉村正親「法金剛院境内」『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』
(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1997 年
註５「蹴鞠 (第３巻第３段)」『日本絵巻物全集』24　角川書店　1968 年
註６「闘鶏 (第３巻第２段)」『日本絵巻物全集』24　角川書店　1968 年
註７　森　蘊「法金剛院の庭園について　下」『建築史』第１巻第２号　1939 年

12　平安京右京二条三坊（図版1・22）

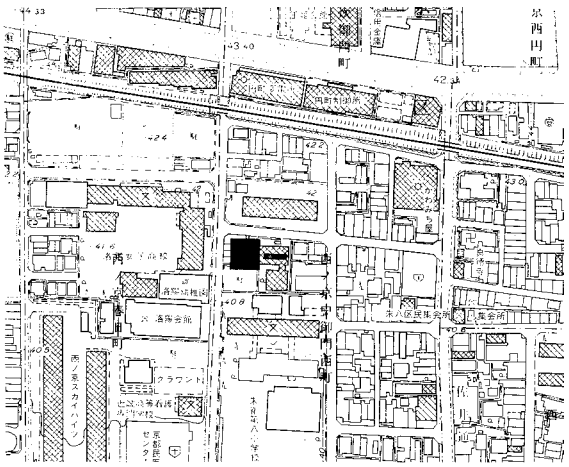


図54　調査位置図（1：5,000）

経過　中京区西ノ京中御門町19番地に所在する学校法人洛陽女子学院所有地で幼稚園建物の建設が計画された。この地区は右京二条三坊一町・宇多小路に比定されている。調査地では京都市埋蔵文化財調査センターによる試掘調査が1996年7月1日と8月26日に実施され、古墳時代の溝、平安時代の柱穴、宇多小路東側溝などの遺構が検出された。このため、遺構の規模と全容を明らかにする発掘調査を実施することになった。調査は1区（20 × 20 m = 400㎡）、2区（17 × 3 m = 51㎡）を設定し、1996年9月17日から11月16日の期間に実施した。

遺構　検出した遺構には古墳時代前期の溝、平安時代中期の建物・柱穴・土壙・溝、平安時代後期の土壙・井戸、室町時代中期の井戸、江戸時代の河川、明治時代以降の溝などがある。

古墳時代前期の溝ＳＤ２下層は２区で検出した。幅1.7 m、深さ0.7 mを測る。溝底部から庄内式併行期の土器が出土した。

平安時代中期の建物ＳＢ14・21・41・44は柱間が7尺と8尺のものがある。柱穴掘形が方形に近いＳＢ21が古く、ＳＢ14、ＳＢ41、ＳＢ44の順に新しくなるものと考えられる。ＳＢ14とＳＢ41は同時期に併存した可能性がある。１区南東地区に集中して検出した土壙ＳＫ７・８・８Ｂ・10・13・55～57などは平面形がほぼ円形で、径1.0 m前後、深さ0.5 mの擂鉢状を呈している。この土壙は、物資を保管する目的で甕などを据え付けていた痕跡ともみられ、ＳＢ41・44はこれら覆い屋の可能性がある。溝ＳＤ４は１区北東地区で検出した。幅1.0 m、深さ0.2 mを測り、東西から南北に屈曲する。

平安時代後期の土壙ＳＫ30は楕円の平面形で、南北径1.7 m、東西径1.3 m、土壙内から完形の土師器皿が多量に出土した。井戸ＳＥ66は方形縦板横桟留め井戸で、一辺0.9 mの最下段の木枠と縦板0.5 mほどが遺存していた。円形の掘形径は4.0 m前後を測り、木枠の据え付け位置が南西隅に偏る。数回の造り替えがあったものとみられる。最終的に廃棄埋没した時代が平安時代後期といえる。

室町時代中期に埋没した井戸ＳＥ81は円形石組みの井戸で、最下段の石組みが一部遺存した。掘形径4.0 m、石組み内径1.0 m前後を測る。井戸底部の出土遺物から、構築時期が平安時代後期にさかのぼる可能性もある。

江戸時代の河川ＳＤ85は１区西端で南北に検出した。幅6.0 m、深さ1.0 mを測る。造営時に設定された宇多小路東側溝を踏襲したもので、水量の増加により幅を拡大したと考えられる。江戸時代に至って細流化し、埋没したとみられる。

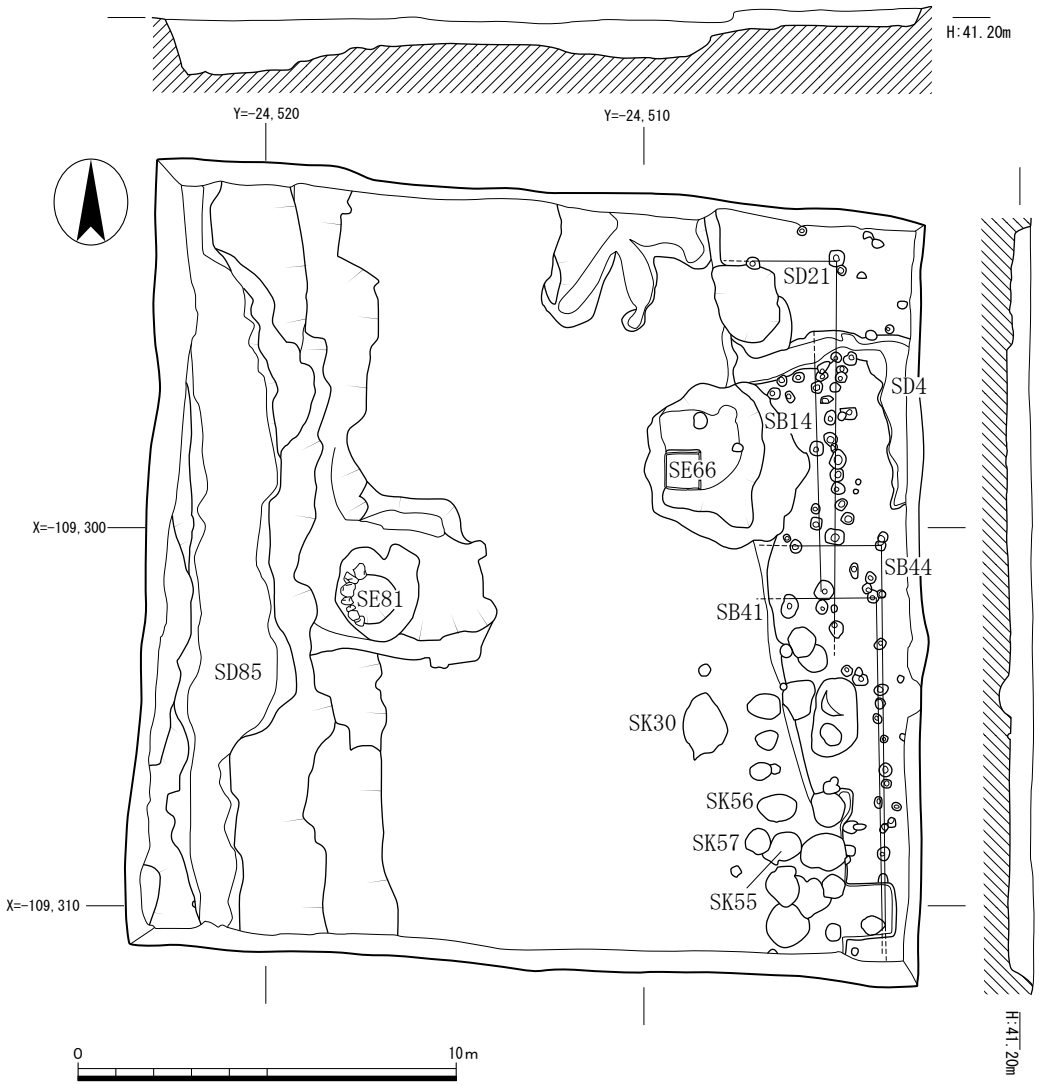


図55　1区遺構実測図（1:200）

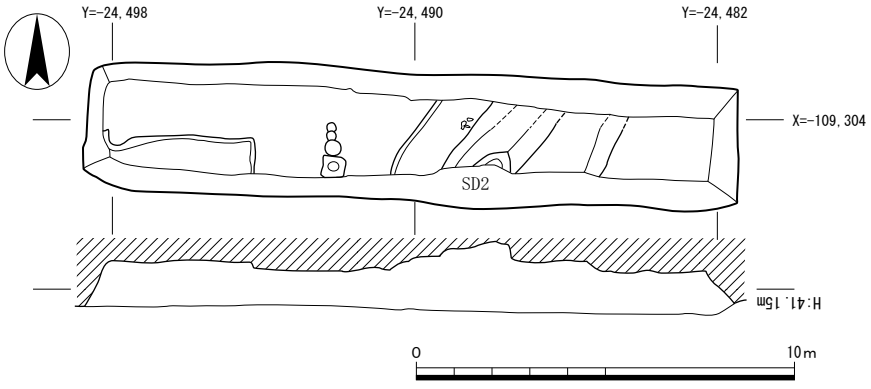


図56　2区遺構実測図（1:200）

遺物　出土した遺物には古墳時代前期、平安時代前期から後期、室町時代中期、江戸時代、明治時代以降に属するものがある。

古墳時代前期の遺物は土師器甕がある。小片のため特徴を識別しがたいが、庄内式併行期に属したものとみられる。２区ＳＤ２下層から出土した。

平安時代前期の遺物は土師器皿・釜、須恵器甕、灰釉陶器椀、瓦などが、河川ＳＤ85に混入して出土した。

平安時代中期の遺物は土師器皿、須恵器杯、灰釉陶器椀、緑釉陶器椀・皿、瓦などが柱穴、土壙、溝から出土した。また、２区ＳＤ２上層からは、須恵器壷１点、腰刀１振り、鋤先１点、銭貨（延喜通寶）70枚以上、小礫10数個がまとまって出土した。

平安時代後期の遺物は土師器皿、瓦器椀、陶器甕、青磁椀、瓦、木製品（曲物･箸･燃えさし･井戸枠・板材）などが土壙ＳＫ30、井戸ＳＥ66から出土した。

室町時代中期の遺物は土師器皿､瓦器釜､陶器椀などが井戸ＳＥ81､河川ＳＤ85から出土した。

江戸時代の遺物は土師器皿、施釉陶器椀、染付磁器椀、土製品炉などが河川ＳＤ85から出土した。

明治時代以降の遺物は陶磁器椀・皿、硝子製品、煉瓦などが、盛土下の小溝から出土した。

小結　２区検出のＳＤ２下層は古墳時代前期に属している。周辺の遺構成立面である黄色粘土層を掘り込んで開削されており、人工の溝とみられる。この時期の集落に関係した溝といえる。平安時代中期にはＳＤ２上層は幅を拡大して浅くなり、岸辺近くは湿地化したとみられる。検出した祭祀遺物は、この湿地化した水際で執行された祭祀儀礼によるものといえる。１区検出の建物４棟はいずれも南北棟で、井戸や土壙群と同時期に存在した脇殿か雑舎とみられる。平安時代後期に埋没する井戸と土壙が検出されたが、建物遺構は認められないため、後期の時期には別の土地利用があったとみられる。室町時代中期までには一帯は耕作地に変わる。宇多小路東側溝は、幅を拡大し水量を増して河川化している。江戸時代にも田園の景観は続くが、河川化した宇多川は徐々に水量を減じて細流化し、明治時代以降に暗渠化されたものといえる。

（平田　泰）

図57　ＳＤ２上層遺物出土状況（西から）

図58　井戸ＳＥ66（東から）

13　平安京右京三条一坊（図版１・23・24）

経過　本調査は、二条駅地区土地区画整理事業のうちの14号道路新設工事に伴う発掘調査である。調査地は、平安京右京三条一坊三町の南東端、姉小路と朱雀大路の交差点北西角部分にあたる。

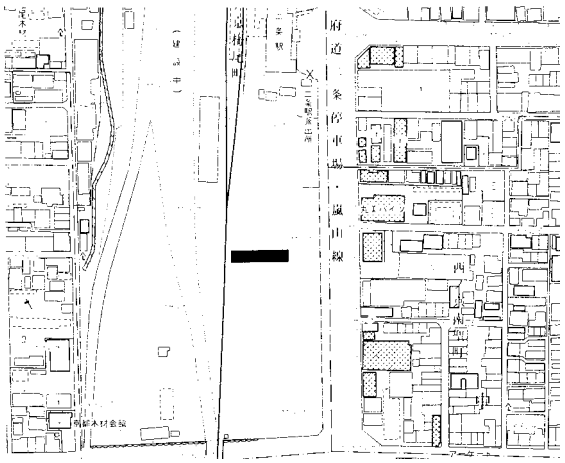


図59　調査位置図（1：5,000）

近年、調査地周辺はＪＲ二条駅周辺の再開発事業が推進されており、これに伴って発掘調査件数が増加している。この地域で、朱雀大路西側溝や姉小路に関連する遺構は、1992年調査[註1]と1994年調査[註2]で検出している。1992年調査では朱雀大路の西側溝を検出しており、本調査区に南接した調査区では姉小路の南側溝などを検出した。1994年調査は本調査の西に近接しており、姉小路の路面と南北両側溝などを検出した。以上のことから、本調査では姉小路北側溝と朱雀大路西側溝が検出されるものと予想された。

遺構　層位は現地表下0.70ｍまでが現代盛土、0.90ｍまでが旧耕作土、以下は遺構面であるいわゆる地山となる。地山上面は標高33.3ｍ前後で平坦である。調査区内は朱雀大路、姉小路と右京三条一坊三町の宅地部分に分けることができる。

朱雀大路　朱雀大路に関する遺構としては、西側溝と考えられる南北溝ＳＤ41がある。この溝の東側には近現代の攪乱が多くあって、路面は遺存していなかった。

ＳＤ41は埋土の堆積状態から平安時代後期に一旦埋没し（ＳＤ41－Ⅰ）、その後に再掘削され鎌倉時代に埋没してしまう（ＳＤ41－Ⅱ）。ＳＤ41－Ⅰは、西肩を朱雀大路西築地推定線の東約１ｍで検出した。東肩はＳＤ41－Ⅱに切られ確認できなかった。深さ0.35ｍ、東西幅1.2ｍ分を検出し、断面は扁平な「Ｕ」字状になるものと考えられ、肩部と底部の境には護岸に用いられたと考えられる杭が穿たれていた。埋土からは12世紀中ごろの土器群が出土した。ＳＤ41－ⅡはＳＤ41－Ⅰ西肩の東0.9ｍに切り込む。東西幅3.6ｍ、深さ0.35ｍの上部が開いた「Ｕ」字状の断面を呈する。西肩底部に杭列を検出した。下層からは13世紀前半の土器群が、上層からは13世紀後半の土器群が出土した。Ⅰ・Ⅱともに姉小路北側溝の東延長付近（調査区北端から南へ約4.5ｍの地点）でそれ以南が極端に浅くなる。この浅い部分の東端には幅約１ｍ、深さ0.1～0.15ｍの細い南へ延びる溝を検出した。これはＳＤ41－Ⅱに伴うものと思われる。

姉小路　姉小路に関連する遺構としては、北側溝と考えられる東西溝ＳＤ42がある。また、路面部分では東西方向の掘立柱列Ａ・Ｂおよび柱穴を検出した。

ＳＤ42は調査区南半部を西端から東へ延び、朱雀大路西築地推定線の西約２ｍの地点で直角に南へ折れ南に延びる。幅は0.8～1.0ｍ、検出面からの深さが0.2ｍ前後で、屈曲部付近では幅0.6ｍと細くなる。底部の標高は屈曲部付近が最も高く、南と西へそれぞれ低くなっている。埋土は

２層に分かれ、下層からは平安時代中期、上層からは平安時代末期から鎌倉時代の遺物が出土した。このことから、ＳＤ42は平安時代中期に埋没し始め、鎌倉時代には完全に埋まってしまったと考えられる。

ＳＤ42の南側は姉小路の路面に相当するが、路面整地は全く確認できなかった。しかし、地山面がやや汚れ、平安時代前期・中期を中心とした比較的多くの遺物が突き刺さった状態で検出した。遺構として明確な輪郭は確認できず、調査地一帯は湿潤な地域であったらしいことから、踏み込まれた遺物であると判断した。

掘立柱列Ａは、東西３間分（Ｐ107～110）を検出した。柱間は西から2.1ｍ、2.4ｍ、2.1ｍで、座標東に対してやや北に振れる。柱穴はＰ107・109が長軸0.8ｍ、短軸0.6ｍの楕円形で、Ｐ108・110が径0.5ｍの円形である。掘立柱列Ｂは東西５間分（Ｐ101～105・120）を検出した。柱間は2.4ｍ等間で、座標東に対してやや南に振れる。柱穴は長軸0.6～0.8ｍ、短軸0.5～0.7ｍの楕円形である。他に以下の柱穴がある。Ｐ106は径0.4ｍの円形、Ｐ94は長軸0.7ｍ、短軸0.6ｍの楕円形の掘形である。上記のいずれの柱穴も柱痕跡は円形で径0.2ｍ前後であった。掘立柱列Ａ・Ｂおよび柱穴は、埋土の遺物から、10世紀前半に成立し、後半までには廃絶したものと考えられるが、姉小路の道路内に位置している。

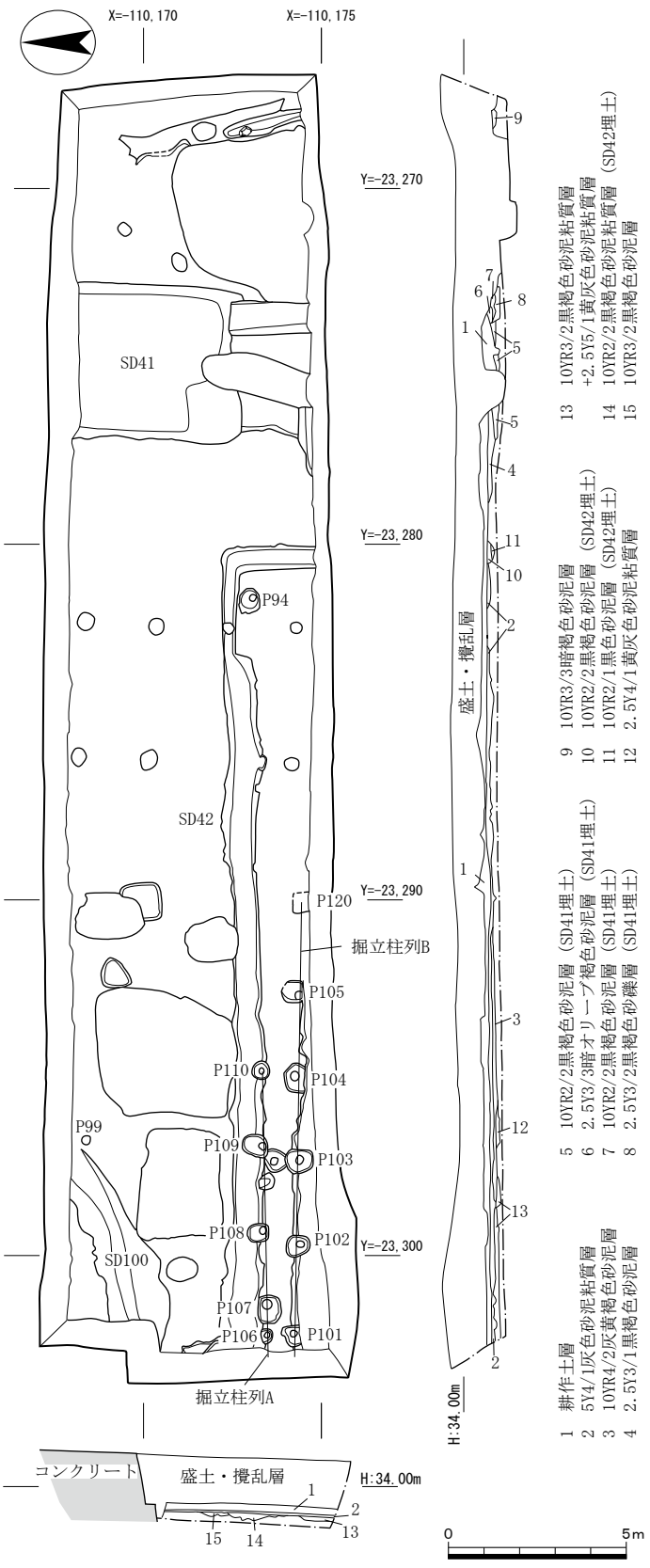


図60　遺構実測図（1:200）

宅地部分　宅地部分では、平安時代の明確な遺構は検出できなかったが、Ｐ 99 とＳＤ 100 がある。ＳＤ 100 は調査区の北西端で検出した。断面は「Ｖ」字状を呈し、北東から弧を描いて西に延びる流路と考えられる。遺物は全く出土しなかったが、埋土が土壌化しており、平安時代以前のかなり古い時代の流路であろう。Ｐ 99 はＳＤ 100 の東肩部で検出した。埋土がＳＤ 100 に良く似ていることから、同時代と考えられる。

遺物　遺物は整理箱に 69 箱出土した。遺物の大半は瓦類である。遺物の時期は、平安時代前期から江戸時代に及ぶが、量的には平安時代中期に属するものが多い。石器と考えられる剥片や弥生時代の石包丁未製品なども少量出土している。

平安時代前期から中期の遺物はＳＤ 42 や掘立柱列Ａ・Ｂなどから出土した。土器類は 10 世紀中ごろに位置付けられるものが中心である。瓦類はＳＤ 41 をはじめ、後世の遺構などからも多量に出土した。ほとんどが平瓦・丸瓦の破片で軒瓦は小破片が１点あるのみである。また、須恵器には墨書のあるものや転用硯、円面・風字硯などがある。平安時代後期から鎌倉時代の遺物はＳＤ 41・42 を中心として出土した。

小結　朱雀大路西側溝ＳＤ 41 は平安時代後期と鎌倉時代に埋没したものがあり、1992 年調査で検出した同溝と時期的には合致するが、やや西に寄った位置で検出した。

姉小路北側溝ＳＤ 42 は平安時代中期（10 世紀前半）に埋没し始め、鎌倉時代前半（12 世紀後半から 13 世紀初頭）には完全に埋まっている。1994 年調査で検出した姉小路北側溝の東延長上にあたり、時期的に合致するが、かなり幅が狭くなっている。この溝は朱雀大路の西側で直角に南方（路面側）へ折れ曲がり、路面を横断する。

本調査の成果からは、朱雀大路西側溝は姉小路との交差点部では浅くなっており、また姉小路北側溝は朱雀大路との交差点部を目前にして南（路面）側へ折れ曲がる。この両者の状況は密接に関連しており､朱雀大路西側溝は姉小路との交差点部分を南へ貫通せずに浅くなっていたため、姉小路北側溝は南へ路面部を横断せざるを得なかったのではないかと考えられる。また、西側溝の浅くなった部分の東端で検出した南北溝は溢れた水を南へ流すためのものと思われる。

また、姉小路路面部分では、平安時代中期の東西方向の掘立柱列Ａ・Ｂと柱穴を検出した。これらは比較的短期間で廃絶したと考えられる。しかし、検出位置が路面部分であること、ＳＤ 42 の埋没開始時期と合うことなどを考えると、柵列であるのか建物の一部であるのか現時点では判断できない。

本調査では多くの課題を残したが、それらの解決は今後の周辺での調査に委ねる。

（高橋　潔）

註１　本　弥八郎「平安京右京三条一坊」『平成４年度　京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所　1995 年

註２　吉村正親「平安京右京三条一坊」『平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996 年

14　平安京右京六条一坊（図版1・25）

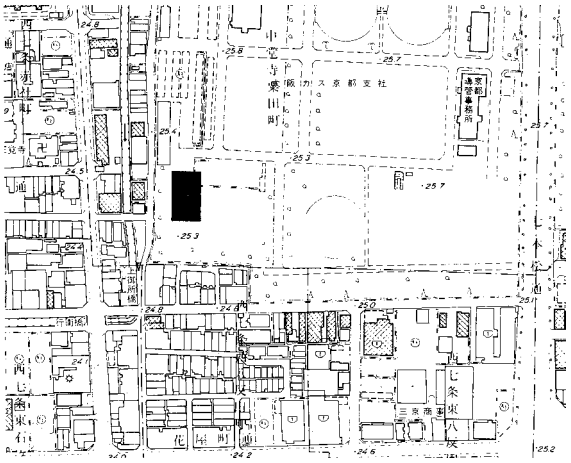


図61　調査位置図（1：5,000）

経過　大阪ガス京都工場跡地を対象にした埋蔵文化財の調査は本調査で第12次になる。今回の調査地は平安京右京六条一坊十三町の南西部に該当する。この十三町ではこれまでに第4次調査で北東部、第6次調査で中央部北寄り、さらに第7次調査では北部を対象とした3件の発掘調査を実施している。この一連の調査によって、十三町に営まれた邸宅を構成する建物、溝、柵、井戸など、平安時代前期の遺構を多数検出しているが、これらの成果によってこの町が9世紀中頃までは1／4町に四分割されていたこと、その後1町全域が一つの邸宅として利用されていたことが明らかになっており、今回の調査でもそれに関連する遺構の検出が予想された。

調査にあたっては建設予定地中央に東西方向の排水溝が横切っていたため、それを避ける形で南北2区に分割して調査区を設定した。調査の経過の中で、北調査区については北端で検出した溝の規模や延長部の状況を確認するため北および北東の一部、南調査区では池の南限を追求する目的で南東隅を拡張した。調査の結果、北調査区で平安時代前期の掘立柱建物と溝、南調査区で2時期にわたる池を検出した。

遺構　今回の調査で検出した平安時代の主要な遺構は掘立柱建物ＳＢ1、東西方向の溝ＳＤ20、および池ＳＧ19・21である。ＳＢ1は南北2間×東西5間の身舎の4面（西面は未確認）に庇が付く東西棟で、柱間は南北8尺、東西9尺、庇の出は9.5尺である。北庇のさらに北8尺の位置にもう1列柱が並び、孫庇をもつ建物である可能性がある。ＳＤ20は幅約0.3ｍほどの東西方向の溝で、ＳＢ1の北1.5ｍを平行に走る。一部で幅が広がるが、その部分には両肩に石積みがあったようである。溝の埋土には土器類が多量に含まれていた。

ＳＧ19とＳＧ21はともに池状の遺構である。ＳＧ19は先行する池ＳＧ21を北側から埋め立て整地し、北肩を杭と板で東西方向に護岸したものである。ＳＧ21の北肩はＳＧ19が直線的に造られているのに対して南調査区南西部で南に湾曲しており、底部に拳大の礫が多数みられた。両遺構とも南肩は未確認のため幅は不明である。ＳＧ19については直線的な北肩部の形状から当初は溝とも考えていたが、十三町南端から約12ｍ北に位置し、南の内溝とするには位置や規模の点からみて難しく、ＳＧ21同様に池状の遺構と判断した。このＳＧ19の造作に伴う整地層はＳＧ21を埋め立てるだけではなく、その北方のＳＢ1付近にまで薄く延びることを確認している。溝や建物の柱穴から出土した土器類の形式（平安京Ⅱ期中～Ⅱ期新）からみると、遺構はすべて9世紀後半以降に属するもので、その廃絶期は10世紀初頭と考えられる。北側の調査成果からみて、この時期には十三町は全域が一つの宅地となっており、ＳＢ1はその中でも規模の

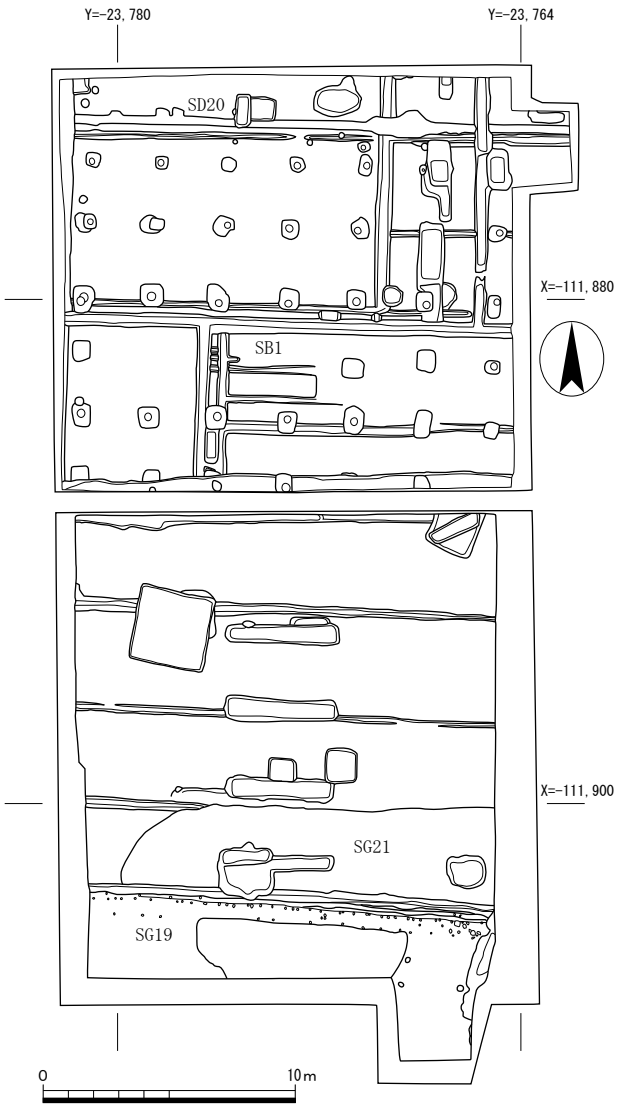


図62　遺構平面図（1:300）

大きな建物である。

遺物　遺物は主として溝ＳＤ20と池ＳＧ19、ＳＧ21から出土したもので、建物やＳＧ21北部の整地層から出土したものはわずかである。ＳＧ19護岸の杭の他、大半は土器類で、瓦類は少ない。土器類は特にＳＤ20から多く出土しているが、遺存状況は良くない。以下に３遺構の土器類の破片データを示し、ＳＤ20出土土器類の一部を図示する（図63）。

ＳＤ20　総数11,402片で種類別の比は、土師器87.6%、黒色土器6.5%、須恵器2.7%、緑釉陶器2.2%、白色土器0.0%、灰釉陶器0.6%、輸入陶磁器0.2%、その他0.2%。機能別の比は、供膳具92.8%、貯蔵具1.3%、煮沸具1.5%、土師器を除いた供膳具を土器の種類別にみると黒色土器64.8%、須恵器6.5%、緑釉陶器22.8%、白色土器0.0%、灰釉陶器4.4%、輸入陶磁器1.6%。

ＳＧ21　総数が2,311片で種別の比が土師器80.1%、黒色土器0.8%、須恵器11.7%、緑釉陶器4.6%、白色土器0.1%、灰釉陶器1.7%、輸入陶磁器0.7%、その他0.3%。機能別の比は供膳具77.3%、貯蔵具9.0%、煮沸具3.7%、供膳具の種別では黒色土器7.0%、須恵器17.0%、緑釉陶器49.0%、白色土器1.0%、灰釉陶器19.5%、輸入陶磁器6.5%。

ＳＧ19　総数902片、種別の比が土師器78.7%、黒色土器2.1%、須恵器10.0%、緑釉陶器6.0%、白色土器0.0%、灰釉陶器1.6%、輸入陶磁器1.6%、その他0.1%。機能別の比は供膳具81.8%、貯蔵具7.1%、煮沸具3.9%、供膳具の種別では、黒色土器13.5%、須恵器16.2%、緑釉陶器45.9%、白色土器0.0%、灰釉陶器12.6%、輸入陶磁器11.7%。

これらの土器群の時期はＳＧ21が平安京Ⅱ期新（古相）、ＳＤ20、ＳＧ19がⅡ期新に属するもので９世紀末から10世紀初頭に位置づけられる。同時期の他の遺跡でのあり方と比較すれば、ＳＤ20の供膳具における黒色土器とＳＧ21、ＳＧ19での輸入陶磁器比率の高さが目に付くが、輸入陶磁器については同じく十三町の６次調査で検出した池状の遺構ＳＸ01（ＳＧ21と関連するものとみられる）でも8.1%と比較的高い比率を示しており、この時期の十三町の傾向を示す

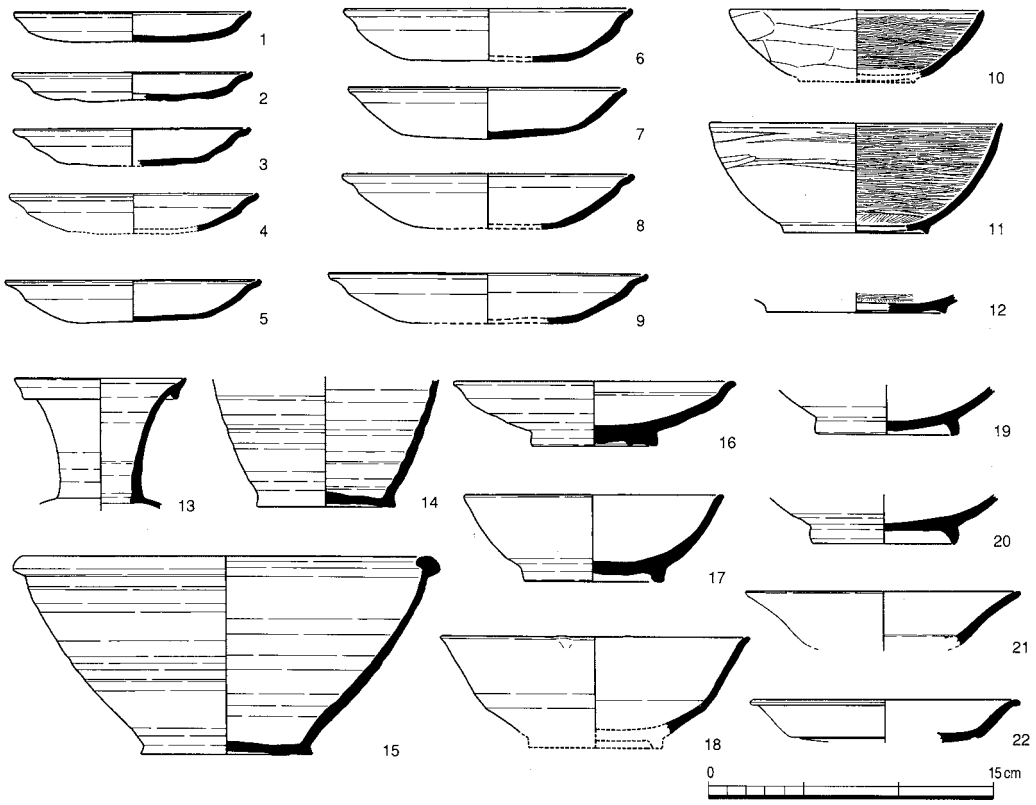


図63　ＳＤ20出土土器実測図（1～9: 土師器、10～12: 黒色土器、13～15: 須恵器、16～18: 緑釉陶器、19・20: 灰釉陶器、21・22: 輸入陶磁器）（1：4）

データとして評価できるのではないだろうか。

小結　今回の調査結果と既往の調査成果を合わせると、右京六条一坊十三町に関しては南東の１／４を除いた範囲がほぼ明らかになったといえるだろう。先に述べたようにこれまでに検出した十三町の遺構群は１／４町分割の９世紀中頃まで（Ａ期）と、その後の１町全域が一つの邸宅として利用されていた時期（Ｂ期）の２時期に大別できるが、今回の調査範囲では９世紀前半代に属する遺構はまったく認められなかった。遺物についてみても同期のものはなく、十三町はＡ期には町北半が２つの宅地として利用され、南半部は宅地として利用されていなかったか、あるいは利用されていたとしても小径に沿って小規模な建物がならび、南側は空閑地であった可能性もある。Ｂ期に至り、それまでの建物に替わり新たな数棟の建物が建てられる。宅地を区画していた溝や小径にまたがる位置に建つものもあり、この時期には１町占地となったことがわかる。条坊区画と異なるラインに掘られたＳＤ20の位置も、１町占地の中でこの時期に新たに建てられたＳＢ１との関係で理解すべきだろう。また宅地の中央部付近では主要な建物に挟まれた位置に池が作られるが、この池が今回検出したＳＧ21と関連するものとすれば、敷地中央部から南西部に細長く池を配し、その周辺に建物が点在する邸宅が想定できる。この町の東には、ほぼ同時期に同じく１町を占地した右京六条一坊五町の邸宅例がある。そこでは主殿を囲むように配置された脇殿群と宅地北方に柵で画された雑舎群があるが、それに比べて十三町のＢ期の宅地では建物配置にまとまりがとぼしい感がある。　（平尾政幸）

Ⅲ　白河街区

15　六勝寺跡・岡崎遺跡（図版１）

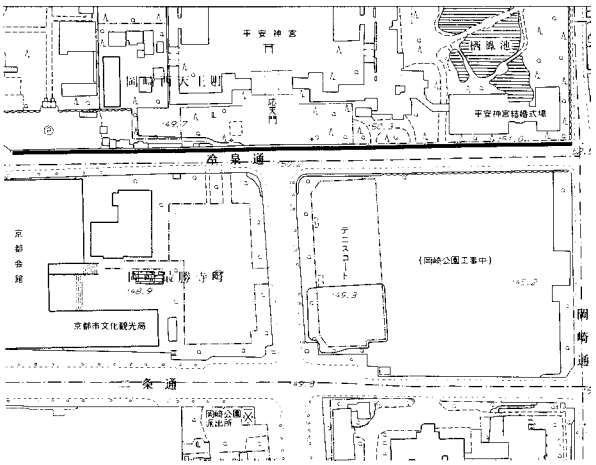


図 64　調査位置図（1 : 5,000）

経過　今回の調査は、自転車歩行者道新設工事に伴う発掘・立会調査である。調査地は左京区岡崎西天王町から最勝寺町に至る市道冷泉通車道北端部にあたる。この区間は推定尊勝寺跡の寺域内および最勝寺跡の北限域にあたる。

調査区一帯は、平安時代の後期に白河・鳥羽天皇（上皇）らが「院政」権力を確立する目的で、承暦元年（1077）に法勝寺を手始めに造営を開始して、勝の字を付けた寺を次々と六つ建立し「六勝寺」と総称される寺跡推定地である。六勝寺の寺域や伽藍配置などについて、文献やこの間の考古資料から様々な復原案が出されているが、見解の一致をみない部分も多い。新たな考古資料の蓄積によってより確実な復原にせまることが要請されている。

今回の調査では、その位置から推定して最勝寺の東限を画する南北側溝の有無の確認や、北限域の様相の更なる解明につながることが想定された。またこの地域は弥生時代から古墳時代の遺構を検出した岡崎遺跡の範囲にもあたり、それに関連する遺構・遺物の検出も想定された。

調査は、歩道の拡幅工事に際して、歩道際に並行する雨水排水路の移動に伴う掘削工事を契機とする。ただし、冷泉通西端から平安神宮の応天門前、西横断歩道地点までの工事区間は、従来の調査から冷泉通を東西に走る旧下水路跡が予想されたので、攪乱の有無を確認するため、事前に№23 地点を調査した。その結果、想定どおり上記区間は下水路による攪乱であったので当該区間は調査の対象外とした。調査対象地は冷泉通の応天門前三差路東端より、東の岡崎道手前までとなった。また、応天門から東側についても工事区域の南半に沿うように旧下水路跡が通る。そのため当初は発掘調査を計画していたが、立会調査に替えている。

遺構　今回検出した主な遺構としては平安時代後期の瓦溜がある。調査区の基本層序は、場所による相違はあるが、現地表下 30cm前後まではアスファルトと舗装時の整地である。ついで 30cmほどの厚みで明治の内国博覧会前後の道路面とそれをはさんだ整地層がある。№18 地点で、この整地層下の土壙から幕末以降の染付片が出土している。基本的には現地表下 80cmの近代整地層直下が白河砂からなる地山である。

№23 地点で検出した瓦溜は掘削箇所の北端部分にある。検出位置は現地表下 60cmで、遺構の深さは 110cmを測る。掘削地点の北壁全面に観察され、北へ広がる。

遺物　今回出土した遺物は整理箱３箱で、そのほとんどが瓦類である。古墳時代の遺物はいず

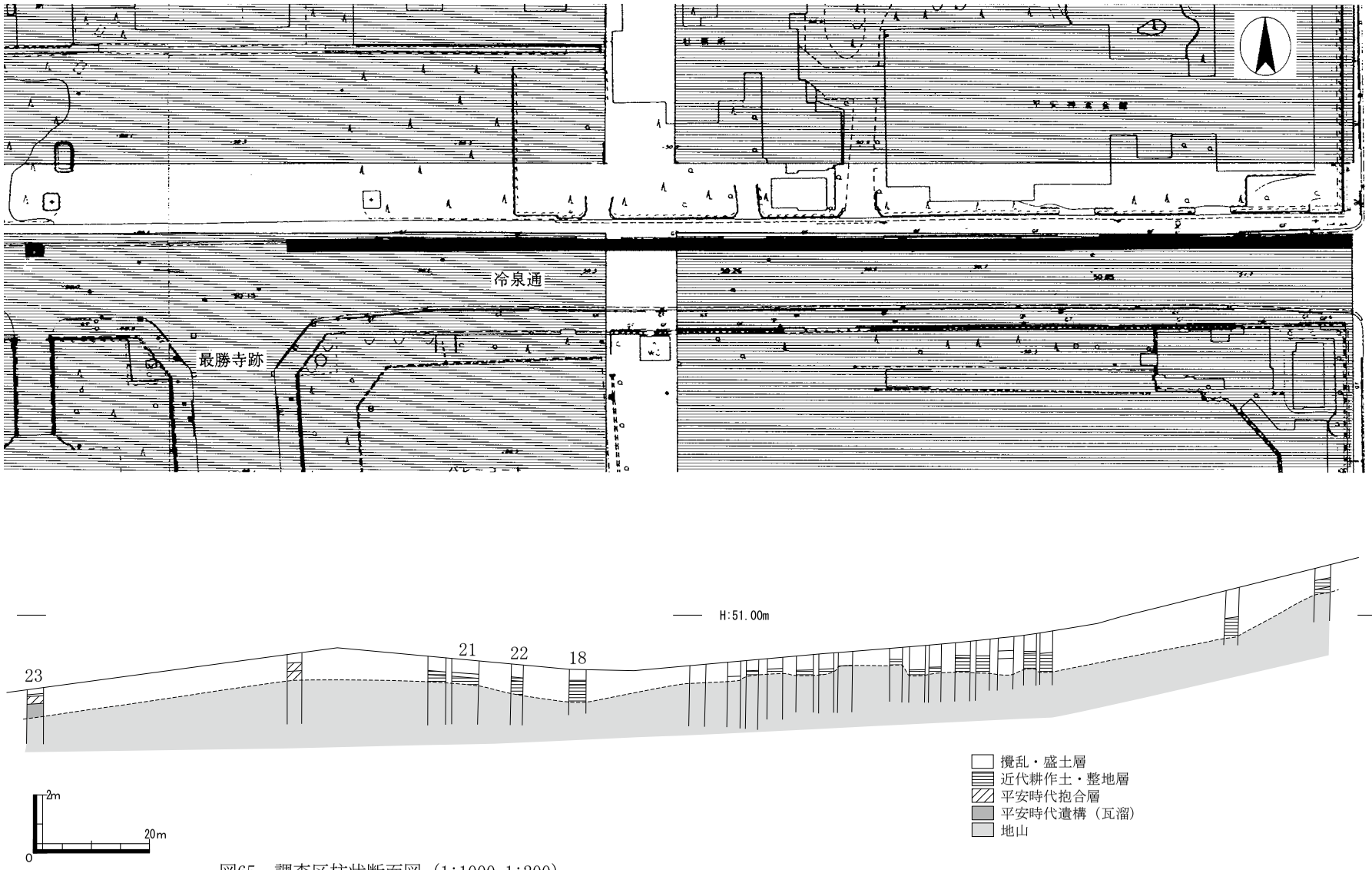


図65　調査区柱状断面図（1:1000,1:200）

れも近世以降の遺構・整地層への混入で、土師器と須恵器が各１片ずつある。土師器は小片であり時期は不明であるが、岡崎グランドから出土した布留式併行期の土器と同様の特徴を示す。須恵器は同じく岡崎グランドで検出された、鵜塚古墳と同様の６世紀代のものである。

平安時代後期の遺物は瓦類が大半を占める。近世耕作土や整地層からも出土したが、№23 地点の夜間立会で検出した瓦溜のものがほとんどで、軒瓦は出土しなかった。土師器は同じ瓦溜から小破片が少量出土した。

江戸時代の遺物は、近世耕作土や明治期の平安神宮建設時の整地層から、肥前染付や京焼系陶器の破片がわずかに出土した。

小結　過去の調査[註1・2]において検出され、最勝寺の東限を画するとした南北溝については、工事区域ではあったが掘削深度が浅く、確認できなかった。南北溝は最勝寺東側に位置する小路の東側溝の可能性もあり、その場合、小路西側溝（＝最勝寺東限）の検出も予想されたが、結果としてはその有無は確認できなかった。近代整地層の下は地山となっており、明治の内国博覧会の際の整地により削平されたか、№21 地点が寺域より北側の道路部分であり、側溝のない地点であったと考えられる。従来検出の南北溝が最勝寺東限内側溝なら、調査地点にその遺構が出ないのは、当然ともみられよう。いずれにせよ、近代整地により削平されていることが確認を困難にしている最大要因である。また、同様に北限を画する東西の側溝なども検出していない。

№23 地点で検出した瓦溜は、1995 年の発掘・立会調査[註3]で検出された最勝寺の建物５（推定「五大堂」とされる）の北側に位置するので、これに関連する瓦溜と想定する。

六勝寺の寺域確定作業は、調査の蓄積により徐々にではあれ着実に進んでいる。さらに発展させるためには、小規模な立会調査の機会を活かして、成果をあげることがのぞまれる。

（津々池　惣一）

註１　内田好昭・丸川義広・平方幸雄「最勝寺跡・岡崎遺跡」『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1995 年

註２　尾藤徳行・吉村正親・竜子正彦「最勝寺跡・岡崎遺跡（94KS389）」『京都市内遺跡立会調査概報』平成７年度　京都市文化市民局　1996 年

註３　堀内明博「六勝寺跡・岡崎遺跡」『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1997 年

Ⅳ　その他の遺跡

16　上庄田瓦窯跡（図版２－１・26・27）

経過　本調査は、西賀茂第３土地区画整理事業に伴って行われたものである。昨年の試掘によって、瓦窯跡とその後方の西側台地に工房跡が存在することが明らかとなった。調査は、工事計画などの都合により瓦窯跡と工房跡に分けて行われることになり、今回は工房跡の調査である。

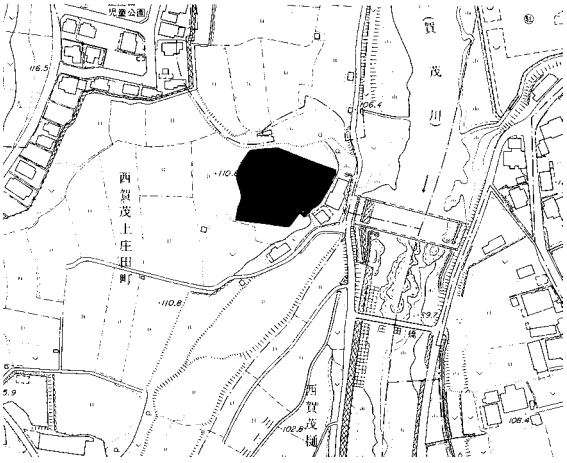


図66　調査位置図（1：5,000）

遺構　検出された遺構は台地の東端の約35ｍ四方に集中し、工房はこの範囲で完結するようである。以下に各遺構について述べていく。

ＳＤ１　瓦窯の北西５ｍのところに窯に並行して検出された、窯に雨水の浸入を防ぐための排水溝である。検出した溝の総延長35ｍ、幅は狭いところで2.0ｍ、広いところは4.5ｍを測る。溝の北端は北西にやや曲がり、溝の南端は後述するＳＤ36に合流する。溝の最上層からは多量の瓦が出土した。瓦は大きく北と南の２群に分かれて出土している。位置的には北群が２・３号窯に近く、南群が１号窯に近いところで検出されている。瓦より下の層は、黄褐色の砂泥層が堆積し遺物はほとんど出土しない。溝底は凹凸が激しい部分もあり、水の流れが激しかったことを表している。

ＳＤ36　長さ18ｍ、幅３ｍの工房への水の浸入を防ぐための溝である。溝の東端は、ＳＤ１と合流し１つの溝となり、南東側の調査区外へと続く。遺物は瓦片が少量出土する。

ＳＤ39　ＳＤ１の東側で検出した幅3.0～4.5ｍ、長さ14ｍ以上の溝である。ＳＤ１より古い段階の排水溝である。ＳＤ39は来年度の調査の予定とし、掘り下げは行っていない。

ＳＢ１　桁行４間（8.0ｍ）×梁間２間（4.5ｍ）の掘立柱建物である。建物の主軸方位は北に対して東に振れる。北１間と南１間は柱をもって間仕切る。桁行の柱間は1.6～2.0ｍとばらつきがある。柱掘形は0.4ｍ、確認された柱穴は0.15ｍである。

ＳＢ２　桁行３間（5.7ｍ）×梁間２間（4.2ｍ）の掘立柱建物である。桁行の柱間は1.7～2.0ｍとこれもばらつきがある。柱掘形、柱穴規模はＳＢ１と同規模である。

ＳＸ33～35　ロクロピットと考えられる土壙３基を並んで検出した。直径はＳＸ33･34が1.1ｍ、ＳＸ35が0.9ｍを測る。深さはＳＸ33が0.3ｍ、ＳＸ34・35が0.5ｍである。形状はいずれも不整形な楕円形を呈し、断面観察によってロクロの軸棒を据えたとみられる痕跡がある。この軸棒の痕跡はいずれも土壙の端に寄り、ロクロの上部構造と関連する可能性がある。

ＳＫ３　多量の瓦が出土した長辺2.4ｍ、短辺1.7ｍの楕円形の土壙。瓦は、平瓦の完形のも

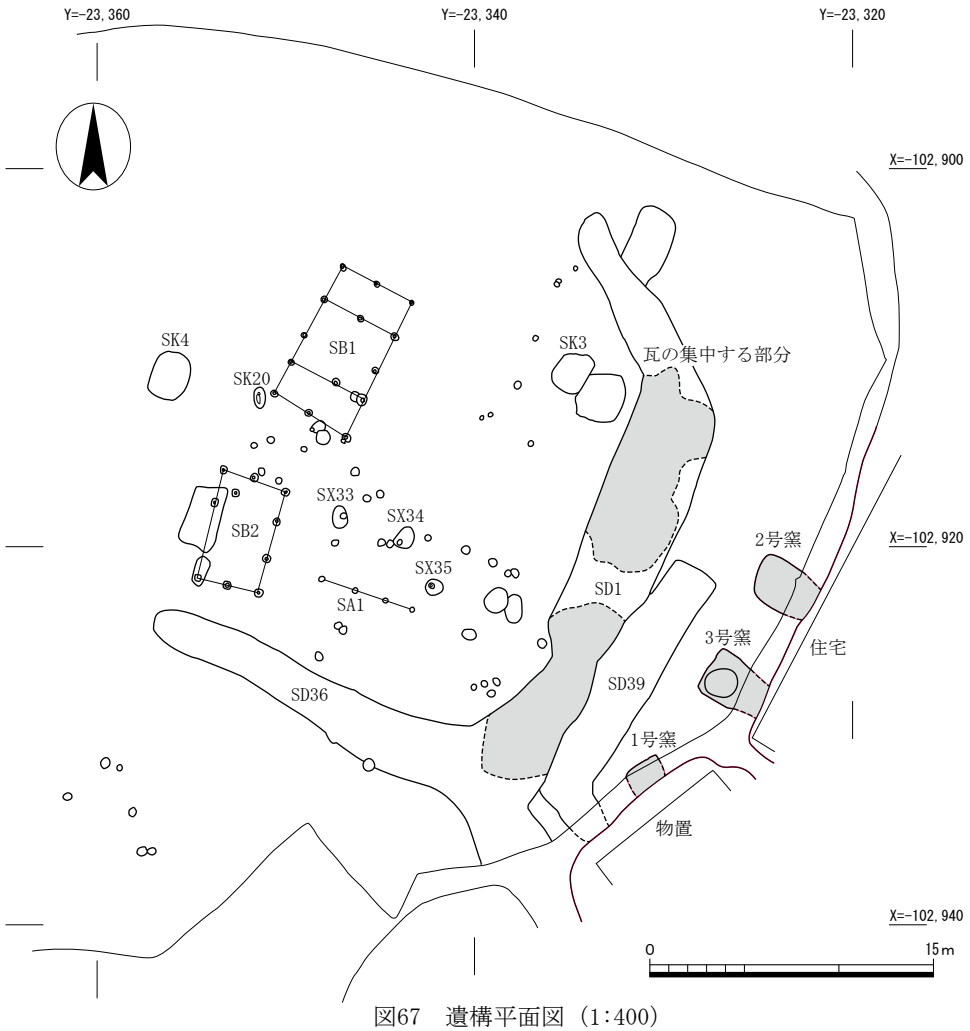
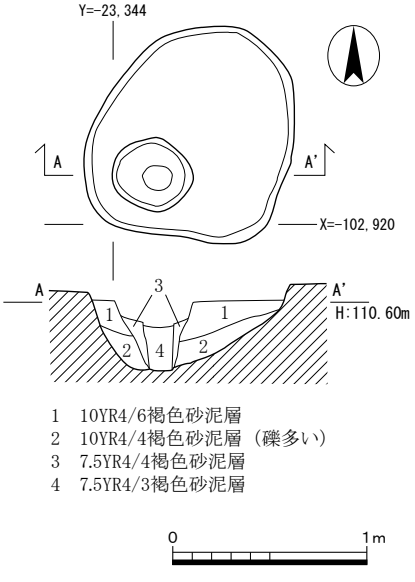


図67　遺構平面図（1:400）



1　10YR4/6褐色砂泥層
2　10YR4/4褐色砂泥層（礫多い）
3　7.5YR4/4褐色砂泥層
4　7.5YR4/3褐色砂泥層

図68　ロクロピットSX34実測図（1:40）

のが多く、これらは５～７枚重なっていた。出土した瓦は、白灰色で軟質のものが大半である。

ＳＫ４　ＳＢ１の西側で検出した南北 2.5 m、東西 2.0 mの方形土壙である。上層では 0.1 ～ 0.4 mの石が多量に出土。下層では黄褐色の砂泥層から土師器、須恵器が出土している。

ＳＫ 20　ＳＢ１の南西隅で検出した。東西 0.45 m、南北 0.9 mの長方形の土壙に２つの丸瓦の筒部を重ねている。２つの瓦はほぼ水平に真北に据えられていた。

ＳＡ１　ロクロピットの南側に柱穴４個からなる東西方向の柵を検出した。ロクロピットでの造瓦作業中に南からの直射日光を避け、粘土の乾燥を防ぐための塀とみられる。

遺物　遺物は、整理箱に約 500 箱出土した。瓦類がほとんどである。整理途中のため詳細は不明であるが、概観を述べたい。

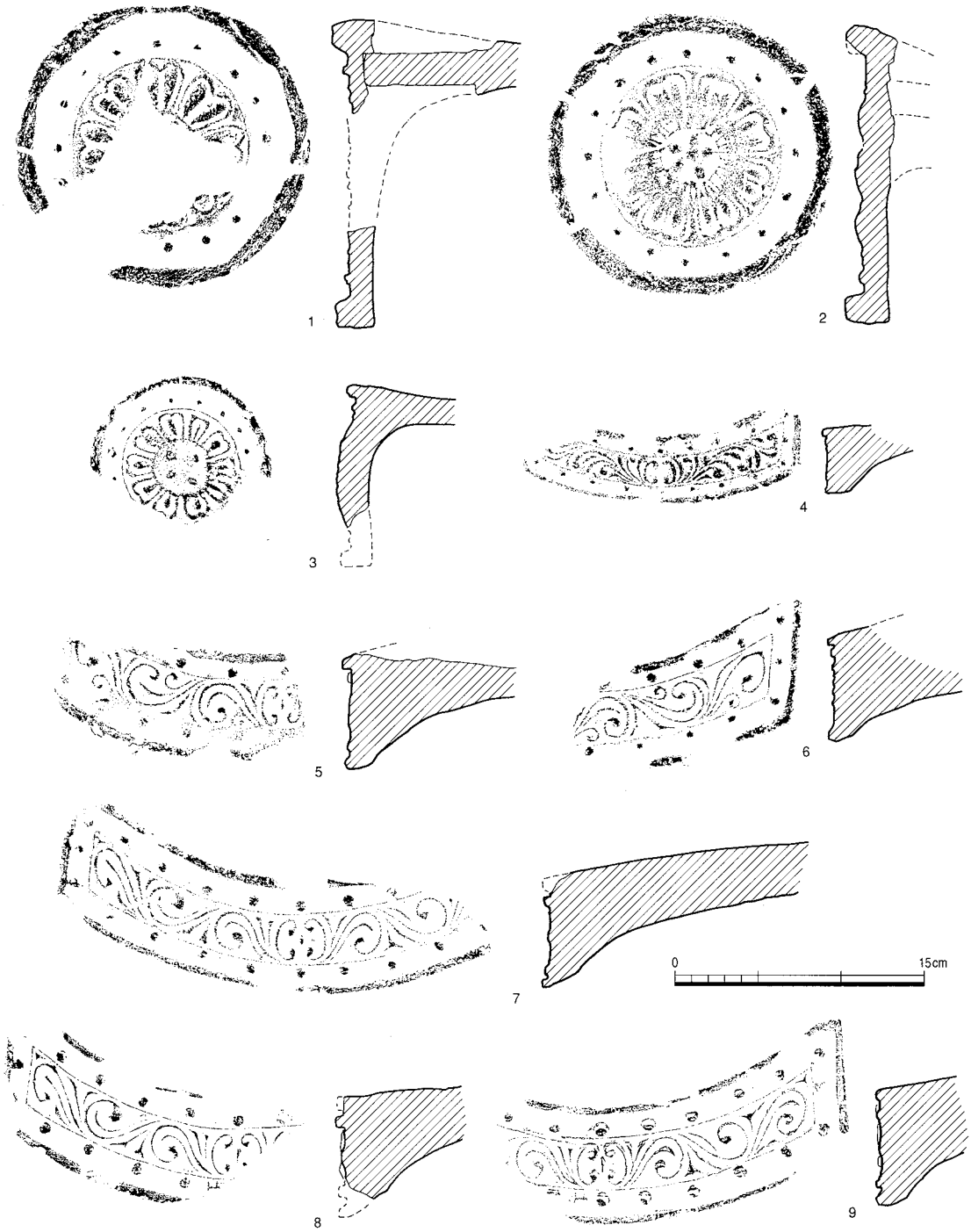


図69　出土軒瓦実測図（1：4）

瓦類は、丸・平瓦が大半を占め、軒丸・軒平瓦は合計約100点、少量の鴟尾片がある。軒丸瓦２種、軒平瓦２種、小型軒丸瓦１種、小型軒平瓦１種ある。軒丸瓦の接合方法は、２種ともに瓦当裏面上半に丸瓦を当て、浅く差し込み、粘土を補足して接合する。丸瓦部は、外面全体に縦方向のヘラケズリを行う。軒平瓦は、２種（５・６と７～９）ある。（８・９）は（７）の瓦笵下外区に「上」の文字を追刻したものである。技法、形態の特徴としては、曲線顎をもち、顎面の幅は約1.5cmのものと幅3.0cmのやや広いものがある。平瓦部凸面の調整方法は、縄叩きした後に縦方向のヘラケズリを行う。ヘラケズリは、瓦当面より15cmまでが特に丁寧であり、それ以外

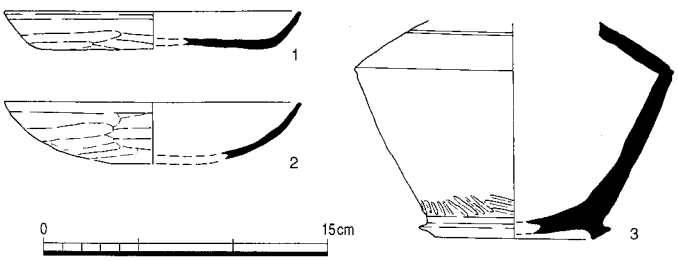


図70　ＳＫ４出土土器実測図（1：4）

の部分は粗く縄叩きの痕跡を残す。また断片的な資料の中に、平瓦部凸面に縦方向のヘラケズリを行うものもあり、凸面押圧技法により成形された軒平瓦がある。側面は縄叩き後に粗いヘラケズリを施すもの、ヘラケズリのみを行うものがある。量的には軒丸瓦が２割、軒平瓦が８割を占め、軒丸瓦では（２）が８割、軒平瓦は（７～９）が９割とそれぞれ大半を占める。出土した瓦は、全体に焼成が悪いものが多い。胎土には砂粒が多く、１㎝大の礫も含まれる。また、軒丸瓦（２）と軒平瓦（８・９）は、同笵瓦が栗栖野瓦窯跡[註1・2]から出土しており、笵の移動があったことがわかる。

ＳＫ４出土の土器は、その特徴から９世紀の第２四半期のものと考えられ、瓦窯操業時期の一端を示すものと思われる。

小結　今回、上ノ庄田瓦窯跡の工房部分をほぼ完全な形で調査することができた。工房は窯後方の台地上に立地し、その作業空間は溝によって独立しており、瓦を焼く窯とは分離されている。今回検出された建物は小規模なものであった。各地の瓦工房跡で確認されている建物は、当遺跡と同規模なものが多い。ただし、上人ヶ平遺跡や福岡県堂がへり遺跡のように大規模な建物が検出される例もあり、建物の規模は、瓦窯全体の規模や目的によって異なるものと思われる。建物の南西で検出されたＳＫ 20 は、他に類例がなくその性格は決めがたいが、機能的な用途が考えがたく、地鎮遺構の可能性がある。排水溝は、蟹ヶ坂瓦窯跡などの窯を馬蹄形にめぐる断面Ｖ字形の排水溝とはその規模や形状が異なる。当遺跡は、西から東へなだらかに傾斜した平坦な台地上に立地し、一定量の雨が降った場合に窯へ浸入する水量が大きくなるため、幅の広い溝が必要であったと考えられる。ロクロピットはその上部構造を復原するには至らないが、各地の造瓦工房跡で同様の遺構が確認されつつあり、今後の検討課題としたい。瓦窯の工房跡の調査は京都市内では初めてであり、当時の官営工房を考える上で重要な資料になると思われ、窯の調査成果と合わせてその実態を復原していきたい。　（南　孝雄・網　伸也）

（追記）1997 年７月 15 日から９月５日にかけて窯跡を中心とした発掘調査を行った。その結果、1995 年の試掘において５号窯とした焼土と瓦で埋まっている遺構[註3]は、ＳＤ１より古い段階の排水溝であることが判明し、ＳＤ 39 とした。また、４号窯はＳＤ 39 の延長であり窯でないことが判明した。また２号窯も窯壁などが確認されず窯でない可能性もあるが、これに関しては部分的な掘り下げしか行っておらず、窯の可能性も残るためここでは２号窯として扱った。

註１　吉村正親「栗栖野瓦窯跡の調査（その１）」『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』平成４年度
京都市文化観光局　1993 年

註２　『木村捷三郎収集瓦図録』
（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996 年　図版９－資料番号 41

註３　南　孝雄・前田義明「上ノ庄田瓦窯跡」『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所　1997 年

17　岩倉幡枝古窯跡群（図版２－１・28）

経過　左京区岩倉幡枝町 730-6、730-4 において店舗建設計画に伴い、京都市埋蔵文化財調査センターが 1995 年８月、および翌年５月に試掘調査を実施した。その結果、敷地北東部で土師器窯、北西部で建物、南部で灰層とそれぞれ推定される遺構痕跡が確認された。

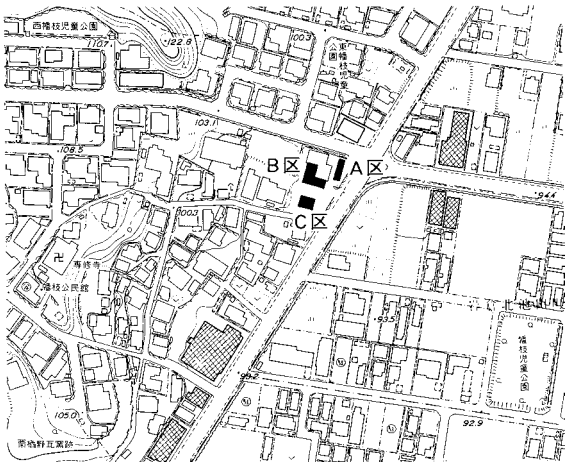


図 71　調査位置図（1 : 5,000）

建設予定地は『京都市遺跡地図台帳』（京都市文化市民局　1996 年）によると元稲荷窯跡（７世紀代の瓦陶兼業窯 :1963 年京都府教育委員会調査）の範囲南側部分に該当する。また『岩倉古窯跡群』（京都大学考古学研究会　1992 年）によると元稲荷窯跡は今回の調査地のすぐ西側に位置する。そうした状況からも元稲荷瓦窯跡の関連遺構の発見が期待された。調査は 1996 年 10 月 15 日から 11 月 15 日までの期間で実施した。

遺構・遺物　調査区の北西部の一番高い部分では、現地表下約 1.0 m、標高 95.5 m前後で遺構面を検出した。遺構面は南東方向に緩やかに傾斜し、調査地のほぼ中央部分で西側が高い北東から南西に走る段（比高差約 0.7 ～ 0.8 m）があり、調査区の南東端では標高約 93.8 mとなる。段差が形成された時期は中世に入って以降の可能性が高い。この段差を埋める土層に 16 世紀代の遺物が含まれていた。平坦化するのは江戸時代に入ってからとみられる。

Ｃ区で７世紀代の平瓦で護岸された溝（暗渠であった可能性もある）、平安時代の遺物を含む溝状の遺構を検出した。Ｂ区では 16 世紀代半ばと考えられる土師器焼成窯の一部とみられる焼土塊、焼土壙、多量の土師器皿類を検出した。Ａ区で 17 世紀とみられる焼土壙などを検出した。坂東善平氏によって発見された土師器窯については、『古代学研究』第 34 号に「京都府幡枝町発見の土師器窯址」の報告があり、その内容と符合する点が多い。これと同類の遺構、遺物を発見したものと思われる。

小結　幡枝の地は、古くから瓦、土器の生産地として知られているが、その生産活動に従事した人々の実態は明らかになってはいない。今回の調査ではその一端を明らかにする資料が得られたものと考えている。　（鈴木廣司・上村憲章）

『京都市内遺跡発掘調査概報』平成８年度　1997 年報告

18　北野廃寺（図版１・29）

経過　今回の調査地点は、以前検出した瓦積み建物基壇の北側に位置し、寺院経営に関わる遺構の検出が期待できた。事前に試掘調査を行ったところ、古代から中世にかけての遺構面が良好に遺存していることが判明したため、発掘調査を実施することとなった。

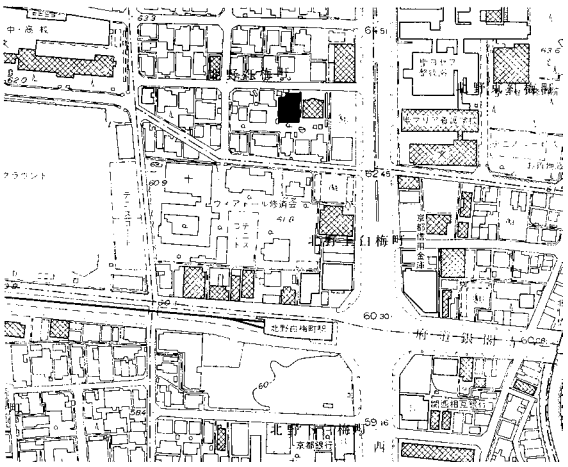


図 72　調査位置図（1 : 5,000）

調査した遺構面は大きく中世と古代に分けられる。上層の中世の遺構面では、布掘り掘形に小礎石を並べた塀と建物の一部を検出している。時期的には 15 世紀後半のもので、寺院廃絶後の屋敷跡と考えられる。また下層では、掘立柱建物を中心とする７世紀から９世紀にかけての多くの遺構を検出している。これらは、北野廃寺（常住寺跡）に関係する遺構群である。

遺構・遺物　下層遺構の概要を簡単に述べる。奈良時代以前と考えられる遺構は、竪穴住居１棟、掘立柱建物２棟、南北溝１条である。７世紀後半では掘立柱建物はみられず、竪穴住居ＳＩ42 が営まれていた。８世紀に入ると寺院地北辺に掘立柱建物ＳＢ１・２が建てられるようになる。平安時代の遺構は掘立柱建物５棟および単独の掘立柱穴１基、土壙１基である。特に、調査区東端で検出した掘立柱建物ＳＢ３は南北に並ぶ竈を伴っており、柱列を５間分検出している。平安遷都に伴い、北野廃寺は常住寺として再整備される。竈をもつ掘立柱建物は、寺院地北辺の付属雑舎の性格を示唆している。同様の施設は長岡京左京四条三坊三町でも検出しており、長岡京内に所在した川原寺の大衆院関係の竈屋と推定されている。今回検出した建物も大衆院（政所院）の一部を検出したと考えられる。また、この地区が僧侶の日常生活に関わる性格をもっていたことは、９世紀後半でも同じである。間仕切りがある南北棟ＳＢ４と、倉と考えられる南北２間×東西３間の総柱建物ＳＢ５を検出しており、常住寺の付属雑舎の変遷を部分的ではあるが明らかにできたといえよう。出土遺物は土器類がほとんどである。奈良時代の遺物は南北溝ＳＤ 150 から土師器や須恵器が多く出土した。遺物全体の様相として甕などの煮沸器具が多いことが特徴的である。また、特筆すべき点として、製塩土器片がＳＢ３の周辺から多量に出土している。

小結　今回の調査で北野廃寺に関連する奈良時代から平安時代にかけての寺域北辺部の掘立柱建物群を検出したことは大きな成果である。これらの施設がいかなる性格をもっていたかは明らかでないが､今後の調査において寺院の付属雑舎群の建物配置を明らかにしていく必要があろう。畿内における古代寺院の研究は今まで伽藍地の究明に力が注がれていた観があり、寺院地としての付属雑舎の様相はあまり省みられてこなかった。北山背の古代寺院は伽藍地の様相も不明な寺院が多いが、今後の課題として寺院地全体の考古学的解明が必要となろう。　（網　伸也）

『京都市内遺跡発掘調査概報』平成８年度　1997 年報告

19　京都大学構内遺跡（図版1・30）

経過　調査地は、京都大学西部構内遺跡の南端にある。北東から南西にかけて緩やかに下る斜面上に立地し、現地表の標高は約53ｍある。

当地は、鎌倉時代の公家西園寺公経の別業「吉田泉殿」（1227年造営）の旧地とされ、江戸時代には庭園遺構の一部が残存していたという記録がある[註1]。調査の目的の第一は、この吉田泉殿に関連する遺構を検出することに置いた。また、調査地の西に村上天皇の中宮藤原安子の火葬塚とされる盛土が、調査地の南に醍醐天皇孫慶頼王墓とされる盛土が存在する。調査の目的の第二は、これらの盛土の性格を知る上での手がかりを得ることに置いた。調査地付近は、地形条件と周辺の調査成果から、旧高野川の氾濫原内と考えられ、平安時代をさかのぼる遺構は残存していないことも予見できた。既往の調査は、1992年に調査地の北西約50ｍの地点で、京都工芸繊維大学吉田団地遺跡調査委員会によって実施された発掘調査[註2]が1件あるのみである。この調査では吉田泉殿に関連する遺構は検出されていない。

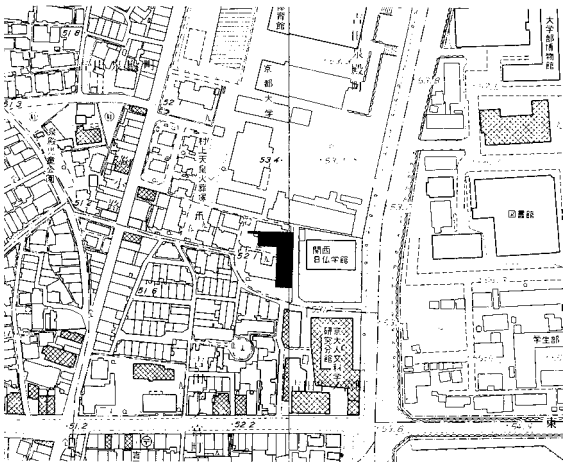


図73　調査位置図（1：5,000）

調査は1996年11月18日に開始した。現代の盛土層、明治時代の盛土層および幕末の耕作土層を重機で除去し、それ以下は人力で掘り下げた。以下5面にわたる調査を順次実施した。最終面である7層上面では、平安時代後期の武士の館跡と思われる遺構を検出した。検出遺構の重要性を考え、1997年3月7日に広報発表を行い、翌8日に現地説明会を実施した。現地説明会では、179名の参加者があった。3月18日に現場作業を終了した。

なお、遺構平面図は手描きで作成し、第5面検出の石積み護岸の立面図は写真測量で作成した。

遺構　基本層序は以下のとおり。

現代盛土層（≧15cm）および旧京都高等工芸学校盛土層（≧80cm）下に7層を認める。1層（黒色泥砂層、≧40cm）は幕末から明治時代初期にかけての、畑の耕作土である。2層（黒褐色泥砂層、≧15cm）は江戸時代中期（18世紀）の畑の耕作土層である。調査区南半のみに残り、上面を洪水砂礫層が覆う。3層（暗オリーブ褐色～オリーブ褐色泥砂層、≧50cm）は室町時代後期から江戸時代前期（15～17世紀）の畑の耕作土層である。3a～3b層に細分できるが、各層が耕作溝の密集から成るため、それぞれの細かな帰属時期は不明である。3a層と3b層の間に洪水砂礫層を認める。4層（黄褐色砂泥層、≧10cm）は室町時代前半の整地層である。比較的精良で均質な土で、薄く調査区全体を覆う。上面に洪水砂礫層が残る部分がある。5層（暗灰黄色泥砂～暗褐色砂礫層、≧30cm）は鎌倉時代の整地層である。巨礫を多量に含む5a層と、礫が少なく土器細片を多量に含む5b層とに細分できる。5b層の上に5a層が乗る部分が多いが、両層は必ずしも先後の関係にあるわけではない。この層は、調査区の西部では、明瞭な段を介して道路状の

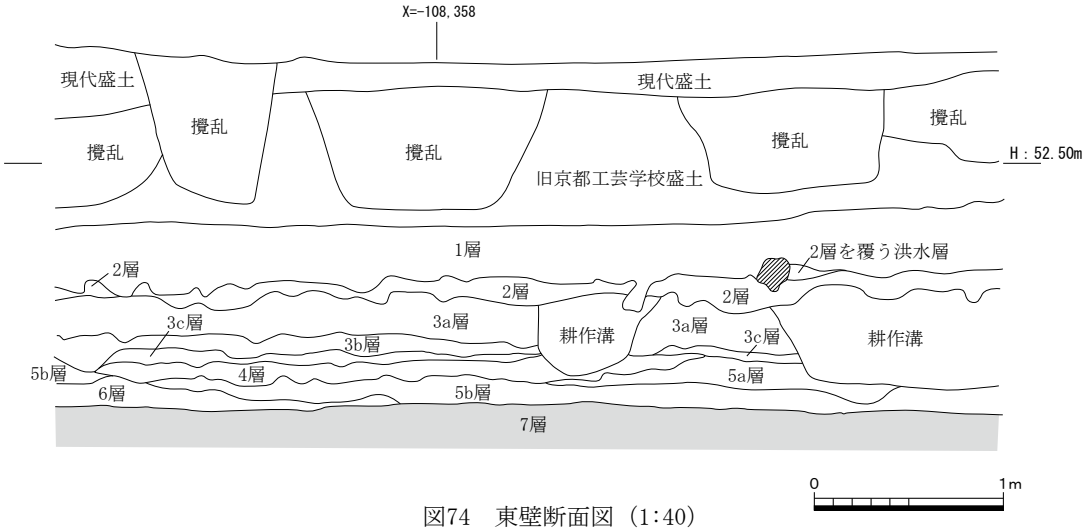


図74　東壁断面図（1:40）

高まりを形成する。６層（灰オリーブ色シルト～細粒砂層、≧ 20cm）は下層の旧高野川氾濫原の礫層上部に堆積した土壌化した自然堆積層で、局所的にしか残存しない。７層（砂礫～礫層、＞ 60cm）は旧高野川河道もしくは氾濫原（川原）の堆積物で、本遺跡の基盤を形成する。平安時代中期（10 世紀）の遺物を包含する。平面的な調査は３層上面、３層を少し下げた面、４層上面、５層上面、７層上面で行った。以下、検出した遺構を、各時代ごと概説する。

３層上面から４層上面の各面で、室町時代後期（15 世紀後半）から明治時代（19 世紀後半）にかけての畑の耕作溝を、調査区全面で検出した。溝の方向は、北で東に約 15° 振る。調査区の西部には鎌倉時代に形成された道路状の高まりがあるが、この上にも３層が薄く覆い耕作が及んでいたことがわかる。18 世紀に埋没する石組み溝１は道路状の高まりの東限に一致し、前代の区画が踏襲されている。４層上面では秩序だって分布しない柱穴を数基検出している。４層は道路状遺構の上にも及んでおり、高低差約 20cmの明瞭な段を形成している。

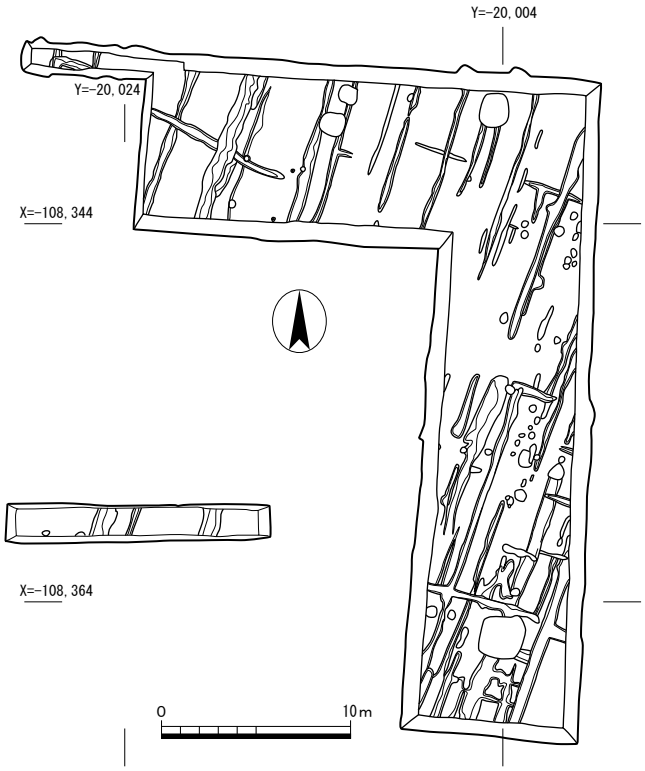


図75　4層上面遺構平面図（1:400）

５層上面で室町時代前期（14 世紀後半から 15 世紀前半）の南北溝、土器埋納遺構および不定形な土壙数基を検出した。また、７層上面で検出した掘立柱建物２棟（建物１・２）、柵（柱列６）などはこの面で成立する遺構である。建物１は２間×３間の方形の平面形、建物２は３間×３間の方形の平面形の掘立柱建物で両建物は近接して並ぶ。土器埋納遺

構は完形の筒形瓦質土器を埋納したもので、建物１に伴う。柵は建物２に取り付く。溝 184 は建物２の東側から南に延びる。両建物の西側には道路状遺構の高まりが南北に延びる。道路状遺構の上面には部分的に路面状の礫敷がみられるが、轍や側溝がないこと、幅が 14 ｍに及ぶこと、室町時代後期には耕地化し継続性がないことなどから、これを道路と断定するには至らなかった。しかし、建物１・２との位置関係は、この遺構を道路とみなしても矛盾はない。これらの遺構は北で東に約 15° 振る。この方位は上層の室町時代後期以降の畑の耕作溝と同じである。

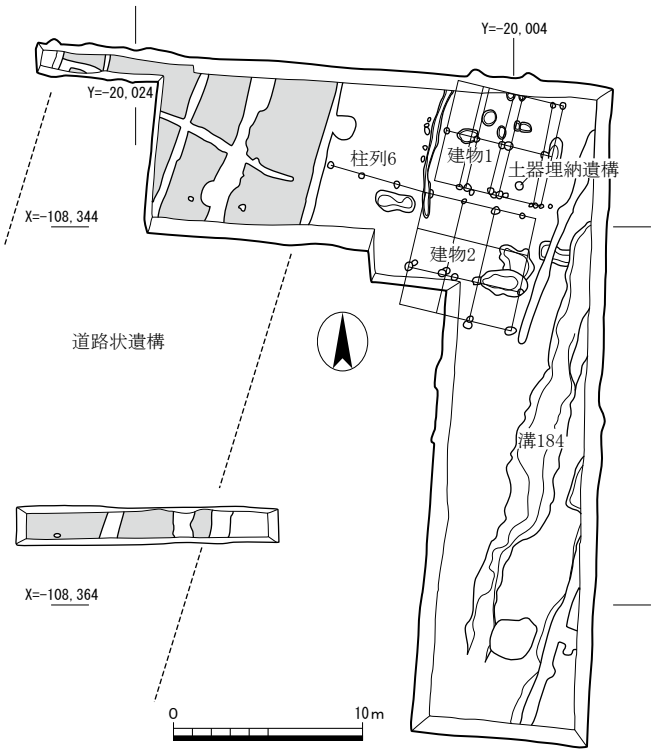


図76　5層上面遺構平面図（1:400）

７層上面で溝と塀で囲われた平安時代後期（12 世紀末）の屋敷跡を検出した。部分的に残る６層上面で成立する遺構群である。遺構は屋敷を囲う溝（溝 253・438）、柱列３列（柱列３～５）、掘立柱建物４棟（建物３～６）、井戸５基、区画溝（溝 232）などである。溝 253 は屋敷地の北辺を囲う溝で、屋敷側の南斜面を河原石を積んで護岸する。検出した中央部を約３ｍ掘り残し、両側面に南斜面と同様の護岸を施し出入口とする。溝 438 は溝 253 の西端に取り付き南西方向に延びる。これが屋敷地の西辺を区画するものと思われる。柱列３は溝 253 の南肩に近接して東西に延びる。屋敷を囲う板塀と考える。

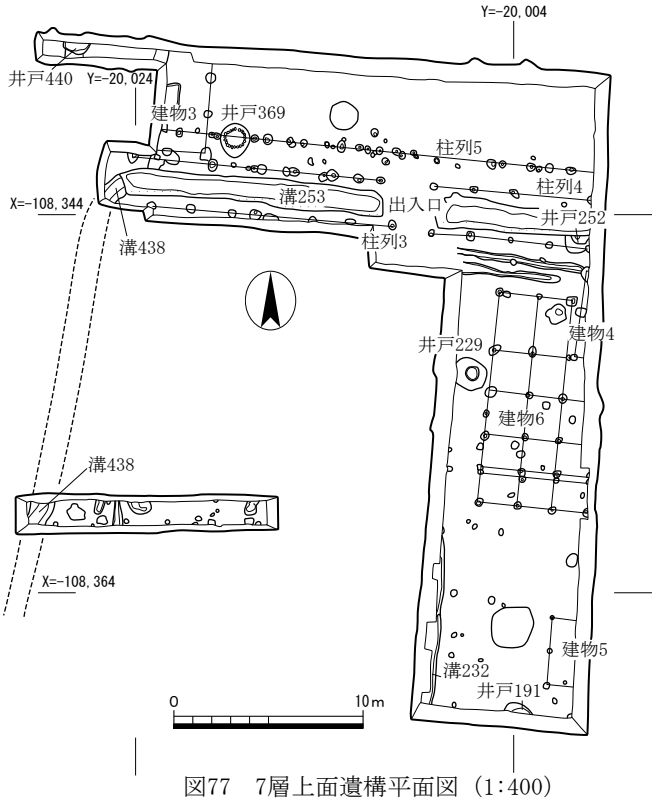


図77　7層上面遺構平面図（1:400）

柱列４は溝 253 の北肩に接して東西に延びる。柱列５は柱列４の北側に平行して東西に延び、両柱列間の幅は約 1.5 ｍある。柱列４と５は、２時期以上の建て替えがあり、軍事的緊張時の仮設防御柵と考える。建物６は、南北２間×東西２間以上の身舎の西と北に庇を有し、庇の北にさらに２間×２間の角屋が取り付く。角屋部分は別棟の可能性もある。直径約 50㎝の柱穴掘形に

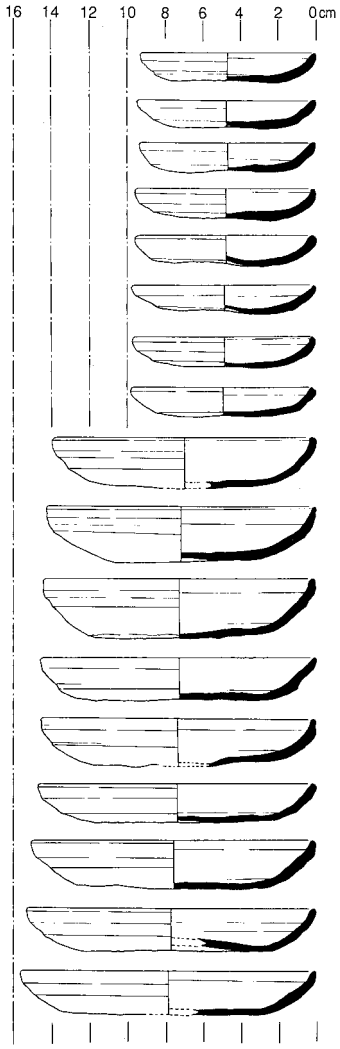


図 78　土器溜 401 出土土器実測図
(1 : 4)

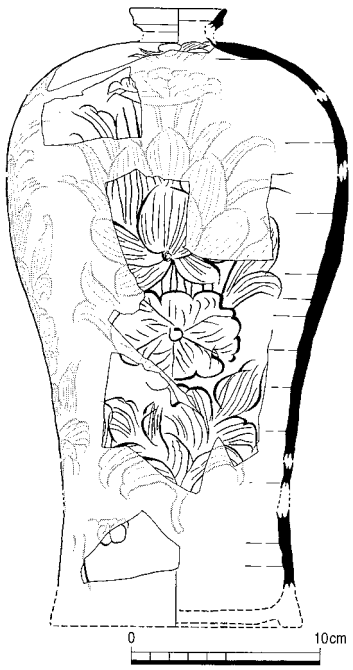


図 79　高麗青磁梅瓶実測図
(1 : 4)

一辺約 14cmの角柱の柱痕を認める。位置や規模、構造などから、この屋敷の中心的な建物ではなく副屋と考える。建物３～５は建物６などと同様の方向の柱列で、建物として復原したが規模や構造は不明である。いずれも雑舎的な建物と考える。井戸は、屋敷の内側に２基（井戸 191・229)、屋敷の外側に２基（井戸 369・440)、溝 253 と切り合い溝に先行するもの１基（井戸 252）がある。井戸 369 が石組みである他は、すべて素掘りである。いずれも底部に円形の水溜を有し、曲物が用いられていたものと思われる。井戸 369・440 は、建物３とともに溝と塀で区画された外側にあるが、この屋敷に付属する施設と考える。溝 232 は南北に延びる溝で、屋敷内部の空間を区画する溝もしくは塀の布掘り掘形と考える。これらの遺構は、いずれも北で東に約５°振る方位で、上層の遺構よりも振り幅が小さい。この屋敷は、検出した層位と出土した土器群から、12 世紀末に属したものとみられる。建物を構成する柱穴に重なりがないことから、存続期間は短かったものと考える。

遺物　土器類が大半を占め、瓦類は少ない。木器は出土していない。江戸時代中期以降を除くと、遺物の主体は土師器皿で、これ以外には平安時代後期から鎌倉時代の輸入陶磁器がある。瓦器椀は少ない。１層から３層までは耕作土であるため、平安時代から室町時代の遺物も多く包含する。３層からは鉄滓、鞴羽口などの鋳造関連遺物や鉄釘が出土しているが、これらは、５層上面・７層上面の遺構に伴う可能性がある。とりわけ鉄釘は約 170 点出土しており、掘立柱建物や塀に伴う可能性が高い。以下、特記すべき遺物について述べる。

江戸時代の遺物としては、「乾山省書」の銘がある角絵皿破片が出土している。

室町時代前半の遺物としては、五輪塔部材がある。第４面の溝 184 は４層で覆われるが、その前段階の作業として拳大から人頭大の礫で埋められており、この中から花崗岩製の五輪塔の空輪・風輪・地輪の各部が出土している。

平安時代後期の遺物としては、溝 253 の埋土中で検出した土器溜 401 の一括資料がある。また、井戸 369 も、廃絶後に土器溜として利用されており、良好な一括資料である。両資料はほぼ全部が土師器皿で、完形もしくは完形に近いものも多い。そ

れぞれ遺物整理箱に1箱ずつある。土器溜401は小森・上村編年[註2]の平安京Ⅴ期新（12世紀後半）段階、井戸369は同編年の平安京Ⅵ期古（12世紀後半から13世紀初）段階の資料である。輸入陶磁器としては、中国華南産の白磁水注、高麗青磁梅瓶がある。白磁水注は注口部と板状の把手部の破片で、注口部には獣面を描く。高麗青磁梅瓶は、体部の全面に蓮花紋を片切彫の技法で線刻した1個体である。いずれも12世紀代の製品である。

また、5層から、縄文時代の打製石斧1点、縄文時代から弥生時代のサヌカイト製のスクレーパー状の石器1点が出土している。

小結　遺跡の基盤をなす7層は10世紀代の遺物を包含し、平安時代中期には当地は旧高野川の川原もしくは河道であったことが確認できた。したがって、調査地の西に存在する藤原安子火葬塚とされる盛土は､安子没年の康保元年（964）には存在し得ず､安子の火葬塚ではあり得ない。調査地の南にある醍醐天皇孫慶頼王墓についても同様である。

11、12世紀を通じて当地は徐々に植生の侵入を許し、陸化したものと思われる。12世紀の後半には7層上面で検出した屋敷が構えられる。この屋敷は、以下に列挙する理由で武士の屋敷跡と考える。

①検出した建物は細い柱を用いた草葺か板葺の簡素な住宅で、貴族層の住居や関連施設とは考えにくいこと。

②一辺30ｍを越える規模の範囲を占有し、一般農民層の屋敷とは考えにくいこと。

③輸入陶磁器が多いこと、土師器皿の大量投棄がみられることから、相応の経済力を有していた階層の屋敷であること。

④屋敷の外回りに防御柵的な柱列があること。

⑤開発領主的な地方武士の館と考えられている初期の中世居館と、規模と構造が似ること。

⑥武士は院政期に院の権力と結びついて力を伸ばすが、この屋敷が院の空間である白河に近接していること。旧高野川川原の荒地にも係わらず屋敷を構えており、平安京内より鴨東に活動の拠点を求めている人物の屋敷であると思われること。

⑦この屋敷が、武士の置かれた環境が大きく変化する治承・寿永の内乱期から鎌倉幕府成立期に廃絶していると考えられること。

さらに、⑤の要素を重視すれば、院や権門に軍事的な役割を期待され任官された地方武士層の京屋敷の可能性が考えられる。また、溝253の石積み護岸と鳥羽離宮や六勝寺の大建築にみられる玉石積み地業との類似性を積極的に評価すれば、院関連の土木工事に徴発された労働力を動員できた人物の屋敷と考えることも可能である。鎌倉で定型化をみる武家屋敷と初期中世居館の間を埋める遺構としての評価もできよう。

吉田泉殿に直接関連する遺構は検出できなかったが、鎌倉時代に大規模な整地（5層）を行っていることを明らかにした。この整地層は、京都工繊大調査地点にも認められるもので調査地付近一帯に広がることは明らかである。吉田泉殿造営時の周辺整備に伴う整地と考える。この整地時に調査区西部に形成された道路状遺構の性格は明確にできなかったが、人為的に作られた高ま

りであるため、何らかの意味付けが必要であろう。今後の課題である。吉田泉殿は、本調査地の北側一帯、現京都大学西部講堂から体育館付近に存在したものと考える。また、５層上面で検出した建物１・２は、室町時代前半の一般農民層の住居と考える

室町時代後半から明治時代に京都高等工芸学校が建設されるまで、継続的に耕地が営まれることも明らかになった。

調査に際しては、清水芳裕、千葉豊、伊藤淳史の各氏をはじめとする京都大学埋蔵文化財研究センターの皆さんにご指導を頂いた。また、高麗青磁梅瓶については、伊藤郁太郎、出川哲郎、野村恵子（以上、大阪市立東洋陶磁美術館）、金巴望（財団法人高麗美術館）の各氏にご教示頂いた。

（内田好昭）

註１　『山州名跡志』巻之四　1711 年、および『山城名勝志』巻十三　1711 年
註２　京都工芸繊維大学吉田団地遺跡調査会編
『京都工芸繊維大学構内遺跡発掘調査報告　京都大学西部構内遺跡』　京都工芸繊維大学　1993 年
註３　小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号
（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996 年

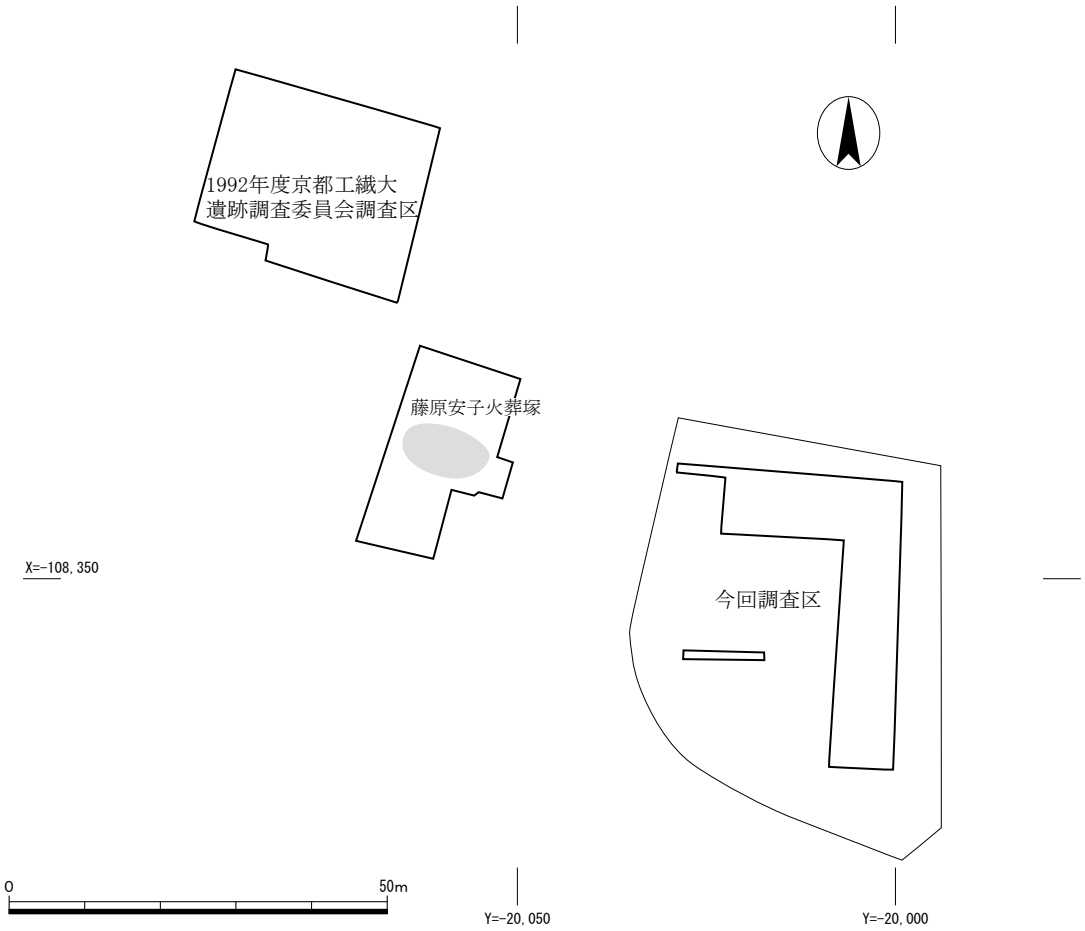


図80　調査区配置図（1:1000）

20　法性寺跡・鳥辺野跡・正覚寺跡（図版１・31）

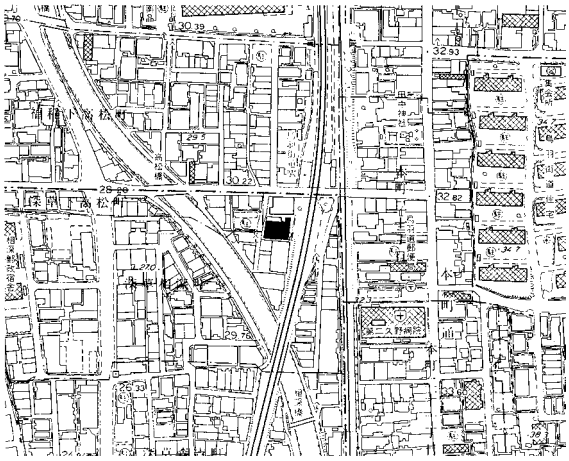


図 81　調査位置図（1 : 5,000）

経過　新十条通建設に伴い、1996 年 11 月に試掘調査を実施したところ、弥生時代の流路遺構を検出したため、遺構の広がりを知る目的で、1997 年１月から２月にかけて発掘調査を実施した。遺構の存在が予想される敷地南半に東西 17 m、南北 10 m（一部 14 mに拡張）の調査区を設定した。想定位置で流路遺構を検出し、まず流路遺構が埋没した上面で、鎌倉時代（13 世紀）に属する東西溝や土壙を検出した（第１面）。ついで流路遺構（流路 23）の掘り下げを進めた。流路 23 を掘り上げた後、全景写真を撮影し、実測図を作成した（第２面）。そして、壁面に沿って断ち割りを行い、土層断面図を作成して、現場での作業を終了した。

遺構　基本層序 : 調査区の南半部には弥生時代の遺物を含む流路 23 が存在し、堆積層は南ほど厚い。全体の層序は、上から現代盛土層が 35㎝、旧耕作土層が 50㎝ある。旧耕作土層は北半が水田耕作土層で厚さ 25㎝あるが、南半は厚さ 60㎝に達する箇所もある。南半は用水の関係で畑に利用されたとみられる。北半では旧耕作土層下が地山の砂礫層となるが、流路 23 部分では最大 1.4 mにわたって流路堆積層がある。

第１面 : 流路 23 を整地した暗褐色砂泥層（図 82 の１）上面で検出した遺構群で、東西溝１条と土壙数基、東西・南北方向の小溝がある。東西溝と土壙は鎌倉時代、小溝は近世以降の耕作に伴うものである。東西溝は、幅 0.8 m、深さ 0.3 mある。南肩は２段に落ちる。層位の中程に砂層がみられ、流水のあったことがわかる。方位はほぼ真東西である。土壙は性格が不明である。ともに土師器や瓦器などが出土した。

第２面 : 流路 23 を完掘した状態の遺構面（図 82）で、南東部に流路 23 があり、その北・西側には落込 24・25・31、柱穴 32・33 がある。

流路 23 は北東から南西に流出する流路遺構である。調査区ではその北西岸を検出したが、流路の中心は調査区の東側にあり、新旧２時期がある。古期を流路 23 Ｂとする。標高 29.0 mの等高線がその北西肩である。底部付近には、にぶい黄褐色泥土層（図 82 の３、無遺物）が堆積し、上に黒褐色泥土層（２）が堆積する。（２）層は弥生土器を包含する。

新期を流路 23 Ａとする。これは流路Ｂの（２）層を切って成立する。その北西肩は流路Ｂの北西肩の約１m内側にある。流路Ａの規模は、幅７m以上あり、深さは南東隅で確認した地山面までが、検出面から 1.4 m、現地表下 2.1 mある。等高線に示す標高 28.2 mで囲まれた低い部分が底とみられるが、南東隅にはさらに深い部分も存在するため、正確な規模と形状は明らかでない。流路 23 Ａには砂層の堆積が顕著である。その砂層は最低２層（５・７）認められ、流水・

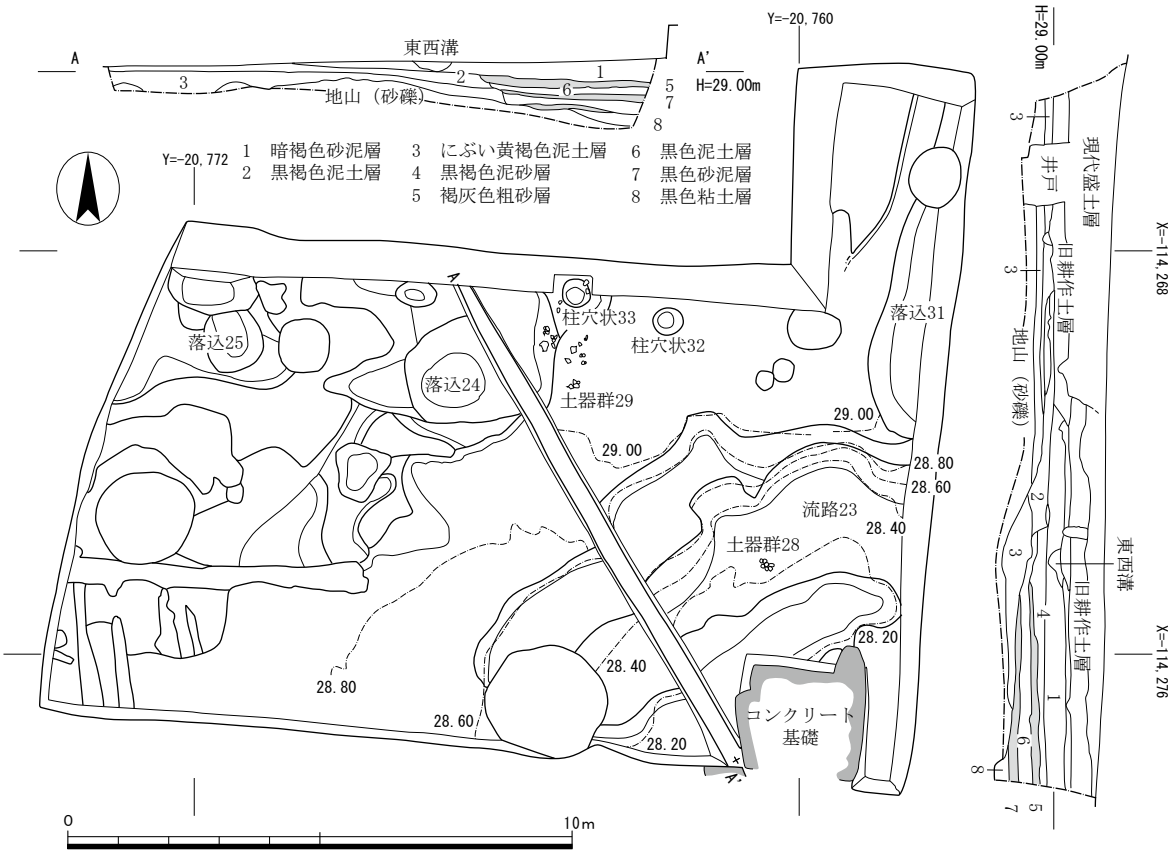


図82　遺構平面図（1:150）

帯水の繰り返しがあったことがわかる。黒褐色砂泥層（４）が堆積した後、暗褐色砂泥層（１）で完全に覆われる。この（１）層は堅く締まった砂泥層で、弥生土器とともに平安時代前期の遺物を含む。平安時代になって周辺が再開発される際に入れられた整地層とみてよい。この（１）層と（４）層との間には、砂層が帯状に堆積していた。これは幅 0.5 m、厚さ 0.15 mあり、西南西方向に延びる。流路 23 Aが埋没して以降に生じた流れの痕跡とみられる。なお、流路 23 では土器の密集する箇所が散在的にあった。比較的まとまりのある箇所を「土器群 28」「土器群 29」とした。土器群 28 は流路 23 Aの（５）層に該当し、壷と器台が出土した。土器群 29 は流路 23 Bの（２）層に該当し、壷と甕の比較的大きな破片が出土した。

流路 23 の北側では、落込 24・25・31、柱穴状 32・33 を検出した。落込 24・25・31 は不定形な形状の土壙状の遺構である。深さは、落込 24 が 0.65 m、落込 25 が 0.55 m、落込 31 が 0.4 mある。すべて遺物は含まない。柱穴 32・33 はともに直径 0.7 m、深さ 0.4 mの規模をもつ。両者間の距離は心々で2.4 mある。柱の痕跡はともにない。内部から弥生土器の比較的大きな破片が出土した。

遺物　整理箱で９箱出土した。弥生土器が大半で、他に古墳時代・飛鳥時代・平安時代・鎌倉時代のものがある。図 83 に掲載したものは、流路 23（２・６・10・12 ～ 16・18 ～ 23）、流路 23 上の（１）層（９・11・24・28 ～ 32）、土器群 28（25・26）、土器群 29（１・３・７・17）、柱穴 32（８）、柱穴 33（４・５・27）、第１面東西溝（33・34）より出土したものである。弥生土器は流路 23 と柱穴 32・33 から主に出土した。中期末（畿内第Ⅳ様式）に属するものが主体を

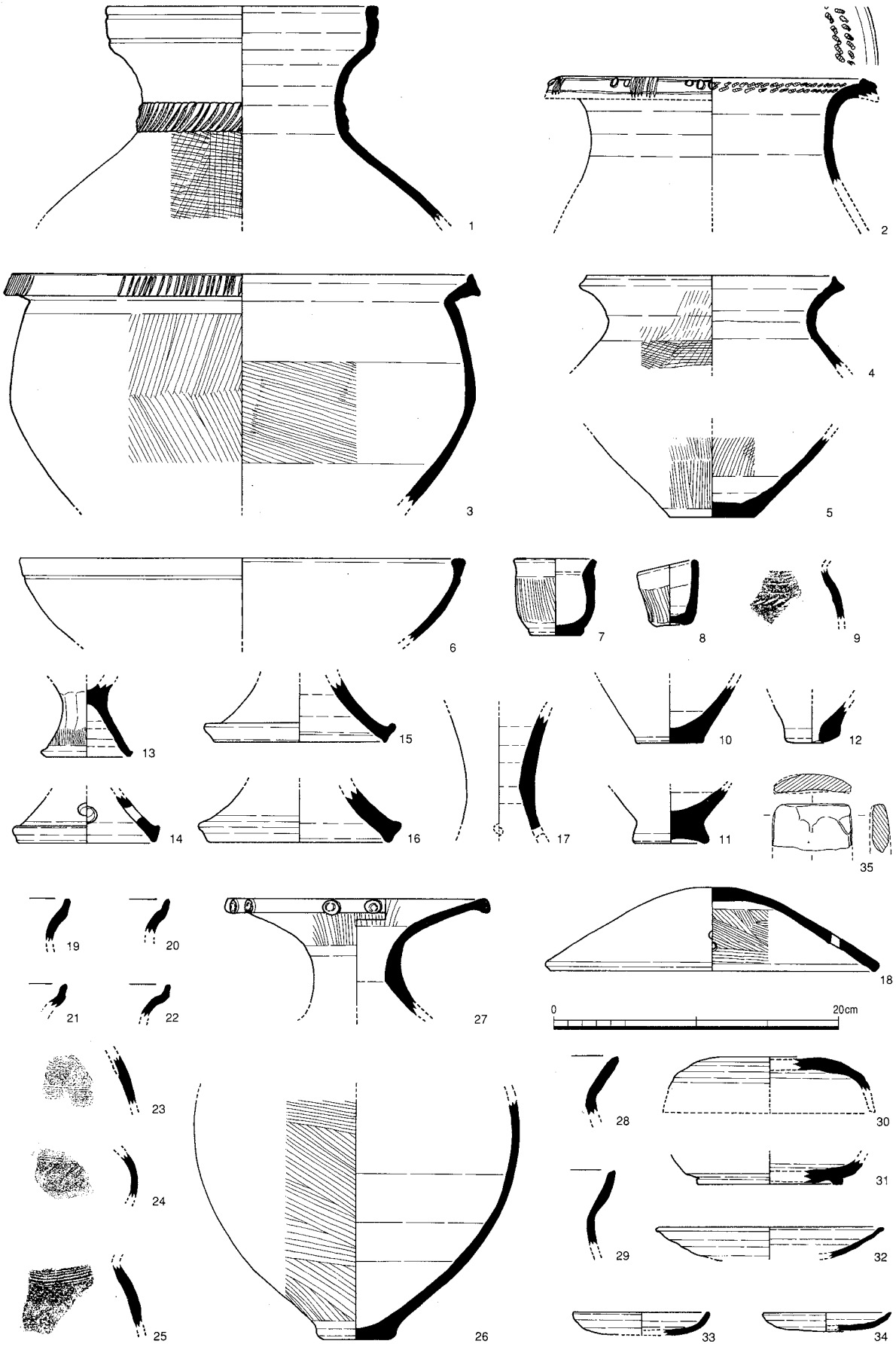


図 83　出土遺物実測図（1 : 4）

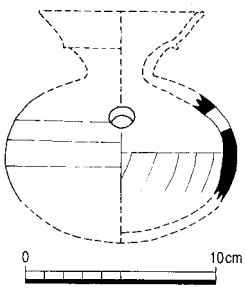


図84　流路23出土須恵器甕実測図（1：4）

なす。壷（1・2）、小型壷（7・8）、甕（3～5、9～12）、鉢（6・13）、高杯（14～16）、器台（17）、蓋（18）などがある。石斧（35）は扁平片刃石斧とみられるが二次加工されている。後期（畿内第Ⅴ様式）に属するものには、壷（26）、甕（19～25）、器台（27）がある。

図84に示した甕は初期須恵器であり、古墳時代中期に属する。流路23の（2）層から出土した。

古墳時代後期では土師器甕（28・29）、須恵器杯蓋（30）がある。28は流路23上の（1）層から、29は（1）層と流路23A（4）層の間に堆積した砂層から出土した。ともに流路の埋没年代を知る資料である。

平安時代前期では須恵器杯（31）と灰釉陶器皿（32）がある。

鎌倉時代のものは（1）層上面で検出した遺構群から出土した。土師器皿（33・34）を図示したが、他はすべて小片である。

小結　第1面とした遺構群は13世紀に属する。東福寺の造営時期に該当するが、寺院との具体的な関係は不明である。

第2面では弥生時代・古墳時代中期の遺物を含む流路23を調査した。流路23には2時期の重複がある。新期の流路23A、古期の流路23Bはともに畿内第Ⅳ様式土器を主体に古墳時代須恵器をわずかに含む。流路23Aが埋没した上に堆積した砂層には、古墳時代後期以降の土器が含まれ、平安時代前期になって完全に整地される。流路23が平安時代前期に埋められていることは、平安京の造営によって東山の山麓が開発されたことと無関係ではなかろう。しかし整地された上部では平安時代前期・中期の遺構はみられなかった。

調査地周辺では、昭和61・62年度に立会調査が実施されており、法性寺跡、正覚寺跡の推定がなされるとともに、弥生時代の遺構や包含層が散在的に検出されている[註]。本遺跡もそれら弥生遺跡の一つに位置づけられるものである。今回の調査によって、不明な点の多かった周辺の弥生遺跡について、良好な資料が得られた意義は大きい。定される遺跡の中心は平安時代に法性寺、鎌倉時代には東福寺が建てられた扇状地上に求められる。今回調査した地点はその南西側にあたるため、検出した流路23は、東福寺が立地する扇状地の南側の水を集めて鴨川に達する流路とみられる。出土した弥生土器の状態では、調査地に近接して遺跡の中心部が存在する可能性が極めて高い。本調査地の北東側での開発には特に注意が必要なことを強調しておきたい。

今回調査した弥生時代の遺跡は、今後その所在地をとって「深草相深町遺跡」と呼称するのが妥当である。　（丸川義広・布川豊治）

註　吉村正親「法性寺跡・正覚寺跡」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1991年

21　下三栖遺跡（図版２－３・32・33）

経過　今調査は、共同溝埋設工事に伴い実施した試掘調査の結果、遺跡の存在が確認されたのを受けて行われた。調査地は伏見丘陵の西にあり、北を鴨川、西を桂川、南を宇治川に画され、旧河川の自然堤防であった微高地に位置する。微高地上では早くから集落が営まれており、中世の下三栖城の比定地にも隣接している。

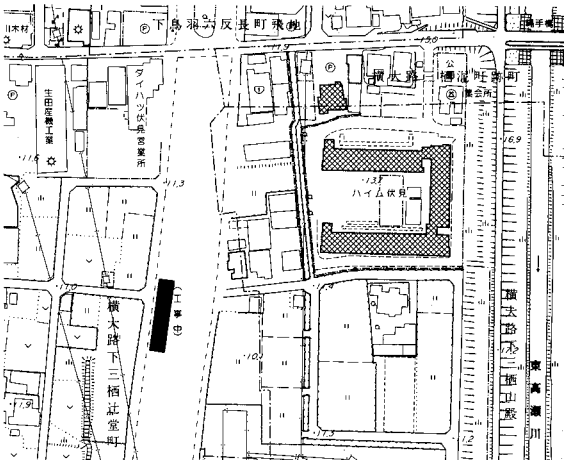


図85　調査位置図（1：5,000）

調査は、重機によって表土を除去した後、中世の面から開始した。トレンチ北側の現代用水路より北では、中世・近世の溝を検出した。南側については、古代から中世（７～13世紀）までの遺構を検出し、建物・溝・井戸・墓・竪穴住居などを確認した。下層の調査は、トレンチ中央に重機によって断ち割りを入れ、断面観察を行った。断面から弥生時代の遺物を採集した。また、平面でも確認していた噴砂の噴出状況の観察と、土層の転写も行った。

遺構　基本層序は、盛土・近世耕作土層の下に第１面のオリーブ褐色砂泥層（５Ｙ 6/2）、その下に第２面の暗灰黄色砂泥層（2.5 Ｙ 5/2）となる。第３面は２層に分けられた。整地層の暗灰黄色砂泥層（2.5 Ｙ 4/1）と流れ堆積層の灰色砂泥層（7.5 Ｙ 6/1）である。

第１面は鎌倉時代（13世紀中期から後期）と考えられる建物１棟と、それに伴う２条の溝（ＳＤ３・11）、坪境の溝（ＳＤ２）、井戸（ＳＥ12）、土壙（ＳＫ５・66）などを検出した。これらの他に噴砂の痕跡も検出した。噴砂は、ＳＤ３の埋土を切る形でみられたが、時期を限定するまでには至らなかった。

図86　噴砂断面（東から）

ＳＤ２は東西方向の溝で、３時期に分かれる。溝は北側から徐々に埋まり、近世まで存続していた。この溝は、紀伊郡条里の坪境に比定できる。

ＳＤ３・11は、ともに屋敷地の北限・南限を示す溝である。ＳＤ11は、トレンチ南西で南に曲がる。また溝の南側部分が特に深くなっており、水はここを流れていたと考えられる。

建物は、ＳＤ３・11の間で検出した柱穴群から約75㎡の建物を想定した。建物南東隅はＳＥ12の

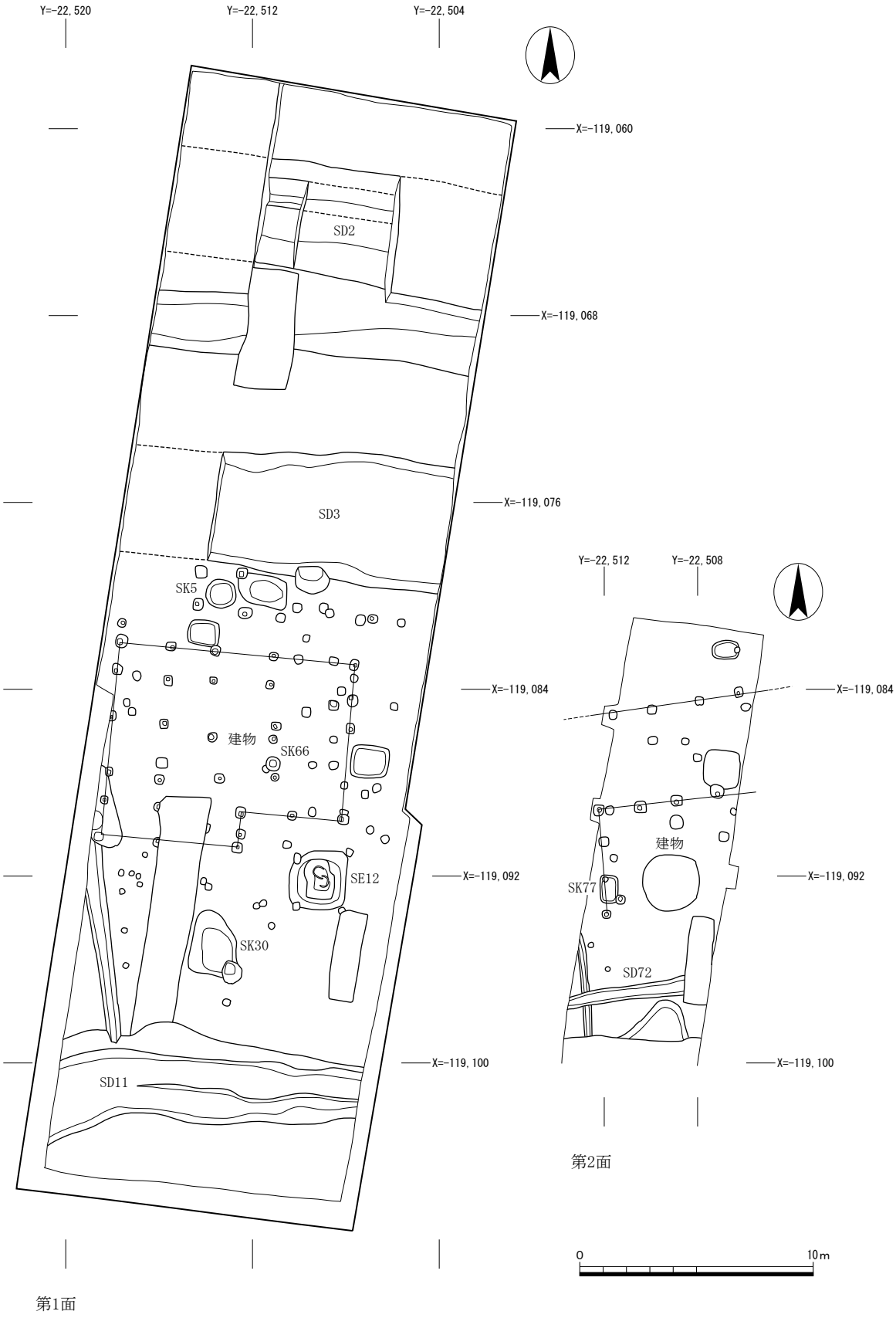


図87　遺構平面図（1:250）

ために東側の梁間が狭くなっていた。

ＳＥ 12 は、建物とＳＤ 11 の間で検出した。井戸の掘形は直径約 2.5 ｍ、深さ約 0.9 ｍで井戸枠はすべて抜き取られていた。

ＳＫ 66 は、建物内に存在した水溜のような施設と考えられる。深さが約 0.6 ｍと浅く底部に曲物を２段重ねて据え付けていた。

ＳＫ５は、建物の北側でＳＤ３の南側に位置する。白色粘土で丁寧に上層を覆っていたことから屋敷墓を想定していた。しかし掘形内から多量の瓦器釜（三脚羽釜）や瓦器椀が出土し、墓とみることはできない。性格は不明である。

第２面は平安時代末から鎌倉時代前半と考えられる建物２棟、溝、墓を検出した。

建物は２棟とも第１面とは方向を異にしていた。

ＳＤ 72 は東西方向の溝で、建物と方向を同じくする。幅約 0.6 ｍ、深さ約 0.1 ｍと、第１面のＳＤ 11 よりかなり規模が小さい。

ＳＫ 77 は方形の土壙である。北端部で、13 世紀前半の土師器が数枚重なって出土した。東西 0.5 ｍ、南北 1.0 ｍの規模で、中世屋敷墓の可能性が高い。

第３面では奈良時代（７世紀）の竪穴住居を２棟検出した。

ＳＩ 79 は南北約 4.8 ｍで、北東隅にあたる柱穴を１基検出した。遺物は、壁溝から出土した。

ＳＩ 80 は一辺約５ｍの方形を呈し、周囲に壁溝がめぐる。柱穴は、上層の井戸に削平された１基を除いて、３基すべてを確認した。竈の存在は確認できなかった。

遺物　今回出土した遺物は、整理箱にして 17 箱である。遺物は、弥生時代から室町時代の各時代にわたり出土しているが、最も多かったのは、13 世紀前半の鎌倉時代の遺物である。土師器、須恵器、瓦質土器、焼締陶器、龍泉窯青磁などが出土したが、瓦器椀の出土が特に多かった。

ＳＥ 12・ＳＫ５・ＳＤ 11 から出土した瓦器椀は、ほとんどが樟葉型に分類され、和泉型はＳＫ５から出土した１点のみであった。大和型は出土していない。

瓦器椀以外では、ＳＫ５からまとまって出土した瓦器釜（三脚羽釜）があるが、甕などの貯蔵具が

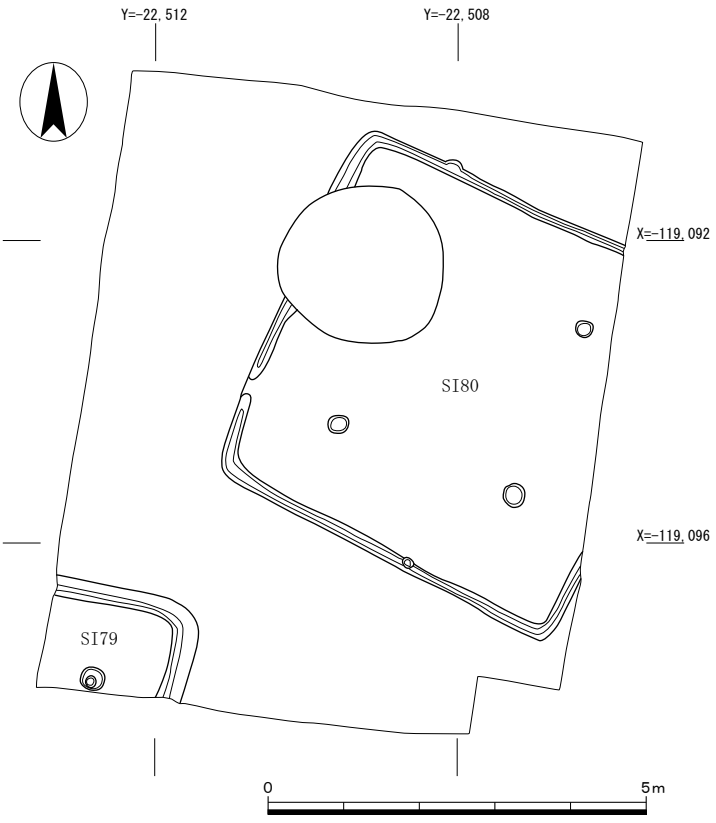


図88　竪穴住居跡平面図（1:100）

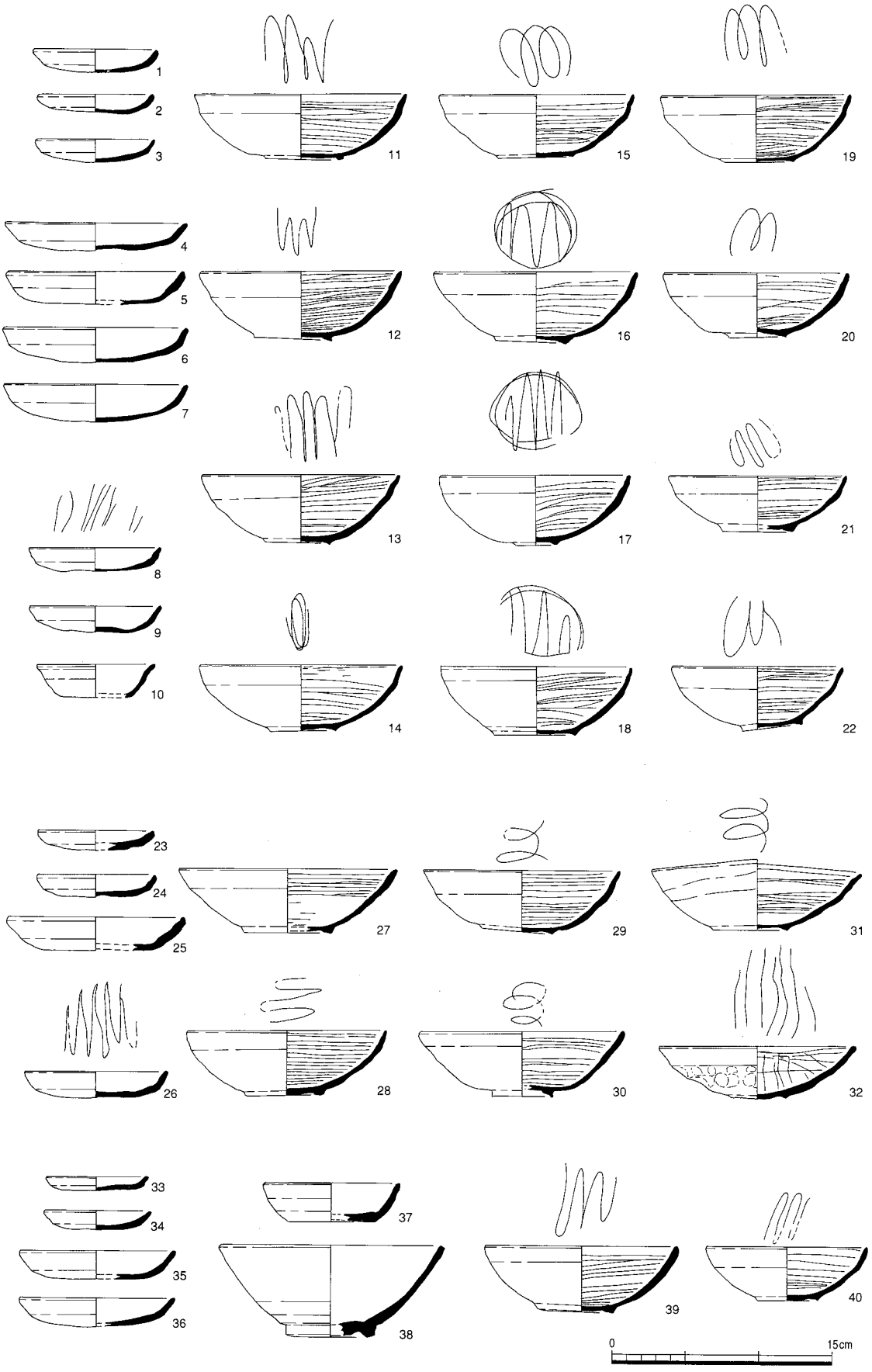


図 89　出土土器実測図（1 ～ 22: ＳＥ 12　23 ～ 32: ＳＫ 5　33 ～ 40: ＳＤ 11）
（1 : 4）

ほとんど出土しなかったことが特徴的である。

他には、建物地鎮に使用されたと考えられる貞観永寶が、第１面の建物南東部の柱穴から出土した。これは白色に酸化しており、平安京内から出土するものとは材質が異なっているようである。

播磨産連巴文軒平瓦が１点、ＳＥ 12 掘形内から出土した（図 90）。また、整地層からも播磨産の平瓦片などが出土しており、鳥羽離宮との関連も考慮される。ＳＥ 12 からは、漆器・箸・人形（図 91 － 41）・刀子形（42・43）・鳥形（44）などの木製品も数点出土している。

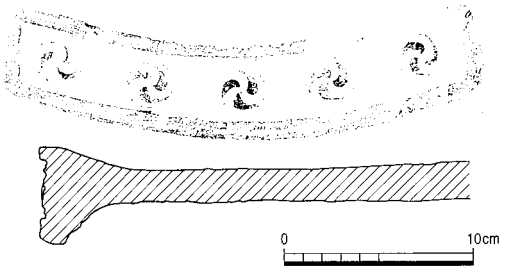


図 90　ＳＥ 12 出土軒瓦実測図（1：4）

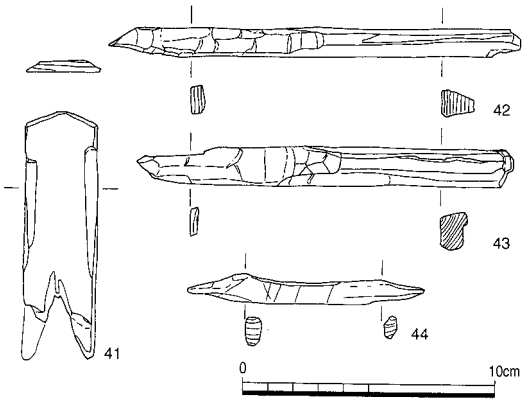


図 91　ＳＥ 12 出土木製品実測図（1：3）

小結　当調査地を『九条家文書』『東寺百合文書』などの文書や、絵図および地図などによって復原された紀伊郡条里に重ね合わせると、ＳＤ２は四条部分の坪境に相当する。里名は不明であるが、十五・十六坪の坪境の溝と十五坪内の一部を明らかにしたことになる。第２面の建物廃絶後の遺構であるＳＫ 77 から出土した土師器によって、第２面の建物の下限は 13 世紀初めとみられよう。

13 世紀代には各地で耕作地の拡大や宅地化が進み、村落の再整備が行われている。第１面の調査では溝（ＳＤ３、ＳＤ 11）の間に、建物と井戸を検出した。建物の南東隅の柱穴からは、地鎮に使われたとみられる貞観永寶が出土している。建物規模も大きいことから、建物は主家と考えられる。この遺構配置は、数棟の掘立柱建物（主家・副家）と井戸を備え、周囲を溝や柵で囲む中世集落の屋敷地の様相を呈している。調査地は、元応元年（1319）の『大徳寺文書』にある「下三栖庄」の一部にあたるとみられ、嘉禄元年（1225）の『安楽寿院公文所下文』には「上三栖庄」の名がみえ、この頃には下三栖庄も存在していたとみてよかろう。

第１面の掘立柱建物は、建て替えの痕跡が認められなかった。下三栖庄は、自治力の強い惣村として室町時代の文献にも登場してくることから、宅地は次第に現代の集落の方に集村したものと考えられる。

文献史料にみえる下三栖庄の一端を考古学的に実証できたことや、奈良時代の京都南部の様子を一部ではあるが確認できたことは大きな成果であった。　（桜井みどり）

22　灰方古墳群（図版２－２・34）

経過　市道大原野道道路改良工事に伴う立会調査により、掘削面から大きな石材や拳大の礫の入った土層を検出した。検出した遺構は横穴式石室となる可能性が大きく、再度試掘調査を実施することになった。試掘調査の結果、横穴式石室が約１/３ほど残存していることが判明した。さらに同工事の進展に伴いもう１基の古墳を確認した。そこで、２基の古墳を対象として緊急の発掘調査を実施することになった。

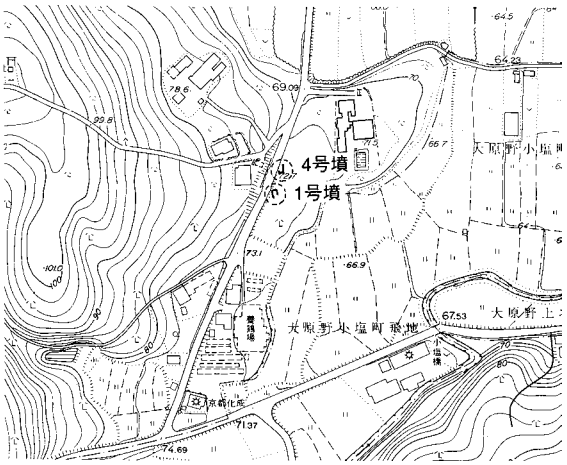


図 92　調査位置図（1 : 5,000）

灰方古墳群は、丹波山地東麓の北東方向に派生する小尾根上に営まれた古墳群である。分布調査などによると、９基の横穴式石室からなる後期の古墳群で、ほとんどが未調査で破壊され、わずかに須恵器の長頸壷・杯・甕、鉄斧、鉄鐏などの採集品が知られているだけであった。

今回、２基の横穴式石室を検出・調査することによって、灰方古墳群の実体の一端を明らかにすることができた。京都府教育委員会が 1989 年に作成した遺跡地図によると、９基の古墳に１～９号墳と番号がつけられている。照合の結果、最初に検出した北側の古墳が４号墳、次に南側で検出した古墳が１号墳と判明した。

遺構・遺物　尾根の背を境にして北斜面に造られた４号墳は北側に開口、南斜面に造られた１号墳は南側に開口している。調査が道路拡張区の石室部に限られ、また所在地が竹林で旧地形がかなり変更されているので、古墳の形状は不明である。

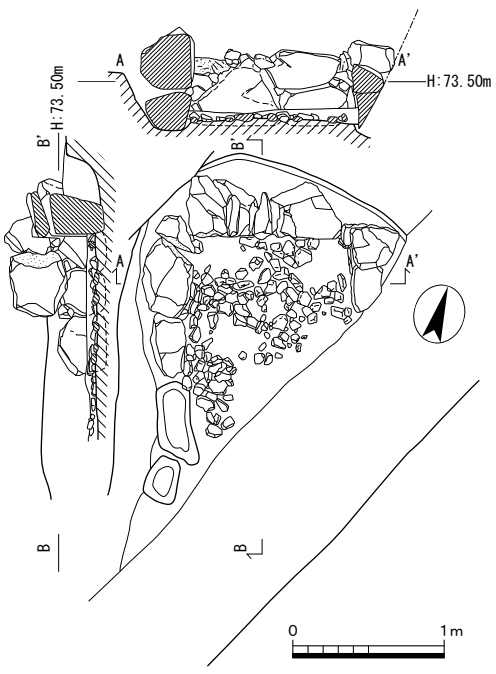


図93　1号墳実測図（1:50）

１号墳の石室は、４号墳に比べて小振りの石を用いている。西側壁は奥壁より２石分、約１ｍを残し他の石材は抜き取られている。東側壁は奥壁より 0.5 ｍ検出したが、それより南は敷地外で規模は不明である。石室の幅は約 1.1 ｍを測る。床面には拳大の礫が敷き詰められている。

４号墳の石室は、東側の側壁４石分検出した。奥壁と西側壁の石材はすでに抜き取られていたが、抜き取り痕跡を一部検出することができた。それによると石室幅は約 1.1 ｍに復原できる。石材は幅 0.7 ～ 1.0 ｍ、厚さ 0.6 ｍ前後で、重さは 0.75 ～ 1.3 ｔを測る。

床面のほぼ中央に排水溝が造られている。幅 0.4

～0.5ｍ、深さ0.2ｍの掘形で溝を掘り、底面の両掘形に沿って横長の石を長側面を上下して据え、その上に偏平な板石を架構して蓋としている。現存長は約3.4ｍである。奥壁は排水溝を造ってから据えられている。

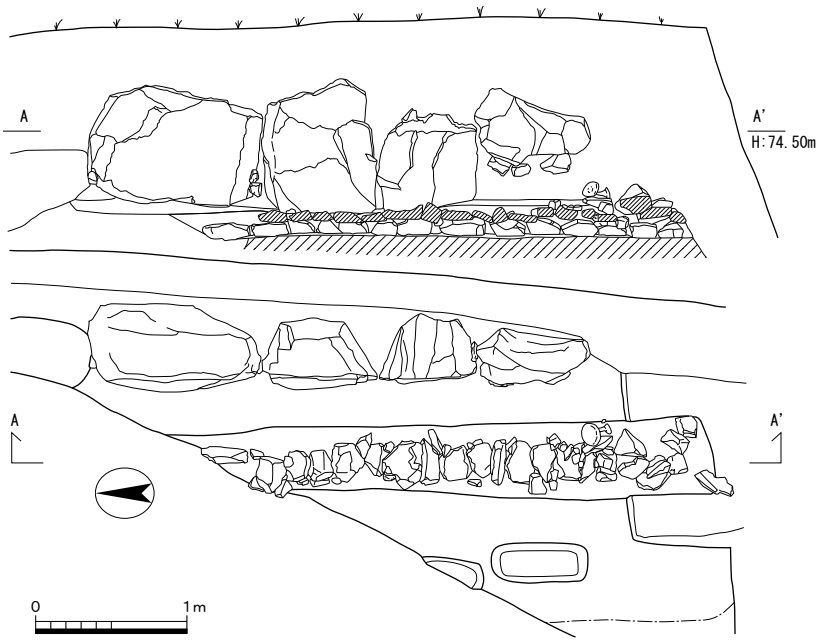


図94　4号古墳実測図（1:50）

１号墳から陶棺と須恵器無蓋高杯（図95―１）が出土した。陶棺は須恵質四注式陶棺の棺身・棺蓋の一部である。厚さは約1.7㎝を測る。棺身の調整は内面主軸方向のナデを施し一部青海波文叩きが残る。蓋外面の調整は主軸方向の刷毛目調整、内面はナデ調整を施す。胎土は砂粒を多く含み青灰色を呈す。円栓は短径9.4㎝、長径10.2㎝を測り、断面台形を呈する。表面に１条の刻線が施されている。

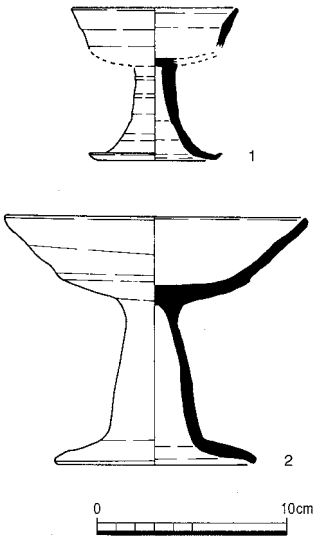


図95　出土土器実測図（1：4）

４号墳から陶棺と土師器高杯（図95―２）が出土した。高杯は奥壁のすぐ前からほぼ完形で出土した。陶棺は土師質で、脚部と棺底の接合部である。穴を開けた底部に円筒の脚を差し込んで接合したものであろう。脚は厚さ約1.3㎝で、復原径17㎝、棺底は厚さ約2.0㎝を測る。胎土は焼成が良好で硬く黄灰色を呈する。

小結　今回の調査によって、詳細が明らかでなかった灰方古墳群の一端を明らかにすることができた。調査した古墳は、どちらも小型の無袖の横穴式石室に復原できるものと思われる。４号墳には土師質陶棺、１号墳には須恵質陶棺を納めている。

４号墳は比較的大型の石材が用いられ、石室中央部に排水施設を備えている。出土遺物から、６世紀後半の築造と思われる。

１号墳は４号墳に比べて小型の石材が用いられているが、規模はあまり変わらないと思われる。石室内には拳大の礫が敷き詰められていた。７世紀前半の古墳である。

調査地付近は乙訓地方でも須恵質四注式陶棺の出土が多い地帯であり、石見上里古墳、芝古墳群、北平尾古墳群、光明寺古墳群、走田古墳群からも須恵質四注式陶棺が出土している。今回の調査でも須恵質四注式陶棺が出土しており、灰方古墳群もこれらの古墳群と密接な関係をもっていると考えられる。

（木下保明・吉崎　伸・西大條　哲）

第２章　試掘・立会調査

Ⅰ　平成８年度の試掘・立会調査概要

平成８年度の原因者負担による試掘・立会調査の委託契約件数は、試掘調査が12件、立会調査が14件、計26件である。これらの調査の中には、試掘･立会調査の結果を含め、第１章で扱ったものや、『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』で報告済みのもの、継続調査のため次年度の調査概要で報告予定のものがある。また、遺構・遺物の希薄なものは、試掘・立会調査一覧表（表４）の記載にとどめた。

その他、文化庁の国庫補助事業である京都市内一円の立会調査（表４－24）が539件あるが、これらは平成８年４月から12月分は『京都市内遺跡立会調査概報』平成８年度で、平成９年１月から３月分は平成９年度の概報で報告されている。

平安宮・京跡　平安宮内裏跡（１）では、江戸時代の土取穴で平安時代の遺構は壊されており検出できなかったが、飛鳥時代の土器や平安時代前期の土器・瓦類、桃山時代の金箔瓦片が、この土取穴から出土している。平安宮朝堂院跡・太政官跡・聚楽遺跡（２）では、予想された位置で朝堂院暉章堂、明礼堂、太政官西面築地などに関連する遺構を検出できた。平安宮右近衛府・図書寮跡（３）では、西大宮大路西側溝や大路路面などを検出している。

平安京左京七条三坊（４）では、鎌倉・室町時代の遺物包含層を確認した。平安京左京九条一坊（５）では、九条大路の路面を検出しており、東寺所用の瓦類も多数出土している。

平安京右京三条二坊（６）では、銅製の帯金具巡方が出土している。平安京右京四条一坊・朱雀院跡（７）は、平安時代前期の遺構が残存している可能性の高い試掘結果であった。

その他の遺跡　尊勝寺跡・最勝寺跡１（８）の立会調査では、数箇所で掘込地業を検出することができた。尊勝寺跡・最勝寺跡２（９）では、尊勝寺の南北方向の雨落溝、瓦溜などを検出している。法住寺殿跡（10）では、明確に土層が変化するラインを検出しており、掘込地業の可能性を指摘することができた。六波羅政庁跡（11）では、平安時代末期から江戸時代まで３層の良好な遺物包含層を検出している。醍醐廃寺（12）では、醍醐廃寺に直接関係する遺構は検出することはできなかったが、７世紀代の土師器や丸・平瓦片が出土している。桃山時代の軍事施設を思わせるような規模の大きい溝が検出されたことも注目できる。　（永田信一）

Ⅱ　平安宮・京跡

１　平安宮内裏跡（図版１）

経過　京都市立二条城北小学校（1996 年現在京都市立出水小学校）の校舎が改築される計画が持ち上がり、事前に試掘調査を実施した。

調査地点は同校の敷地北端部に位置し、平安宮跡（内裏外郭南面築地）および聚楽遺跡にあたる。内裏外郭南面築地の中央には内裏の正門である建礼門、東西には春華門・修明門があったとされるが、それぞれの該当位置を示せば、建礼門は同校から西へ約 20 ｍに、春華門は同校北側の「ふれあいセンター出水住民福祉会館」の東に該当する。周辺の調査では平安時代の土壙や整地層をはじめ、古墳時代から奈良時代に属する遺構・遺物も検出されている。一方、桃山時代には聚楽第の造営に伴い、周辺には大名屋敷などが展開したとされ、周辺の調査では当該期の遺構や、遺物では金箔瓦も出土している。

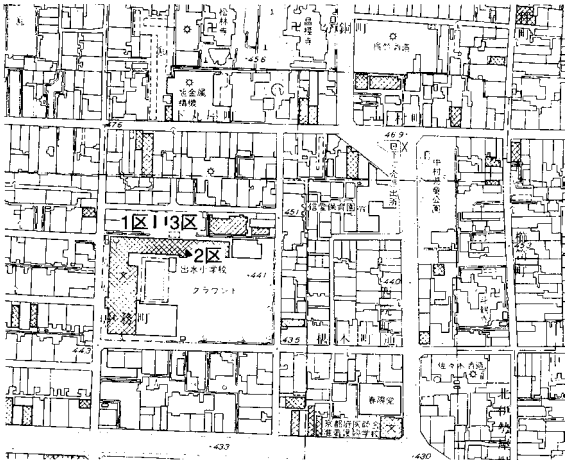


図 96　調査位置図（1 : 5, 000）

試掘調査区は１区・２区を設定し調査を行ったが、平安時代の遺構は検出できず、さらに１区の東に３区を設定した。しかし３区でも１区同様、江戸時代の土取穴により平安時代の遺構は全く検出することはできなかった。

遺構　調査区ごとに調査経過の概要を示す。カッコ内は（調査トレンチの規模、現地表面からの地山深さ、地山標高）を示している。

１区（3.0 × 11.0 ｍ、0.7 ｍ、43.90 ｍ）　調査区のほぼ中央に内裏外郭築地が東西に延長することが想定でき、建礼門－春華門間に相当する。

基本層序は同校の整地・積土層が厚さ 0.4 ～ 0.5 ｍ、江戸時代の耕作土層が厚さ 0.2 ｍあり、直下が江戸時代の土取穴ないし地山となる。地山は褐色砂泥層が厚さ 0.5 ｍ、褐色砂泥（礫含）層が厚さ 0.2 ｍおよび褐色泥土層となり、上層の褐色砂泥層が土取りの対象となる土層である。調査の結果、土取穴上面で江戸時代後期の東西溝１条と、土壙１基を検出した。土取穴は調査区全面で検出した。検出面からの深さは 0.4 ～ 0.8 ｍあり、南北方向に約４ｍ間隔で２箇所の高まりがある。土取りの単位か土取り作業の境界を示すと考えられる。北半の土取穴では、その間をさらに二分する箇所に高まりがある。土取穴は北から順次埋め戻さ

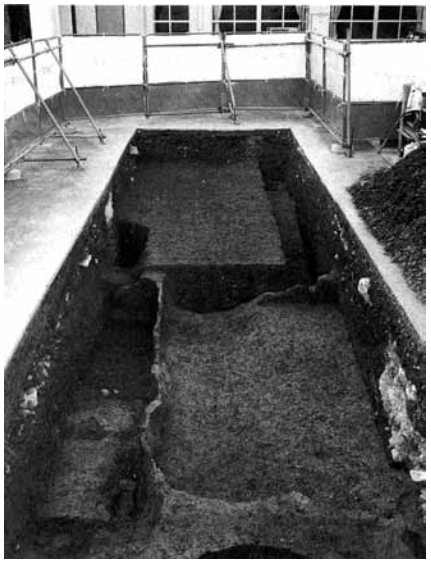


図 97　１区全景（北から）

れており、比較的磨滅の少ない平安時代前期から後期の遺物を主体に、飛鳥時代や桃山・江戸時代の遺物も少量出土した。

２区（2.0 × 4.7 m・1.5 × 3.5 m、1.2 m、42.95 m） 内裏外郭の南部にあたり、種々の行事が行われた内裏の南庭に該当する。

基本層序は、校庭整地層が厚さ 0.1 m、旧校舎解体時の土層が厚さ 1.0 m、江戸時代の遺物包含層が厚さ 0.15 mあり、その下層が地山となる。地山は褐色砂泥層が厚さ 0.1 m、暗褐色泥砂（礫含）層が厚さ約 0.2 m、褐色細砂層が厚さ 0.1 m、暗褐色泥砂（礫多量）層となる。調査の結果、旧校舎の基礎ならびに基礎撤去時に調査区の大半が攪乱を受けていることが判明した。

３区（2.5 × 8.0 m、1.2 m、43.65 m） １区の東に設定した調査区である。

基本的な層序は１区とほぼ同様である。調査の結果、３区についても、全面に江戸時代の土取穴が展開し、調査区東端でわずかに地山を検出したにとどまる。１区同様、土取りの単位ないし土取り作業の境界を示すと考えられる地山の高まりをほぼ１区と同位置で検出した。

遺物 遺物は遺物整理箱で５箱出土した。大半は、１・３区の土取穴から出土したものである。

平安時代以前の遺物はいずれも小破片であるが、土師器甕、須恵器杯・杯蓋・高杯などがあり、７世紀後半に属すると考えている。

平安時代の遺物には土器類と瓦類がある。土器類では、土師器皿・杯・椀・高杯・甕、須恵器杯・蓋・壷・甕、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀などがある。瓦類では、軒丸・軒平瓦、丸・平瓦などがある。軒瓦は平安時代中期から後期に属するもので、蓮華文軒丸瓦３点、巴文軒丸瓦１点、唐草文軒平瓦１点、剣頭文軒平瓦１点がある。

桃山・江戸時代の遺物には、土器類と瓦類がある。土器類では、土師器・陶磁器などがある。瓦類には、丸・平瓦、金箔瓦１点などがある。金箔瓦は鬼瓦と考えられる破片で、約 10㎝四方あり。平坦面が遺存している。表面から側面に赤漆を塗り、金箔を押す。釘穴が１箇所ある。

小結 調査では平安時代の遺構は検出できなかったものの、いくつかの知見を得ることができた。

土取穴では、土取りの単位ないし土取り作業の境界を示すと考えられる地山の壁の検出位置が１・３区ともほぼ一致することから、同じ工程で土取りが及んだことが窺われる。なお、土取穴間に南北方向に遺存していた地山の土層観察では、築地や関連する遺構は検出できなかったことから、築地に伴う地業などは施工されなかったか、削平されたものと考えられる。

遺物については、すべてが土取穴からの出土であるが、注目すべきものも含まれている。当該地周辺では古墳時代の遺構・遺物は、比較的多くの調査地点で検出されているが、飛鳥時代の遺構・遺物の検出例は少なく、今回新たな資料を提示できた。また、平安時代の土器類では、平安時代前期から中期（平安京Ⅰ期～Ⅱ期）のものが多数を占めることを明らかにした。

今回の試掘調査では、土取穴が全面にわたって展開しており、目的としていた遺構は検出できなかった。しかし、土取穴の埋土からは、飛鳥時代から平安時代の遺物が出土していることから、土取りの及ばない箇所については、遺構が遺存している可能性は高いものと考えられ、今後とも周辺の開発には注意を要する。 （辻 裕司）

２　平安宮朝堂院・太政官跡・聚楽遺跡（図版１・35）

経過　本調査は、上京区竹屋町通における上水道管敷設替え工事に伴って実施した立会調査である。調査対象地は、平安宮朝堂院東半部および太政官を東西に貫いており、また古墳時代の聚楽遺跡にもあたっている。本調査の南の歩道部分では、ガス管敷設工事に伴って1979年に立会調査[註]を行っており、朝堂院域では主に暉章堂東辺基壇外装、明礼堂西辺基壇外装、東回廊基壇、太政官域では柱穴などを検出した。

図98　調査位置図（1：5,000）

調査は1996年７月15日より開始し、幅0.8ｍの工事掘削溝の土層観察と遺物採取を中心に行った。ところが、８月12・13日の工事区域の東部の掘削時に、朝堂院暉章堂の基壇外装と考えられる遺構が良好に遺存していたため、工事業者および水道局と協議し協力を得て、建物基壇などの検出が予想される６箇所について、３日間工事を中止し先行調査を行った。

遺構　予想されたとおり、本調査でも道路舗装直下の浅い位置で朝堂院暉章堂・明礼堂の基壇外装に関する遺構および太政官西面築地に関連する遺構などを検出した。概して対象地の西半部では遺構の残存状況が良好で、太政官内にあたる東半では後世に攪乱を受けていた。

朝堂院暉章堂　東辺および北辺の基壇外装（いずれも凝灰岩切石）と西辺では外装の据え付け痕跡を確認した。

東辺では基壇外装のうちの延石を検出した。延石の短辺は0.35ｍ、厚さは西端で0.20ｍ、東端で0.12ｍ､上面西端には幅0.05ｍの地覆石との平坦な当たり面（標高40.48ｍ）が造り出され、東端へは傾斜面となり、底面は平坦である。南北約0.60ｍ分を検出したが、一石分の長辺は不明である。延石は地山を幅0.90ｍの溝状に掘り込んで据え付けたものと思われる。

北辺では地覆石・延石とこれに直交する板石を検出した。地覆石・延石は本工事で中央が削ら

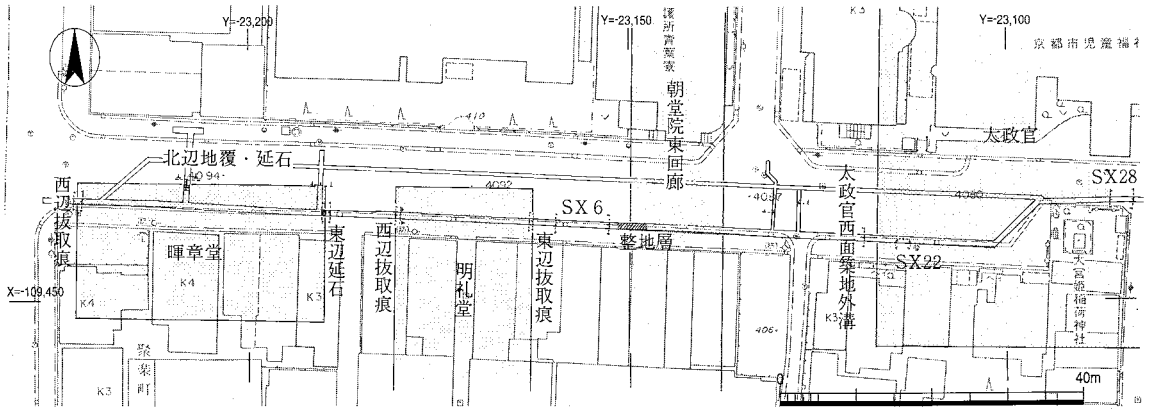


図99　主要遺構配置図（1：100）

れたが、良好に残存していた。地覆石の上面は標高 40.68 mで、現道路舗装の直下で検出した。短辺 0.40 m、厚さ 0.32 mで、上面には羽目石を受けるため基壇側に 0.08 mの掻き込みをほぼ中央まで施し、下面には延石と組み合わせるため北側に 0.10 mの掻き込みを幅 0.12 mほど施している。地覆石と延石とは 0.06 m重なる。検出した上面東端には束石を組み込むための掻き込みも認められた。延石は標高 40.47 mで検出した。東辺のものとは形状が異なり、上面が平坦な厚さ 0.20 m、短辺 0.35 mの板状の石である。地覆石・延石ともに東西 0.50 m分を検出したが、一石分の長辺は不明である。また、延石の北には上面のレベルを合わせ、張り出させて南北 0.80 m以上の平坦な板石が据えられていた。これは基壇北辺の中央やや西寄りに位置することから、北辺中央階段部の北張り出しの西縁延石にあたると思われる。

西辺では基壇外装の据え付け掘形と考えられる南北方向の深さ 0.30 m、幅約 1.5 mの溝状遺構を標高 40.53 mで検出した。外装の凝灰岩は抜き取られており、凝灰岩・瓦小片が散乱した状態であった。

なお、北辺の地覆・延石および西辺の延石はトンネル工法によって現地保存された。

朝堂院明礼堂　西辺と東辺で基壇外装の抜き取り痕跡を検出した。

西辺では標高 40.25 m前後で東西 0.70 mの範囲に凝灰岩片・粉末が帯状に密集した状態で検出した。さらに 0.1 mの間層を挟んだ標高 40.15 m前後でも同様に凝灰岩片・粉末が帯状に密集した状態で確認した。

東辺では西辺と同様の状況を示し、凝灰岩片・粉末の密度が疎らであったが、東西 0.40 m分を検出した。上層は標高 40.32 m、下層は標高 40.18 mであった。

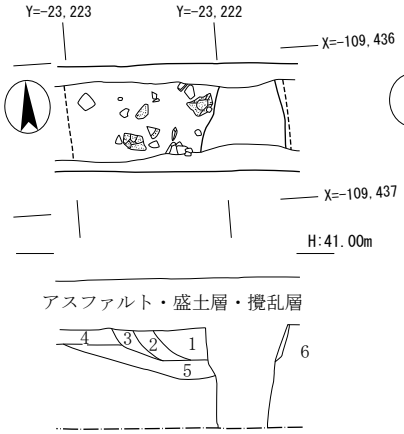
太政官西面築地　西面築地推定位置の西辺では築地外溝（西溝）と考えられる南北溝（ＳＤ 18）東肩を確認した。ＳＤ 18 は標高 40.25 mで検出し、幅 1.05 m以上、深さは 0.37 mである。その位置から､西面築地外溝(西溝)であろう。同東辺では内溝にあたる遺構は検出できなかった。

その他　朝堂院東回廊推定地点では明確に回廊に関連すると考えられる遺構は検出できなかった。しかし、回廊推定地点西端では９世紀代の整地と考えられる土層を検出した。上面は平坦であり標高は 40.35 m前後で、層厚 0.10 ～ 0.35 mであった。

また、３箇所で瓦溜（ＳＸ６・22・28）を検出した。ＳＸ６は明礼堂の東、東回廊の西の空閑地にあたる。検出高は 40.50 m前後で、東西７m以上、深さは 0.50 m、ほとんど隙間なく多量の瓦片と凝灰岩片が堆積する。大半は平・丸瓦であるが、軒平瓦・軒丸瓦や鬼瓦の破片もごく少量出土している。ＳＸ 22 は太政官西面築地の内側、内溝の推定位置の東辺で検出した。検出高は 40.40 m前後で東西 1.20 m、深さは 0.46 m、層位は上・下二層に分かれ、上層からは 10 世紀前半の土師器、下層からは９世紀後半の土師器・緑釉陶器が多量の平・丸瓦とともに出土した。ＳＸ 28 は太政官内にあたる。検出高は 40.12 m前後で東西 3.30 m、深さは 0.37 m、９世紀末から 10 世紀初頭の土師器・須恵器・緑釉陶器、平・丸瓦が出土した。

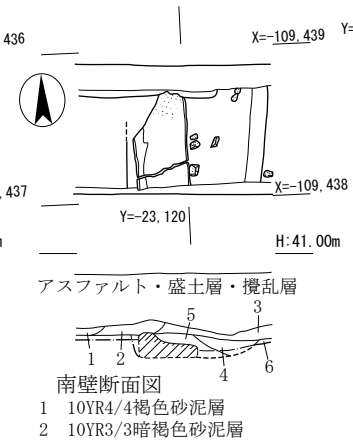
江戸時代以降の主な遺構に土取穴、路面状の整地層などがある。本調査の対象地竹屋町通西部では、道路北半部のほぼ全域に土取穴が存在している。これに対して東部では厚さ 0.4 mの路面

1　暉章堂西辺抜取痕



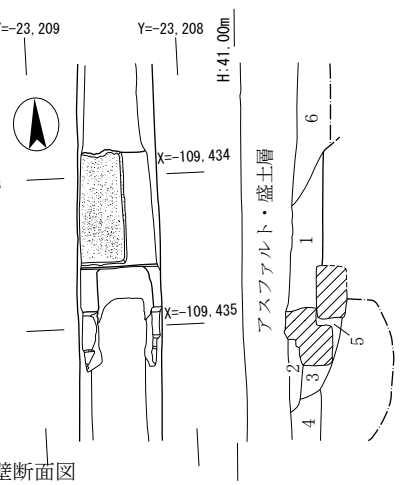
北壁断面図
1　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥層（凝灰岩小片を多く含む）
2　10YR5/3にぶい黄褐色砂泥層（凝灰岩小片を多く含む）
3　7.5YR4/4褐色砂泥層
4　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥層
5　7.5YR4/3褐色砂泥層（凝灰岩片・礫多く含む）
6　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥層（凝灰岩小片を多く含む）

2　暉章堂東辺延石



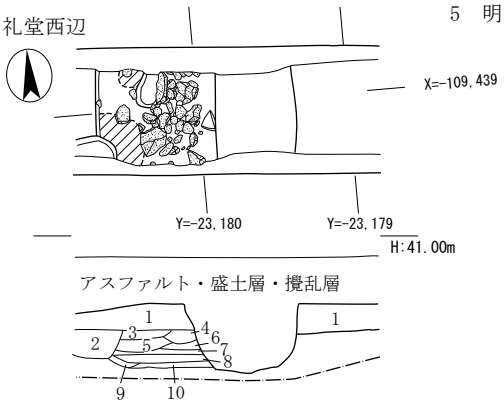
南壁断面図
1　10YR4/4褐色砂泥層
2　10YR3/3暗褐色砂泥層
3　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥層
4　2.5Y4/4オリーブ褐色泥土層
6　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥層

3　暉章堂北辺地覆・延石



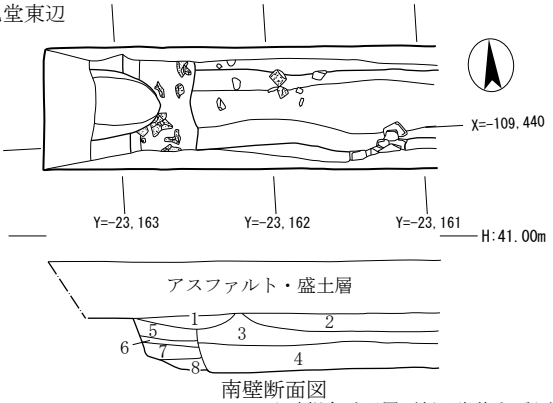
東壁断面図
1　7.5YR3/4暗褐色泥砂層（凝灰岩細片含む）
2　7.5YR3/3暗褐色泥砂層（凝灰岩粉末含む　羽目板抜取か）
3　7.5YR3/4暗褐色泥砂層（凝灰岩粉末含む　地覆石裏込）
4　7.5YR3/3暗褐色砂礫層（基壇版築）
5　10YR4/6褐色粘土質+10YR3/4暗褐色粘質土層（延石裏込）
6　10YR3/4暗褐色泥砂層（土取痕）

4　明礼堂西辺



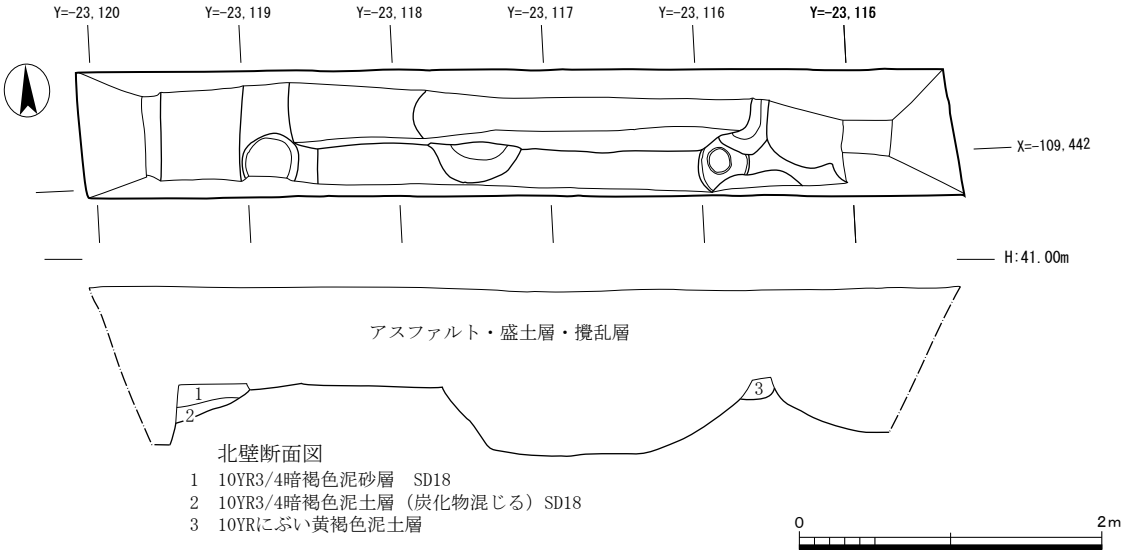
南壁断面図
1　10YR4/4褐色泥土層
2　10YR4/4褐色泥土層（凝灰岩粉末多い）
3　10YR4/4褐色泥土層（凝灰岩粉末多い）
4　10YR3/3暗褐色泥土層（凝灰岩粉末多い）
5　10YR2/3黒褐色泥砂層
6　10YR2/3黒褐色泥砂層（砂質）
7　5YR8/1灰白色凝灰岩片・粉末層
8　10YR5/6黄褐色泥土層
9　10YR4/4褐色泥土層
10　7.5YR8/4浅黄燈色凝灰岩片・粉末層

5　明礼堂東辺



南壁断面図
1　7.5YR3/4暗褐色砂泥層（凝灰岩片まばら）
2　7.5YR4/3褐色砂泥層（凝灰岩片・粉末含む）
3　7.5YR4/4褐色砂泥層（凝灰岩片・粉末やや多い）
4　7.5YR4/3褐色砂泥層
5　7.5YR4/4褐色泥砂層
6　7.5YR4/3褐色泥土層（凝灰岩片多く含む）
7　7.5YR4/4褐色砂泥層
8　7.5YR4/3褐色泥土層（凝灰岩片多く含む）

6　太政官西面築地



北壁断面図
1　10YR3/4暗褐色泥砂層　SD18
2　10YR3/4暗褐色泥土層（炭化物混じる）SD18
3　10YRにぶい黄褐色泥土層

0　2m

図100　主要遺構実測図（1:50）

状の整地層を検出した。

遺物　遺物は遺物整理箱に 22 箱出土した。大半は平安時代の遺物であり、またそのほとんどは瓦溜などから出土した瓦類である。

平安時代の遺物には土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、凝灰岩片などがあり、瓦類が最も多く、凝灰岩片も少なくない。土器類は小片で磨滅しているが、平安時代中期を中心としている。瓦類では平瓦が多く、軒瓦は軒平瓦８点・軒丸瓦３点と全体量からすれば僅少である。また、鬼瓦と考えられる破片や緑釉を施したものも各１点ある。

江戸時代以降の遺物には土師器、陶器、磁器、染付、瓦などがある。土取穴や路面状の整地層、その他土壙などから出土している。

また、古墳時代後期の須恵器杯身の破片、弥生時代の石包丁破片が各１点出土している。

小結　本調査では、平安宮跡の朝堂院暉章堂・明礼堂、太政官西面築地を検出する成果をあげることができた。

暉章堂の東辺の延石は 1979 年の立会調査で検出したものと位置的にも形状的にも一致し、その北延長にあたる。北辺については基壇外装の地覆・延石および北辺中央階段西縁の延石が良好に遺存していることが判明した。また抜き取り痕跡ではあるが、西辺を確認できた。北辺と西辺はこれまでに検出されておらず、その位置を確定できたことは重要な成果といえる。暉章堂の基壇については、地山を削り出して整地し、ある程度版築による基壇を構築、基壇外面を掘り込み成形して延石を据え、地覆石を据えたのち裏込めを施す、という手順を踏んだと考えられる。

明礼堂では基壇外装は遺存しておらず、東西端部で基壇外装の抜き取り痕跡を検出した。明礼堂の基壇外装は地山を掘り込んで構築されたと考えられ、創建（下層）の後、ある時期に改装が行われた（上層）と考えられるが、その時期を明確に示す遺物を得ることができなかった。この改装についてはこれまで確認されておらず、これも重要な成果の一つといえる。その時期の確定が今後の課題となろう。1979 年の立会調査では西辺の基壇外装が検出されたが、本調査では確認できなかった。

朝堂院東回廊に関する明確な遺構は検出できなかった。しかし、回廊の西端では９世紀代の整地と考えられる土層を確認した。東回廊に関する整地層と考えられる。

太政官に関する遺構としては西面築地の外溝（ＳＤ 18）と考えられる南北溝を検出した。

上記以外には、明礼堂と東回廊の間で１基（ＳＸ６）、太政官域内で２基（ＳＸ 22・28）の瓦溜を検出した。これらはいずれも９世紀末から 10 世紀初頭に形成された廃棄土壙であると考えられ、当該期にこの周辺で何らかの改変が行われたことが想定でき、先の明礼堂の改装痕跡との関連が注目される。　（高橋　潔）

註　高橋　潔「朝堂院・太政官・中務省跡」『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 13 冊
（財）京都市埋蔵文化財研究所　1995 年
なお同書所収の辻　純一「朝堂院跡」および辻　裕司「太政官跡」も参照されたい。

３　平安宮右近衛府・図書寮跡（図版１）

経過　上京区御前通の一条通から下立売通間（Ａ区）、下長者町通一筋南の通りで御前通から下ノ森通間（Ｂ区）において行われた配水管布設替え工事に伴い、1996 年６月 17 日より 12 月 20 日まで立会調査を実施した。Ａ区は西大宮大路の東側に平行し、Ｂ区は西大宮大路から平安宮右近衛府の中央部、図書寮の南東部に至る。また、仁和寺街道以南は古墳時代から奈良時代の鳳瑞遺跡にも含まれる。調査では西大宮大路の側溝や路面に伴う遺構を検出し、飛鳥時代から近世まで多数の遺物が出土した。

遺構　基本層序は、Ａ区では仁和寺街道以北で現地表下 1.0 ｍ前後まで盛土層で、その直下から地山となる。仁和寺街道以南より 73 地点までは現地表下 0.3 ｍ前後の盛土層直下から 0.7 ～ 1.1 ｍの間に路面堆積層や遺物包含層が確認できる。73 地点以南から 53 地点にかけては、現地表下 0.3 ｍから氾濫堆積状の砂礫層になる。Ａ区南の 69 地点では現地表下 0.4 ｍで遺物包含層と遺構が存在し、0.5 ｍで黄灰色砂泥の地山となる。

Ｂ区では、西端の 56･57 地点で現地表下 0.3 ～ 0.4 ｍの盛土層直下から、遺物包含層と遺構が存在し、0.5 ｍで黄褐色砂泥層の地山を確認した。

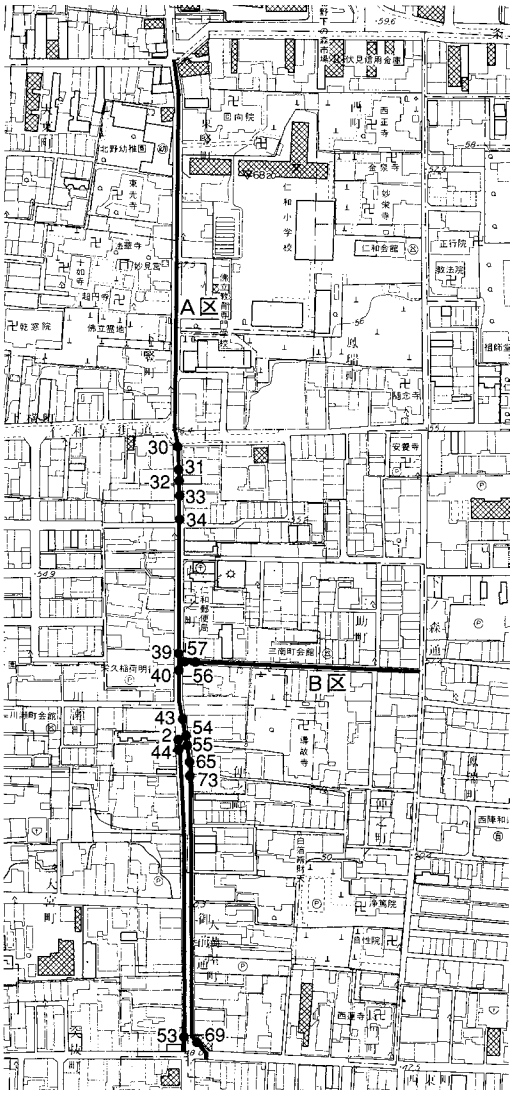


図 101　調査位置図（1 : 5, 000）

遺構は、調査区の 21 箇所の地点で 17 基を検出した。

溝は、55 ～ 57･65･73 地点の５箇所で検出したが、55･65･73 地点の溝は同一の溝と考えられ、今回の調査では３条の溝を検出したことになる。これらの溝は御前通東側の発掘調査（調査１～３）で検出された西大宮大路西側溝（隍）群の南延長部と考えられる。57 地点の溝は調査１[註1]の隍 31、調査２[註2]のＳＤ 62、調査３[註3]のＳＤ 11 の延長部に位置するが、これらが平安時代後期の遺物を多量に含むのに対して、57 地点の溝は平安時代前期の遺物を含んでいる。56 地点の溝は調査１の隍 33、調査３のＳＤ 15 の延長部に位置する。55・65・73 地点の溝は調査１の隍 23、調査２のＳＤ 64、調査３のＳＤ 16 の延長部に位置する。この 55・65・73 地点の溝は埋土を大きく上層と下層に分けることができる。上層では平安時代から室町時代にかけての瓦が敷き詰められて多量に出土し､溝を埋めて整地した状況である。下層には平安時代前期の遺物が含まれている。

路面堆積層は、２・30 ～ 34・39・40・43・44・54 の 10 箇所で検出した。30 ～ 33 地点では、

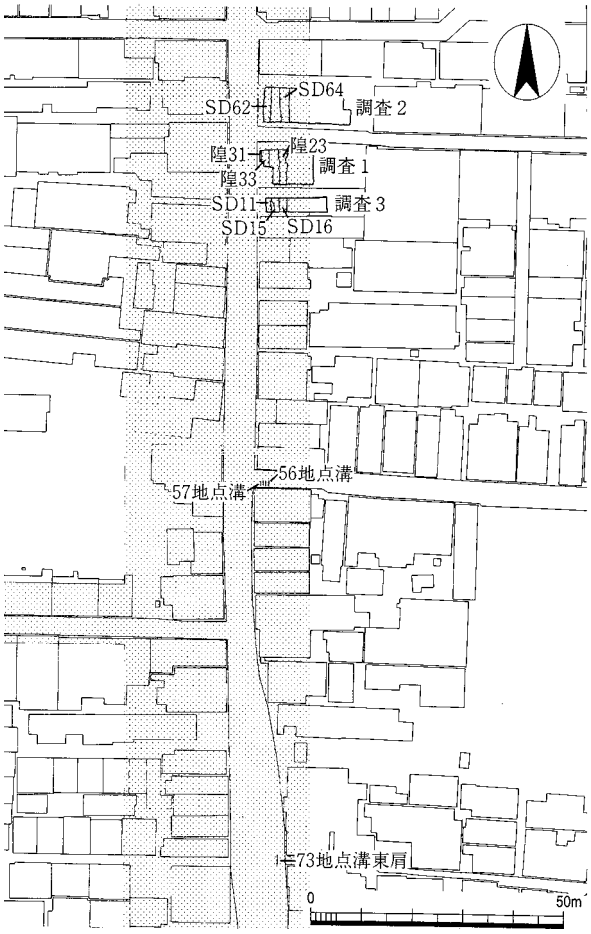


図 102　遺構配置図（1 : 1500）

31 地点の下層から室町時代の土師器が出土しており、室町時代以降の路面堆積層とわかった。

遺物　調査区の仁和寺街道から下立売通間の 23 箇所・33 土層で整理箱 3 箱分が出土している。遺物の時期は飛鳥時代から近世まで広範に出土しているが、平安時代から室町時代までの瓦類が大半を占めている。

土器類は平安時代が大半を占め、特に 40 地点の落込と 73 地点の溝からは、平安時代前期（9 世紀前半）の土師器皿・杯・高杯・甕、須恵器杯・甕、黒色土器椀、緑釉陶器椀、灰釉陶器などが出土している。

瓦類は大半が丸・平瓦であるが、40 地点の落込では緑釉瓦、55 地点の溝では室町時代の剣頭文軒平瓦が出土している。また平瓦の一部には熨斗瓦と考えられる瓦も含まれている。

金属製品は 40 地点の落込から皇朝十二銭の富壽神寶が 1 点出土している。

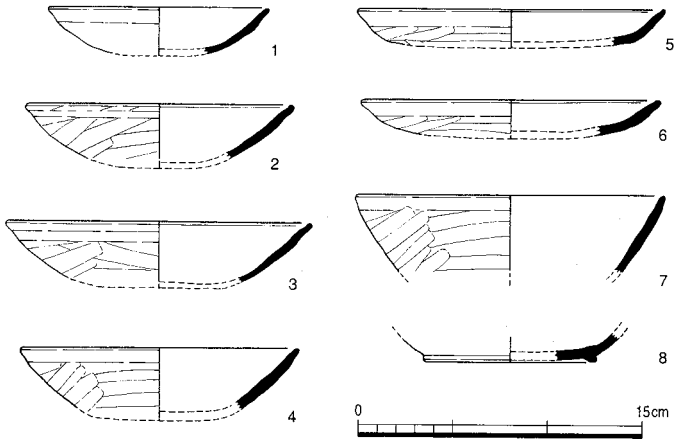


図 103　40 地点出土土器実測図（1 : 4）

小結　今回の調査によって、A 区の仁和寺街道以南から 73 地点の周辺には遺物包含層および遺構が多数残っていることが判明した。この区間で西大宮大路東側溝群の南延長部と考えられる 3 条の溝を検出したが、先の調査で検出した溝と時期が違うので今後の調査に期待がかかる。

西大宮大路から御前通の変遷については、55・65・73 地点の溝が室町時代以降に瓦を敷き詰めて整地されたと考えられることや、31 地点の路面堆積層の大半が室町時代以降であると考えられることなどから、西大宮大路は室町時代以降に大きな改造工事が行われた可能性が指摘できる。　（吉本健吾・長戸満男）

註 1　梅川光隆「平安宮西限」『平安京跡発掘調査概報』昭和 60 年度　京都市文化観光局　1986 年
註 2　辻　裕司「平安宮西限（1）」『平安京跡発掘調査概報』平成 2 年度　京都市文化観光局　1991 年
註 3　辻　裕司「平安宮西限（2）」『平安京跡発掘調査概報』平成 2 年度　京都市文化観光局　1991 年

４　平安京左京七条三坊（図版１）

経過　烏丸通上数珠屋町通交差点北から七条通と接する道路内および歩道敷地内で、埋設管布設状況確認に伴う立会調査を実施した。

当調査地は平安京左京七条三坊十三・十四・十五町に推定される。また、高速鉄道烏丸線内遺跡発掘調査では、鎌倉時代から室町時代に属する古墓群（東本願寺前古墓群）を確認しており、平安時代・中世に属する遺構の検出が期待された。調査は、1996年９月２日から９月12日まで行い、写真撮影、断面観察、遺物採集を行った。調査箇所は、道路東側で19箇所（No.１～16、18～20）、西側で６箇所（No.17 N・S、23～26）である。

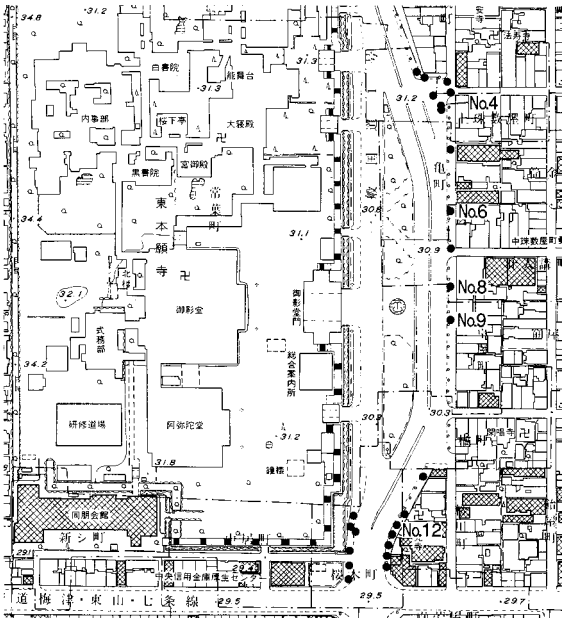


図104　調査位置図（1：5,000）

遺構　今回の調査では、No.６・12で鎌倉・室町時代に属する遺物包含層を、No.９では江戸時代後半に属する遺物包含層を、No.４・８で江戸時代後期に属する瓦溜を検出した。

遺物　平安時代末から鎌倉・室町時代とみられる遺物が少量出土し、平安時代末に属する軒平瓦が撹乱層から出土している。鎌倉･室町時代の遺物は土師器､瓦器､輸入陶磁器などがみられる。江戸時代の遺物は土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付、瓦などの他に伏見人形もみられる。瓦には丸瓦、平瓦、桟瓦などがあり、その中には二次的な火熱をうけた瓦がみられる。

小結　今回の調査では、平安時代の遺構および東本願寺前古墓群に関連する遺構の検出に努めたが、掘削が遺構成立面まで達しなかったこともあり、多くの調査区で埋設管に伴う攪乱層の確認にとどまった。しかし攪乱を受けていない箇所で鎌倉・室町時代と考えられる遺物包含層を、江戸時代に属する瓦溜や遺物包含層などを確認した。また、平安時代末から鎌倉・室町時代、江戸時代前期から後期に属する遺物が出土した。江戸時代前期には遺物の出土量が増加し、後期までその傾向が持続する特徴が認められる。慶長七年（1602）２月、教如によって建立された東本願寺に伴う周辺での何らかの開発行為を推測させるものである。今後より広い調査が可能であれば平安時代、中・近世の土地活用を考える上で大きな成果が期待できる。

（南出俊彦・山本雅和・上村和直）

5 平安京左京九条一坊（図版１）

経過　本調査は、電線共同溝工事に伴う立会調査である。調査地は壬生通から大宮通までの九条通北側の東寺に南接する歩道で、平安京左京九条一坊の九条大路の路面に該当する。

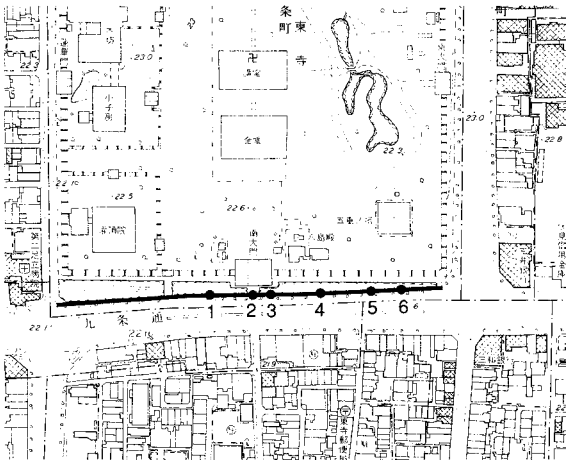


図 105　調査位置図（1：5,000）

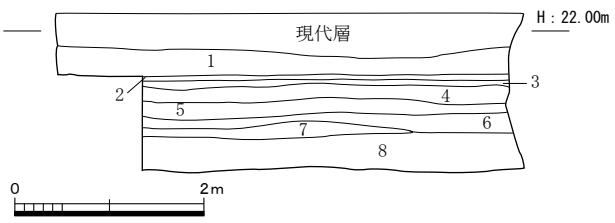
当調査に先立ち、工事予定地の壬生川通から堀川通までの、九条通北側歩道で同工事の試験掘りに伴う立会調査を行った。その結果、九条大路の明確な路面は確認できなかったが、平安時代の遺物包含層を３地点で検出した。特に東寺南大門前の南東地点で検出した遺物包含層からは瓦を多量に採集した。その成果を踏まえ、調査は東寺前の歩道に限定して、南北２ｍ×東西６ｍの規模で、６箇所の調査区を設定して行った。

遺構　検出した遺構の総数は 14 基で、その内訳は路面 12、土壙１、溝１である。平安時代の遺構には路面と土壙がある。以下、各調査区ごとに概述する。

調査区１　全調査区の西端で、南大門からは南西に位置している。層序は現代層以下に、第１層の黄灰色砂泥層（2.5Y5/1）、第２層の暗褐色砂泥層（10YR3/3）、第３層の黒色砂泥層（10YR2/1）、第４層の褐灰色砂泥層（10YR4/1）、第５層の褐灰色砂泥層（10YR5/1）、第６層の暗灰黄色粗砂層（2.5Y5/2）、第７層の黒褐色細砂層（2.5Y3/2）、第８層の暗褐色砂礫層（10YR3/4）である。第１層は中世から近世の耕作土層。第２層は小礫と粘土で堅く締められており、路面とみられる。第３・４層は平安時代の遺物包含層。第５層は第２層と類似した様相で、平安時代の路面とみられる。第６～８層は流路状の堆積である。

調査区２　南大門のほぼ真南に位置する。層序は現代層以下、調査区１で認められた第２・４～８層の順で、路面とみられる第２・５層も継続して認められる。

調査区３　南大門の南に位置する。層序は調査区２と同一で、路面とみられる第２・５層も継続して認められる。第７層の黒褐色細砂層からは平安時代の軒瓦を含む多量の瓦が出土している。



1　黄灰色砂泥層（2.5YR5/1）　5　褐灰色砂泥層（10YR5/1）路面
2　暗褐色砂泥層（10YR3/3）路面　6　暗灰黄色粗砂層（2.5YR5/2）
3　黒色砂泥層（10YR2/1）炭多量　7　黒褐色細砂層（2.5YR3/2）
4　褐灰色砂泥層（10YR4/1）　8　暗褐色砂礫層（10YR3/4）

図106　調査区1南壁断面図（1:80）

調査区４　南大門からは南東に位置する。層序は調査区２・３と同一で、路面とみられる第２・５層も継続して認められる。第４層の褐灰色砂泥層から平安時代の瓦が多量に出土している。

調査区５　南大門からは、さらに南東に位置する。現代層直下で幅６ｍ、深さ２ｍ以上の近世の南北方向の石組溝の検出にと

どまった。

調査区６　全調査区の東端で、大宮通西に近接する。層序は現代層以下に調査区１で認められた第２～６層が堆積する。路面とみられる第２・５層が再び認められる

遺物　出土した遺物は、整理箱に 24 箱であった。遺物は土器類と瓦類で、大半が瓦類である。土器類には土師器、須恵器、灰釉陶器、白磁があり、いずれも平安時代のもので、調査区２に堆積する第２層暗褐色砂泥層から出土している。瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦がある。特に、調査区２・３に堆積する第７層黒褐色細砂から瓦が多量に出土している。出土した瓦には軒

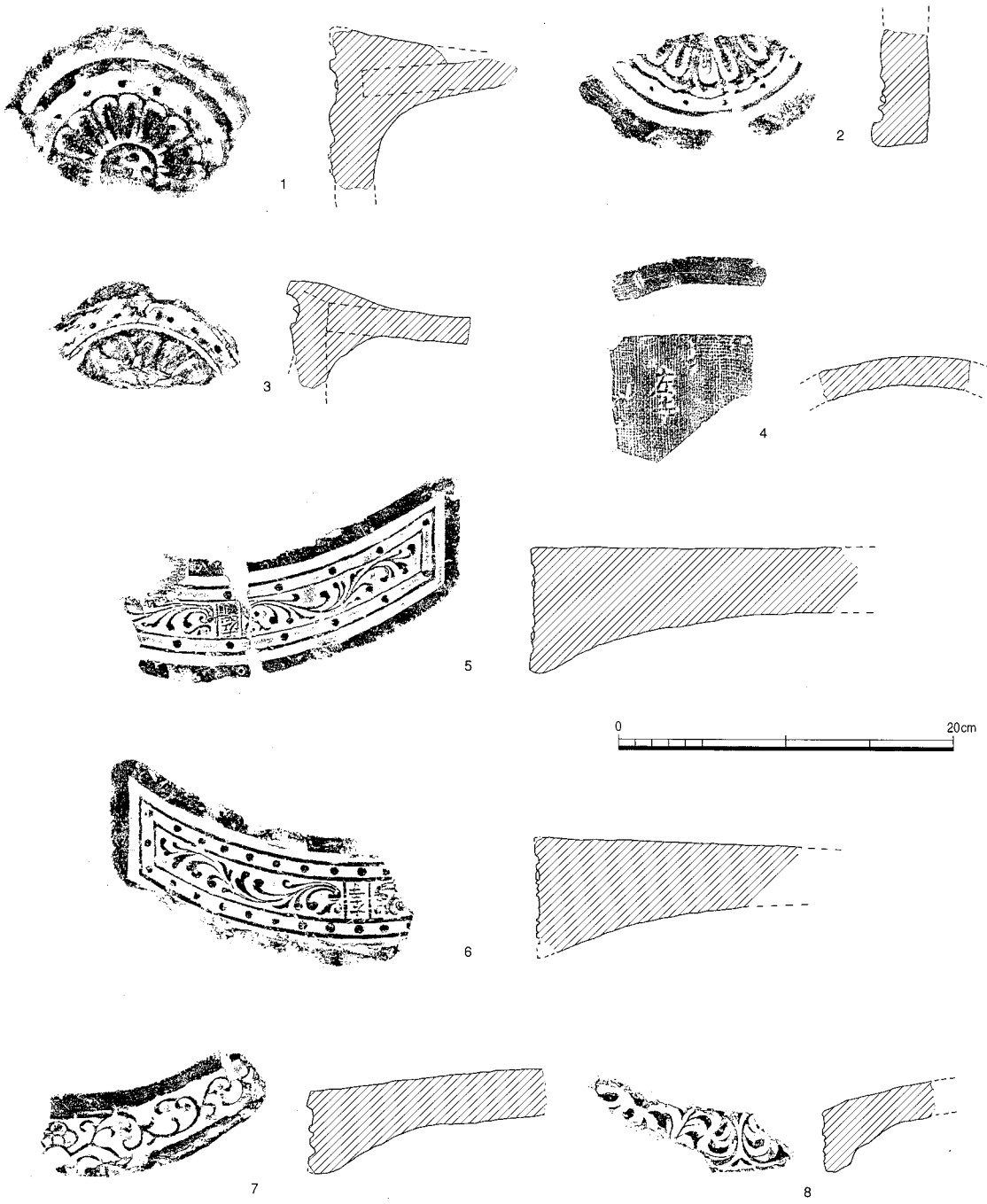


図 107　出土瓦実測図（調査区２：１～３・７～８　調査区３：４～６）
（1 : 4）

瓦も多く認められ、調査区２の第７層からは複弁蓮華文軒丸瓦（１・２）、単弁蓮華文軒丸瓦（３）、唐草文軒平瓦（７・８）が出土した。また、調査区３の第７層からは「左寺」銘唐草文軒平瓦（５・６）が出土しており、調査区３の第５層からは「左寺」銘を裏面に陽刻した平瓦（４）も出土している。

小結　調査の結果、路面を東西約 130 mにわたり検出した。さらに路面の下層に堆積する砂層からは東寺所用の「左寺」銘唐草文軒平瓦・蓮華文軒丸瓦などを含む多量の瓦が出土した。

検出した路面は九条大路の路面とみられるが、砂層については東寺の南接地に当初から東西に堀が存在していたことが考えられ、路面・堀の変遷との関連で興味深い。　（加納敬二）

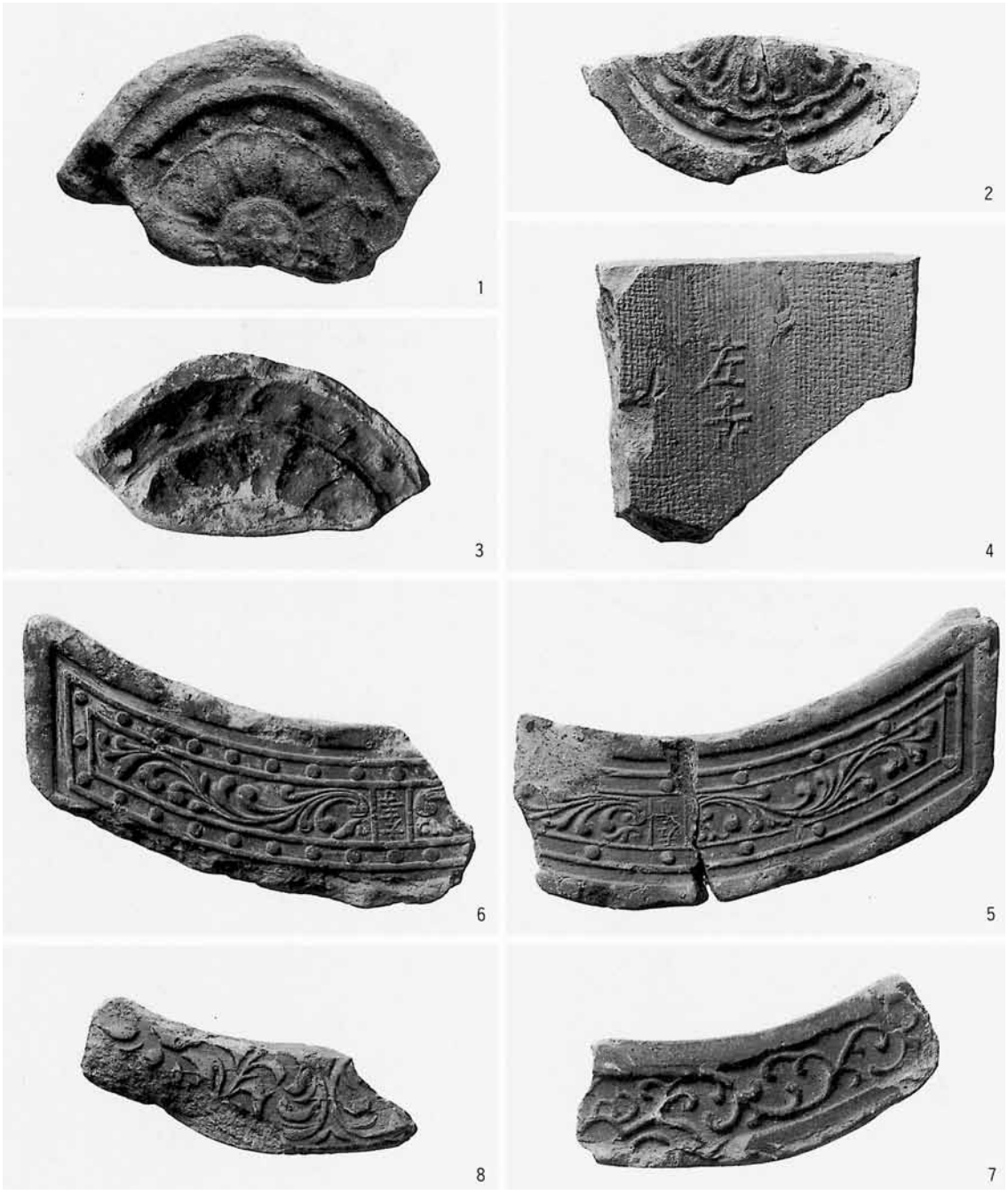


図 108　出土瓦

６　平安京右京三条二坊（図版１）

経過　中京区押小路通西大路から七本松通間（Ａ区）、西土居通押小路から御池通間（Ｂ区）において行われた配水管布設替え工事に伴い、1996 年７月４日より８月 28 日まで立会調査を実施した。Ａ区は二条大路の北側に平行し、Ｂ区は右京三条二坊九町と十町の東側を南北に縦断する。付近では平安時代の掘立柱建物・園池・河川が検出されている。またＡ区西側では桃山時代の御土居推定地を横断する。

調査では平安時代の遺構を検出し、平安時代から近世まで多数の遺物が出土した。

遺構　基本層序は、Ａ区では 35 地点以東の現地表下 0.3 ～ 0.9 ｍまでに路面およびそれに伴う整地層、下層は地山である。Ａ区中央部から西部は現地表下 0.4 ～ 1.5 ｍまでが氾濫状の砂礫層と砂泥層、下層が地山になる。Ｂ区南部（５地点）では現地表下 0.3 ｍで黒褐色粘土の平安時代前期の遺物包含層、0.7 ｍで褐色粘土の地山になる。Ｂ区北側では６地点以北が掘削深 1.6 ｍまで平安時代の遺物を含む池状堆積となる。

遺構は、調査区の 14 箇所の地点で 14 基を検出した。

６地点では、現地表下 0.9 ｍで、池状堆積の肩と思われる落込を検出し、南方向に緩やかなカーブを描き落ち込む。埋土からは平安時代の土師器皿・甕、須恵器壷や銅製帯金具丸鞆が出土している。８地点では、現地表下 0.8 ｍから厚さ 0.7 ｍ以上の池状の堆積層を検出し、平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器が出土している。

28・29・31・32 ～ 35 地点で検出した路面およびそれに伴う整地層は、いずれも二条大路の推定地内で検出されたものである。28 地点が現地表下 0.6 ｍ、29 地点が 0.4 ｍ、31 地点が 0.5 ｍ、32 地点が 0.6 ｍ、33 地点が 0.5 ｍ、34 地点が 0.6 ｍ、35 地点が 0.5 ｍで検出されており、遺構の厚さがすべて 0.2 ｍの間におさまっており、同時期の路面敷と考えられる。ただ時期を特定でき

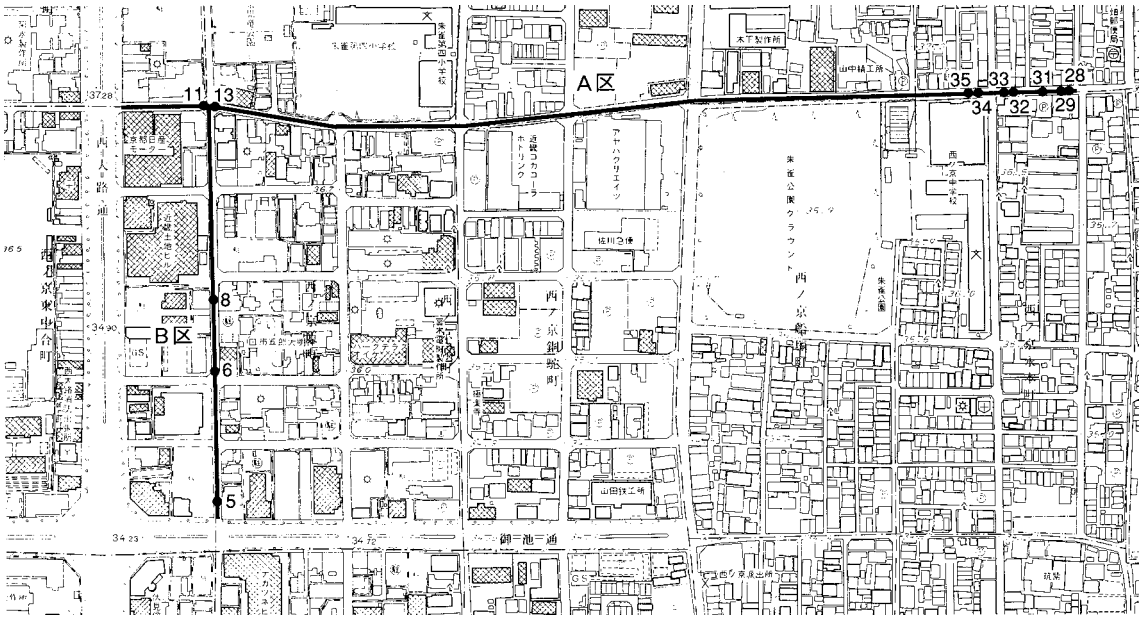


図 109　調査位置図（1 : 5, 000）

る遺物の大半が平安時代から鎌倉時代の布目瓦で、それ以外の遺物は31地点の鎌倉時代後半の白磁だけである。また遺構上層は一部で江戸時代の層が含まれるが、現代層とみられ、確実に平安時代から鎌倉時代の路面とは断定しがたい。

11地点で検出した南北方向の石垣は、現地表下0.1ｍで最上段の石を検出しており、以下1.4ｍまで径30～40㎝大の石を4段積み重ねている。最下段の石の下には南北方向に径12～13㎝の胴木を配している。遺構の時期を特定できる遺物は出土しなかった。また11地点から東へ６ｍ離した13地点で土留めを目的に設置したと思われる板を検出している。確認できたのは厚さ１～２㎝、幅約35㎝、検出長36㎝の板１枚だけであるが、検出状況から南北方向に板列をなしていると推測される。この地点が御土居の推定地であることから、御土居に関連する遺構と考えられる。

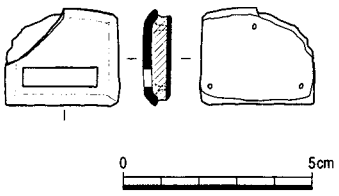


図110　出土銅製帯金具実測図（1：2）

遺物　調査区の25箇所・38土層で整理箱4箱分が出土している。遺物の時期は平安時代から近世まで広範にわたるが、平安時代から鎌倉時代の布目瓦が大半を占めている。

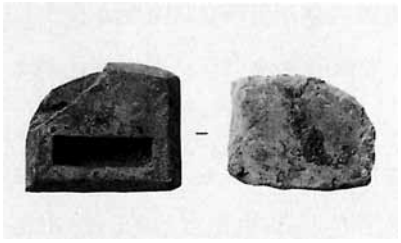


図111　出土銅製帯金具

遺物の中で最も重要なものは、６地点の平安時代の落込から出土した銅製帯金具丸鞆である。一部破損しているが、幅2.6㎝、長さ3.1㎝、厚さ0.73㎝（裏金具とも）を測り、長方形の一辺は曲線で0.2㎝ほど上へ膨らんで山形をなしている。透孔は縦0.55㎝、横1.95㎝で開けられており、径0.3㎝の鋲足が３点確認できる。銅製帯金具は平安時代以前から使用されており、時期は特定できていない。

小結　今回の調査によって、Ａ区東側では平安時代から鎌倉時代の瓦片を多量に含む路面およびそれに伴う整地層を、Ａ区西側の11・13地点では御土居に関連すると思われる石垣遺構およびそれに関連する遺構を検出した。

Ｂ区では平安時代の遺物包含層および遺構が多数残っていることが確認できた。Ｂ区の隣接地である右京三条二坊八町では発掘調査[註]において庭園遺構の池を検出しており、６・８地点で検出された落込および池状堆積層も九町および十町の邸宅内の園池の池に関連するものと考えられる。また６地点の落込で出土した銅製帯金具は、出土例が少なく重要なものである。

（吉本健吾・長戸満男）

註　堀内明博・木下保明「平安京右京三条二坊」『昭和61年度
京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1989年

７　平安京右京四条一坊・朱雀院跡（図版１）

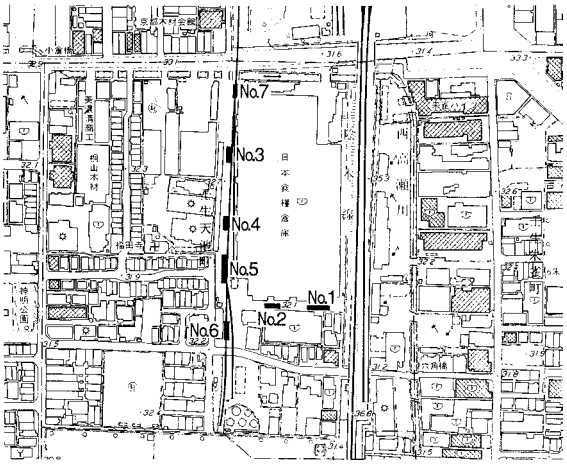


図 112　調査位置図（1：5,000）

経過　当該地に集合住宅の建設が計画され、その建設工事に先立って当研究所が試掘調査を実施することとなった。

試掘調査を実施するにあたって、対象敷地内における遺構および堆積層の残存状況を把握することを主な目的とした。なお、調査対象敷地内には、現在は敷地中央部から東部にレンガ造りの大規模な倉庫が残っている。このため試掘調査区は、鉄道の引き込み線を含む西辺の南北通路と、そこから折れて東へ延びる東西通路上に一定間隔でトレンチを設定した。東西通路上では、東からNo.１トレンチとNo.２トレンチの２箇所、南北通路上では、No.３からNo.６トレンチの４箇所の調査区を設定して試掘調査を実施した。南北通路最北部については、機械掘削時におけるNo.３トレンチなどの遺構面や遺物包含層の検出状況から、No.７トレンチを追加設定し調査を実施した。

遺構　堆積層位は、各調査区を通じてほぼ共通していた。No.７およびNo.３からNo.５トレンチでは、地山上面に平安時代の遺構面を確認している。地山は、No.４トレンチ以北では褐色系の砂泥土やシルト土などを主体とするが、No.５トレンチ以南では、礫を多く含む砂質土か砂礫が主体をなす。No.３トレンチでは、この上面で厚さ数cmの整地層を検出し、平安時代前半期のものと確認したが、隣接のトレンチでは検出しておらず、浅い窪みを埋めた土層と思われる。No.５トレンチの地山上層は、遺物を検出していないが、整地土層の可能性もある。平安時代の遺構面には、厚さ 15cm前後から 20cmほどの黒褐色砂泥層が各トレンチを通じて堆積しており、この地域全体の基本土層とみられる。黒褐色砂泥層の上面では、畑の畦が形成されているところが多い。畑の上面には現存倉庫の建設に伴う厚い整地土が積まれている。その上面は、アスファルトあるいはコンクリートが敷かれており表土層を形成している。

南部のNo.１・２・６の３トレンチについても、黒褐色砂泥層を含めて層位は基本的には共通したものであるが、南方および東方に向けて地山が緩やかに傾斜するため、近代整地土の厚さは異なっている。また、No.２・６トレンチでは地山面から池が成立している関係で、黒褐色砂泥層下に池の堆積土層が認められる。なお、No.６トレンチの池底面に堆積する泥土を含む砂礫層下で、シルトや粘土を主とする湿地堆積とみられる厚い土層を確認している。上層の池の前身とみられ、平安京成立以前の自然地形ととらえられる。

遺構は多く検出できなかったが、No.５トレンチの北半部において溝、ピット、土壙を検出している。溝は東西方向で調査区外へ延びており、検出面で幅0.5ｍを測る。溝から出土した遺物から、９世紀代には埋没したものと推測される。ピットや土壙は、この溝の北側で検出した。出土遺物

は小片のものが少量であり時期の確定は難しいが、埋土が溝と相似している点などから平安時代の前半期中には埋没した遺構群とみている。

中世から近世にかけての居住に直接関連する遺構を検出した調査区は、最北部の№７トレンチに限られる。№７トレンチでは、土壙あるいは井戸、溝状遺構、杭列などの遺構を確認している。出土した遺物から、廃絶期は江戸時代後期から近代とみられるが、成立期も近世の内と推測している。他の調査区でもこの時期は畑と、№２トレンチと№６トレンチで検出した池の遺構が中心である。

遺物　試掘調査のため、遺構の掘り込みは行っていないので遺物の出土量は少ない。その中では江戸時代後期以降のものが多く、出土遺物の大半を占めている。この時期の遺物は、№７トレンチが中心である。№７トレンチ出土の遺物は、江戸時代後期の西高瀬川開削と、この地域の再開発に関連すると理解される。また、平安時代前期の遺物の出土もある。この時期の遺物は、№５トレンチの遺構や№３トレンチの整地層から出土しており、№７トレンチの遺物包含層からも混入遺物として出土している。しかし、南部に位置する№１・２・６の３トレンチからは、ほとんど出土していない。同一の遺跡内ではあっても、居住地区と非居住地区という土地利用の区別を反映している可能性が大きい。遺物を型式的にみると平安京Ⅰ期からⅡ期新（９世紀から10世紀前葉）に比定できるものが中心であり、Ⅲ期に属するものは今回の調査ではほとんど出土していない。

平安時代後半以降から中世および近世前半とみられる遺物は、12世紀代、15世紀後半代、17世紀代に比定できるものが出土しているだけであり、その他の時期のものはほとんどみられなかった。

出土量が限定的であるが、このような遺物の出土状況は、朱雀院の構造やその盛衰を明確に反映したものと考えている。

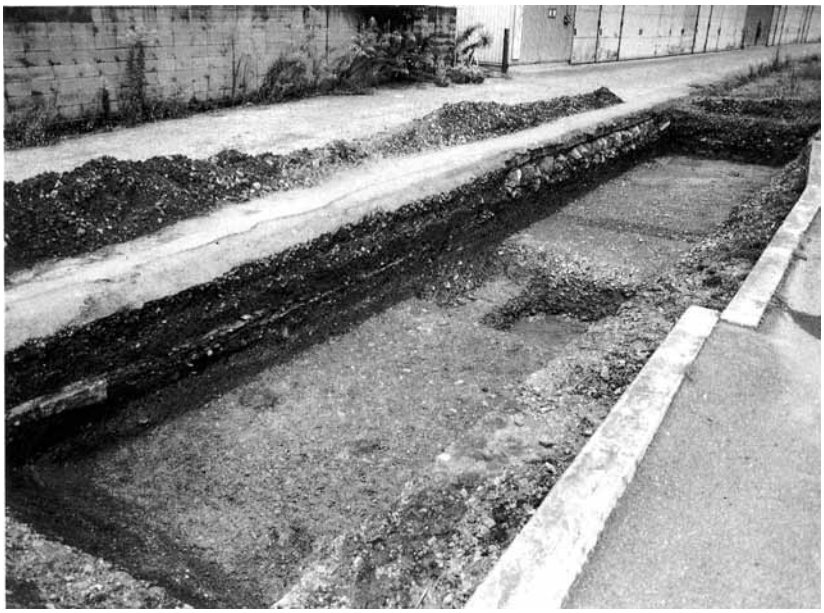


図113　№５トレンチ全景（南東から）

小結　今回実施した試掘調査によって、平安時代前期の早い時期には形成されたとみられる遺構面が、良好な状態で遺存することが明らかとなった。この遺構面には比較的規模の大きい池が形成されている。その北側の一町部分では、居住空間的様相を示す遺構、遺物を数多く検出しており、院内の北半部の情報を得ることができた。

対象敷地内において全面的な発掘調査を実施することができるならば、文献資料からでは推測の域をでない平安時代前期における院内北東半部の内部構造を、園池を伴った形で具体的に把握できるだろう。なお、レンガ造り倉庫のために試掘調査を実施できなかった敷地中央部から北東部については倉庫の基礎の深度が現地表下１ｍほどであり、既試掘調査区域と同様に平安時代の遺構面は良好な残存状況にあるとみて良い。全域を対象地とした発掘調査が必要であると考える。

（小森俊寛）

Ⅲ　その他の遺跡

8　尊勝寺跡・最勝寺跡１（図版１）

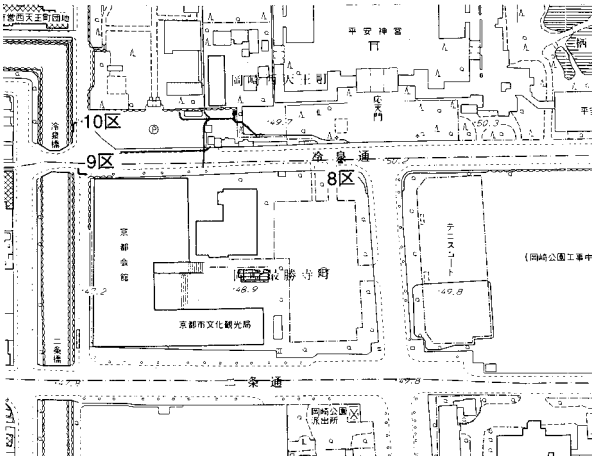


図 114　調査位置図（1 : 5,000）

経過　本調査は、岡崎公園内地中化工事に伴う立会調査である。調査地は、京都会館北側の冷泉通および京都市駐車場公社バス駐車場内で、六勝寺の尊勝寺寺域中央東部地区にあたる。

調査は、工事区間が縦横に及ぶため、各工事区間ごとに調査区番号をふり、計 10 箇所を対象に調査を行った。なお、1995 年に行った発掘・立会調査[註1・2]では、尊勝寺の伽藍を構成する諸建物を良好な状態で検出している。そのため、埋設工事の際に特に重要な箇所については、一部発掘調査も行った。

遺構　土層の堆積状態は各地点で異なり、ここでは１区中央付近についてのみ記す。現地表下 25cmが道路の舗装で、以下は近代以降の盛土層が厚さ 50cm、暗灰黄色砂泥層（2.5Y4/2）が厚さ 10cm、暗オリーブ褐色砂泥層（2.5Y3/3）が厚さ 20cm、黒褐色砂泥層（10YR2/3）が厚さ 20cm、黒褐色泥砂層（10YR3/2）が厚さ 20cmの順に堆積する。

検出した遺構の時期は平安時代後期、鎌倉時代、江戸時代および時期不明である。以下、時代別に主要な遺構を列記する。なお､古墳時代初頭の遺物包含層を１区の中央付近で検出している。

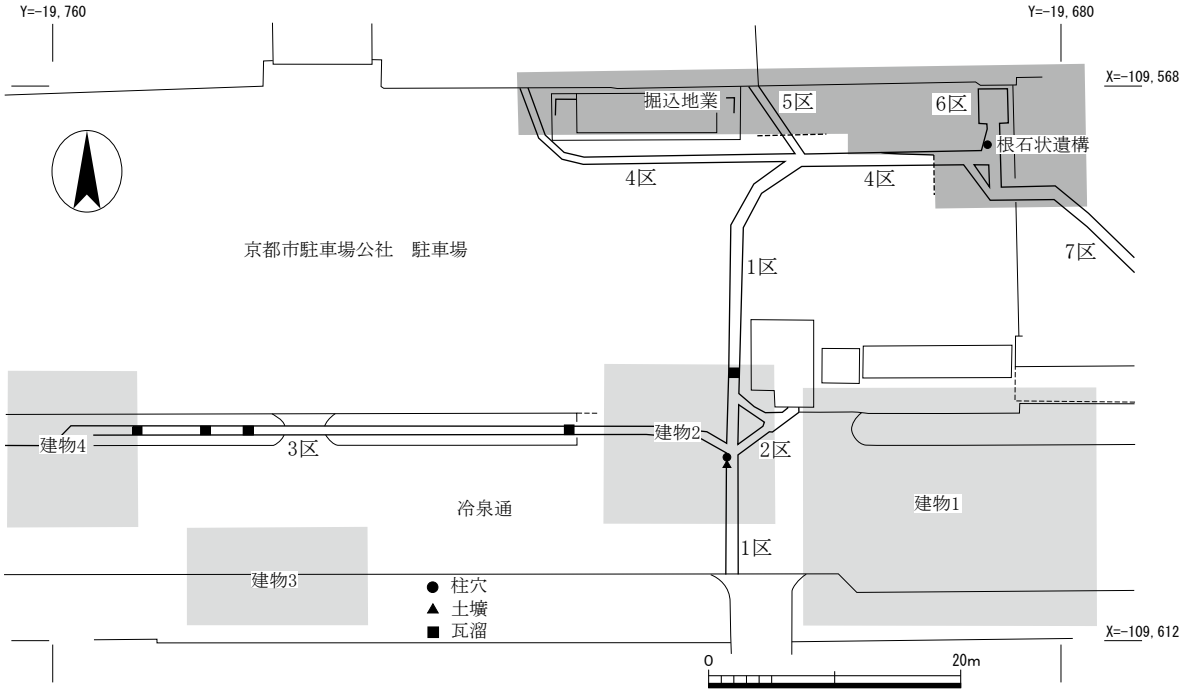


図115　3～7区検出遺構位置図（1:600）

平安時代後期　１区では、建物２（註２で報告した建物番号、建物番号については以下同じ）の基壇に関連するとみられる整地層、土壙２基、瓦溜１基を検出した。２区では、１区と同様の整地層を、３区では瓦溜４基を検出した。４～６区では、東西方向および４区の東部で南に屈曲する掘込地業を、この地業が屈曲する付近では、花崗岩の根石状遺構を検出した。掘込地業は、東西 36 m以上ある。

鎌倉時代　８区の神宮道交差点南西で土壙状遺構１基を検出した。

江戸時代　建物２の北端付近で東西３m以上の瓦溜などを検出した。

時期不明　１区と２・３区が分岐する地点で柱穴２基を検出した。

遺物　瓦を中心に整理箱で 47 箱出土した。その時期は古墳時代、平安時代中期、同後期、鎌倉時代、江戸時代である。

古墳時代の遺物は土器のみがあり、１区の遺物包含層から庄内式併行期の甕が少量出土した。

平安時代中期の遺物は、４区東方の整地層に混入した状態で黒色土器椀などがわずかに出土している。

平安時代後期の遺物は瓦類、土器類、鉄製品（釘）があるが、瓦溜から全出土量の大部分を占める瓦類が出土した。瓦類には軒丸瓦 14 点、軒平瓦 10 点があり、「×」印のヘラ記号のある瓦もある。土器類には土師器、瓦器、白磁、灰釉系陶器などがある。

鎌倉時代の遺物は、８区の土壙状落込から土師器、瓦器が出土した。

江戸時代の遺物は京･信楽系陶器、土師器などの土器類を中心にして少量出土したのみである。

小結　４～６区で検出した掘込地業は、既往の調査ではまったく知られていなかった遺構である。この掘込地業は、東西方向に長さ 36 m以上を検出し、さらにその東端で南への屈曲を確認した。検出した規模、形状などからみて、何らかの建物遺構に関連する下部施設と考えられる。どのような建物になるかは、全体の規模、形状、柱配置などが不明であり今後の調査に委ねたい。また、今回の調査目的であった建物４の東限、建物２の北限については、平安時代後期以降の瓦溜や江戸時代の瓦溜あるいは工事掘削深が浅いことなどから明らかにすることができなかった。そのため、これについても今後の課題となった。　（平方幸雄）

註１　上村和直・堀内明博・吉村正親「尊勝寺跡・最勝寺跡・岡崎遺跡（95ＫＳ 62）」
『京都市内遺跡立会調査概報』平成７年度　京都市文化市民局　1996 年

註２　堀内明博「六勝寺跡・岡崎遺跡」『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所　1997 年

9　尊勝寺跡・最勝寺跡２（図版１）

経過　本調査は、電気通信管路新設撤去に伴う立会調査である。調査地は、京都会館北側の冷泉通および平安神宮駐車場内に位置し、尊勝寺寺域の中央東側から最勝寺北限にかけての一帯に相当する。

調査は、工事区間が４箇所に分かれるため、それぞれに調査区番号をふり実施した。なお、1995年に行った発掘・立会調査[註]で尊勝寺寺域内で検出した建物１の西端部分が工事区域にかかるため、その部分については埋設工事の際に一部発掘調査も行った。

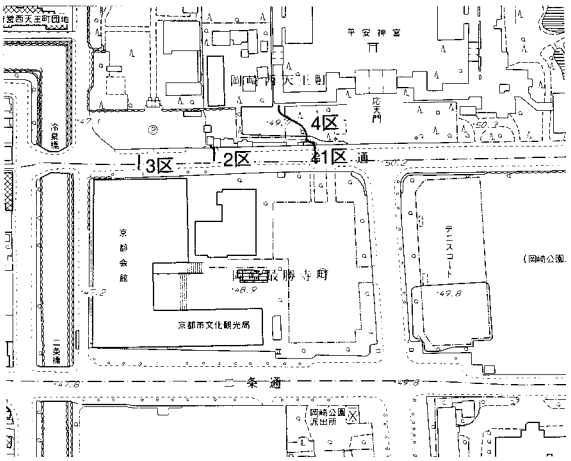


図116　調査位置図（1：5,000）

遺構　土層の堆積状態は、１区とそれ以外で異なり、ここでは１区以外について記す。現地表下25cmまでが道路の舗装、以下は上から、近代以降の盛土層が厚さ50cm、暗灰黄色砂泥層（2.5Y4/2）が厚さ10cm、暗オリーブ褐色砂泥層（2.5Y3/3）が厚さ20cm、黒褐色泥砂層（10YR2/3）が厚さ20cm、黒褐色泥砂層（10YR3/2）が厚さ20cmの順に堆積する。なお１区では現地表下52cmで平安時代後期の遺構面となるのに対し、それ以外では１ｍを越えないと遺構面が確認できなかった。このことはこれまでの調査成果と符合する。

検出した遺構の時期は、平安時代後期と時期不明である。

平安時代後期の遺構は、２区で南北方向の雨落溝を１条、１区北端歩道脇と３区北端歩道脇で瓦溜を各１基ずつ検出した。雨落溝は河原石を用いた石組みで、東西各々３石を敷き並べているが、溝底には石の敷設は認められなかった。溝幅は1.65ｍ、深さ0.2ｍある。

時期不明の遺構は、１区と４区の接続部で落込２基と、４区の中程で土壙状遺構２基を検出した。

遺物　整理箱で９箱出土し、平安時代後期の瓦と土師器および室町時代の土師器である。遺物の大半は瓦溜から出土した瓦類であり、これには軒丸瓦２点、軒平瓦１点がある。

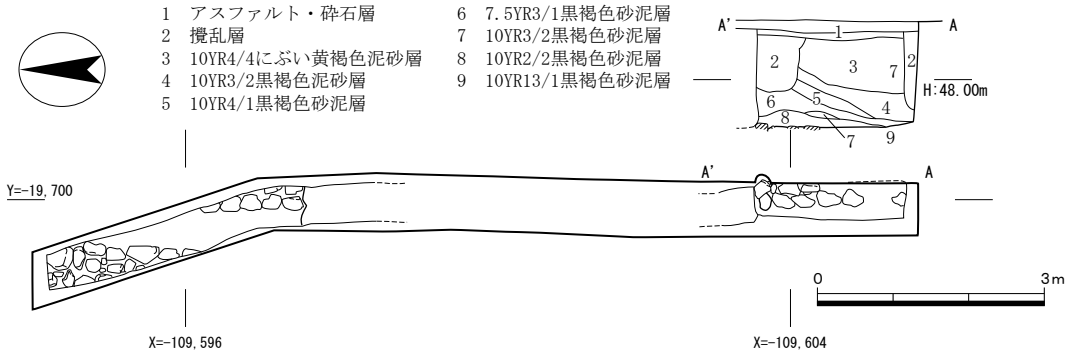


図117　2区雨落溝実測図（1:100）

小結　尊勝寺寺域内で検出した雨落溝は、建物１（本概要　第２章Ⅲ－８「尊勝寺跡・最勝寺跡１」の図 115 で図示した建物番号）の西端施設である。この雨落溝は２区よりもさらに北側へ延長しており、昨年来の調査成果からみて、建物１は南北棟が考えられる。　（平方幸雄）

註　堀内明博「六勝寺跡・岡崎遺跡」『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所　1997 年

図 118　建物１西辺雨落溝北側（南から）

図 119　同雨落溝南側（北から）

10　法住寺殿跡（図版１）

経過　本調査は、京都市立一橋小学校プール改築工事に伴う試掘調査である。運動場北辺部に東側から№１～３トレンチとして３箇所の調査区を設定し、遺構の遺存状況を確認するために調査を実施した。

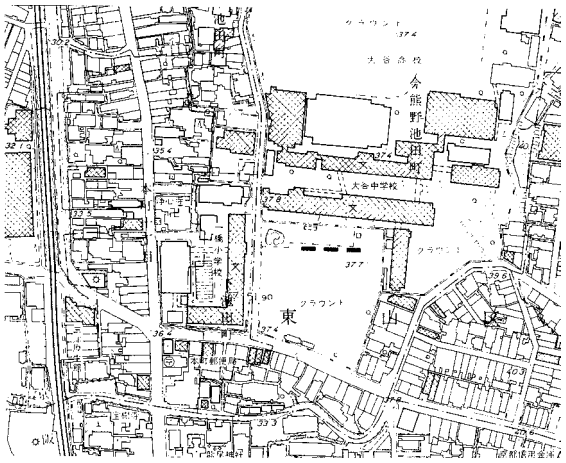


図 120　調査位置図（1：5,000）

遺構・遺物　№１トレンチは、現地表下 1.1 ｍにおいて厚さ 15㎝前後の中世遺物包含層を検出し、この下端で遺構面を確認した。遺構面は、現地表下約 1.2 ｍ前後にある。この遺構面から円形（検出部で 6.5 ｍ以上）の大型遺構を検出した。中世遺物包含層からは、土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器、青磁、瓦などが出土している。室町時代後半期のものが中心だが平安時代後期から鎌倉時代の瓦などの遺物も数多く含まれていた。弥生土器片とみられるものが少数含まれている。

№２トレンチは、現地表下約 1.2 ｍで遺構面を検出。Ｐ it か土壙とみられる遺構を確認し、西部では土取穴とみられる大型の落込を検出している。近世後半の土取穴の可能性がある。混入遺物として宋の青白磁片が出土している。

№３トレンチは、現地表下約 1.1 ｍ前後で遺構面を検出。西側に、地山土と暗褐色土層が混じり、拳大の礫が含まれる掘込地業を確認した。この上面で柱穴の可能性がある遺構やＰ it を検出している。この遺構面は№２・№１トレンチで検出している遺構面と連続するとみて良いだろう。地業は中世前半以前（平安時代後期から鎌倉時代）と考えられる。地業上面から平安時代後期の瓦や、土師器小片が出土している。

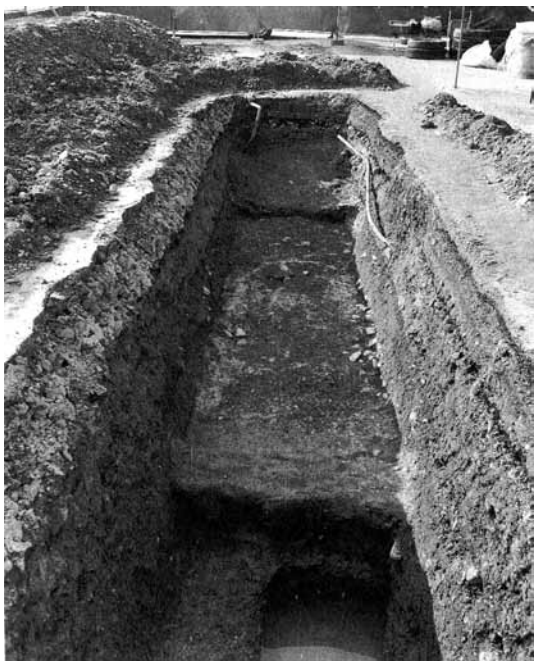


図 121　№３トレンチ全景（東から）

小結　各調査区において現地表（グランド）下 1.2 ｍ前後で、遺存状態が良好な遺構面を確認することができた。検出した遺構面より上の土層は、ほぼ水平堆積する中世から近代（現代）の土層群である。東側№１トレンチでは、遺構面直上に中世遺物包含層が堆積している。その出土遺物から、この遺構面は中世前半以前と判断できる。この遺構面で各種の遺構を確認している。

№３トレンチ中央部から西部で確認した遺構は、平安時代後期の寺院建築などの基礎とみられる掘込地業が確認された。法住寺殿の最勝光院あ

るいは法性寺子院に関連する建物の地業の可能性がある。

№１トレンチで確認した径約８ｍと推定される円形遺構は、中世遺物包含層に混入した古い時期の遺物と関係した可能性があり、弥生時代か古墳時代の遺構とみられる。

遺構面は全方向に広がるとみられ、一部土取穴による削平部分もあるが、残存状況は良好といえる。建設工事前段階での本調査が必要である。

なお、一橋小学校敷地は京都市の遺跡台帳では法住寺殿推定範囲内（南辺を一橋小学校の南側の道路においている）に含まれるとされる。しかし、『京都市の地名』（日本歴史地名大系 27、平凡社）などによれば、法性寺の寺域は一ノ橋を含むとされる。当地域での既発掘調査の報告では、法住寺殿南部に位置する最勝光院に関連付けられている。本格的な発掘調査が実施できれば、この問題に解答を出せる成果も期待できよう。　（小森俊寛）

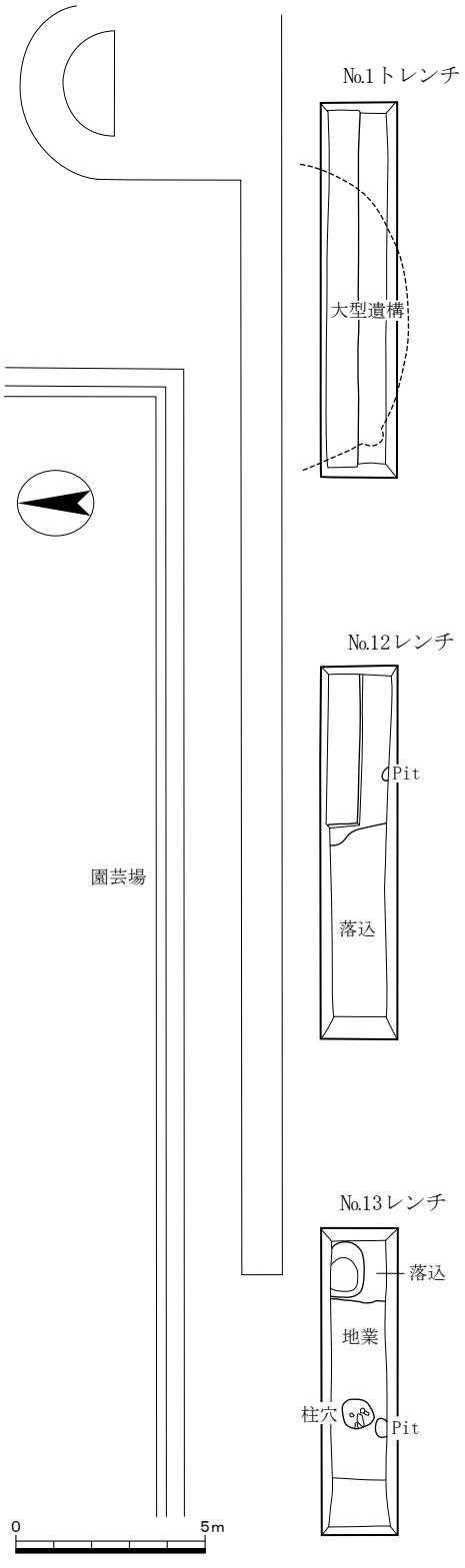


図122　遺構平面図（1:200）

11　六波羅政庁跡（図版１）

経過　京都国立博物館の敷地は、平安時代後期の法住寺殿跡、鎌倉時代の六波羅探題南庁跡、桃山時代には現存するものより広大であった方広寺跡など、歴史的にも著名な３遺跡が重複する地区に位置する。

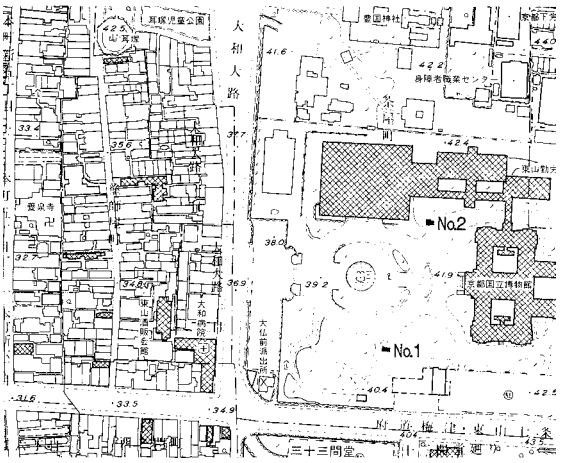


図 123　調査位置図（1 : 5,000）

同博物館で、新館などの大規模な建て替え工事が計画されたため、試掘調査を行った。建て替え工事は南北の地区に分かれて行われる予定であり、両地区にそれぞれ調査区を設定して実施した。その結果、２箇所の調査区ともに各時代の遺構の遺存状況は良好であった。これに既調査や同敷地内における埋設管敷設工事などの立会調査の情報を加えて、建て替え工事予定地内の遺構の遺存状況はさらに明確になった。

南門の北西近くに設けた調査区を№１トレンチ、北部の新館の南東角近くに設定した調査区を№２トレンチとした。

遺構・遺物　№１トレンチでは、現地表下 0.2 ～ 0.3 ｍで黄褐色の泥砂土を主体とする厚さ１ｍを越える厚い整地土層上面を検出した。この土層からは、平安時代後期とみられる瓦をはじめ中世から近世に比定し得る遺物も出土しているが、近代の遺物も含まれており、明治時代における京都国立博物館建設に伴う整地土層と理解できる。この近代の整地土層は、№２トレンチでも現地表下 0.2 ～ 0.3 ｍで上面を検出しているが、厚さが 0.5 ～ 0.6 ｍであり、№１トレンチ地点に比べるとやや薄い。難波洋三氏（同博物館考古室）によれば、両調査区間の既埋設管敷設工事でも確認できたとのことであり、両調査区間では連続する共通の整地土層とみてよいだろう。

西門付近の既発掘調査地でも、0.3 ～ 0.5 ｍの厚さではあるが同様の土層が確認されている。これらの状況と地形からみて、博物館の建設に際して、現本館付近から西側の敷地全域に対して整地作業が行われたものとみられる。なお、両調査区間での厚さの差異は、南北方向での比高差を反映したものと理解してよいだろう。

この近代の整地土層下では、両調査区ともに近世から近代初頭の遺構面を検出している。この遺構面は、№１トレンチでは現地表下 1.5 ～ 1.6 ｍと深いが、№２トレンチでは現地表下 0.8 ｍ前後と比較的浅い。上面の様相も若干異なり、№２トレンチでは畑の畝とみられる高まりを３～４条検出しているが、№１トレンチでは確認できなかった。

№２トレンチでは、近世から近代初期の遺構面下で、この面のベース土層を含めて計３層の遺物包含層を確認した。畑の畝を形成する土層を入れると４層になる部分もあるが、基本的には３層である。これらの遺物包含層下は、淡黄褐色泥砂～粘質土を主体とする地山（自然堆積層）である。ただ、この地山面も平坦で水平に近い面を形成しており、削平や整地作業で造り出された

面の可能性が高い。

№２トレンチでは、ほぼ水平に堆積するこの３層の遺物包含層は、暗褐色～暗茶褐色の類似した色調を呈する。出土遺物は、上層で中世から近世初頭とみられる土師器片や瓦片が、中層からは土師器皿、瓦器鍋・釜、焼締陶器甕など鎌倉時代後半期と推定できる遺物が、下層からは平安時代末期から鎌倉時代とみられる土師器皿がそれぞれ出土している。これらの点からこの３層に関しては、上層が方広寺、中･下層が法住寺殿あるいは六波羅探題に関連する遺物包含層であり、それぞれに関連する整地土層とみることが可能である。

№１トレンチでは近世初頭以降の遺構面が攪乱などを受けた部分がなく、地山に達するまでの掘下げは遺構面を破壊する事になるので、北壁沿いにサブトレンチを入れて下層の確認を行うにとどめた。№２トレンチの上・中層に対応する土層は確認したが下層と地山に関しては未確認である。上層に対応するとみている土層からは、近世初頭の土器、陶磁器片が少量出土している。中層に対応するだろう土層からは、中世の土師器皿片が少数と鉄滓片が多く出土している。この土層は、№２トレンチの中層とは土質がまったく異なり炭を主体とする土層であり、大きな遺構内堆積土の可能性が高いが、時期的には対応するものと考えておいてよいだろう。

西門付近の既発掘調査では、近代整地土層と地山上面との間に方広寺の整地土層を含めて３層の遺物包含層が検出されている。これらの３層の土層は、今回の№２トレンチの上～下層の３層に対応する土層と理解される。これらのことなどから、基本的には共通した遺物包含層（整地土層）が博物館敷地西半部では、ほぼ全域に広がっているものと理解してよいだろう。既調査地では、地山直上面および各土層上面において、弥生時代から平安時代前半期および平安時代後半期から江戸時代の遺構、遺物が数多く検出されている。各時代ともに遺構や遺構面の残存状況は良好であった。

№２トレンチでは、中・下層の両上面でピット、土壙などの遺構を確認しているが、№１トレンチでは明確には確認できなかった。№２トレンチ北側拡張部の北西角で検出した、拳大の礫が入れられた遺構（大型遺構）は､中層上面から成立している。検出が一部のため確認が困難だが、単なる土壙ではなく掘込地業の一部ともみられる。

小結　新館などの、地山面より深い基礎掘削を行って建て替えた現代建築物以外の、本館付近から西側の博物館敷地内には、周知の３遺跡を中心にした古代から近世の遺構が、比較的良好な状態で残存すると推定できる。現代建物による遺跡破壊が明確な部分以外の建設予定地域に関しては、十全の遺跡調査が必要である。残存が推定される遺構面は、地山上面および３層の遺物包含層各上面の合計４面である。　（小森俊寛）

12　醍醐廃寺（図版２－４・36）

経過　この調査は、醍醐市営住宅の建て替え事業に伴う立会・試掘調査である。対象地は、市営住宅中団地の全域および東団地の一部である。

この地は、木村捷三郎氏らにより白鳳期の軒瓦が採集されたことで、当該期の寺院跡の存在が想定され、醍醐廃寺として京都市遺跡地図台帳に登録されている。

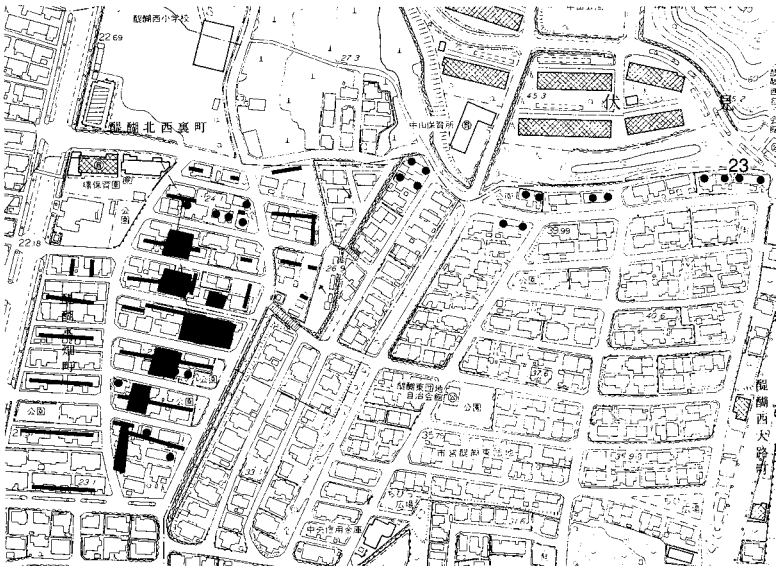


図 124　調査位置図（1 : 5,000）

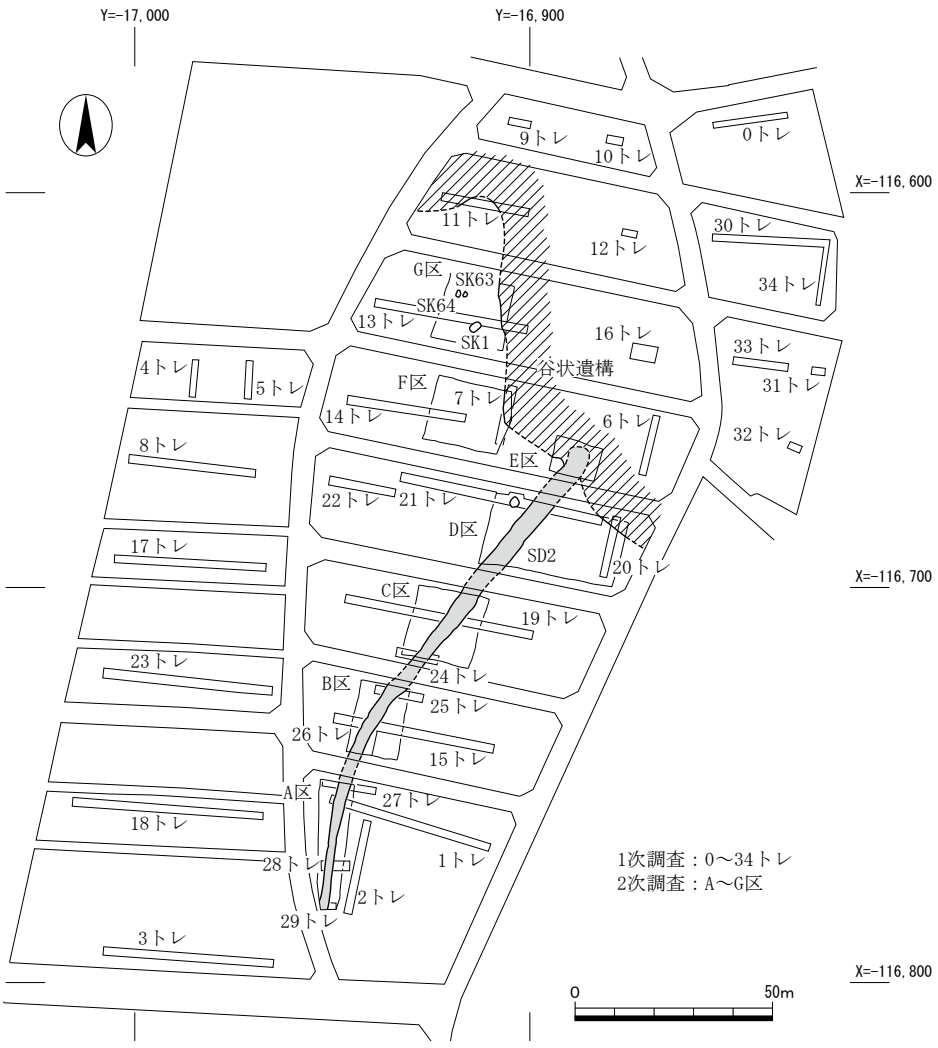
調査は、４月 26 日より先行解体に伴う立会調査から始め、次いで試掘調査に入った。７月８日から８月９日まで、第１次試掘調査（以下、１次調査）を行った。次いで、８月 13 日から 10 月 11 日にかけて、第２次試掘調査（以下、２次調査）を行った。

調査の結果、想定していた白鳳期の醍醐廃寺の遺構そのものは、検出することはできなかった。しかし、同時期の丸・平瓦片や土師器、須恵器が出土した。また、平安時代の軒平瓦や緑釉陶器などの遺物をＳＤ２南部で比較的まとまって検出した。さらに、鎌倉時代に属する軒平瓦や溝状遺構を東団地立会で検出、またＧ区では土壙墓を検出した。そして、桃山時代と考えられる南北 140 ｍを越える堀もしくは溝を検出した。

遺構　調査地は、旧市営住宅建設に伴う造成時か、それ以前に大規模な削平を受け、遺構も多くが消失していることが判明した。したがって、基本層序も造成以前に存在していた谷の埋土とその上層の盛土層がみられる程度で、現代盛土層以下にはいわゆる地山が露出する。今回検出した遺構は地山を切って構築されたものであり、深い遺構が削平を免れて残存していたものである。以下に、基本層序と検出した主な遺構を個別に記す。

調査地は、山科盆地の南を画する中山から南に延びる緩やかな丘陵上と、そこから西に派生する低位段丘上に立地する。丘陵上の立会地点での現地表は標高 39 ～ 40 ｍ、西の低位段丘上の調査地点の標高は 23 ～ 24 ｍある。丘陵を形成するのは下部大阪層群の海成粘土で、立会調査ではこの地層中からマガキの化石を採取している。今回発掘調査を行ったのは西の低位段丘上で、山科盆地を南流する山科川の左岸にあたる。ここでは、下部大阪層群の上を、低位段丘層相当層が不整合に覆う。低位段丘層は下部の砂礫層と上部のシルト層からなり、シルト層は始良Ｔｎ火山灰の降灰層（≦ 10㎝）を挟在する。試掘６・７トレンチ以北で検出した谷部はウルム氷期最寒冷期の下刻による谷地形で、この部分でのシルトおよび粘土からなる遺跡の基盤層は、沖積層下

部層に相当するとみられる。どの調査区でも現代盛土層直下に遺跡の基盤層を検出するが、丘陵および低位段丘上の盛土が０～10㎝であるのに対し、北の谷部の盛土は２ｍ以上に及ぶ。また、試掘23・25トレンチ以南では市営住宅建築時かそれ以前の削平が数ｍに及ぶと思われ、低位段丘層相当層が失われ、下部大阪層群の海成粘土層が遺構検出面を形成する。

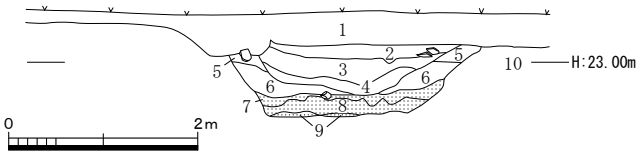


検出した遺構は65基を数える。平安時代末期から鎌倉時代の土壙ＳＫ63～65、室町時代の土壙ＳＫ１、桃山時代の溝ＳＤ２などがある。

ＳＫ63･64は、２次調査のＧ区北西部から検出した。ＳＫ63は、南北1.5ｍ、東西0.8ｍある。ＳＫ64は南北1.3ｍ、東西0.8ｍある。遺構内からは鎌倉時代の土師器の皿が数個体と鉄釘片十数個が出土した。釘は木部のコーナーにあたるところを打ち付けた状態で出土した。この遺構は木棺を伴う墓と思われる。ＳＫ65は、ＳＫ63･64の南隣で検出した。長径2.5ｍ、短径1.0ｍで、東西方向に長い不定形なものである。平安時代末期の土師器を検出したが、遺構の性格は不明である。

ＳＫ１は、１次調査の13トレンチで一部分を検出し、２次調査のＧ区で全容を検出した。位置はＧ区の南半部である。長径3.5ｍ、短径2.5ｍある不定形なものである。出土した土師器の細片から室町時代のものと思われるが遺構の性格は不明である。

ＳＤ２は、１次調査の19トレンチで部分を検出し、２次調査で対象地域での全容を確認した。Ａ区～Ｅ区に及ぶもので、規模は幅2.0～4.5ｍ、長さ140ｍ以上、深さは0.5～2.2ｍである。方向は南西から北東で、北方向から北西方向に弓状に湾曲する。溝底の標高は南端で22.9



1　10YR4/4褐色砂泥層（中礫多く含む）
2　10YR5/4にぶい黄褐色泥土層（中～巨礫含む）
3　2.5YR5/1黄灰色泥土・粘質層
4　5YR5/1灰色泥砂層（中～巨礫含む）
5　2.5YR4/3オリーブ褐色泥砂層（中礫含む）
6　2.5YR5/4黄褐色砂礫層（中礫含む）
7　2.5YR6/4にぶい黄色泥土層（小礫含む）
8　2.5YR5/2暗灰黄色砂泥層（小礫含む）
9　5YR6/2灰オリーブ色粘土層
10　地山・砂礫層
※2～6:SD2上層、7～9:SD2下層

図126　B区SD2北壁断面図（1:80）

m、北端部で21.7ｍで、高低差は1.2ｍあり、北端部に向かって深くなっている。また、幅も北端部に向かって広くなっている。これは、南に対して標高が高くなっている地形が削平されたためと考えられる。ＳＤ２は造成以後のものと改修以後のものとの２時期を確認でき、両期とも杭列を伴う。最初の時期のものは腐植土を多く含む泥土が堆積している。その堆積層上に、一部粘土状の土を貼り付け底部として、さらに両側に杭を打って裏込めをして規模縮小して２時期目の造作を行っている。これもまた、底部から堆積して浅くなっている。埋没した時期は、最上層の埋土遺物から、桃山時代と考えられる。また、ＳＤ２の最北端は調査区北東部に広がる谷状地形の肩部を切っていたことが判明した。しかし、近・現代と思われる板囲いの貯水場的な施設の一部によって北端の下層部が占められており、底部の観察はできなかった。

ＳＫ３は、１次調査で検出し、Ｄ区調査時に完掘した。平面形は円形で径1.5ｍ、深さ1.2ｍで井戸状を示す。遺物はなく、遺構の性格を判断する確定的な材料はみいだせなかった。また、南端部分はさらに南行している。Ｐitについては、Ｄ区東半部とＦ･Ｇ区で散在して検出したが、建物として復原するには至らなかった。これらの時期は近世と思われる。

また、調査区東部の試掘30トレンチには桃山時代の整地層の広がりがある。西に向かって下降する斜面となっている元の地形に盛土して水平面を造る。西端部の厚さは1.5ｍある。東西は10ｍ以上の広がりを持つ。

遺物　出土遺物は、調査面積に比して非常に少なく、そのほとんどがＳＤ２の埋土中からのものである。

白鳳期の遺物には土師器皿・甕、須恵器杯・甕・平瓶などがある。市営住宅建設時の盛土層から出土した若干の須恵器片を除いて、ＳＤ２の南端部分の埋土から出土した。

平安時代の遺物は、出土量は少ないながら前期から中期の土器と瓦が出土している。これらはＳＤ２の中央から南部にかけての埋土上層から出土した。軒平瓦は前期のもので、平安京内で出土する「大伴」「左寺」銘瓦と文様構成が酷似している。土器は土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などの破片がある。

鎌倉時代の遺物は、調査区北端Ｇ区の土壙から出土した。土師器の小皿は復原できるものもあり、木部の付着した釘も共伴している。なおＳＤ２・近世耕作土層からも小破片の土師器や瓦器が出土した。13世紀初頭のものである。また、市営住宅基礎撤去の立会調査では、奈良街道に近い北東部（立会23）で平安時代後半から鎌倉時代にかけての遺物包含層を検出し、剣頭文の軒平瓦が、土師器や瓦器とともに出土した。

室町時代の遺物は明代の輸入青磁椀・白磁椀、常滑産の焼締陶器がある。いずれも15世紀末から16世紀にかけてのものであり、ＳＤ２の埋土上層から出土した。

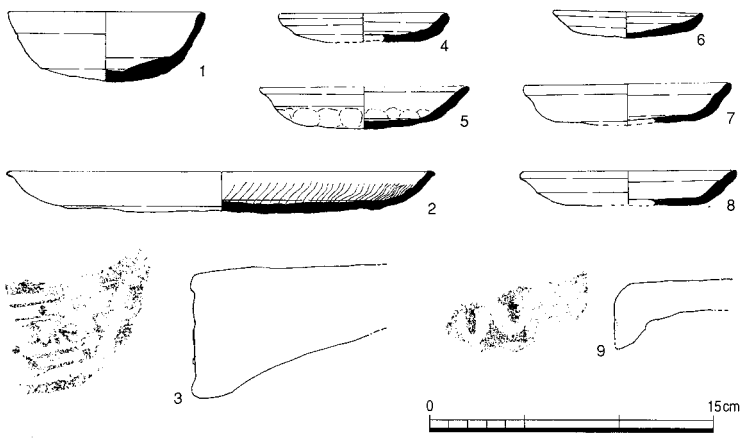


図127　出土遺物実測図（1～3：ＳＤ2、4：ＳＫ65、5：ＳＫ63、6～8：ＳＫ64、9：立会）（1：4）

桃山時代の遺物は、丹波･信楽・伊賀産の陶器や擂鉢、輸入染付椀、瓦などがある。染付椀が比較的古相のものであることから、天正期までさかのぼるものである。ＳＤ２の埋土上層および調査区北部の整地層から出土した。また木器類はＳＤ２の下層から出土しており、ＳＤ２の土留め杭、曲物の底、掛矢の頭などがある。

江戸時代の遺物は、調査区の北部の大半を占める谷部の旧耕作土から出土している。18世紀代の伊万里染付椀や、19世紀代の京・信楽系の陶器がある。

小結　今回の調査の主目的であった醍醐廃寺に関する遺構の検出はできなかった。しかし、ＳＤ２の埋土上層から７世紀代の土師器や丸・平瓦片が出土している。したがって、当該期に寺院跡などの施設があった可能性が大である。

また、ＳＤ２のＡ区上層では、平安時代前期・中期の瓦や土器が比較的まとまって出土しており、この時期に寺院などの何らかの遺構があったものと考えられる。

鎌倉時代の遺構・遺物には、Ｇ区にみられた土壙墓のほかに、東団地の立会調査地点でも鎌倉時代に属する剣頭文軒平瓦が土師器や瓦器などと共に出土している。その地点は西側に南北方向の溝状遺構を備えており、さらにその東には現地形が平坦地を形成しており、醍醐寺の子院などの存在も考えられる。

ＳＤ２は、古い時期のものは幅が広く、深いものであり、軍事的な性格の遺構（構など）の可能性も考えられる。『太閤さま軍記のうち』[註]には「醍醐惣構」の記載があり、これに関連する施設とも考えられる。また試掘30トレンチで検出した中団地東端に広がる整地層もこれに関連する可能性がある。また、新しい時期のものも出土した土器などから桃山時代には埋まったと思われる。

今後、調査地の東側、いわゆる「東団地」も建て替えが予定されている。今回の調査から、ＳＤ２より丘陵一帯を含む東側に遺構の中心部分が存在する可能性が高いと判明した。今後の調査で、各時期のこの地区の様相が明らかになることを期待したい。

（津々池惣一・内田好昭・丸川義広・能芝　勉・布川豊治）

註　『戦国資料業書（一）太閤資料集』　人物往来社　1965年

第３章　資料整理

１　保存処理

出土木製品の受け入れ状況

本年度の木製品の受け入れ状況は、大型・小型合計２現場である。内訳は、平安京右京二条二坊五町（95ＨＫ－ＩＷ)､平安京左京八条三坊十四町（95ＨＫ－ＥＩ）である。これらの遺物は、小型木製品は洗浄の後、パックして遺物整理箱に収納し、大型木製品は洗浄の後、金属プールに収納し保管している。

木製品保存処理

本年度は、前年より保存処理継続中の木製品の取り上げと、新規に保存処理を開始したものがある。本年度処理済木製品の現場は、平安京左京では84ＨＫ－ＢＣ、86ＢＢ－ＨＬ79、86ＢＢ－ＨＬ82、平安京右京では87ＨＫ－ＲＬ１、87ＨＫ－ＹＦ、86ＢＢ－ＨＲ169、その他、長岡京跡（87ＮＧ－ＰＶ)、鳥羽離宮跡（89ＴＢ－ＴＢ135）がある。

本年度の木製品処理のサイクルについて、小型含浸槽（１ｍ）の廃棄処分や、含浸槽設置棟の工事などで現在使用中の含浸槽の移動･再設置を行わねばならず、効率的な運用ができなかった。

前年度の報告で、含浸後一部の遺物に円形状の黒みを帯びた斑点のことを記したが、今回含浸の時に槽内にフックでつり下げて収納する方式を実験的に採用し、現在処理進行中であるので、処理終了時の結果を待ちたい。

金属製品の保存処理

国庫補助事業で行った常盤東ノ町古墳群（95ＢＢ－ＵＺ255）の立会調査出土の刀子のクリーニングを行った。

土層転写（遺構断面はぎ取り）

法金剛院境内（96ＨＫ－ＩＶ３)、下三栖遺跡（96ＦＤ－ＳＳ）の土層転写を行った。

修羅の保存処理

昨年より、当研究所鳥羽事務所内の敷地内に移設･水漬保管していた金閣寺出土の修羅に対し、数度にわたる水洗を実施し、表面の汚れやクラック内の砂粒を除去した。

1996年12月６日、鳥羽事務所より修羅用保存処理設備が完成した下鳥羽収蔵庫に、大（ケヤキ材)・小（クリ材）２基の修羅を移送（図128・129）し、含浸処理槽内で加温によるアク抜きを実施するとともに、1997年３月中旬まで写真測量、含水率測定（図130)、クラック計測（図131)、重量測定などの事前の各種調査を行い、本格的な保存処理に移った。同年３月17日に保存処理剤である低分子ポリエチレン・グリコール（ＰＥＧ400）の投入を行い、大・小とも５％の濃度で含浸処理進行中である。保存処理中も月１回のペースでクラック計測・ねじれ計測・重量測定、３ヶ月に１回に写真測量を行う予定である。

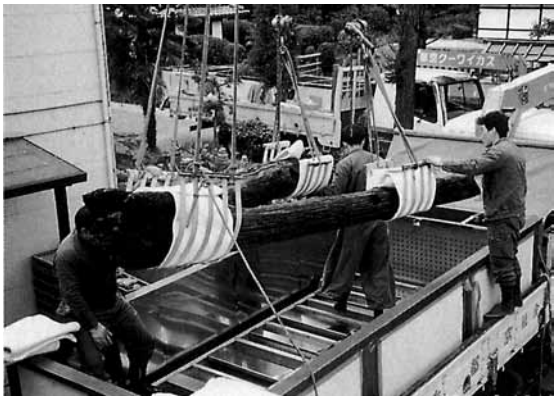


図 128　鳥羽事務所搬出

図 129　含浸処理槽の設置

図 130　含水率測定

図 131　クラック計測

また、この間 1996 年８月５日に第２回修羅保存処理検討委員会を開き、同年 10 月 26 日には市民を対象に見学会を開いた。　（卜田健司）

２　復原彩色

本年度の復原彩色は遺物復原のみで総計 330 点あった。そのうちの 263 点は長岡京跡水垂遺跡報告書のためのものである。内訳は下表のとおりになる。

表１　平成８年度の復原彩色件数一覧表

内　容	調査記号	点数	内　容	調査記号	点数
国庫補助概報	96 BB－RH 224	5	展示貸出	93 RT－FS	2
調査概要	95 MK－HO 30	1		93 NG－RI	1
報 告 書	90 ～ 95 NG－MI	263		94 KS－BA5	2
展示貸出	91 KS－KG	1		95 BB－HL 243	51
	92 HK－PN	4			

（出水みゆき・中村享子）

第４章　普及啓発事業等報告

１　財団法人京都市埋蔵文化財研究所設立二十周年記念事業の実施

（１）　特別展示「京都発掘 20 年」の開催

埋蔵文化財研究所の 20 年間の調査成果を広く市民の方々に公開するため、出土遺物と写真解説パネルによる特別展示を開催した。

会　場　　京都市考古資料館

期　間　　平成８年 11 月１日から１年間

（２）「つちの中の京都」～リーフレット京都合冊～の刊行

市民の方々に埋蔵文化財および京都の歴史について理解を深めて頂くため、平成２年から隔月で発行してきた「リーフレット京都」を平成８年３月まで発行したもの（№１～86 号）を合冊し､刊行するとともに関係機関等へ配布した。（Ｂ５版･186 頁､11 月１日　1,000 部発行）

（３）　記念講演会の開催

埋蔵文化財研究所の設立二十周年を記念するとともに、広く市民の方々に対し埋蔵文化財保護の普及啓発を図るため、記念講演会を開催した。

日　時　　平成８年 11 月 23 日（土）　午後２時～４時

会　場　　京都会館会議場（参加者　約 300 名）

講　演　　「遺跡でなにがわかるか」　奈良国立文化財研究所　所長　　田　中　　琢

主　催　　京都市・財団法人京都市埋蔵文化財研究所

後　援　　京都新聞社・ＫＢＳ京都・ＮＨＫ京都放送局

（４）　記念誌「京都発掘 20 年」の刊行

埋蔵文化財研究所の 20 年間の事業内容および調査研究のあゆみをまとめた記念誌を刊行し、関係機関等へ配布した。（Ａ４版・96 頁、11 月 30 日　1,000 部発行）

２　普及啓発および技術者養成事業

（１）「 '96 発掘調査成果写真展」の開催

期　間　　平成９年２月 25 日～３月９日（12 日間）

会　場　　京都市考古資料館（入場者　861 名）

主　催　　京都市・財団法人京都市埋蔵文化財研究所

後　援　　京都新聞社・ＫＢＳ京都・ＮＨＫ京都放送局

（２）　現地説明会等の開催

ア　平成８年４月７日「東寺領八条院町（平安京左京八条三坊十四町)」（参加者　約 200 名）

イ　平成８年４月 20 日「平安宮釜所・侍従所跡」　（参加者　約 350 名）

ウ　平成８年５月２日「平安宮跡（内酒殿出土木簡）」報道機関発表

エ　平成８年６月 23 日「平安京右京一条三坊二町」　（参加者　約 200 名）

オ　平成８年９月７日「上ノ庄田瓦窯跡」　（参加者　約 100 名）

カ　平成８年 10 月 26 日「京都市指定文化財　鹿苑寺出土の修羅一般公開」（参加者　約 100 名）

キ　平成８年 11 月 17 日「法金剛院旧境内跡」　（参加者　約 100 名）

ク　平成８年 11 月 30 日「平安京右京六条一坊」　（参加者　約 100 名）

ケ　平成９年２月９日「法金剛院旧境内跡」　（参加者　約 300 名）

コ　平成９年３月８日「京都大学西部構内遺跡」　（参加者　約 200 名）

（３）　文化財調査報告書等出版物の刊行

ア「木村捷三郎収集瓦図録」

イ「平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要」

ウ「研究紀要　第３号」

エ「京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－」（調査報告第 14 冊）

オ「特別史跡特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園」（調査報告第 15 冊）

カ「平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要」

（４）「リーフレット京都」（№87 ～№98）の発行

・№87　京都の遺跡１　「先土器・縄文時代」

・№88　発掘ニュース 19「日ノ岡堤谷窯跡の発掘」

・№89　京都の遺跡２　「弥生時代」

・№90　仏教・寺院５　「西本願寺境内の庭園遺構」

・№91　京都の遺跡３　「古墳時代」

・№92　発掘ニュース 20「八条院町跡出土の漆器」

・№93　京都の遺跡４　「飛鳥・奈良時代」

・№94　発掘ニュース 21「平安京右京二条二坊のまじない遺構」

・№95　京都の遺跡５　「長岡京時代」

・№96　発掘ニュース 22「発掘成果をふりかえって　1996」

・№97　京都の遺跡６　「平安時代前期・中期」

・№98　土器・瓦 13　「土製小壷と茶の湯の“つぼつぼ”」

（５）　京都市遺跡巡り「嵯峨・御室の遺跡見学会」の開催

日　時　　平成８年 10 月 19 日（土）　午後１時～４時

内　容　　第１コース「嵯峨地域」

嵯峨小学校でコースおよび出土遺物の説明、展示を行った後、清涼寺（嵯峨釈迦堂）、大覚寺（出土遺物の説明）、名古曾滝、嵯峨七ツ塚、大覚寺１号墳（円山古墳）を巡り、各箇所で説明を行った。（参加者 60 名）

第２コース「御室地域」

御室小学校でコース説明の後、仁和寺南大門、八角円堂･僧坊、双ヶ岡古墳公園、法金剛院、ＪＲ花園駅前発掘調査現場（法金剛院境内・遺物展示）を巡り、各箇所で説明を行った。

（参加者 60 名）

（６） 研究会等への派遣

ア　平成８年４月～平成９年３月（毎月開催）　於：向日市（京都府埋文調査研究センター）

「長岡京連絡協議会」　調査部調査課　課長補佐　長宗繁一

〃　主任　木下保明

〃　〃　鈴木廣司

〃　〃　吉崎伸

〃　上村憲章

イ　平成８年５月 25 日・26 日　於：東京都（早稲田大学）

「日本考古学協会第 62 回総会」　調査部調査課　網伸也

〃　長戸満男

ウ　平成８年５月 27 日・28 日　於：東京都（三田共用会議所）

「文化庁埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究協力者会議」

調査部資料課　第２係長　辻純一

エ　平成８年６月 22 日・23 日　於：東京都（専修大学）

「第５回古代交通研究大会」　調査部調査課　小森俊寛

オ　平成８年７月５日・６日　於：奈良市（奈良国立文化財研究所）

「第８回埋蔵文化財写真技術研究会」

調査部資料課　村井伸也

〃　幸明綾子

カ　平成８年７月９日・10 日　於：東京都（三田共用会議所）

「文化庁埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究協力者会議」

調査部資料課　第２係長　辻純一

キ　平成８年７月 13 日・14 日　於：宮津市（ホテル北野屋）

「京都府埋蔵文化財研究会第４回大会」

調査部調査課　主任　百瀬正恒

〃　〃　丸川義広

〃　内田好昭

〃　山本雅和

ク　平成８年９月 17 日・18 日　於：東京都（文部省）

「文化庁埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究協力者会議」

調査部資料課　第２係長　辻純一

ケ　平成８年９月 28 日　　於：奈良県香芝市（ふたがみ文化センター）
「第 20 回近畿旧石器交流会」　調査部調査課　内田好昭
調査部調査課　高橋潔

コ　平成８年 10 月４日　　於：向日市（市民会館）
「第２回近畿ブロック研修会」　調査部調査課　主任　吉村正親
〃　〃　木下保明
〃　高橋潔
〃　竜子正彦
〃　高正龍
〃　南孝雄
〃　上村憲章
〃　真喜志悦子
〃　鎌田泰知

サ　平成８年 11 月 18 日・19 日　　於：東京都（三田共同会議所）
「文化庁埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究協力者会議」
調査部資料課　第２係長　辻純一

３　京都市考古資料館状況報告

（１）速報展の実施

ア「内酒殿の木簡発見」（平成８年５月３日～５月６日）
平安宮跡の発掘調査で井戸跡から出土した「内酒殿」、「弘仁元年十月十八日」等が記された木簡を展示

イ「内酒殿跡の調査」（平成８年５月８日～８月 29 日）
平安宮跡の発掘調査で出土した墨書された灰釉陶器、緑釉陶器、緑釉瓦などを展示

ウ「法金剛院旧境内出土の瓦経」（平成８年８月 30 日～ 10 月 15 日）
法金剛院旧境内の調査で出土した瓦経、瓦類などを展示

エ「上ノ庄田瓦窯の調査」（平成８年 10 月 19 日～ 12 月１日）
上ノ庄田瓦窯の調査で出土した軒丸瓦、軒平瓦および故木村捷三郎氏所蔵の写真資料（昭和 15 年実施の発掘調査風景）などを展示

オ「平安京右京六条一坊の遺跡と遺物」（平成８年 12 月３日～平成９年２月２日）
平安京右京六条一坊の調査で出土した緑釉陶器、灰釉鳥形鈕蓋および石帯の一部（「丸鞆」、「巡方」）などを展示

カ「植物園北遺跡の調査」（平成９年２月４日～平成９年３月 30 日）
植物園北遺跡の調査で出土した弥生時代末から古墳時代初頭の庄内式土器、在地の模倣土器などを展示

（２）第17回京都市考古資料館小・中学生夏期教室の開催

期　間　平成８年８月６日～９日

ア　小学生夏期教室　８月６日・７日

第１日（児童のみ　参加者41名）

９：30～11：30　資料館見学、瓦の拓本の実習

第２日（親子　参加者37組）

９：30～11：30　古墳見学（甲塚古墳、蛇塚古墳の見学および出土遺物の説明）

イ　中学生夏期教室　８月８日・９日

第１日（参加者77名）

９：30～11：30　資料館見学、瓦の拓本の実習

第２日（参加者72名）

９：30～12：00　上ノ庄田瓦窯跡で発掘調査および遺物の水洗いの体験学習

ウ　夏期教室拓本・写真展の開催

期　間　平成８年８月17日～９月１日

会　場　考古資料館１階

（３）　文化財講座の開催

平成８年度の連続講座では、従来の京都市域の発掘調査結果報告と併せて、20年にわたる発掘調査の中で各講師が大切に育んできたテーマについて「私の研究レポート」として発表する。

ア　第90回　平成８年４月27日

「平成７年度京都市域の調査成果」　調査部調査課　課　長　鈴木久男

連続講座－私の研究レポート－講座１

「卵形遺物をもとめて」　考古資料館　主席学芸員　峰巍

（受講者90名）

イ　第91回　平成８年５月25日

「平安京右京九条二坊の調査」　調査部調査課　南孝雄

連続講座－私の研究レポート－講座２

「中世平瓦の製作技法について」　調査部調査課　東洋一

（受講者84名）

ウ　第92回　平成８年６月22日

「淀水垂遺跡の調査」　調査部調査課　吉崎伸

連続講座－私の研究レポート－講座３

「初期京焼について」　調査部担当課　課　長　永田信一

（受講者95名）

エ　第93回　平成８年７月27日

「北白川廃寺塔跡の調査」　調査部調査課　主　任　吉村正親

連続講座－私の研究レポート－講座４
「京都北山の遺跡」　調査部調査課　津々池　惣　一
（受講者 94 名）

オ　第 94 回　平成８年９月 28 日
現地講座「二条城の石垣」　調査部調査課　南　出　俊　彦
（受講者 108 名）

カ　第 95 回　平成８年 10 月 26 日
「日ノ岡堤谷須恵器窯跡の調査」　調査部調査課　主　任　丸　川　義　広
連続講座－私の研究レポート－講座５
「平安時代末期の墓制について」　調査部調査課　小檜山　一　良
（受講者 89 名）

キ　第 96 回　平成９年１月 25 日
「平安京左京北辺三坊（新町小学校内）の調査」
調査部調査課　主　任　鈴　木　廣　司
連続講座－私の研究レポート－講座６
「久我殿について」　調査部調査課　課長補佐　長　宗　繁　一
（受講者 80 名）

ク　第 97 回　平成９年２月 22 日
「西本願寺境内の調査」　調査部調査課　近　藤　知　子
連続講座－私の研究レポート－講座７
「写真資料のデジタル化について」　調査部資料課　宮　原　健　吾
（受講者 94 名）

ケ　第 98 回　平成９年３月 22 日
「平安京右京二条二坊（朱雀第四小学校内）の調査」
調査部調査課　網　伸　也
連続講座－私の研究レポート－講座８
「中国東北地方高句麗遺跡の踏査について」
調査部調査課　高　正　龍
（受講者 95 名）

（４）　その他普及啓発

１階「情報コーナー」において、「リーフレット京都」の配布をはじめ、パソコン、レーザーディスクおよびビデオによる展示資料・遺跡などの紹介を行うほか、次の参考資料を整備し利用に供している。

ア　考古学・日本歴史関係図書

イ　府下および近県の博物館施設等のパンフレット、講演会資料

ウ　発掘調査、現地説明会の資料

エ　発掘調査関連掲載の新聞記事

（５）　考古資料の貸出

ア　継続貸出分　　28 件　737 点

イ　新規貸出分　　22 件　421 点

（６）　博物館学芸員課程実習生の受入れ

ア　実習

京都芸術短期大学	5	京都造形芸術大学	1
立命館大学	5	京都精華大学	4
京都女子大学	2	京都橘女子大学	6

イ　施設見学

京都女子大学	20	大阪市立大学	40

（７）　入館状況

表２　平成８年度入館者数一覧表

月	開館日	一般		団体		合計	一日平均
		12 才以上	12 才未満	12 才以上	12 才未満		
4	25	1,043	148	100	140	1,431	57.2
5	27	1,580	161	744	125	2,610	96.7
6	26	898	47	167	193	1,305	50.2
7	26	878	83	161	0	1,122	43.2
8	27	1,158	186	261	86	1,691	62.6
9	25	1,060	64	175	0	1,299	52.0
10	27	1,101	80	112	20	1,313	48.6
11	26	1,158	99	312	14	1,583	60.9
12	23	979	58	48	0	1,085	47.2
1	24	1,025	83	152	0	1,260	52.5
2	24	1,222	71	94	0	1,387	57.8
3	26	1,521	92	137	0	1,750	63.7
計	306 日	13,623 人	1,172 人	2,463 人	578 人	17,836 人	58.3 人

４　役職員名簿（平成９年３月31日現在）

（１）役員名簿

役員名	氏　　名	職　　名
理事長	溝　　郁生	京都市文化市民局長
専務理事	山田宏晁	京都市文化市民局文化部参事
理　　事	井上満郎	京都産業大学教授
	上田正昭	京都大学名誉教授・大阪女子大学学長
	川上　　貢	財団法人京都市埋蔵文化財研究所所長
	田中　　琢	奈良国立文化財研究所所長
	田辺昭三	京都造形芸術大学教授
	角田文衛	財団法人古代学協会理事長・古代学研究所所長
	寺西章郎	京都市文化市民局文化部参事
	並川和雄	京都市埋蔵文化財調査センター所長
	西川幸治	京都大学名誉教授・滋賀県立大学教授
	新田　　稔	京都市文化市民局文化部文化財保護課長
	村井康彦	滋賀県立大学教授
	和田晴吾	立命館大学教授
監　　事	能勢邦廣	京都市会計室長
	廣瀬伸彦	税理士・京都府監査委員
顧　　問	杉山信三	前財団法人京都市埋蔵文化財研究所所長

（２）職員名簿

	氏　　名	職　　名
	川上　　貢	研究所長（理事）
	田辺　昭三	嘱託（理事）
総務部総務課	新室　邦明	総務部長（京都市出向）
	青木　春夫	総務課長
	村木　節也	庶務係長
	金島　恵一	事業係長代理
	菅田　悦子	主　　任
	上村　京子	〃
	本田　憲三	〃
	夏原美智代	事務職員
	佐藤　正典	〃
	上田　栄治	調査補佐員

	氏　　名	職　　名
調査部調査課	鈴木　久男	調査課長
	長宗　繁一	課長補佐
		（調査第４係長事務取扱）
	本　弥八郎	調査第１係長
	平方　幸雄	調査第２係長
	菅田　　薫	調査第３係長
	磯部　　勝	調査第５係長
	前田　義明	担当係長
	吉村　正親	主　　任
	平田　　泰	〃
	木下　保明	〃
	鈴木　廣司	〃

	氏　名	職　名	
調査部調査課	堀内　明博	主　任	(8.9.30 退職)
	百瀬　正恒	〃	
	久世　康博	〃	
	加納　敬二	〃	
	平尾　政幸	〃	
	辻　裕司	〃	
	上村　和直	〃	
	丸川　義広	〃	
	吉崎　伸	〃	
	網　伸也	研究職員	
	内田　好昭	〃	
	高　正龍	〃	
	高橋　潔	〃	
	山本　雅和	〃	
	南　孝雄	〃	
	小森　俊寛	〃	
	長戸　満男	〃	
	上村　憲章	〃	
	近藤　知子	〃	
	田中利津子	〃	
	小松　武彦	〃	
	桜井みどり	〃	
	清藤　玲子	〃	
	伊藤　潔	〃	
	津々池惣一	〃	
	南出　俊彦	〃	
	小檜山一良	〃	
	近藤　章子	〃	
	永田　宗秀	〃	
	東　洋一	〃	
	真喜志悦子	調査補佐員	
	能芝　勉	〃	
	能芝　妙子	〃	
	法邑真理子	〃	
	鎌田　泰知	〃	
	小倉万里子	〃	
	竜子正彦	〃	
	出口　勲	〃	

	氏　名	職　名	
調査部調査課	藤村　敏之	調査補佐員	
	山口　真	〃	
	太田　吉男	〃	
	堀内　寛昭	〃	
	大立目　一	〃	
	川村　雅章	〃	
	西大　條哲	〃	
	布川　豊治	〃	
	宮下　則子	〃	
	吉本　健吾	〃	
	端　美和子	〃	
	藤村　雅美	〃	
	北川　和子	〃	(8.4.9 退職)
	北原　四男	〃	(9.3.31 退職)
	小谷　裕	〃	
	尾藤　徳行	〃	
	大立目道代	〃	
調査部資料課	中村　敦	資料第１係長代理	
	辻　純一	資料第２係長	
	出水みゆき	研究職員	
	児玉　光世	〃	
	岡　ひろみ	〃	
	卜田　健司	〃	
	宮原　健吾	〃	
	角村　幹雄	〃	
	村井　伸也	〃	
	村上　勉	〃	
	ﾓﾝﾍﾟﾃｨ恭代	〃	
	幸明　綾子	〃	
	大槻　明義	〃	
	中村　享子	〃	
	岡田　文男	非常勤嘱託員	
	永田　信一	担当課長	
考古資料館	村田耕太良	館　長	
	峰　巍	主席学芸員	
	原山　充志	研究職員	
	多田　清治	〃	

（村木節也）

表３　平成８年度発掘調査一覧表

		契約記号・遺跡名・略記号	所　在　地	調査期間	面　積	委託者	調査員	備　考
平安宮	1	H7－051.H8－006 豊楽殿跡 95HK－IX	中京区聚楽廻西町・中町 （山陰線南側道）	96.01.09 ～ 96.05.01	217㎡	京都市	小松 伊藤	
	2	H8－014 中和院跡 96HK－ZP	上京区下立売通千本東入 田中町 422－1	96.05.30 ～ 96.06.13	105㎡	（株）京都菓子工業	小森 上村憲	
	3	H8－052 太政官跡 96HK－SB001	上京区郁芳通美福東入 主税町（二条児童公園）	96.11.07 ～ 96.11.22	75㎡	京都市	高	
	※	H7－041.H8－012 内酒殿・釜所・侍従所跡 95HK－ZN	上京区日暮通下立売上る 分銅町 556	95.10.30 ～ 96.05.31	1,060㎡	京都市住宅供給公社	辻裕 丸川	平成７年度で報告済み
平安京	4	H8－041 朱雀大路跡 96HK－HK008	下京区中堂寺坊城町地内	96.11.05 ～ 96.12.06	188㎡	住宅都市整備公団	平尾	
	※	H8－038、H9－003 左京四条二坊 96HK－FF002	中京区東堀川通錦小路上る 四坊堀川町 622－2 （堀川高校）	96.11.20 ～ 97.10.03	1,953㎡	京都市	上村和 山本	平成９年度で報告予定
	5	H8－056 左京七条二坊・名勝滴翠園 96HK－WI004	下京区堀川通花屋町下る 本願寺門前町	96.12.12 ～ 97.01.20	11㎡	宗教法人浄土真宗本願寺派	近藤知	
	6	H8－037 左京八条二坊 96HK－EL001	下京区油小路通塩小路下る東油小路町 553－4	96.09.05 ～ 96.11.15	336㎡	（株）信開住宅	東 南出	
	7	H8－060 左京八条二坊 96HK－EL002	下京区油小路通塩小路下る東油小路町 553－4	97.01.16 ～ 97.02.28	160㎡	（株）信開住宅	南出 久世	
	※	H8－055 左京八条二坊 96HK－EM	下京区油小路通塩小路下る南不動堂町地内	97.02.18 ～ 98.02.28	2,650㎡	（株）阪急電鉄	鈴木廣	平成９年度で報告予定
	※	H8－067、H9－024 左京八条三坊 96HK－EO001 ～ 003	下京区油小路通塩小路下る東塩小路町地内	97.03.03 ～ 98.03.03	1,622㎡	京都市	上村憲	平成９年度で報告予定
	8	H8－034 左京八条三坊 96HK－EC006	下京区烏丸通塩小路下る東塩小路町	96.07.29 ～ 96.10.24	484㎡	（株）京都ステーションセンター	山本	
	9	H7－043、H7－063、H8－013 左京八条三坊 95HK－EI001・002	下京区東洞院通七条下る東塩小路町地内	96.01.08 ～ 96.06.12	800㎡	近畿郵政局	上村和	発掘・試掘
		H8－018 左京八条三坊 96HK－EI003	下京区東洞院通七条下る東塩小路町地内	96.06.17 ～ 96.09.27	270㎡	近畿郵政局	上村和	
	※	H8－062、H9－023 右京北辺二坊・北野廃寺 97HK－JC	北区北野下白梅町 27－1	97.03.17 ～ 97.05.23	563㎡	（株）京阪都市設計	平尾	平成９年度で報告予定
	10	H8－002 右京一条三坊 96HK－IY	中京区西ノ京御輿ヶ岡町 1－2	96.04.15 ～ 96.07.13	355㎡	（株）間組	久世	
	11	H8－004 右京一条四坊・法金剛院境内 95HK－IT005 ～ 007	右京区花園伊町・扇野町・寺ノ内町地内	96.05.10 ～ 96.06.08	200㎡	京都市	小松 吉村	１次調査
		H8－019 右京一条四坊・法金剛院境内 96HK－IV002	右京区花園寺ノ内町地内	96.06.19 ～ 96.11.26	343㎡	京都市	小松 吉村 小檜山	２次調査

		契約記号・遺跡名・略記号	所　在　地	調査期間	面　積	委託者	調査員	備　考
平安京		H8－020 右京一条四坊 96HK－IV003	右京区花園伊町地内	96.07.18 ～ 96.10.09	246㎡	京都市	吉村 小松 高橋	3次調査
		H8－026 右京一条四坊 96HK－SB	右京区花園寺ノ内町	97.09.02 ～ 97.12.27	92㎡	京都市	伊藤 小松	4次調査
		H8－027 右京一条四坊・法金剛院境内 96HK－JV001	右京区花園寺ノ内町他地内	96.11.05 ～ 96.12.10	600㎡	京都市	小松 吉村 小槍山	5次調査 1区
		H8－028 法金剛院境内 96HK－JV002	右京区花園寺ノ内町他 地内	96.12.11 ～ 97.03.31	796㎡	京都市	小松 吉村 小槍山	5次調査 1～3区
	12	H8－043 右京二条三坊 96HK－IC002	中京区西ノ京御門町 19 （洛陽女子学院）	96.09.17 ～ 96.11.16	451㎡	洛陽女子学院	平田	
	13	H8－021 右京三条一坊 96HK－UI012	中京区西ノ京栂尾町地内	96.10.29 ～ 96.12.20	296㎡	京都市	高橋	
	※	H8－050．H9－021 右京三条一坊 96HK－UP002	中京区西ノ京栂尾町地内	96.10.28 ～ 97.12.28	4,500㎡	（株）京都二条 開発	伊藤	平成9年度 で報告予定
	14	H8－025 右京六条一坊 96HK－XF012	下京区中堂寺粟田町地内	96.09.02 ～ 96.12.28	650㎡	大阪ガス（株）	平尾	
白河街区	15	H8－063 六勝寺跡岡崎遺跡 96KS－ZR005	左京区岡崎西天王町～ 岡崎最勝寺町	97.01.20 ～ 97.03.17	183㎡ 227 m	京都市	津々池	発掘・立会
その他の遺跡	16	H8－017 上ノ庄田瓦窯跡 96RH－AD002	北区西賀茂上庄田町地内	96.07.10 ～ 96.09.20	1,420㎡	京都市西賀茂 第三土地区画 整理組合	網 南	H7－37：試掘
	17	H8－046 岩倉幡枝古窯跡群 96RH－MI	左京区岩倉幡枝町 730－6．730－4	96.10.14 ～ 96.11.15	271㎡	京都市	鈴木廣 上村憲	国庫補助
	18	H8－049 北野廃寺 96RH－KG015	北区北野紅梅町 85	96.10.16 ～ 96.11.23	220㎡	京都市	網 南 桜井	国庫補助
	19	H8－039 京都大学構内遺跡 96KS－HI	左京区吉田泉殿町 6－1	96.11.08 ～ 97.03.18	491㎡	近畿財務局	内田	
	20	H8－061 法性寺跡・鳥辺野跡・正覚寺跡 96RT－SJ002	伏見区深草相深町他地内	97.01.17 ～ 97.03.06	175㎡	阪神高速道路 公団	丸川	H8－42：試掘
	※	H8－068．H9－025 山科本願寺跡 97RT－HG001	山科区西野左義長町 16 他	97.03.26 ～ 97.07.10	940㎡	（株）中野興産	永田宗 近藤知	平成9年度 で報告予定
	21	H8－059 下三栖遺跡 96FD－SS	伏見区横大路下三栖辻堂 町地内	97.01.09 ～ 97.02.08	672㎡	京都市	南 網 桜井	
	22	H8－015 灰方古墳群 96MK－HK	西京区大原野灰方町 394－2	96.06.03 ～ 96.06.07	17㎡	京都市	木下 吉崎	

表４　試掘・立会調査一覧表

		契約記号・遺跡名・略記号	所　在　地	調査期間	面　積	委託者	調査員	備　考
平安宮	1	H8－047 内裏跡 96HK－AH001	上京区浄福寺通下立売 下る中務町 487 （二条城北小学校）	96.11.18 ～ 96.12.06	試　掘 68㎡	京都市	辻裕	２章Ⅱ－１
	2	H8－033 朝堂院・太政官跡・聚楽遺跡 96HK－UW006	上京区竹屋町通、 千本通～美福通	96.07.15 ～ 96.10.09	立　会 400 m	京都市水道局	高橋 堀内明	２章Ⅱ－２
	※	H7－059、H8－008 大宿直・梨本・職御曹司跡 95HK－UW011	上京区裏門通、 中立売通～出水通他地内	96.01.29 ～ 96.03.19	立　会 1,084 m	京都市水道局	吉本 川村	平成７年度 で報告済み
	3	H8－024 右近衛府・図書寮跡 96HK－UW004	上京区御前通、一条通 ～下立売通他地内	96.06.17 ～ 96.12.20	立　会 1,275㎡	京都市水道局	吉本 長戸	２章Ⅱ－３
平安京	4	H8－040 左京七条三坊 96HK－ZR007	下京区桜木町～ 上数珠屋町他	96.09.02 ～ 96.09.12	立　会 100㎡	建設省京都国 道工事事務所	南出 山本 上村和	２章Ⅱ－４
	5	H8－044 左京九条一・二坊 96HK－ZR008	南区四ツ塚町、九条町、 東寺門前町、西九条河原 城町・蔵王町	96.09.18 ～ 96.10.02	立　会 34㎡	建設省近畿 地方建設局	加納	
	6	H8－053 左京九条一坊 96HK－ZR009	南区西九条春日町～ 四ツ塚町地先	96.11.05 ～ 96.11.14	立　会 60㎡	建設省近畿 地方建設局	加納	２章Ⅱ－５
	7	H8－058．H9－006 右京一条四坊・法金剛院境内 97HK－UW001	右京区花園内畑町～ 花園伊町	97.04.01 ～ 97.05.20	立　会 551 m	京都市水道局	小松 吉村 小檜山	１章Ⅱ－11 ６次調査
	8	H8－030 右京二条四坊 96HK－IZ	右京区太秦安井西裏町 他地内	96.09.09 ～ 96.10.02	試　掘 539㎡	京都市	辻裕 田中	平成９年度 に発掘調査
	9	H8－035 右京三条一坊 96HK－UQ001	中京区西ノ京栂尾町 10 街区	96.08.20 ～ 96.09.04	試　掘 125㎡	日本国有鉄道 精算事業団	伊藤	平成９年度 に発掘調査
	10	H8－022 右京三条一坊 96HK－UI010	中京区西ノ京星池町地内	96.07.01 ～ 96.07.26	試　掘 121㎡	京都市	伊藤	平成９年度 に発掘調査
	11	H8－005 右京三条一坊 96HK－UI011	中京区西ノ京星池町	96.07.29 ～ 96.08.06	試　掘 79㎡	京都市	伊藤	平成９年度 に発掘調査
	12	H8－031 右京三条二坊 96HK－UW005	中京区押小路通、 西ノ京南上合町～ 西ノ京内畑町他	96.07.04 ～ 96.08.28	立　会 1,282㎡	京都市水道局	吉本 長戸	２章Ⅱ－６
	13	H8－045 右京四条一坊・朱雀院跡 96HK－UR001	中京区壬生天池町１番地他	96.10.07 ～ 96.10.21	試　掘 287㎡	（株）丸紅	小森	２章Ⅱ－７
白河街区	14	H8－003 尊勝寺跡・最勝寺跡 96KS－KZ001	左京区岡崎西天王町地先	96.04.18 ～ 96.05.20	立　会 212㎡	（株）関西電力	堀内明 平方 本	２章Ⅲ－８
	15	H8－011 尊勝寺跡・最勝寺跡 96KS－NT002	左京区岡崎最勝寺町地内	96.05.27 ～ 96.06.12	立　会 74㎡	ＮＴＴ	堀内明 平方 本	２章Ⅲ－９
その他の遺跡	※	H7－058、H8－007 北白川廃寺 95KS－UW010	左京区北白川山田町～ 北白川上別当町地内	96.01.23 ～ 96.03.11	立　会 480 m	京都市水道局	尾藤 竜子	平成７年度 で報告済み
	※	H7－053、H8－009 仁和寺院家跡・常盤仲之町 遺跡・常盤東ノ町古墳群 95UZ－UW009	右京区下立売通、 太秦宮ノ前町～ 太秦和泉式部町他地内	96.01.09 ～ 96.04.03	立　会 1,544㎡	京都市水道局	吉本 川村	平成７年度 で報告済み

		契約記号・遺跡名・略記号	所　在　地	調査期間	面積	委託者	調査員	備　考
その他の遺跡	16	H8－042 法性寺跡・鳥辺野跡・正覚寺跡 96RT－SJ001	伏見区深草相深町他地内	96.11.11 ～96.11.25	試　掘 114㎡	阪神高速 道路公団	丸川	1章Ⅳ－20
	17	H7－062.H8－010 法性寺跡 95RT－UW012	東山区本町十五丁目地内	96.03.21 ～96.09.06	立　会 1,689 m	京都市水道局	尾藤 竜子	
	18	H8－048 珍皇寺旧境内 96RT－EM	東山区清水五丁目	96.10.09 ～96.10.18	試　掘 167㎡	京都市	久世	
	19	H8－051 法住寺殿跡 96RT－IR003	東山区本町通10丁目東入 下池田町527 （一橋小学校）	96.11.11 ～96.11.16	試　掘 56㎡	京都市	小森	2章Ⅲ－10
	20	H8－070 六波羅政庁跡 96RT－AA002	東山区茶屋町527 （京都国立博物館）	97.03.24 ～97.03.26	試　掘 25㎡	京都国立 博物館	小森	2章Ⅲ－11
	21	H8－071 安朱遺跡 96RT－FS005	山科区上野御所ノ内町	97.03.24 ～97.03.25	試　掘 20㎡	京都市	高	
	22	H8－023 醍醐廃寺 96FD－DH001、DD001･002	伏見区醍醐高畑町他地内	96.04.26 ～96.10.11	試　掘 立　会 3,361㎡	京都市	津々池 内田	2章Ⅲ－12
	23	H8－016 伏見城跡 96FD－UW003	伏見区京町通、下板橋通 ～大手筋通他地内	96.06.10 ～96.11.22	立　会 1,227 m	京都市水道局	竜子 尾藤	
	24	H8－001 京都市内遺跡 96BB－	京都市内一円	96.04.01 ～97.03.31	立　会	京都市	第1係	国庫補助

表5　平成8年度その他契約一覧表

No.	契約番号	内　容	遺　跡　名　・　所　在　地	委　託　者	調査員	備　考
1	H8－029	修羅保存処理	特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園 北区金閣寺町1	宗教法人鹿苑寺	永田信 卜田、大槻	
2	H8－032	整理保存	安祥寺下寺跡 山科区安朱桟敷町地内	京都市交通局	中村敦	
3	H8－036	測量	平安京跡 下京区諏訪開町12	埋蔵文化財発掘調査団	辻純 宮原	
4	H8－054	測量	平安京跡 下京区烏丸通高辻上る大政所町682他	（財）京都府埋蔵文化財 調査研究センター	辻純 宮原	
5	H8－057	測量	平安京跡 下京区北小路通大宮西入御器屋町30	平安学園平安京跡調査委員会	辻純 宮原	
6	H8－064	測量	平安京跡 中京区壬生上大竹町（両洋学園）	（財）古代学協会	辻純 宮原	
7	H8－065	整理	岩倉幡枝古窯跡群 左京区岩倉幡枝町730－6　730－4	京都市	鈴木広 上村憲	H8－046
8	H8－066	整理	北野廃寺 北区北野紅梅町85	京都市	網	H8－049
9	H8－069	報告書	京都市内一円 京都市内遺跡	京都市	本、鈴木広 上村憲	国庫補助